岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 237

宮原遺跡
奈良井古墳
奈良井遺跡

一般国道2号改築工事（玉島笠岡道路）及び一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）に伴う発掘調査

２０１３

岡 山 県 教 育 委 員 会

奈良井古墳・奈良井遺跡遠景（南東上空から）

巻頭図版2

1　奈良井古墳石室（東から）

2　奈良井遺跡出土須恵器

序

本報告書には、浅口市金光町佐方に所在する宮原遺跡・奈良井古墳・奈良井遺跡の発掘調査結果を収載しました。

岡山県の南西部に位置する浅口市は、北は古く山岳仏教の名残を留める遙照山山地、南は瀬戸内海国立公園を構成する海岸線を有するとともに、歴史的文化遺産が数多く存在する地域であります。

このたび、一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）及び一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）が計画されるに伴い、岡山県教育委員会では、事業地内に所在する遺跡の取り扱いについて関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状保存が困難な部分については記録保存のための発掘調査を実施することとしました。

発掘調査は平成23年度に実施し、宮原遺跡では縄文時代中期末から後期初頭の集落の一端が明らかとなり、奈良井古墳は７世紀初頭に築造された横穴式石室をもつ古墳であることがわかりました。さらに、奈良井遺跡では弥生時代から中世にかけての集落跡が確認され、出土遺物から古墳時代後期に操業された須恵器窯の存在の可能性が高まりました。

これらの調査成果を収めた本書が学術研究に寄与できるだけでなく、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば幸いに存じます。

発掘調査の実施、報告書の作成に際しましては、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所、岡山県備中県民局建設部をはじめとする関係各位や地元の皆様から御理解と多大な御協力を賜りました。末筆ながら、記して厚く御礼申し上げます。

平成25年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　平井泰男

例　　言

1　本書は、岡山県教育委員会が一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）事業に伴い、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所と岡山県の委託契約に基づき実施した奈良井遺跡、及び一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）に伴い、岡山県教育委員会が岡山県備中県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した宮原遺跡・奈良井古墳・奈良井遺跡の発掘調査報告書である。なお、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所と岡山県の契約事項は文化財課が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

2　宮原遺跡は浅口市金光町佐方2550ほか、奈良井古墳は浅口市金光町佐方2170-3、奈良井遺跡は浅口市金光町佐方2215ほかに所在する。

3　確認調査は平成22年度に岡山県古代吉備文化財センター職員石田爲成が行い、本発掘調査は平成23年度に同センター職員澤山孝之・岡本泰典・中原香織が担当して実施した。調査面積は確認調査が59㎡、発掘調査は一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）事業に伴い奈良井遺跡が2,919㎡、一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）に伴い宮原遺跡が700㎡、奈良井古墳が570㎡、奈良井遺跡が884㎡であり、合計は5,073㎡である。

4　発掘調査及び報告書作成にあたっては「一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）及び一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々に委員を委嘱し、委員各位からは有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

岩崎志保（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）
根木　修（元岡山市教育委員会）
福本　明（倉敷市教育委員会）
間壁葭子（倉敷考古館）
松木武彦（岡山大学）

5　本書の作成は、平成24年度に岡山県古代吉備文化財センターで実施し、澤山が担当した。

6　本書の執筆は、澤山・岡本・中原、岡山県教育庁文化財課石田爲成が担当し、文責はそれぞれの文末に示した。全体の編集は澤山が行った。

7　本書に関する遺物のうち、以下については鑑定・分析を次の諸氏に依頼し、有益な御教示を得た。記して御礼申し上げる。

石材鑑定　　鈴木茂之（岡山大学）
胎土分析　　白石　純（岡山理科大学）

8　花粉分析・放射性炭素年代測定については、株式会社パレオ・ラボに委託し、実施した。

9　遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。

10　本書に関連する出土遺物ならびに図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325－３）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は海抜高である。

2　遺構全体図及び遺構図が示す北方位は平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北であり、調査地における磁北は西偏７°24′を測る。

3　報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。

4　遺構・遺物実測図の縮尺率は次のとおり統一しており、各図に縮尺率を明記している。

遺構　竪穴遺構・土層断面：1/80　　段状遺構・河道断面：1/60

土坑・被熱面・柱穴・溝断面：1/30

遺物　土器：1/3、1/4、1/8　　土製品：1/3　　石器：1/2、1/3　　鉄器：1/3

5　遺構全体図では遺構名を次のように略称を用いている。

段状遺構：段　　竪穴遺構：竪　　土坑：土　　被熱面：熱　　河道：河　　柱穴：柱

6　遺構番号は、各遺跡の遺構の種類ごとに１から通し番号を付けている。

7　遺物番号は各遺跡・古墳の遺物全体を種類ごとに１から通し番号を付けている。土器以外のものについては、その材質を示すために番号の頭に次に示す略号を付した。

土製品：Ｃ　　石器：Ｓ　　鉄器：Ｍ

8　掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

9　掲載した遺構に示している網掛けは以下の範囲を示すものである。

弱い被熱痕

強い被熱痕

10　土層断面図に使用した土色は、基本的に『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を参考にした。

11　第２図は、国土地理院発行1/50,000地形図の「玉島」・「寄島」を複製し、加筆したものである。

12　第82図は、フリーソフト「カシミール３Ｄ」で編集、加工したものである。

13　本書で用いた時代区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀などを併用している。なお、７世紀代については、ここでは古墳時代を表記として用いた。

目　　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
第１章　地理的・歴史的環境…… 1
第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過…… 5
　第１節　調査に至る経緯…… 5
　第２節　発掘調査の経過…… 6
　第３節　報告書作成の経過…… 7
　第４節　日誌抄…… 8
　第５節　発掘調査及び報告書作成の体制…… 8
第３章　宮原遺跡……11
　第１節　調査の概要……11
　第２節　縄文時代の遺構と遺物……13
　第３節　古墳時代以降の遺構と遺物……18
　第４節　小結……18
第４章　奈良井古墳……19
　第１節　調査の概要……19
　第２節　小結……28
第５章　奈良井遺跡……29
　第１節　遺跡の概要……29
　第２節　弥生～古墳時代の遺構と遺物……37
　第３節　古代以降の遺構と遺物……59
　第４節　小結……66
第６章　自然科学的分野における鑑定・分析……67
　第１節　奈良井遺跡における放射性炭素年代測定……67
　第２節　奈良井遺跡における花粉分析……71
　第３節　奈良井古墳・奈良井遺跡出土土器の胎土分析……74
第７章　総括……77
　第１節　奈良井古墳について……77
　第２節　奈良井遺跡の須恵器について……80
遺構一覧表
遺物観察表
遺構名称新旧対照表
図版
報告書抄録

図目次

第１図　遺跡位置図（1/1,500,000）…… 1
第２図　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）
…… 2・3
第３図　奈良井古墳・奈良井遺跡・宮原遺跡調査位置図（1/2,000）…… 5
第４図　奈良井遺跡国・県事業調査区配置図（1/1,200）…… 6
第５図　遺構全体図（1/400）…… 11
第６図　調査区西壁断面図（1/80）…… 12
第７図　調査区北壁断面図（1/80）…… 12
第８図　河道１断面図（1/60）…… 13
第９図　河道１出土遺物①（1/3）…… 14
第10図　河道１出土遺物②（1/3）…… 15
第11図　河道１出土遺物③（1/3）…… 16
第12図　河道１出土遺物④（1/2）…… 17
第13図　遺構に伴わない遺物（1/2）…… 17
第14図　土坑１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 18
第15図　遺構に伴わない遺物（1/4）…… 18
第16図　調査前地形測量図（1/250）…… 19
第17図　墳丘測量図（1/150）…… 20
第18図　墳丘断面図（1/80）…… 21・22
第19図　横穴式石室（1/60）…… 24
第20図　墳丘除去後地形測量図（1/150）…… 25
第21図　石室と石室掘り方（1/80）…… 26
第22図　出土遺物（1/4・1/2）…… 27
第23図　遺構全体図（1/600）…… 29
第24図　調査区北半遺構全体図（1/400）…… 30
第25図　調査区北半谷部断面図（1/80）…… 31
第26図　調査区北半東西断面図①（1/80）…… 32
第27図　調査区北半東西断面図②（1/80）…… 32
第28図　調査区北半南壁断面図（1/80）…… 33
第29図　調査区南半遺構全体図（1/400）…… 34
第30図　調査区南半北壁断面図①（1/80）…… 35
第31図　調査区南半北壁断面図②（1/80）…… 36
第32図　調査区南半南壁断面図（1/80）…… 36
第33図　段状遺構１（1/60）…… 37
第34図　段状遺構１出土遺物①（1/4）…… 38
第35図　段状遺構１出土遺物②（1/4）…… 39
第36図　段状遺構１出土遺物③（1/3）…… 40
第37図　段状遺構２（1/60）…… 40
第38図　土坑１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 40
第39図　土坑２（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）
…… 41
第40図　土坑３（1/30）・出土遺物（1/4）…… 42
第41図　土坑４（1/30）・出土遺物（1/4）…… 42
第42図　土坑５・６（1/30）…… 42
第43図　土坑７（1/30）・出土遺物（1/4）…… 43
第44図　土坑８（1/30）・出土遺物（1/4）…… 43
第45図　土坑９～11・被熱面１（1/30）…… 44
第46図　溝１・２（1/30）…… 45
第47図　溝３（1/30）・出土遺物（1/4）…… 45
第48図　溝４～８（1/30）…… 46
第49図　溝９（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）
…… 47
第50図　溝10（1/30）・出土遺物（1/3）…… 47
第51図　溝11（1/30）・出土遺物（1/4）…… 48
第52図　溝12～15（1/30）…… 48
第53図　谷部出土遺物①（1/4）…… 49
第54図　谷部出土遺物②（1/4）…… 50
第55図　谷部出土遺物③（1/4）…… 51
第56図　谷部出土遺物④（1/4）…… 52
第57図　谷部出土遺物⑤（1/4）…… 53
第58図　谷部出土遺物⑥（1/4）…… 54
第59図　谷部出土遺物⑦（1/4）…… 55
第60図　谷部出土遺物⑧（1/4・1/3）…… 56
第61図　柱穴１～５（1/30）・柱穴５出土遺物（1/4）…… 56
第62図　遺構に伴わない遺物①（1/4）…… 57
第63図　遺構に伴わない遺物②（1/2）…… 58
第64図　竪穴遺構１（1/80）…… 59
第65図　竪穴遺構１出土遺物（1/4・1/3）…… 60
第66図　土坑12（1/30）…… 60
第67図　土坑13（1/30）…… 61
第68図　土坑14（1/30）・出土遺物（1/8）…… 61
第69図　土坑15～17（1/30）…… 62
第70図　土坑18（1/30）・出土遺物（1/4）…… 63
第71図　溝16～20（1/30）…… 64
第72図　溝21（1/30）・出土遺物（1/3）…… 65
第73図　溝22（1/30）…… 65
第74図　柱穴６～９（1/30）・柱穴８・10～14出土遺物（1/4・1/3）…… 65
第75図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3）…… 66
第76図　暦年較正結果 …… 70
第77図　奈良井古墳・奈良井遺跡出土須恵器の器種別胎土比較① …… 76
第78図　奈良井古墳・奈良井遺跡出土須恵器の器種別胎土比較② …… 76
第79図　奈良井古墳・奈良井遺跡と県内窯跡の胎土比較① …… 76
第80図　奈良井古墳・奈良井遺跡と県内窯跡の

胎土比較② …… 76
第81図　奈良井古墳・奈良井遺跡と県内窯跡の胎土比較③ …… 76
第82図　周辺古墳分布図（1/60,000）…… 78
第83図　杯蓋・杯身法量点数分布図 …… 80
第84図　杯蓋・杯身法量相関図 …… 81
第85図　杯蓋・杯身調整手法点数・法量分布 …… 81

巻頭図版目次

巻頭図版１　奈良井古墳・奈良井遺跡遠景（南東上空から）
巻頭図版２　１　奈良井古墳石室（東から）
２　奈良井遺跡出土須恵器

図版目次

（宮原遺跡）
図版１　１　調査区西側全景（北から）
２　調査区西側全景（東から）
３　調査区東側全景（北西から）
図版２　１　河道１断面（北西から）
２　調査区西壁南側断面（北東から）
３　調査区西壁北側断面（南東から）

（奈良井古墳）
図版３　１　調査前遠景（東から）
２　調査前全景（東から）
３　調査前全景（南から）
図版４　１　墳丘全景（東から）
２　墳丘遠景（南上空から）
３　墳丘と集落遠景（北西上空から）
４　石室内断面（北東から）
５　周溝断面（北東から）
図版５　１　墳丘断面（東から）
２　墳丘南側断面（東から）
３　墳丘北側断面（東から）
図版６　１　石室掘り方南側断面（東から）
２　石室掘り方北側断面（東から）
３　石室掘り方西側断面（北から）
図版７　１　石室全景（東から）
２　石室と集落遠景（北西から）
３　石室全景（南東から）
４　石室全景（北東から）
図版８　１　石室奥壁（東から）
２　石室南壁（北東から）
３　石室北壁（南東から）
４　石材抜き取り跡の土器だまり（北から）
５　石室掘り方（東から）

（奈良井遺跡）
図版９　１　調査区北半調査前全景（南東から）
２　調査区南半調査前全景（東から）
３　遺構全景（南東上空から）
図版10　１　調査区北半全景（西から）
２　調査区北半全景（南西から）
３　調査区北半南西側全景（北から）
図版11　１　調査区南半西側全景（南西から）
２　調査区南半東側全景（北東から）
３　調査区南半東側全景（南西から）
図版12　１　調査区北半東西断面（北西から）
２　調査区北半東西断面（北から）
３　調査区北半南壁断面（北西から）
４　調査区北半北壁断面（南東から）
図版13　１　調査区南半西壁断面（南東から）
２　調査区南半北壁断面（南東から）
３　調査区南半北壁断面（南西から）
図版14　１　調査区南半南壁断面（北から）
２　段状遺構１（東から）
３　土坑２（南東から）
４　土坑11（南東から）
図版15　１　溝３断面（南から）
２　溝９断面（南西から）
３　溝10断面（南西から）
４　溝13断面（南東から）
５　谷部溝遺物出土状況（南東から）
図版16　１　谷部溝（南東から）
２　調査区北半谷部断面（南東から）
３　竪穴遺構１（北西から）
図版17　１　竪穴遺構１（南西から）
２　竪穴遺構１土層断面（北東から）
３　土坑12（南から）
４　土坑14（東から）
５　土坑18（南西から）

6　柱穴掘り下げ作業（北東から）
7　柱穴６（南東から）

（宮原遺跡）
図版18　1　河道１出土土器①
2　河道１出土土器②
図版19　1　河道１出土土器③
2　出土石器

（奈良井古墳・奈良井遺跡）
図版20　1　奈良井古墳出土土器
2　奈良井遺跡段状遺構１、溝11出土土器

（奈良井遺跡）
図版21　谷部出土土器①
図版22　谷部出土土器②
図版23　1　谷部出土土器③
2　柱穴８・13、包含層出土土器
3　土坑18出土瓦
図版24　1　杯蓋外面天井部・杯身外面底部・杯身内面底部
2　出土土製品・石器・鉄器

写真目次

写真１　第２回埋蔵文化財保護対策委員会（平成23年７月28日開催）……10
写真２　第３回埋蔵文化財保護対策委員会（平成24年２月16日開催）……10
写真３　奈良井古墳現地公開（平成23年８月23・24日開催）……10
写真４　奈良井遺跡現地公開（平成24年３月９日開催）……10
写真５　奈良井古墳の墳丘調査状況……23
写真６　奈良井遺跡（竪穴遺構１第４層）から産出した花粉化石……73

表目次

表１　文化財保護法に基づく文書一覧……９
表２　測定試料および処理……67
表３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果……68
表４　分析試料一覧表……71
表５　産出花粉化石一覧表……72
表６　奈良井古墳・奈良井遺跡出土須恵器の胎土分析値（Si～P:%、Rb～Zr:ppm）……75
表７　宮原遺跡遺構一覧表……85
表８　宮原遺跡遺物観察表……85
表９　宮原遺跡遺構名称新旧対照表……87
表10　奈良井古墳遺物観察表……87
表11　奈良井遺跡遺構一覧表……87
表12　奈良井遺跡遺物観察表……89
表13　奈良井遺跡遺構名称新旧対照表……94

第１章　地理的・歴史的環境

宮原遺跡(1)、奈良井古墳(2)、奈良井遺跡(3)は、岡山県南西部の浅口市金光町佐方に所在する（第１図）。浅口市は東側を倉敷市、西側を浅口郡里庄町と笠岡市、北側を小田郡矢掛町と接し、南側は瀬戸内海に面する。県地形区分では瀬戸内沿岸山地と瀬戸内沿岸平野に属し、市北部には標高300～400ｍの遙照山山地が、市南部には標高150～250ｍの寄島山地がそれぞれ南西から北東方向に延びている。

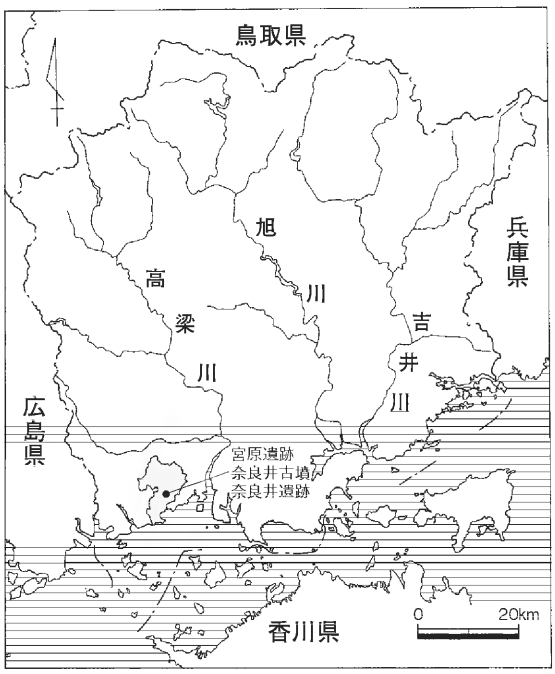
遙照山山地の南側と寄島山地の北側の斜面部には、金光・鴨方地域の丘陵地と平野部が広がる。平野部中央には両山地から発する河川と合流して東流する里見川があり、倉敷市玉島へ流下した後、瀬戸内海に注ぐ。宮原遺跡、奈良井古墳、奈良井遺跡は、里見川支流の寄島山地から北流する佐方川に沿った狭小な平野部と丘陵地に位置する。なお、金光町占見新田では17世紀中頃まで里見川のデルタ地帯となっており、平安時代まで遡ると海岸線はさらに西方まで進入していたと推測される。

周辺の遺跡概要（第２図）をみると、古くは旧石器時代から存在する。鴨方町益坂の和田遺跡(55)では槍先形尖頭器が出土している。また、沿岸部では倉敷市玉島黒崎の小原南遺跡(92)、諏訪神社遺跡(93)、山王遺跡(94)、帆崎遺跡(95)などが知られており、広域に移動している人間活動が想起される。

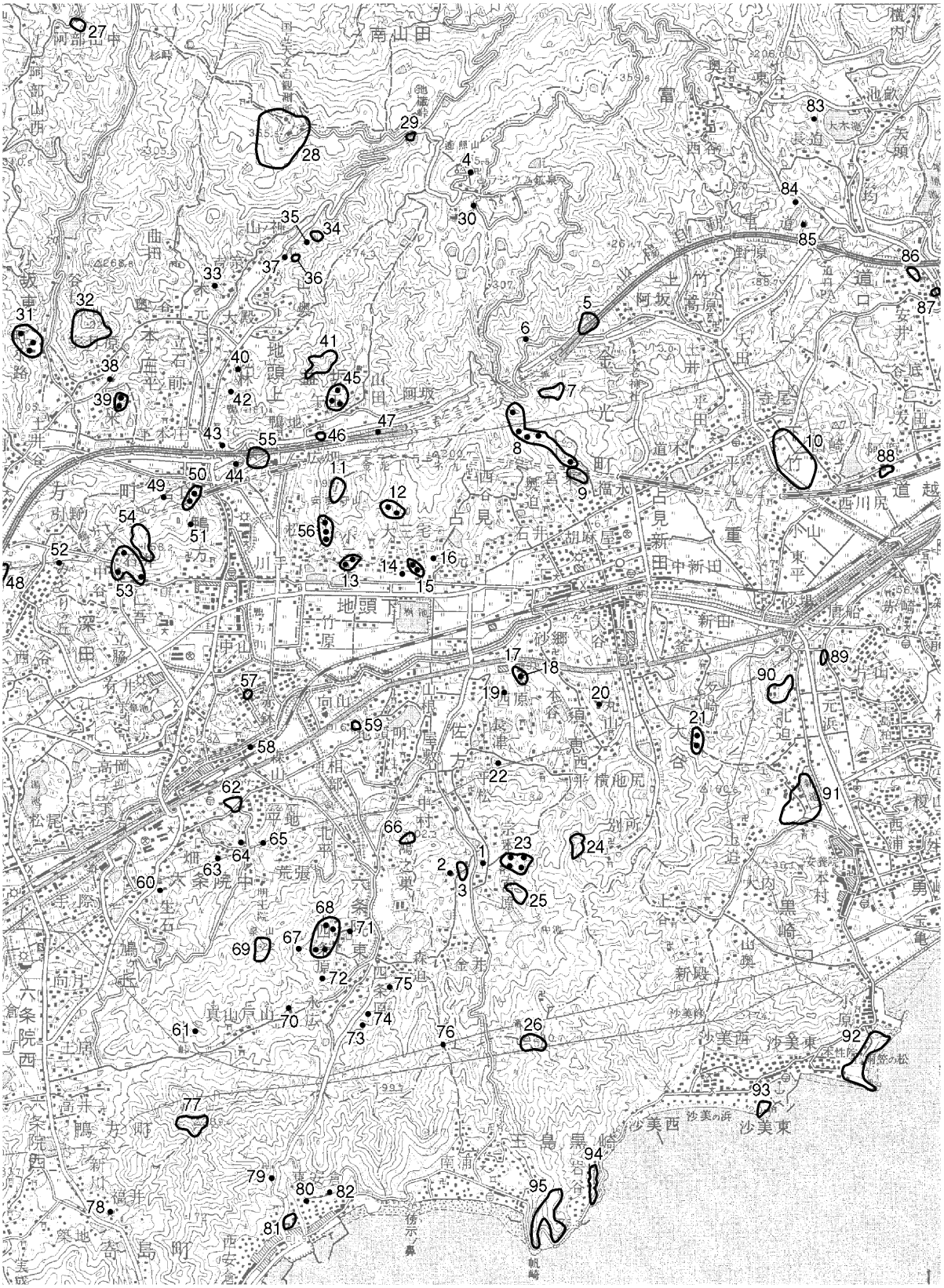
縄文時代になると、金光町占見新田の加賀池遺跡(9)や倉敷市玉島道口の道口遺跡(86)で早期の押型文土器が出土している。後期に入ると遺跡は増加し、加賀池遺跡や鴨方町地頭上の段林遺跡(34)、鴨方町益坂の向原遺跡(46)や寄島町の安倉八幡遺跡(81)、東安倉遺跡(82)で土器が確認されている。また、高梁川河口部西岸にあたる倉敷市玉島道口の岸本貝塚(87)、玉島道越の阿原貝塚(88)や玉島柏島の東元浜貝塚(89)、玉島黒崎の西元浜貝塚(90)、中津貝塚(91)といった後期を主体とする貝塚遺跡も確認されていることから、山間部から海浜部にかけて活発な狩猟・採集活動の様子が窺える。

弥生時代になると、さらに遺跡は増加する。前期では、鴨方町小坂東の犬飼本谷遺跡で木葉文土器が出土している。中期では金光町上竹の上竹西の坊遺跡(5)では竪穴住居が検出され、土器、石鏃や石包丁、分銅形土製品が出土している。また、鴨方町本庄の地蔵峠遺跡(29)の存在は、竹林寺山山麓に集落が点在した可能性を示している。

後期では、高地の鴨方町小坂東の阿部山遺跡(27)、鴨方町本庄の竹林寺天文台遺跡(28)や、平地や低丘陵の鴨方町地頭上の道面遺跡(36)、段林遺跡や向原遺跡、鴨方町六条院中の赤鉢遺跡(57)、森山遺跡(62)が知られる。竹林寺天文台遺跡は竪穴住居や掘立柱建物が確認され、石器や土製品が出土している。道面遺跡は竪穴住居や柱穴列、貯蔵穴が発見されている。段林遺跡は竪穴住居や炉跡が検出され、石器・玉類・鉄鏃・分銅形土製品が出



第１図　遺跡位置図（1/1,500,000）



1 宮原遺跡　2 奈良井古墳　3 奈良井遺跡　4 遙照山廃寺　5 上竹西の坊遺跡
6 大石古墳　7 城山城跡(加賀山城跡)　8 加賀谷１～５号墳　9 加賀池遺跡　10 東郷遺跡
11 安芸守山城跡　12 朝鮮谷１・２号墳　13 小三宅１・２号墳　14 占見廃寺　15 山崎１・２号窯
16 金地古墳　17 岸名遺跡　18 窯（古墳）　19 窯（古墳）　20 窯（古墳）
21 夕崎１・２号墳　22 窯（平安）　23 宮原１～４号墳　24 須恵竜王山城跡　25 佐方城跡（鬼打城跡）
26 竜王山城跡　27 阿部山遺跡　28 竹林寺天文台遺跡　29 地蔵峠遺跡　30 遙照山瓦窯跡

31 杉谷１～３号墳	32 杉山城跡（要害山）	33 坪古墳	34 段林遺跡	35 段林古墳
36 道面遺跡	37 塚地古墳	38 宇月原塚古墳	39 向山１・２号墳	40 地頭上八幡塚古墳
41 西知山城跡	42 光林坊古墳	43 日吉塚古墳	44 宮の脇古墳	45 片山塚１～３号墳
46 向原遺跡	47 阿坂古墳	48 沖の店遺跡	49 上名口古墳	50 下名口１・２号墳
51 鴨山石鎚塚	52 引野中世墓	53 石井１～３号墳	54 鴨山城跡	55 和田遺跡
56 安芸守山西南１～３号墳	57 赤鉢遺跡	58 畳屋古墳	59 窯？（古墳）	60 龍王池東古墳
61 真山戸山不動坊窯跡	62 森山遺跡	63 畑岩屋塚古墳	64 山ノ神塚古墳	65 算用ヶ岡塚古墳
66 鴻の巣山遺跡	67 上原塚古墳	68 古寺跡１～４号墳	69 泉山城跡	70 真山戸山下原塚古墳
71 天神山塚古墳	72 侍山塚古墳	73 軽部荒神塚古墳	74 永広塚古墳	75 向ヶ市塚古墳
76 タンゴ山古墳	77 竜王山城跡	78 福井古墳	79 殿山古墳	80 原古墳
81 安倉八幡遺跡	82 東安倉遺跡	83 陶谷窯跡	84 道口窯跡	85 桜池窯跡
86 道口遺跡	87 岸本貝塚	88 阿原貝塚	89 東元浜貝塚	90 西元浜貝塚
91 中津貝塚	92 小原南遺跡	93 諏訪神社遺跡	94 山王遺跡	95 帆崎遺跡

第２図　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）

土している。森山遺跡は竪穴住居や柱穴列が確認され、土器や石器、分銅形土製品がみつかっている。後期末の和田遺跡では、特殊器台形土器や玉類を供献している木棺墓・土坑墓群が確認されている。

古墳時代の前期古墳をみると、六条院東の鴻の巣山遺跡(66)が初期の古墳とされ、庄内式土器と類似する土器群が出土している。これに続く古墳として、箱式石棺を主体部とする小規模な円墳が造営される。このうち、鴨方町本庄の坪古墳(33)では乳文鏡が出土しており、鴨方町小坂東の向山１号墳(39)では、石棺中から人骨２体と鉄製の剣・鉇・鎌が出土している。鴨方町益坂の安芸守山西南古墳２号墳(56)では竪穴式石室と推定される石材が残存し、鴨方町六条院中の侍山塚古墳(72)の１号石棺は、朱塗りの可能性がある。鴨方町六条院東のタンゴ山古墳(76)の２号石棺には人骨が残存し、銅鏃が発見されている。この他、鴨方町地頭上の光林坊古墳(42)、鴨方町鴨方の鴨山石鎚塚(51)、鴨方町六条院中の算用ヶ岡塚古墳(65)などがあるが、この地域全体を統括する古墳はこれまで確認されていない。

後期では横穴式石室墳が増加する。遙照山山地南側では金光町上竹の大石古墳(6)、金光町占見新田の加賀谷１～５号墳(8)、金光町地頭下の朝鮮谷１・２号墳(12)、小三宅１・２号墳(13)、金光町占見の金地古墳(16)や鴨方町小坂東の杉谷１～３号墳(31)、宇月原塚古墳(38)、鴨方町本庄の上名口古墳(49)、鴨方町深田の石井１～３号墳(53)が知られる。鴨方町本庄の下名口２号墳(50)では馬具が出土している。

鴨方町地頭上では発掘調査により古墳の概況が明らかになっている。段林古墳(35)は径８～９ｍの円墳と推定され、奥壁幅1.1ｍである。石室内から耳環・鉄鏃・農工具が出土している。塚地古墳(37)は径約11ｍの円墳と推定され、奥壁幅1.6ｍの横穴式石室から馬具・耳環・鉄刀・鉄製刀子・鉄鏃・鉄釘が出土している。宮の脇古墳(44)は径約14ｍの円墳と推定され、石室幅1.8ｍの横穴式石室をもつと考えられている。石室からは耳環・銅釧・大刀・玉類・鉄釘が出土している。その他では日吉塚古墳(43)が知られる。また、鴨方町益坂の阿坂古墳(47)は径12ｍの円墳と推定され、調査により奥壁幅1.3ｍの横穴式石室内から耳環・鉄鏃の副葬を確認した。片山塚２号墳(45)では、調査により幅１ｍの横穴式石室が検出されている。以上のことから、遙照山山地南側では下名口２号墳、宮の脇古墳、塚地古墳などが所在する本庄川から鴨方川の流域に有力支配層が存在したと思われる。

一方、寄島山地北側では、六条院中の畳屋古墳(58)、龍王池東古墳(60)、畑岩屋塚古墳(63)、山ノ神塚古墳(64)、上原塚古墳(67)、古寺跡１～４号墳(68)、六条院東の軽部荒神塚古墳(73)、永広塚古墳(74)など、堅川流域に盛んな造墓活動が認められる。特に真山戸山下原塚古墳(70)（石室幅1.75ｍ）、天神山塚古墳(71)（同２ｍ）や六条院東の向ヶ市塚古墳(75)（同1.75ｍ）の石室規模が大形であり、この地域に有力支配層が存在したと思われる。加えて、佐方川流域の金光町佐方の宮原１号墳(23)（同２ｍ）も石室規模が大きく、この地域にも有力支配層の存在が推測される。他地域では金光町大谷の夕崎１・２

号墳 (21) が知られる。また、寄島山地南側では、寄島町の福井古墳 (78)、殿山古墳 (79)、原古墳 (80) が知られている。なお、鴨方町地頭上の地頭上八幡塚古墳 (40) は竪穴式石槨をもつ終末期の古墳とされる。当地域の特徴としては、古墳時代を通じて前方後円墳が築造されていないことである。

金光町須恵の岸名遺跡 (17) では古墳時代後期の竪穴住居11軒が検出されている。周辺では10基程度の須恵器窯 (18) が想定され、金光須恵古窯跡群と総称されている。また、上竹西の坊遺跡では７～８世紀頃の須恵器窯が検出され、灰原からは須恵器や円面硯が出土している。さらに、玉島陶古窯跡群の一角を占める倉敷市玉島道口の陶谷窯跡 (83)、道口窯跡 (84)、桜池窯跡 (85) は古墳時代から奈良時代の操業が知られており、この一帯が高梁川下流西部の一大窯業生産地であったことが推定される。一方、沿岸部では塩生産が盛んになり、金光町八重の東郷遺跡 (10) では製塩土器が出土している。

古代では、金光町占見の占見廃寺 (14) で礎石が検出され、複弁八葉蓮華文軒丸瓦・平城宮系6225軒丸瓦・平城宮系6663軒平瓦・均整唐草文軒平瓦などが出土している。創建時期は７世紀後半で、８世紀中葉に整備・修理とされる。占見廃寺東方には、山崎１・２号窯 (15) が築かれている。和田遺跡では８世紀前半の製炭窯が検出されている。山岳宗教の資料では、金光町上竹・鴨方町地頭上の遙照山廃寺 (4) や鴨方町地頭上の遙照山瓦窯跡 (30) で瓦片が、阿部山遺跡で土製相輪がみつかっている。

中世では、鴨方町小坂西の沖の店遺跡 (48) で土師器の高台付椀や小皿を焼成した窯が検出され、引野中世墓 (52) では五輪塔が多数群集しており、骨蔵器に古銭が副葬されていた。鴨方町六条院中の真山戸山不動坊窯跡 (61) では亀山焼の窯が数基操業していたとみられる。中世山城は、金光町占見新田の城山城跡（加賀山城跡）(7)、金光町地頭下・鴨方町益坂の安芸守山城跡 (11)、金光町大谷の須恵竜王山山城 (24)、金光町佐方の佐方城跡（鬼打城跡）(25)、金光町佐方・倉敷市玉島黒崎の竜王山城跡 (26) や鴨方町小坂東の杉山城跡（要害山）(32)、鴨方町地頭上の西知山城跡 (41)、鴨方町鴨方他の鴨山城跡 (54)、鴨方町六条院中の泉山城跡 (69)、鴨方町六条院西・寄島町の竜王山城跡 (77) が築かれている。　　（澤山）

主要参考文献

『寄島町誌』町誌編纂委員会 1966

「第Ⅶ部 加賀池、宮地池遺跡及び益坂散布地の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県教育委員会 1974

「〔７〕岸名遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』９ 岡山県教育委員会 1979

「〔４〕鴨方町片山古墳群の発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会 1980

「和田遺跡･向原遺跡･宮の脇古墳･阿坂古墳･沖の店遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 岡山県教育委員会 1981

藤田憲司ほか「倉敷市玉島地区とその周辺の新発見縄文時代資料」『倉敷考古館研究集報』18 倉敷考古館 1984

「道口遺跡・上竹西の坊遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 岡山県教育委員会 1988

『鴨方町史』本編 鴨方町史編纂委員会 1990

「段林遺跡・段林古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』132 岡山県教育委員会 1998

「道面遺跡・塚地古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』147 岡山県教育委員会 1999

『金光町史』本編 金光町史編纂委員会 2003

亀田修一「第三章 白鳳時代創建の寺院 第三節 備中（６）占見廃寺」『吉備の古代寺院』吉備人出版 2006

「森山遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』１ 浅口市教育委員会 2008

「竹林寺天文台遺跡」『浅口市埋蔵文化財発掘調査報告』２ 浅口市教育委員会 2009

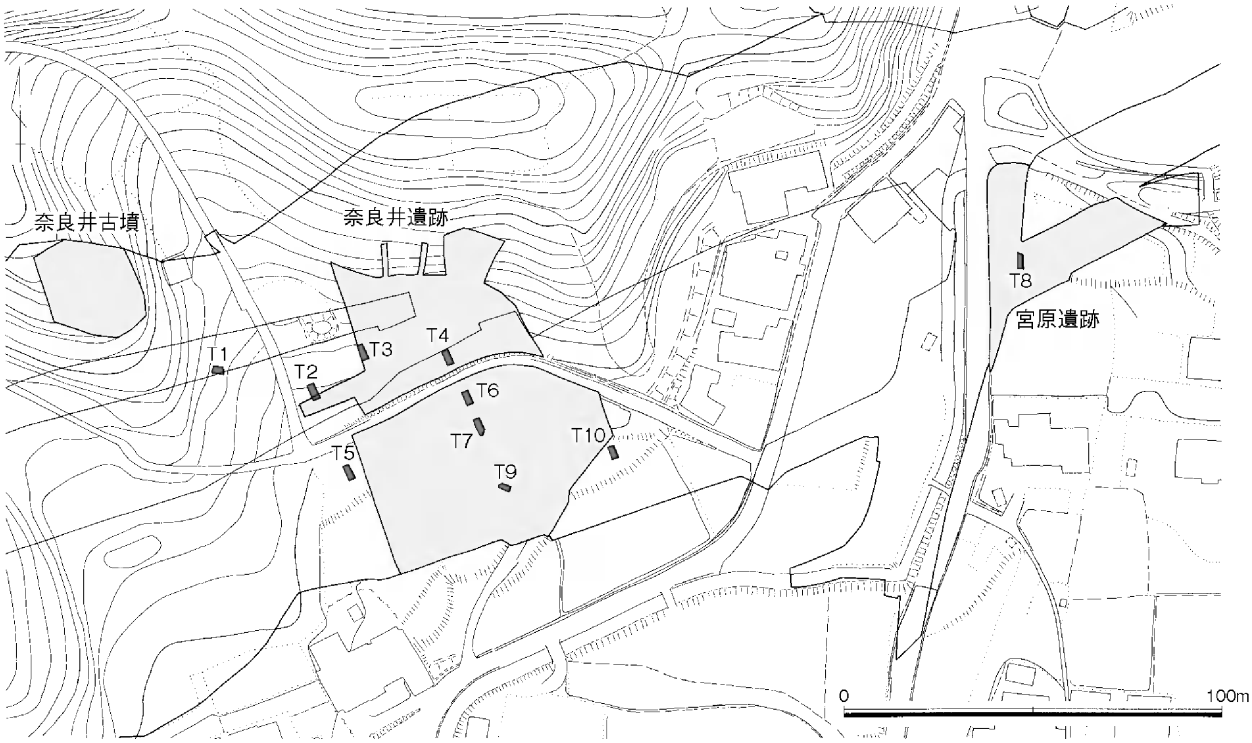
第２章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）が実施されるにあたり、岡山県教育委員会では事業予定地内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所と協議を重ね、用地買収の進展に応じながら確認調査（平成20年度、胎金寺跡）等を行ってきた。

事業の進展に伴い、平成20年度には新たに金光I.C.以西の事業が採択されたが、浅口市金光町佐方地内の事業予定地には宮原遺跡、奈良井遺跡、奈良井古墳が所在した。当該部分の工事は本線部分が一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）、側道部分が一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業として実施されるため、教育庁文化財課では国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所及び岡山県備中県民局建設部と協議を進め、現状での保存が困難な奈良井古墳については発掘調査を実施し記録保存の措置を講じる必要があることを説明し、宮原遺跡、奈良井遺跡については、遺跡の内容や範囲を把握するため、事前に確認調査を実施しその対応について協議することとした。

確認調査は、平成22年７月22日～８月５日にかけて、奈良井遺跡と宮原遺跡において岡山県古代吉備文化財センターが実施した。奈良井遺跡においては、南東に延びる緩やかな丘陵斜面にＴ１～７・



第３図　奈良井古墳・奈良井遺跡・宮原遺跡調査位置図（1/2,000）

Ｔ９・Ｔ10の９か所の調査区を設定して行った（第３図）。Ｔ１・Ｔ２・Ｔ５については谷部にあたり、遺構及び遺物は確認されなかった。Ｔ３は南に小さく張り出した丘陵尾根上に位置し、遺構等は検出されなかったが、その南東側斜面にあたるＴ４・Ｔ６・Ｔ７・Ｔ９において、柱穴や溝等の遺構及び須恵器を中心とした遺物包含層を確認した。以上のことから東側のＴ３からT10にかけての範囲に古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）の遺跡が広がることが判明した。宮原遺跡においては、Ｔ８の１か所を設定し（第３図）、南に延びる微高地の北側縁辺部と流路を検出した。微高地の上面は黒色化し、洪水砂と考えられる砂質土に覆われていた。微高地上では遺構は検出されなかったが、流路の埋土中からは多数の縄文時代後期の土器細片とサヌカイト片を検出した。

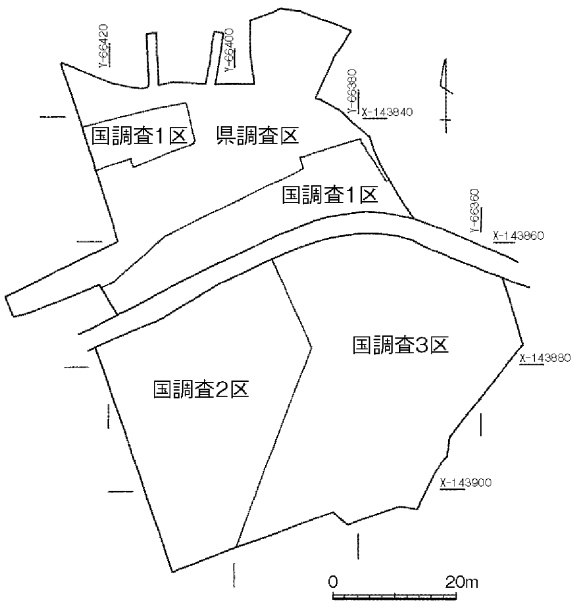
以上の確認調査の結果を受けて、奈良井遺跡、宮原遺跡の遺構・遺物が確認された範囲及び奈良井古墳について、両事業主体者が文化財保護法に基づく手続きを行い、県教育委員会が発掘調査を実施するよう勧告した。発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが平成23年度に実施した。　（石田）

第２節　発掘調査の経過

平成22年度に行った確認調査の結果を受けて、平成23年４月から９月まで側道部分にあたる一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）に伴い、調査員３名が宮原遺跡、奈良井古墳、奈良井遺跡を対象として本発掘調査を実施した。

宮原遺跡は排土場所の関係から、調査区西側を１区、東側を２区と設定して先に１区から着手した（第５図）。調査は現地表下約0.8～２ｍまで堆積していた造成土などを重機で除去して遺構検出を行った。調査区全体に削平が及んでいたが、縄文時代後期を主体とする河道１条と近世の土坑１基を検出し、遺物は縄文土器・須恵器・石器など整理箱で３箱出土した。

奈良井古墳は後世の地形改変によって墳丘が大きく損壊し、横穴式石室も半壊状態であった。調査の結果、７世紀初頭に築造された直径９ｍ弱の円墳である可能性が高いことが明らかになった。石室の規模は残存長3.25ｍ、最大幅1.54ｍ、天井高1.75～2.01ｍを測る。石室内・墳丘盛土・表土などから須恵器や土師器の小片を検出した。この他、瓦質土器など整理箱で１箱出土した。なお、平成25年度以降の工事にあわせて、石材を搬出して近接地に移築保存の予定である。



第４図　奈良井遺跡国・県事業調査区配置図（1/1,200）

奈良井遺跡の調査前は水田や畑の開墾や宅地化で地形改変が進んでいた。調査は現地表下約0.5ｍの造成土などを重機で除去して遺構検出を行った。調査過程において遺跡の広がりの再確認のためにトレンチ２本を北側に設定し、また、調査範囲を北東側と南西側に一部拡張した。調査の結果、調査区東側で谷状の地形を検出し、堆積土中から７世紀代の須恵器片が多数出土した。須恵器片は焼け歪みや溶着した破片

が多く、また窯壁片を多数含むことから付近に窯跡の存在が推測された。この他の遺構としては、弥生時代から近世までの段状遺構３基、竪穴遺構１基、土坑３基、溝５条、柱穴多数を検出した。また、遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・石器・窯壁・鉄滓などが出土した。

引き続いて、同年10月から平成24年３月まで本線部分にあたる一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）事業に伴い、奈良井遺跡を対象として調査員３名が本発掘調査を担当した。調査区は現道で南北に分断されており、排土場所の関係などからこの道路よりも北側を１区、南西側を２区、南東側を３区と区割りして調査を実施した（第４図）。１区の西半部では多数の柱穴・土坑・溝を確認し、東半部では溝などを検出した。また、２区では土坑・柱穴などをわずかに確認し、３区では溝や土坑などを検出した。

県事業で確認した谷状の地形は１区から３区に広がっており、堆積土中には同様に須恵器片や窯壁片が多数含まれていた。調査成果としては、竪穴遺構１基、土坑18基、被熱面１か所、溝16条、柱穴多数を検出し、遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦・窯壁・石器などが認められ、両事業で整理箱51箱が出土した。

発掘調査の進捗に伴い、平成23年６月３日、同７月28日及び平成24年２月16日には、埋蔵文化財保護対策委員会が開催され、委員からは有益な御指導と御助言を得た。また、地元を中心とする県民に対する発掘調査成果の公開にも努め、平成23年８月23・24日に開催した奈良井古墳の現地公開では両日で146名、また、平成24年３月９日に開催した奈良井遺跡の現地公開では、雨天の中53名の参加があった。（澤山）

第３節　報告書作成の経過

報告書作成は、一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）で発掘調査を実施した宮原遺跡、奈良井古墳、奈良井遺跡の整理作業を平成24年４月から９月まで、一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）の事業で発掘調査を実施した奈良井遺跡の整理作業を同年10月から平成25年３月まで、それぞれ調査員１名が従事した。

遺物整理は、各遺跡で検出した遺構及び包含層ごとに出土土器の復元作業を行い、順次遺物の実測作業を実施した。その後、遺物実測図の浄写を進め、遺構あるいは包含層の単位ごとにレイアウトを行った。また、重要で残存状況が良好な遺物は適宜写真撮影を行った。遺構・遺物の理解を深めるために必要な石材鑑定・胎土分析・花粉分析・放射性炭素年代測定などの自然科学的分析は専門機関、諸氏へ鑑定・同定を依頼して貴重な成果を得た。本書の掲載遺物点数は土器251点、土製品１点、石器27点、金属器８点である。遺構整理は全体図・遺構図・断面図などの実測図を基に下図を作成して浄写を行った。また、発掘調査で撮影した遺構写真については選別して現像を行った。本書の掲載遺構等の数は古墳１基、段状遺構２基、竪穴遺構１基、土坑19基、被熱面１か所、溝22条、柱穴９基、河道１条、谷部１か所である。

こうして作成した資料や写真などを用いて割付作業を行い、その後、各遺跡の遺構・遺物の検討と評価を行いながら、原稿の執筆作業と編集業務を行った。10月11日には埋蔵文化財保護対策委員会が開催され、委員からは報告書作成にあたり有益な御指導と御助言を得た。（澤山）

第４節　日誌抄

平成22年度（確認調査）

平成22年

７月22日（木）　確認調査開始。

８月５日（木）　確認調査終了。

平成23年度（発掘調査）

平成23年

４月１日（金）　一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）発掘調査開始。宮原遺跡調査開始。

５月25日（水）　奈良井遺跡調査開始。

６月３日（金）　第１回埋蔵文化財保護対策委員会開催。

６月10日（金）　宮原遺跡調査終了。

６月22日（水）　奈良井古墳調査開始。

７月28日（木）　第２回埋蔵文化財保護対策委員会開催。

８月23日（火）　奈良井古墳現地公開開催。

８月24日（水）　奈良井古墳現地公開開催。

９月30日（金）　奈良井遺跡・奈良井古墳調査終了。一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）発掘調査終了。

10月１日（土）　一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）発掘調査開始。

10月３日（月）　奈良井遺跡調査開始。

平成24年

２月16日（木）　第３回埋蔵文化財保護対策委員会開催。

３月９日（金）　奈良井遺跡現地公開開催。

３月14日（水）　奈良井遺跡調査終了。

３月31日（土）　一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）発掘調査終了。

平成24年度（報告書作成）

平成24年

４月１日（日）　一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）報告書作成開始。

９月30日（日）　一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）報告書作成終了。

10月１日（月）　一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）報告書作成開始。

10月11日（木）　埋蔵文化財保護対策委員会開催。

平成25年

３月31日（日）　一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）報告書作成終了。

第５節　発掘調査及び報告書作成の体制

平成22年度

岡山県教育委員会

教育長	門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長	増本　好孝

文化財課

課長	田村　啓介
参事	光永　真一
総括副参事（埋蔵文化財班長）	宇垣　匡雅
主任	米田　克彦
主事	一色　武

岡山県古代吉備文化財センター

所長	児仁井克一
次長（総務課長事務取扱）	片山　淳司
参事	中野　雅美

〈総務課〉

総括副参事（総務班長）	上田　利弘
主任	植木寿美子

主　　任　　越野　　忍
主　　任　　行守　智和
〈調査第一課〉
課　　長　　江見　正己
総括主幹（第一班長）　　高田恭一郎
主　　任　　石田　爲成
（確認調査担当）

平成23年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長　　阿部　淳二

文化財課

課　　長　　村木　生久
参　　事　　光永　真一
総括副参事（埋蔵文化財班長）　　宇垣　匡雅
主　　任　　石田　爲成
主　　事　　一色　　武

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　平井　泰男
次　　長（総務課長事務取扱）　　片山　淳司
参　　事　　中野　雅美
〈総務課〉
総括副参事（総務班長）　　上田　利弘
主　　任　　植木寿美子
主　　任　　行守　智和
〈調査第三課〉
課　　長　　大橋　雅也
総括主幹（第一班長）　　澤山　孝之
（調査担当）
主　　任　　岡本　泰典
（調査担当）
主　　事　　中原　香織
（調査担当）

平成24年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長　　松尾　茂樹

文化財課

課　　長　　光永　真一
参　　事　　嶋田健一郎
総括副参事（埋蔵文化財班長）　　宇垣　匡雅
主　　任　　石田　爲成
主　　任　　河野　但彰

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　平井　泰男
次　　長（総務課長事務取扱）　　大崎　智浩
総括参事
（調査第一課長事務取扱）　　中野　雅美
〈総務課〉
総括主幹（総務班長）　　岡部　　一
主　　任　　行守　智和
主　　任　　岡村　涼平
〈調査第二課〉
課　　長　　弘田　和司
総括副参事（第一班長）　　澤山　孝之
（報告書担当）

表１　文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日　付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 （㎡）	原因	包蔵地の有無	報告者	担当者	期間
岡吉調 第38号 H20. 7.23	周知	社寺跡 胎金寺跡	浅口市金光町須恵2056ほか	36	道路	無	岡山県古代吉備文化財センター所長	和田剛	H20. 7. 7～ H20. 7.16
岡吉調 第54号 H22. 8.17	周知	集落跡 奈良井遺跡、 宮原遺跡	奈良井遺跡：浅口市金光町佐方2215ほか 宮原遺跡：浅口市金光町佐方2550ほか	59	道路	有	岡山県古代吉備文化財センター所長	石田爲成	H22. 7.22～ H22. 8. 5

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

岡山県文書番号　日付	遺跡の種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	通知者	期間	主な勧告事項
教文埋第1305号 H23. 2.28	集落跡 奈良井遺跡	浅口市金光町佐方2215ほか	3,226	道路	国土交通省中国地方整備局 岡山国道事務所長	H24. 4. 1 ～ H27. 3.31	発掘調査
教文埋第1363号 H23. 3.14	集落跡・古墳 宮原遺跡、奈良井遺跡、奈良井古墳	浅口市金光町佐方2549-4、2550-5、2552-4、2551-4、2549-6ほか	1,674	道路	岡山県備中県民局長	H23. 8.（予定）～ H27. 3.末日（予定）	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号　日付	遺跡の種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調第1号 H23. 4. 1	散布地・古墳 宮原遺跡、奈良井遺跡、奈良井古墳	浅口市金光町佐方2550ほか	1,674	道路	岡山県古代吉備文化財センター所長	澤山孝之・岡本泰典・中原香織	H23. 4. 1 ～ H23. 9.30
岡吉調第23号 H23.10. 3	集落跡 奈良井遺跡	浅口市金光町佐方2215ほか	2,919	道路	岡山県古代吉備文化財センター所長	澤山孝之・岡本泰典・中原香織	H23.10. 1 ～ H24. 3.31

埋蔵文化財発見通知（法第100条第２項）

岡山県文書番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋第506号 H22. 8. 6	奈良井遺跡：弥生土器・須恵器・土師器・鉄滓ほか　計整理箱1箱 宮原遺跡：縄文土器・サヌカイト片 計整理箱1箱	奈良井遺跡：浅口市金光町佐方2215ほか 宮原遺跡：浅口市金光町佐方2550ほか	H22. 7.22 ～ H22. 8. 5	岡山県教育委員会 教育長　門野八洲雄	奈良井遺跡：国土交通省 宮原遺跡：岡山県	岡山県古代吉備文化財センター
教文埋第298号 H23. 6.10	縄文土器・須恵器・石器 計整理箱3箱	浅口市金光町佐方2550・2551 宮原遺跡	H23. 4. 1 ～ H23. 6.10	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	岡山県知事　石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター
教文埋第707号 H23. 9.30	須恵器・土師器・瓦質土器 計整理箱1箱	浅口市金光町佐方2170-3 奈良井古墳	H23. 6.22 ～ H23. 9.30	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	岡山県知事　石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター
教文埋第1371号 H24. 3.16	弥生土器・土師器・須恵器・瓦・窯壁・石器 計整理箱51箱	浅口市金光町佐方2215ほか9筆 奈良井遺跡	H23. 5.25 ～ H24. 3.14	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	岡山県知事　石井正弘・国土交通省	岡山県古代吉備文化財センター

写真１　第２回埋蔵文化財保護対策委員会
（平成23年７月28日開催）

写真２　第３回埋蔵文化財保護対策委員会
（平成24年２月16日開催）

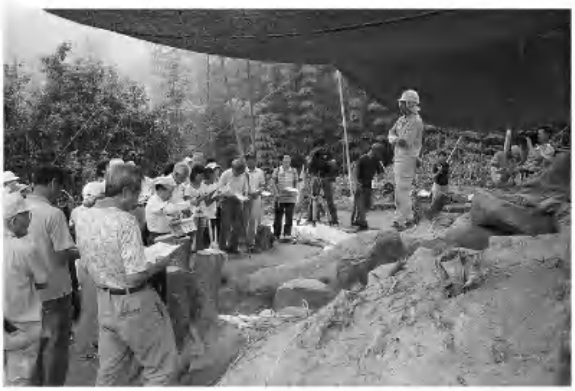


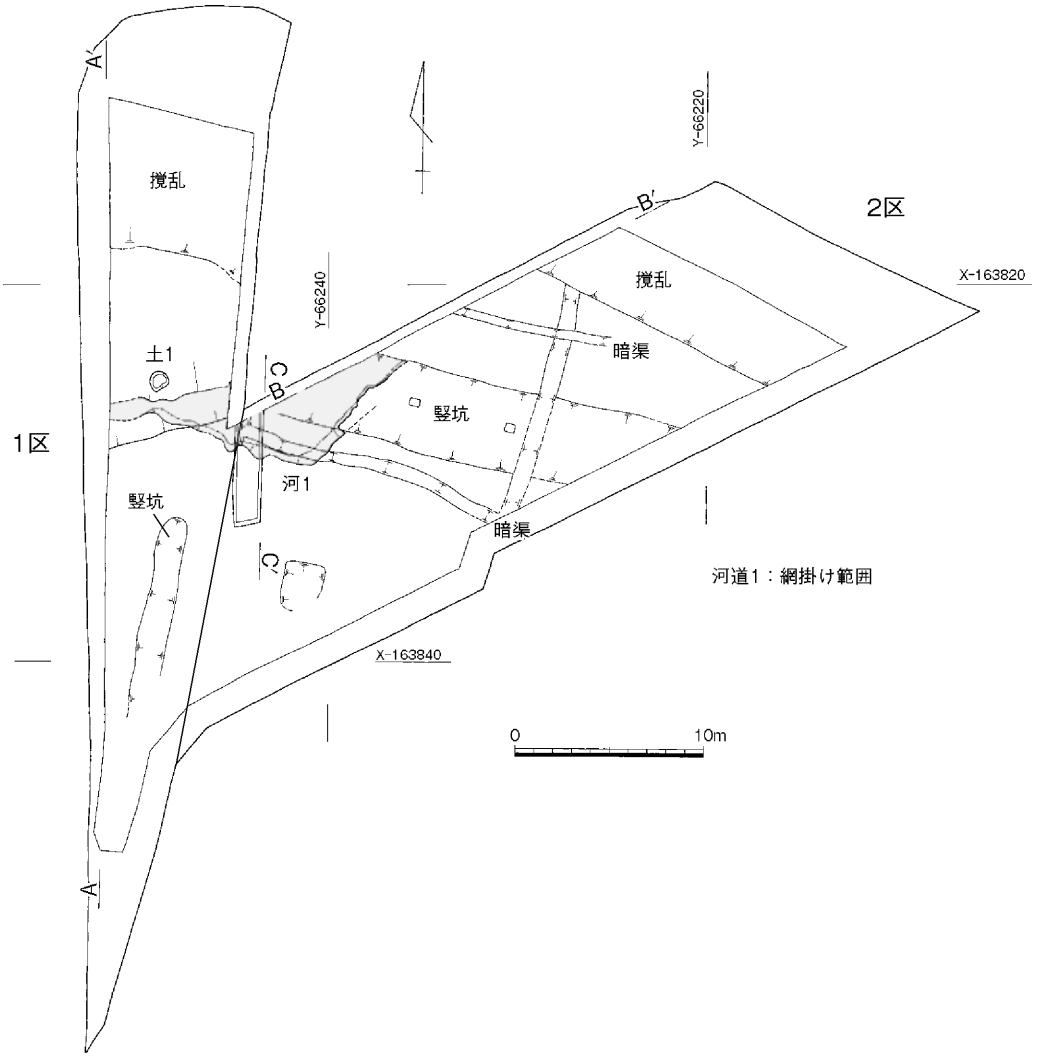
写真３　奈良井古墳現地公開
（平成23年８月23・24日開催）

写真４　奈良井遺跡現地公開
（平成24年３月９日開催）

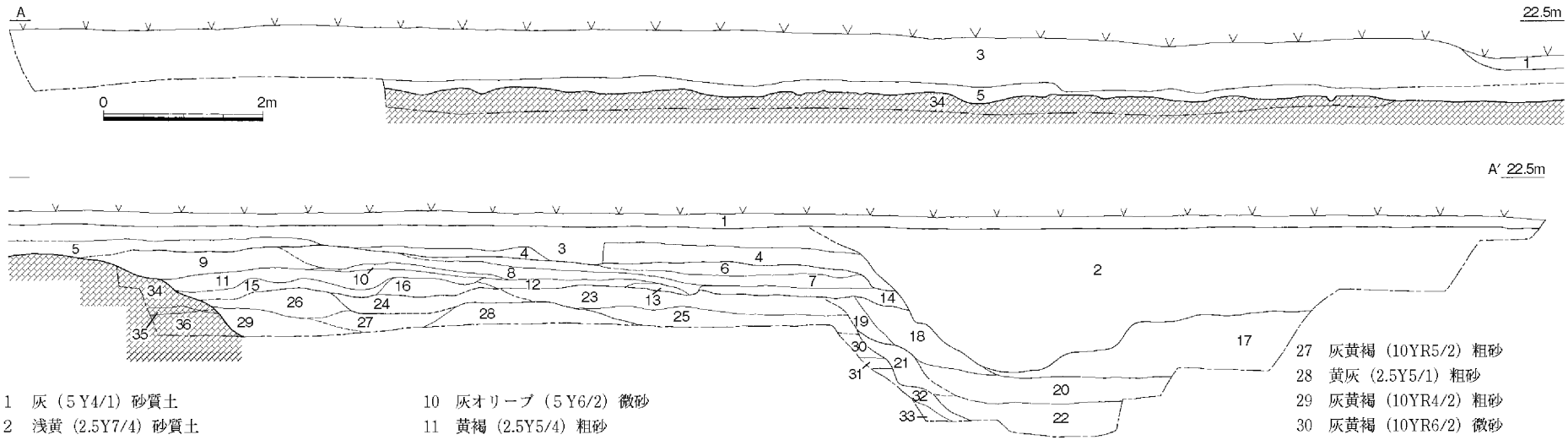
第３章　宮原遺跡

第１節　調査の概要

宮原遺跡は里見川支流の佐方川右岸にあたる微高地北縁に立地する。調査地は標高約22ｍの平坦地に位置し、調査前は水田や畑として利用されていた。確認調査の成果を踏まえて、表土と約0.5～0.8mの造成土を除去した結果、１区北側では佐方川の河川改修による現地表下約２mに及ぶ深い撹乱が明らかになり、さらに１・２区全体に暗渠や土壌改善用に掘削された竪坑が確認された。また、１区中央から北側では、厚さ約0.5mの近代の洪水砂層を確認した（図版２－２・３）。その後、微高地直上まで堆積層を掘削しながら遺構検出作業を行った結果、土坑１基と確認調査で発見した河道１条を検出した（第５～７図）。（澤山）

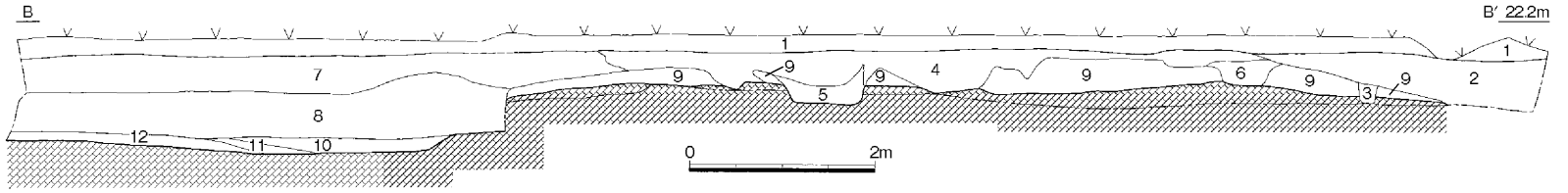


第５図　遺構全体図（1/400）



1　灰（５Y4/1）砂質土
2　浅黄（2.5Y7/4）砂質土
3　造成土
4　黄灰（2.5Y5/1）砂質土
5　黄灰（2.5Y5/1）砂質土
（部分的に褐色を帯びる）
6　にぶい黄褐（10YR5/4）砂質土
7　灰黄褐（10YR6/2）粘質土
（部分的に褐色・黒色を帯びる）
8　暗灰黄（2.5Y5/2）砂質土
9　暗灰黄（2.5Y5/2）粗砂
10　灰オリーブ（５Y6/2）微砂
11　黄褐（2.5Y5/4）粗砂
12　黄灰（2.5Y4/1）砂質土
13　黄褐（2.5Y5/4）粗砂
14　暗灰黄（2.5Y5/2）砂質土
15　灰オリーブ（５Y6/2）微砂
16　暗灰黄（2.5Y5/2）粗砂
17　緑灰（7.5GY5/1）砂質土
（グライ化）
18　暗灰黄（2.5Y5/2）砂質土
19　にぶい黄（2.5Y6/3）砂質土
20　暗オリーブ灰（５GY4/1）砂質土
（グライ化）
21　灰黄（2.5Y6/2）砂質土
22　灰（５Y5/1）砂質土
（部分的に粘質土を含む）
23　灰オリーブ（５Y5/2）砂質土
24　黄灰（2.5Y4/1）砂質土
25　にぶい黄褐（10YR5/3）粗砂
26　黄褐（2.5Y5/4）粗砂
27　灰黄褐（10YR5/2）粗砂
28　黄灰（2.5Y5/1）粗砂
29　灰黄褐（10YR4/2）粗砂
30　灰黄褐（10YR6/2）微砂
（部分的に粗砂を含む）
31　灰（５YR5/1）微砂
32　灰オリーブ（５Y6/2）微砂
33　黄灰（2.5Y5/1）粗砂
34　灰オリーブ（7.5Y6/2）粘質土
（地山　上層は黒色化）
35　暗灰黄（2.5Y5/2）粗砂（地山）
36　灰オリーブ（7.5Y6/2）粘質土
（地山　上層は黒色化）

第６図　調査区西壁断面図（1/80）



1　黒褐（7.5YR3/1）土
2　黒褐（10YR3/2）土
3　暗褐（10YR3/3）土
4　灰黄褐（10YR4/2）土
5　黒褐（10YR2/2）土
6　にぶい黄褐（10YR5/3）砂質土
7　にぶい黄褐（10YR5/4）土
8　黒褐（10YR3/1）土
9　褐（7.5YR4/4）土
10　灰黄褐（10YR5/2）砂質土
11　黒褐（7.5YR3/2）砂質土
12　褐（10YR4/1）砂質土

第７図　調査区北壁断面図（1/80）

第２節　縄文時代の遺構と遺物

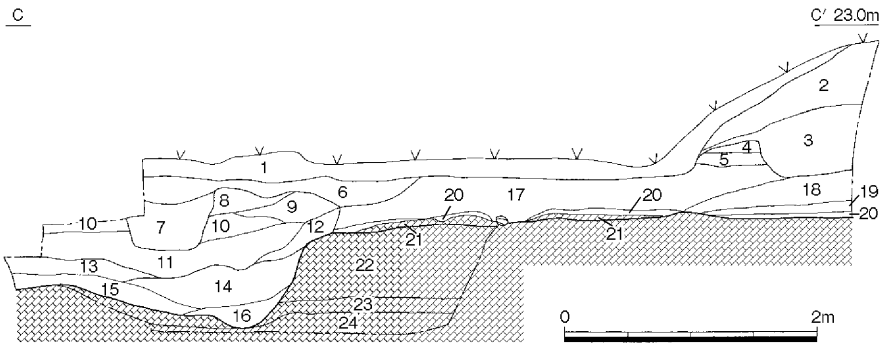
１　河道

河道１（第５・８～12図、図版１・２－１・18・19）

１区中央から２区北西側にかけて検出された。河道は北西から微高地北縁を蛇行しながら北東に向かって流下したと思われ、深さは現状で54cmを測る。幅は近代洪水砂に切られているため判然としないが、数ｍ単位の規模をもっていたと思われる。土層断面からは第10～12層にあたる上層と第13～16層にあたる下層とに堆積の時期差が認められた。この河道からは、縄文時代中期末から後期初頭を主体とする土器と石器がまとまって出土している。ただし、土器は砕片で表面が摩滅したものが多く、形態や施文・文様構成などが不明瞭なものもあった。こうした状況で図化し得た土器は63点である。出土層位をみると、第13～16層から出土した下層土器は**５・６・11・18・22・24・25・32・35・37～40・46・52・54・56・57**であり、第10～12層にあたる上層土器は上記以外のものであった。

１～22は有文土器のうち沈線を主文様として縄文施文が認められない一群であり、**１～12**は口縁部片、**13～22**は胴部片である。口縁部片のうち**２・４・８・10・11**が波状口縁、その他は水平口縁と思われ、それぞれ口縁部の肥厚はなく、口縁端部はナデにより丸または面取り気味に仕上げられている。また、**９・11**の口縁端部には刻目がみられる。

１は口頸部が外反して、口縁部が屈曲し立ち上がる形態をもつ。口縁刻目帯系統に相当し、口縁部には縦位の短い棒状沈線が施され、胴部は無文である。**２**は突起状山形口縁部片であり、頂部に向かって区画文が施される。面取りした口縁端部には小円孔が２か所みられる。**３～12**は巻貝条痕またはナデ・ミガキの器面調整の後に、横方向の沈線が認められる。**３**の沈線は幅0.5～0.7cm、深さ0.3～0.4cm



1　褐灰（10YR4/1）土
2　造成土
3　造成土
4　明黄褐（10YR7/6）砂質土
5　灰黄褐（10YR6/2）砂質土
6　灰黄褐（10YR6/2）砂質土
7　黒褐（10YR3/1）砂質土
8　灰黄（2.5YR6/2）砂質土
9　灰黄褐（10YR6/2）砂質土
10　にぶい黄橙（10YR7/2）砂質土
11　褐灰（10YR5/1）砂質土
12　灰黄褐（2.5YR5/2）砂質土
13　灰黄（2.5Y6/2）微砂
14　褐灰（10YR4/1）砂質土
15　褐灰（10YR5/1）微砂
16　黒褐（10YR3/1）砂質土
17　黄灰（2.5Y5/1）砂質土
18　暗灰黄（2.5Y5/2）砂質土
19　黄灰（2.5Y6/1）砂質土
20　明黄褐（10YR6/6）砂質土
21　黒褐（10YR3/1）粘質土（地山）
22　灰オリーブ（7.5Y6/2）粘土（地山）
23　緑灰（7.5GY6/1）シルト質粘土（地山）
24　にぶい黄色（2.5Y6/3）シルト（地山）

第８図　河道１断面図（1/60）

と広くて深い施文が用いられ、断面はU字形を呈する。沈線間幅は1.0～1.2cmである。４は波状口縁で横方向に展開する隅丸の区画文が施され、沈線は幅0.3cm、深さ0.1～0.2cm、沈線間幅は1.5cmである。５には幅0.3cm、深さ0.2cm、沈線間幅は0.3～1.2cmを測る斜方向の沈線がみられる。６には幅0.3cm、深さ0.3cm、沈線間幅1.2cmの区画文が施される。７には矩形の区画文がみられるが、摩滅により詳細は不明である。８は横方向の広い区画文が認められる。９には幅0.4cm、深さ0.3cm、沈線間幅は1.2～2.1cmの施文がみられる。10～12にも沈線が認められる。

13は二枚貝条痕による器面調整の後に、曲線の沈線文が施される。14～22はナデによる器面調整がみられる。14は厚さ約６㎜の隆帯を貼り付け、その周縁に沈線を巡らす。15～19は横方向の沈線が認められる。17は二枚貝条痕の地文の可能性がある。19は横方向の窓枠状の区画文が認められ、18もその可能性があるが判然としない。21は曲線、22はＪ字状の沈線文であるが、文様構成は不明である。

23～36は有文土器のうち磨消縄文を主文様とする一群で、23～29は口縁部片、30～36は胴部片で

第９図　河道１出土遺物①（1/3）

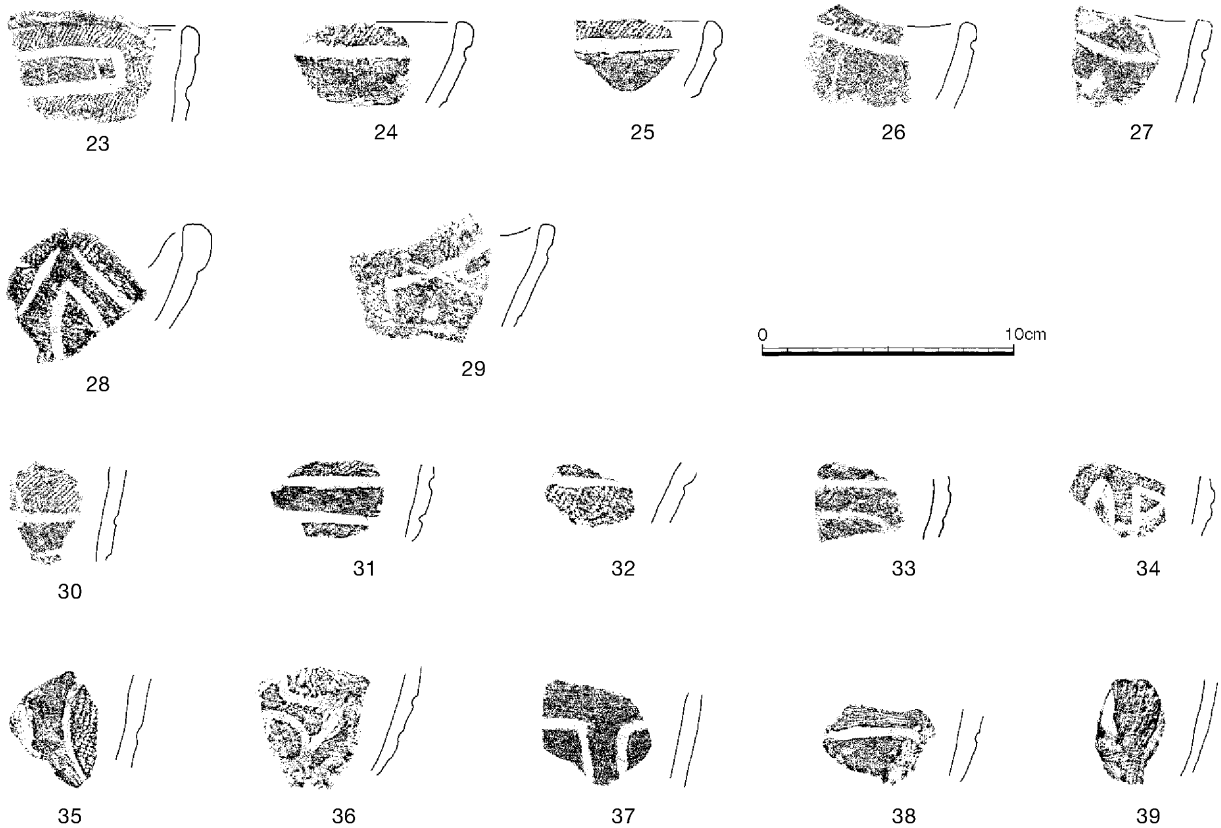
ある。口縁部をみると直下には無文帯をもたず、縄文施文が認められる。ただし、28・29は不明瞭であり、本来未施文であった可能性も考えられる。また、23～25は水平口縁、26～29は波状口縁と思われ、水平口縁の口縁部の肥厚はほとんどなく、口縁端部はナデにより丸または面取り気味に仕上げている。一方、波状口縁では28のように波頂部を厚く肥厚させ、ナデにより平坦面をつくり出すものがみられる。

23は口縁部直下にＬＲ縄文を施した後、縄文帯と無文帯が幅1.0cmと均等な区画文が描かれる。沈線は幅0.6cm、深さ0.2～0.3cmと広くて深いものである。24は口縁部直下にＬＲ縄文を施した後、23と異なり縄文帯より無文帯の幅が広い区画文が描かれる。縄文帯の幅は約0.7cm、無文帯の幅は約1.8cmであり、沈線は幅0.6cm、深さ0.2～0.3cmと広くて深い。25～27も無文帯の状況が分からないが、24と同じ文様構成をもつと思われる。

28は口縁部と並行して波頂部で途切れる沈線文を施し、波頂部下部には紡錘文に類似する文様が認められる。29の波頂部下部には広い区画文がみられる。30～36にも磨消縄文が認められるものの、小破片のために形態や文様構成などが判然としない。

37～39は有文土器のうち小形巻貝による擬縄文を主文様とする一群で、すべて胴部片である。37は矩形と隅丸に描かれた沈線による区画内に認められ、38・39も同様に施されていると思われる。ただし、それぞれの擬縄文は区画内全面を充填しきれておらず、縄文施文と比べてやや粗い印象を受ける。

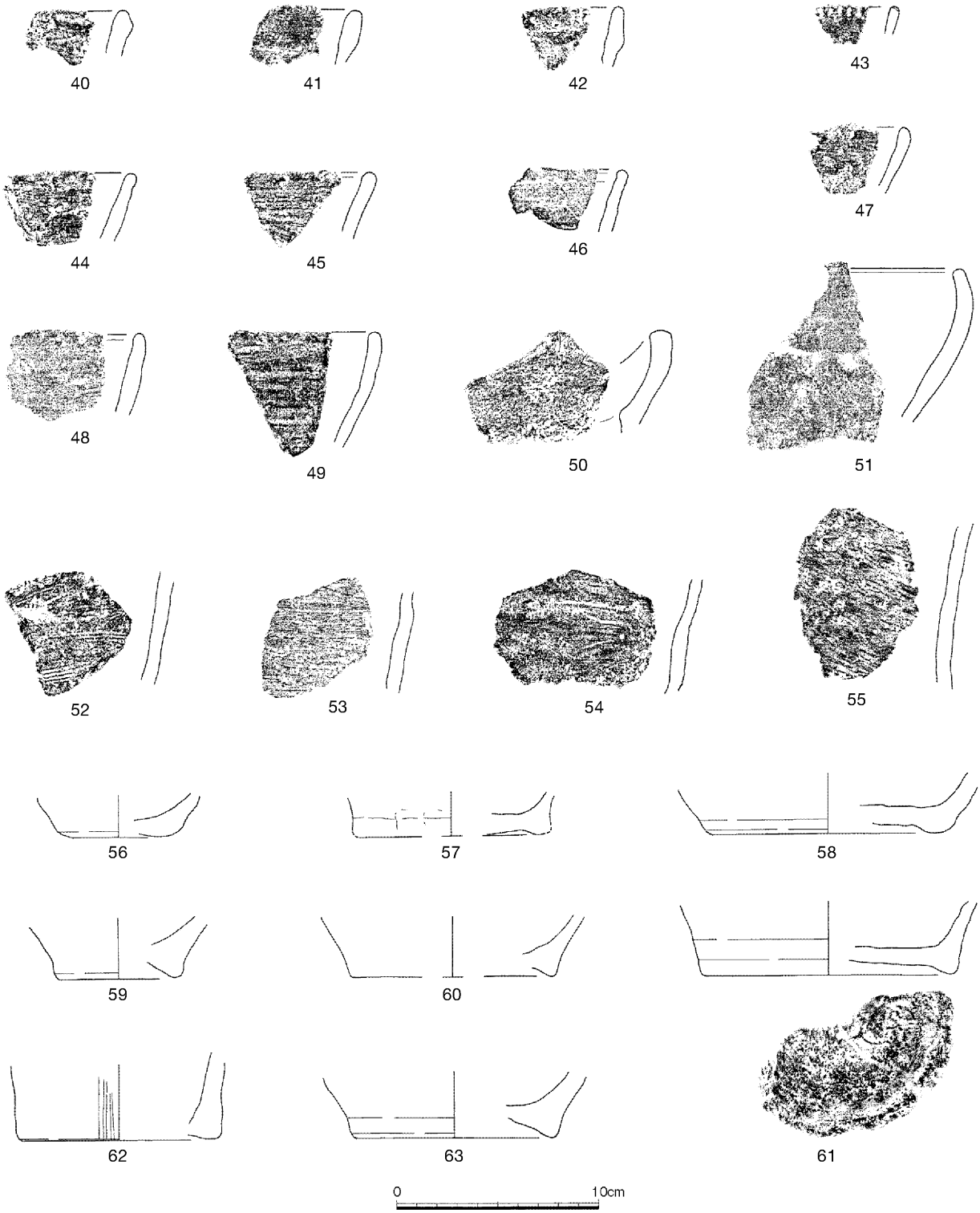
40～63は無文土器の一群であり、40～51は口縁部片、52～55は胴部片、56～63は底部片である。40～42は口縁部下端が肥厚する一群であるが、小片のため胴部の文様構成の有無は不明である。43の口縁端部には刻目が施されている。44～49は水平口縁であり、口縁部は肥厚しておらず、口縁端部は



第10図　河道１出土遺物②（1/3）

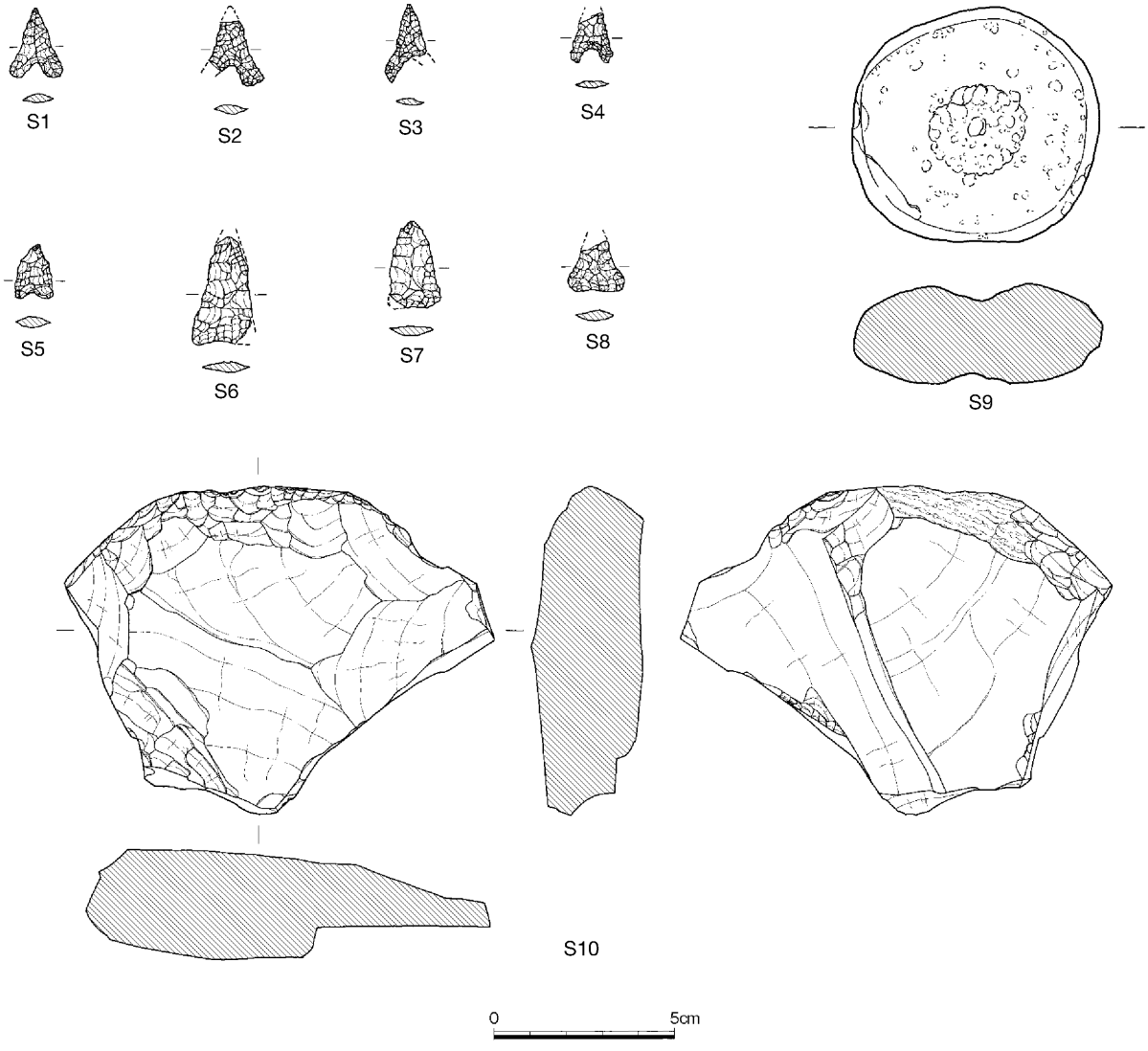
ナデにより仕上げている。器面調整は基本的に外面に巻貝条痕・ナデ、内面はナデを用いている。

50は波状口縁、51は水平口縁であり、外面、内面ともに平滑なナデを用いている。50の口縁部は波頂部がわずかに肥厚しており、ナデにより平坦面をつくり出している。52は二枚貝条痕による器面調整がみられる。53～55は基本的に外面に巻貝条痕、内面はナデの器面調整を行っている。底部は凹底59・60・63と高台底57・58・61、平底56・62などが認められる。



第11図　河道１出土遺物③（1/3）

出土石器をみると、Ｓ１～Ｓ６は凹基式、Ｓ７・Ｓ８は平基式のサヌカイト製の石鏃であり、Ｓ９は両面に敲打痕、側面には敲打痕と擦痕が認められる花崗岩製の凹み石である。Ｓ10は最大長118.0㎜、最大幅90.5㎜、最大厚30.5㎜、重量347.94ｇのサヌカイトの石核である。　（澤山）

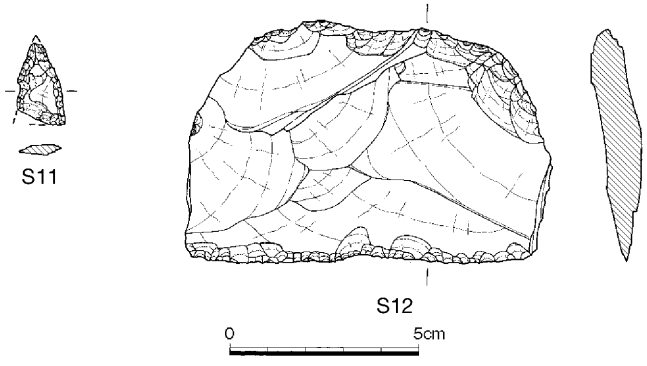


第12図　河道１出土遺物④（1/2）

２　遺構に伴わない遺物

Ｓ11は平基式のサヌカイト製の石鏃である。河道１の検出作業時に確認したものであるためここで扱った。

Ｓ12はサヌカイト製のスクレイパーである。完形品で上端部には敲打による潰しが確認される。表土からの出土で河道１に伴うかは不明であり、より後出の可能性がある（第13図、図版19－２）。　（澤山）



第13図　遺構に伴わない遺物（1/2）

第３節　古墳時代以降の遺構と遺物

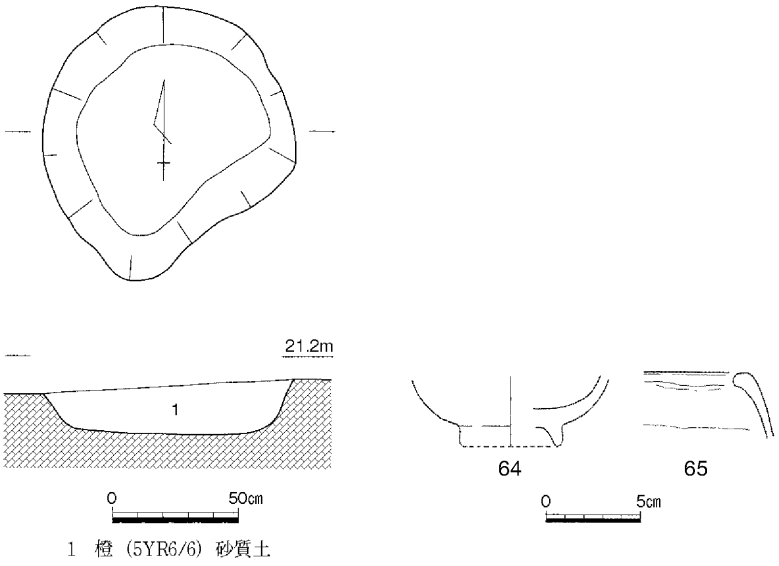
１　土坑

土坑１（第５・14図）

１区中央付近で、近代の洪水砂層を除去後に検出された。

平面形は不整円形であり、断面形は平らな底面から外方に立ち上がる形態を有する。規模は長径111cm、短径102cm、深さ21cmを測る。

遺物は、器面全体が淡黄に発色して、貫入が認められる磁器碗64や、外面にススが付着している土師質土器鍋65などが出土している。時期は近世後期のものと思われる。　（澤山）

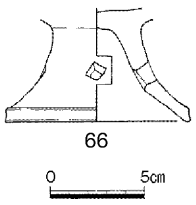


1　橙（5YR6/6）砂質土

第14図　土坑１（1/30）・出土遺物（1/4）

２　遺構に伴わない遺物

須恵器高杯66は、調査開始時に行った造成土の除去作業において、１区南東側で出土した。残存状況は杯部ではすべてが、脚部も半分以上が欠損している。形態としては、短脚の柱部から裾部にかけて直線的に短く外反しており、脚端部は若干上方につまみ上がっている。柱部には菱形の透かし孔が施されており、現状で少なくとも２個１対となる位置に配されている。また、透かし孔の内面は丁寧なケズリ・ナデを行って平滑に仕上げている。胎土は精良であるが、焼成はやや不良である(第15図)。　（澤山）



第15図　遺構に伴わない遺物（1/4）

第４節　小結

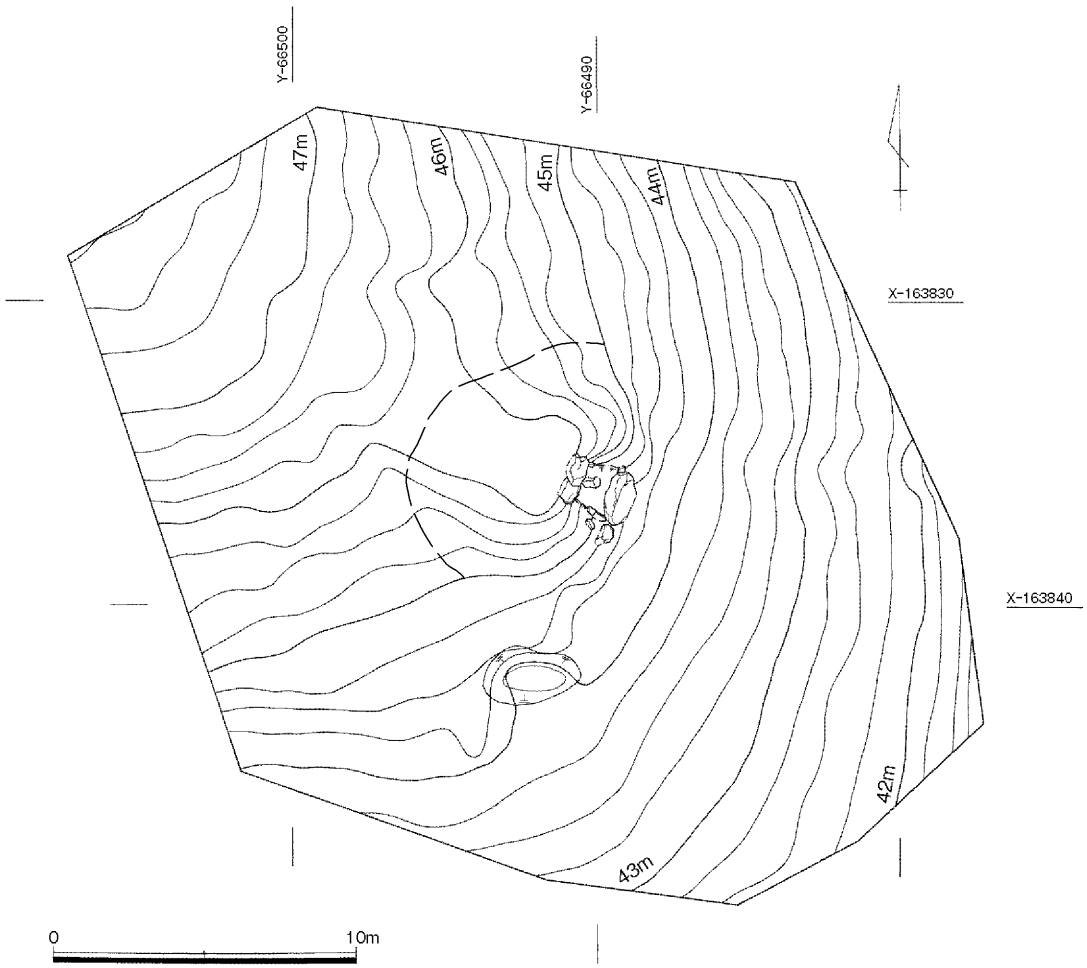
今回の調査では縄文時代中期末あるいは後期初頭の遺構は検出されなかったが、少量ながら土器片や狩猟具の石鏃、堅果類の粉砕具である凹み石、石器素材のサヌカイト石核などの出土から、この河道周辺で安定した集落が存在したと思われる。瀬戸内海沿岸部の縄文時代の遺跡分布をみると、中期末から後期初頭までの磨消縄文期あたりは前～中期に比べて遺跡数が増加する一方、縁帯文期に入ると多くの遺跡が途絶あるいは小規模化し、新出遺跡も少なくなって減少傾向を示すとされる。宮原遺跡もこうした集落相と軌を一にしているが、その背景としては環境変化による遺跡立地の多様化、中核遺跡からの集団分岐、内陸遺跡と海浜遺跡の周期的移動とそれらの変容が要因と思われる。（澤山）

第４章　奈良井古墳

第１節　調査の概要

１　立地と調査前の状況

奈良井古墳は、浅口市南部の寄島山地から北側に派生する、細長い丘陵の南東向き斜面上に立地する（巻頭図版１）。この丘陵は、佐方川水系と堅川水系の平野を分断するように横たわり、浅口市の旧金光町と旧鴨方町との境界ともなっている。東西の平野はそれぞれ金光町佐方地区と鴨方町六条院東地区に属し、いずれも周囲の丘陵上に多くの古墳が分布する地域である。佐方地区の平野は、倉敷市玉島黒崎との境界である寄島山地に源を発し、北流する佐方川の流路に沿って形成されたものである。奈良井古墳からは、南東方向にこの平野一帯と南側の寄島山地を目視することができるが、北側は丘陵に阻まれて直接の見通しはない（図版４－３）。なお、平野を隔てた東側の丘陵上にも、宮原１

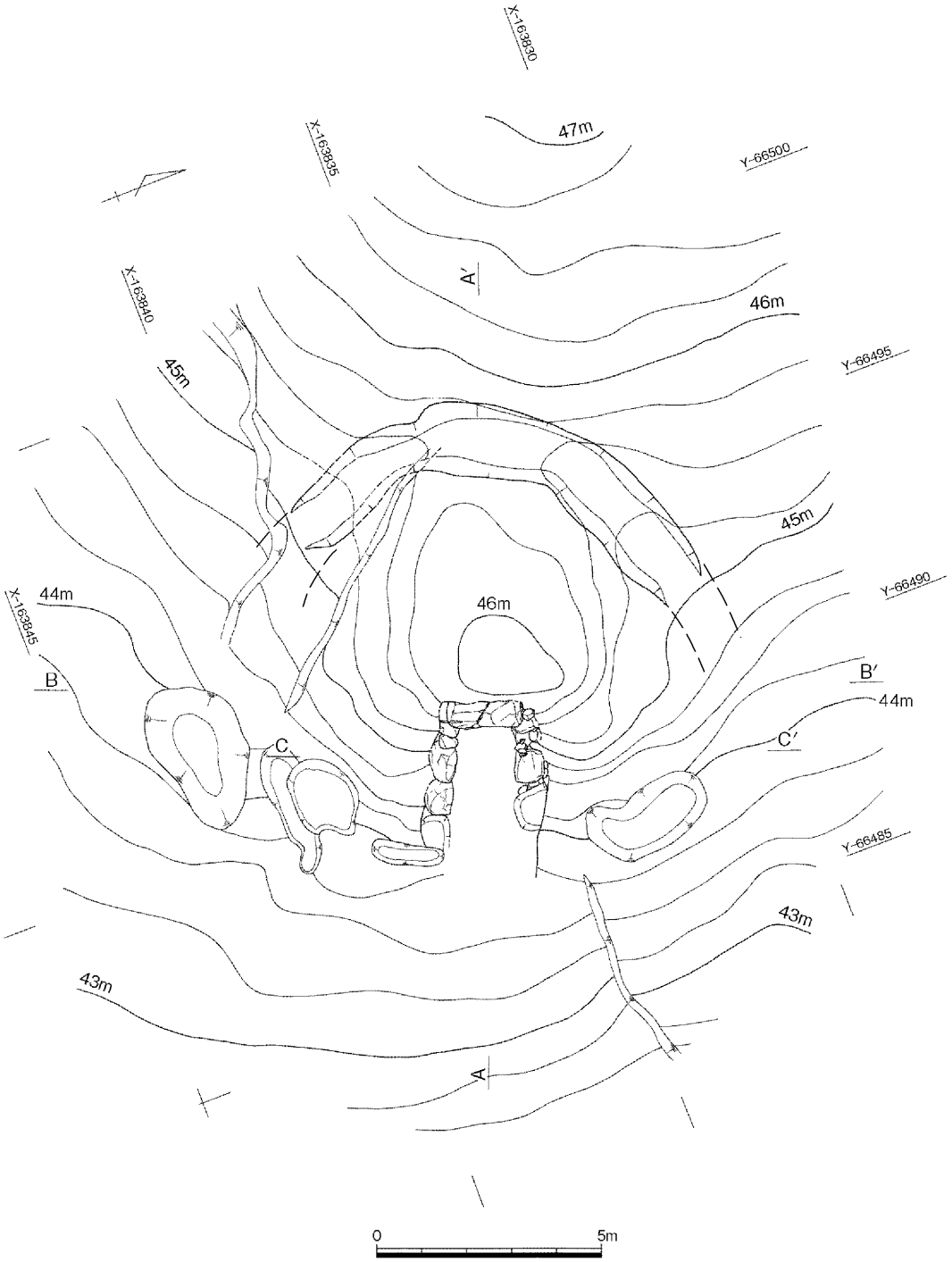


第16図　調査前地形測量図（1/250）

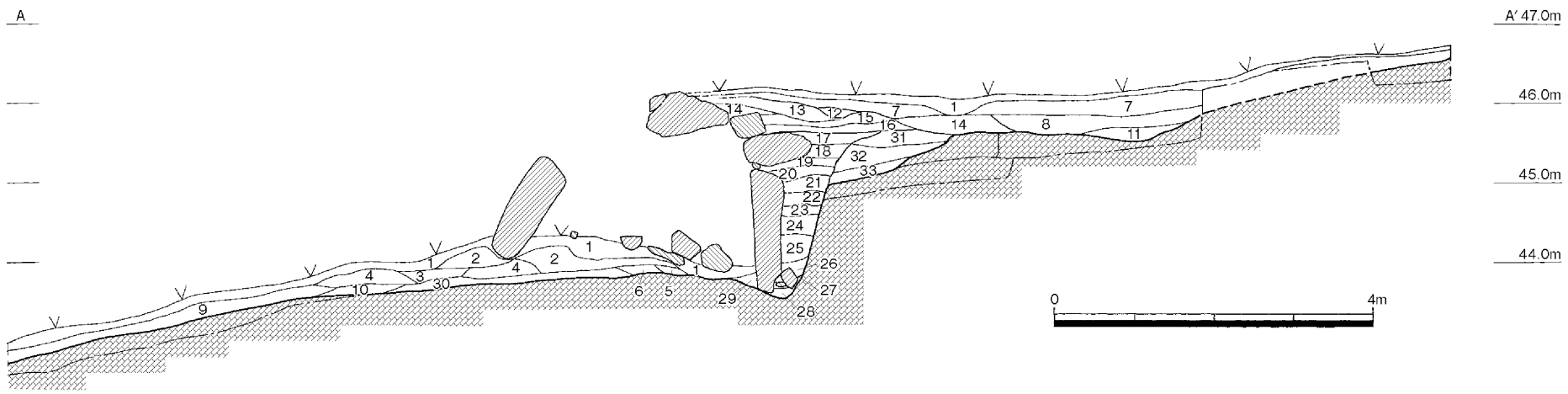
号墳をはじめ複数の古墳が分布する。

調査前の状況は、墳丘・石室ともに大きく損壊し、石室は奥壁寄りの部分のみが残存している状態であった。さらに、転落した天井石が石室の前面を塞ぎ、残った天井石にも亀裂が入り、崩落が危惧されるなど作業に支障が予想された(図版３)。そのため、まず墳丘と石室の現況を図化・記録したうえで、作業の支障となる石材を重機で撤去し、その後に本格的な発掘作業を開始した。　　(岡本)

２　墳丘と周溝

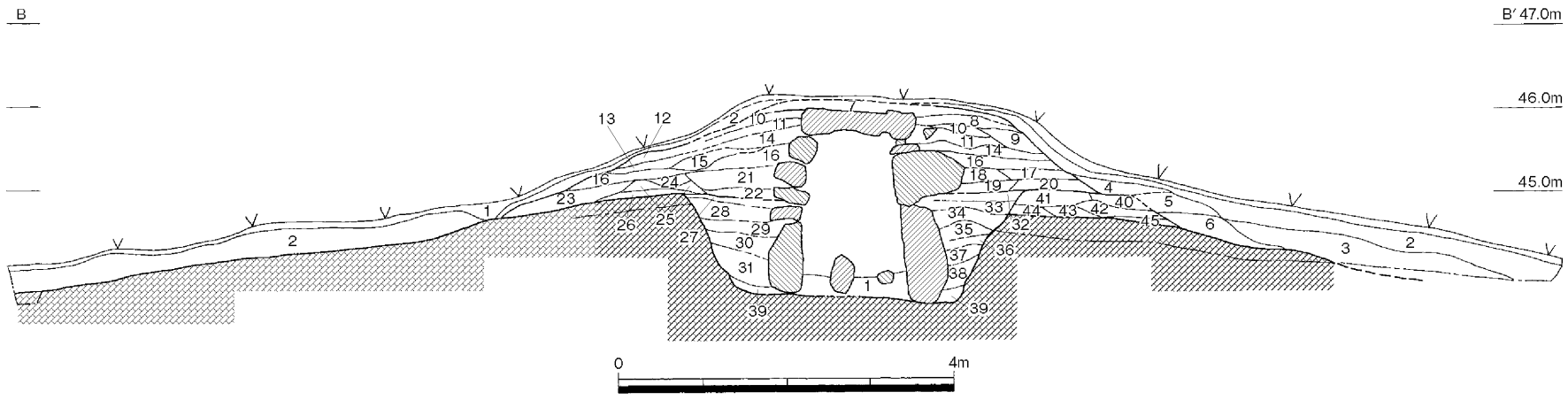


第17図　墳丘測量図（1/150）



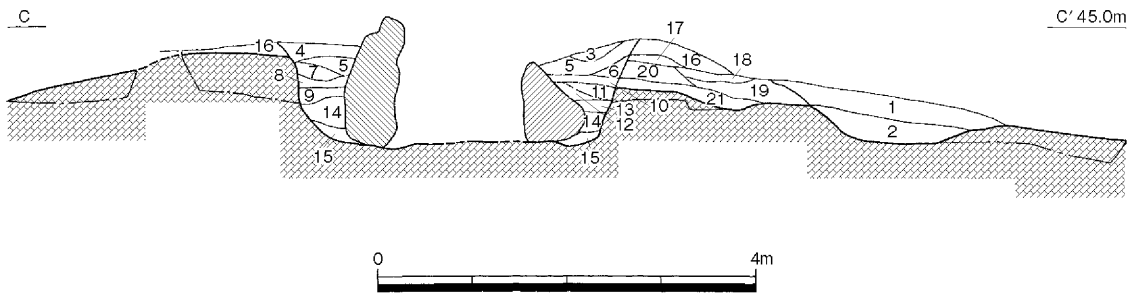
1　表土
2　にぶい黄（2.5Y6/3）土
（褐色土を含む）
3　灰黄褐（10YR4/2）土
（腐植土を含む）
4　にぶい黄（2.5Y6/4）土
（地山ブロックを含む）
5　にぶい黄（2.5Y6/4）土
6　にぶい黄褐（10YR5/3）土
7　にぶい黄（2.5Y6/3）土
（細礫を多く含む）
8　黄褐（2.5Y5/3）土
（細礫を多く含む）
9　にぶい黄橙（10YR6/3）土
10　にぶい黄褐（10YR4/3）土
11　暗灰黄（2.5Y5/2）土
（細礫を多く含む）
12　灰黄（2.5Y7/2）土
13　にぶい黄（2.5Y6/3）土
14　黄灰色（2.5Y6/1）土
15　にぶい黄（2.5Y6/4）土
16　黄灰（2.5Y6/1）土
17　灰黄（2.5Y6/2）土
18　灰黄褐（10YR6/2）土
19　にぶい黄（2.5Y6/3）土
20　灰黄（10YR6/2）土
21　にぶい黄橙（10YR5/3）土
22　にぶい黄橙（10YR6/3）土
23　にぶい黄（2.5Y6/3）土
24　にぶい黄褐（10YR5/4）土
25　黄褐（2.5Y5/3）土
26　にぶい黄（2.5Y6/3）土
27　にぶい黄（2.5Y6/4）土
28　暗灰黄（2.5Y4/2）土
29　暗灰黄（2.5Y4/2）土
30　にぶい黄（2.5Y6/4）土
31　にぶい黄（2.5Y6/3）土
32　黄褐（2.5Y5/4）土
33　黄褐（2.5Y5/3）土

表土：１層
流土・堆積土：２～10層
周溝埋土：11層
石室構築時盛土：12～30層
石室構築前盛土：31～33層



1　表土
2　にぶい黄（2.5Y6/3）土
（細礫を多く含む）
3　灰黄（2.5Y6/2）土
4　暗灰黄（2.5Y5/2）土
5　にぶい黄（2.5Y6/3）土
6　黄褐（2.5Y5/2）土
7　灰黄（2.5Y7/2）土
8　灰黄（2.5Y6/2）土
9　灰黄（2.5Y6/2）土
10　にぶい黄（2.5Y6/3）土
11　にぶい黄（2.5Y6/4）土
12　灰黄（2.5Y7/2）土
13　にぶい黄（2.5Y6/4）土
14　にぶい黄（2.5Y6/4）土
15　黄褐（2.5Y5/4）土
16　黄灰（2.5Y6/1）土
17　にぶい黄橙（10YR6/4）土
18　にぶい黄（2.5Y6/4）土
19　灰黄（2.5Y6/2）土
20　灰黄（2.5Y7/2）土
21　明黄褐（10YR6/6）土
22　にぶい黄（2.5Y6/4）土
23　にぶい黄（2.5Y6/3）土
24　浅黄（2.5Y7/3）土
25　にぶい黄（2.5Y6/4）土
26　明黄褐（10YR7/6）土
27　黄褐（2.5Y5/3）土
28　にぶい黄（2.5Y6/4）土
29　にぶい黄橙（10YR6/4）土
30　明黄褐（10YR6/6）土
31　黄灰（2.5Y5/1）土
32　黄灰（2.5Y6/1）土
33　暗灰黄（2.5Y5/2）土
34　黄褐（2.5Y5/3）土
35　暗灰黄（2.5Y5/2）土
36　灰黄（2.5Y6/2）土
37　黄灰（2.5Y5/1）土
38　灰黄（2.5Y6/2）土
39　暗灰黄（2.5Y5/2）土
40　にぶい黄（2.5Y6/3）土
41　灰黄（2.5Y6/2）土
42　にぶい黄（2.5Y6/4）土
43　にぶい黄（2.5Y6/3）土
44　黄褐（2.5Y5/4）土
45　にぶい黄（2.5Y6/3）土

表土：１層
流土・堆積土：２～７層
石室構築時盛土：８～39層
石室構築前盛土：40～45層



1　黄褐（2.5Y5/3）土
2　暗灰黄（2.5Y4/2）土
3　灰黄（2.5Y6/2）土
4　にぶい黄（2.5Y6/3）土
5　にぶい黄（2.5Y6/4）土
6　にぶい黄（2.5Y6/3）土
7　にぶい黄褐（10YR5/3）土
8　黄褐（2.5Y5/3）土
9　黄褐（2.5Y5/4）土
10　灰黄（2.5Y6/2）土
11　にぶい黄（10YR6/3）土
12　黄褐（10YR6/6）土
13　にぶい黄褐（10YR5/3）土
14　暗灰黄（2.5Y5/2）土
15　暗灰黄（2.5Y4/2）土
16　黄褐（2.5Y5/3）土
17　にぶい黄（2.5Y6/3）土
18　明黄褐（2.5Y6/6）土
19　暗灰黄（2.5Y5/2）土
20　にぶい黄（2.5Y6/4）土
21　暗灰黄（2.5Y5/2）土

流土・堆積土：1～２層
石室構築時盛土：３～15層
石室構築前盛土：16～21層

第18図　墳丘断面図（1/80）

奈良井古墳は石室が地表に露出していたため、その存在が古くから知られており、例えば『淺口郡誌』(註1)には「佐方に於ける数多の古墳中、原形を存するは片山の車塚と奈良井の塚のみ。而かも半壊せられて僅かに奥行一間を残せるもの」、『岡山縣通史』(註2)には「佐方、片山一、楢井二（山奥開墾のとき祝部土器を出す）」との記述がある。「片山の車塚」「片山一」が宮原１号墳、「奈良井の塚」「楢井二」が奈良井古墳にそれぞれ該当するが、『岡山縣通史』の記述からは、奈良井古墳の近隣にかつてもう１基の古墳が存在し、須恵器が出土したことがわかる。ただし、この古墳は開墾等で消滅したらしく現存しない。

墳丘は後世に大きく改変されており、現状からは本来の規模や形状を推測することすら困難であった。墳丘側面の北側及び南側は、開墾や山道の造成などによって削られ、正面にあたる東側も石室もろとも大きく破壊されていた。墳丘頂部の盛土流出も著しく、石室の天井石の一部が露出した状態であったため、本来の墳丘高も不明であるが、石室掘り方の床面からの残存高は約2.3ｍである。

本墳の規模・形状について、『金光町史』(註3)では径７～８ｍ程度の円墳としている。今回の調査では、墳丘背面にあたる西側のセクションベルトで、上面幅135㎝、深さ17㎝の溝状の断面（第18図Ａ－Ａ′断面の第11層、図版４－５）を確認した。これを周溝と考えて傾斜変換点をたどると、第17図のように墳丘の背面側で、ごく浅くいびつな形状の周溝を検出した。この周溝の形状を極力生かし、かつ石室掘り方との位置関係が不自然でないような円を描くと、『金光町史』の記述よりやや大きい直径９ｍ弱の円墳が想定される。その場合、石室の奥壁は墳丘の中央からやや背面寄りに位置することとなる。実際には不整形な円墳であった可能性も高く、周溝の検出もかなり困難だったこともあり、この数値も正確なものとはいえないが、直径は最大でも９ｍを上回ることはなさそうである（図版４－１・２）。

墳丘は、標高約44～45ｍの基底面から、厚さ数㎝～20㎝程度を単位として土を盛り上げて築かれており、一見すると版築を思わせるが、盛土の堅さは手でも掘れる程度で叩き締められた様子はない（第18図、図版５・６）。盛土の最下部には、旧表土と思われる有機物を含む層は確認できなかったので、墳丘築造に際して表土は除去されていた可能性が高い。盛土中には石列などの構築物は確認できず、また直接伴う遺物も出土していない。

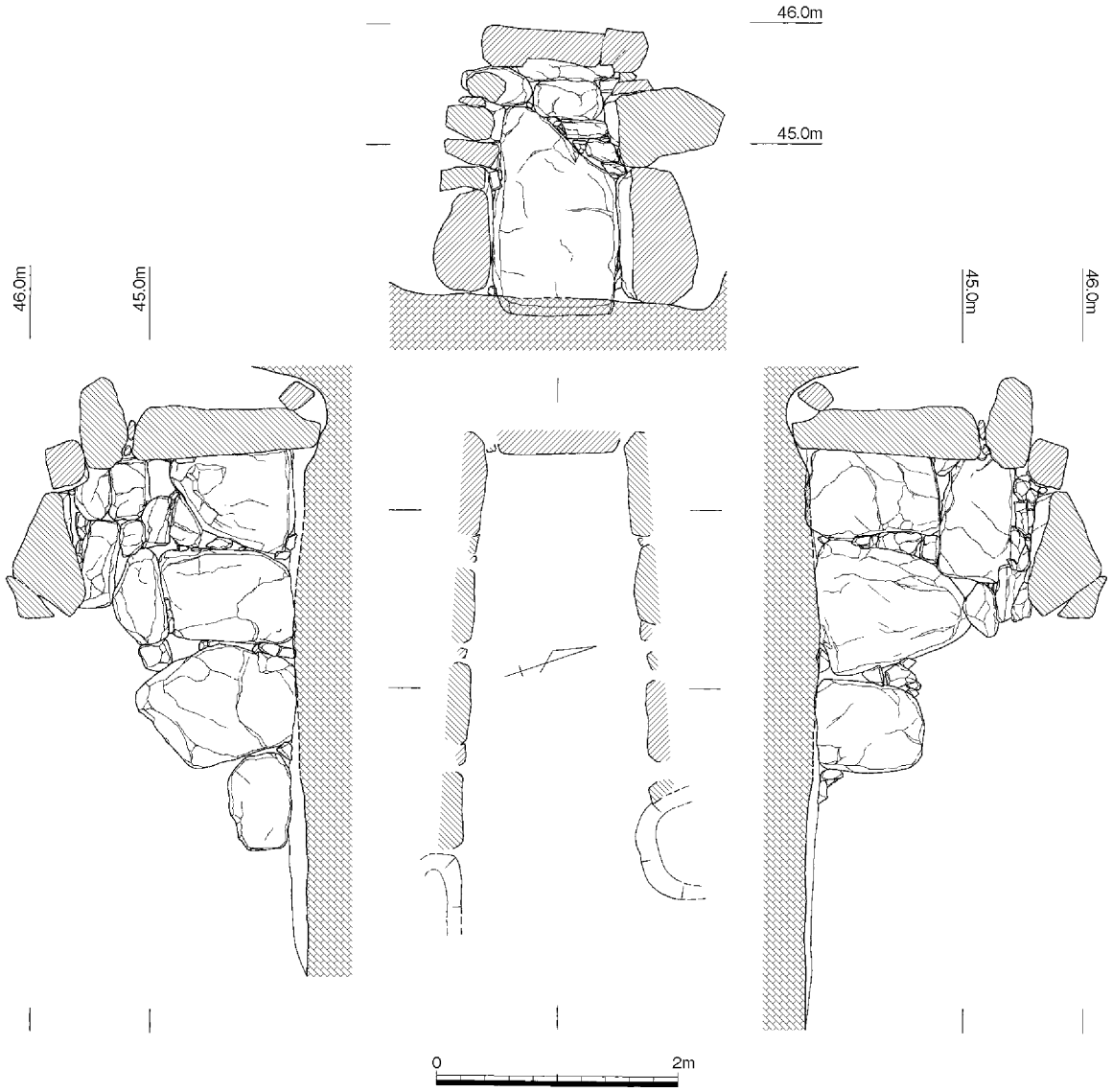
墳丘の築造手順は次のように考えられる。まず、斜面上の表土を除去して地山を露呈させ、石室を収める掘り方を掘削する。この際、斜面下方にあたる墳丘の正面側には、掘削土を利用した盛土がなされたと思われるが、現在ではすべて流失している。次に石室を構築するとともに、地山面がもともと低い部分に盛土による造成（第18図Ａ－Ａ′断面の第31～33層、Ｂ－Ｂ′断面の第40～45層、Ｃ－Ｃ′断面の第16～21層が該当）を行う。その後は掘り方を埋め戻し、さらに墳丘盛土を順次積み上げて、石室を完全に被覆する。なお墳丘周囲も精査したが、墓道など古墳に関連する遺構は検出されなかった。撹乱により破壊されたのか、もともと存在しないのかは不明である。（岡本）

写真５　奈良井古墳の墳丘調査状況

３　横穴式石室

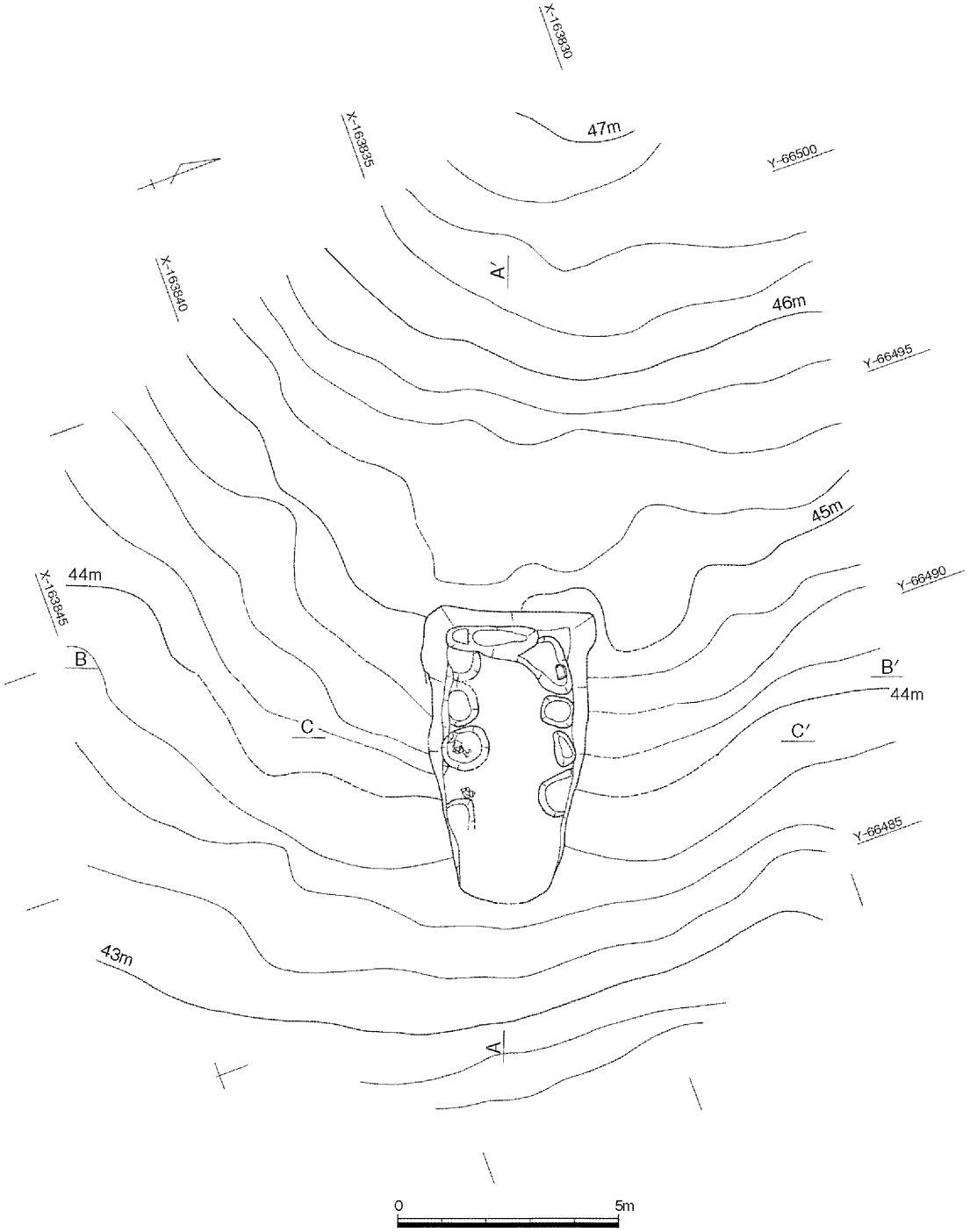
本墳の主体部は横穴式石室である（第19図、巻頭図版２－１、図版７）。石室の主軸方向はＮ－70°－Ｗで東南東に開口し、丘陵麓の平野を向いている。墳丘と同様に破壊が著しく、開口部付近の石材は完全に失われており、奥壁側のみが残存していた。天井石は奥壁寄りの２石が原位置をとどめ、その手前側の１石は転落して地面に突き刺さった状態であった（第18図、図版３－２・３）。石材はすべて周辺で産出する花崗岩で、風化あるいは被熱によって石室壁面にあたる部分の表面が赤褐色に変色し、剥落が進行したものが多くみられた。

石室の残存長は南側壁で3.25ｍ、北側壁で2.97ｍを測り、奥壁部での幅は1.15ｍ、石室の最大幅は1.54ｍである。掘り方の形状と、想定される墳丘の規模から判断して、本来の石室の全長は５ｍ前後であろう。石室掘り方の床面から天井までの高さは1.75～2.01ｍを測るが、本来の床面が残存しておらず、正確な数値は不明である。石室の平面形は開口部に向かって広がり、おそらくは胴張り状の形態であったと考えられる。袖の有無は不明であるが、石室の規模からみて無袖であった可能性が高い。



第19図　横穴式石室（1/60）

南側壁は、基底石４石分が残存する（図版８－２）。側壁の下半を占める基底石は、奥壁側の３石を縦長、手前側の１石を横長に置く。基底石の上には中形の石材を横長に用いて２段ないし３段に積み上げ、最後に小形の石材ですき間を塞ぐ。最上段奥の石材は奥壁石にも載っており、奥壁に組み込まれている。北側壁は基底石３石分が残存し、南側壁と同様に基底石が側壁の下半を占める（図版８－３）。縦長の石材３個を基底石として置き、すき間を小形の石材で埋めた後、奥壁寄りに大形の石材１石を横長に載せ、小形で横長の石材を詰めて高さを調整している。残存部分のみからの判断であるが、両側壁とも基底石を縦長に置くのが特徴で、上端を揃える意図は窺えない。２段目以降も横目地を通すこともなく、両側壁で石材の使い方が異なるなど、石積みは概して粗雑な印象を受ける。



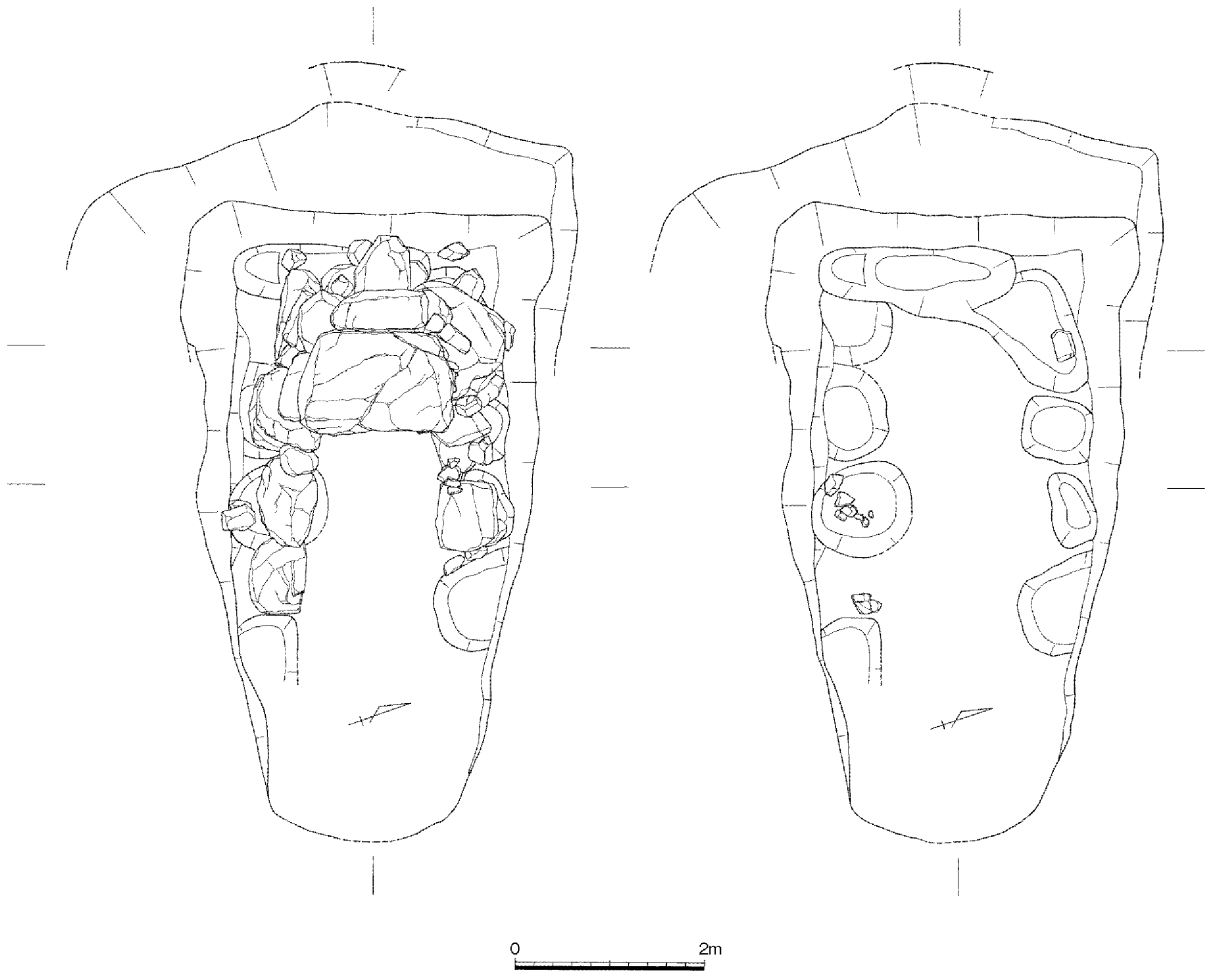
第20図　墳丘除去後地形測量図（1/150）

奥壁は、まず上端が北側に下がるように扁平な一枚石を据えた後、北側壁との間にできた部分に小形の石材を横長に使って順次積み上げ、その上に天井石を載せるという構造である（図版８－１）。奥壁石は上部のほうが下部よりも厚い上に、設置位置が掘り方の底面から外れているため安定が悪いと考えられ、それを補うためか根元に礫がはめこまれていた。

天井石は奥壁側の２石が残存している。一番奥の石材は、手前側に比べて下面が低くなっているため、天井が段状をなしている。この天井のずれは、二次的な石の沈下などではなく、当初から存在しているものである。このため、正面からみると一番奥の天井石は奥壁の最上段のようにもみえる。

石室内も撹乱が激しく、本来の床面は残存しておらず敷石などの有無も不明である（図版４－４）。遺物は原位置を保つどころかその数自体が極めて少なく、古墳の時期決定の手がかりを含め多くの情報が失われていた。南側壁の南端では、石材抜き取り跡の窪みに中世土器の破片が多数詰め込まれており、石室の破壊が中世にまで遡る可能性が判明した（図版８－４）。以後、近現代に至るまで石室は開口したまま、墳丘の破壊や石材の抜き取り、石室への土砂の流入などが続いていたのであろう。

石室の掘り方は、現状では西側が広がった不整な台形を呈し、長辺約5.3ｍ、短辺約2.5ｍ、残存長約7.3ｍ、深さは斜面の上方側で約1.5ｍを測る（第20・21図、図版８－５）。石室自体と掘り方の中心軸は一致せず、石室は掘り方の中心からやや北側へ偏った位置に築かれている。掘り方の底面はほぼ平坦で、基底石を据える場所には深さ数cm程度、奥壁石の部分では深さ20cm近くの窪みがあり、石材の安定を図った様子が見受けられた。（岡本）



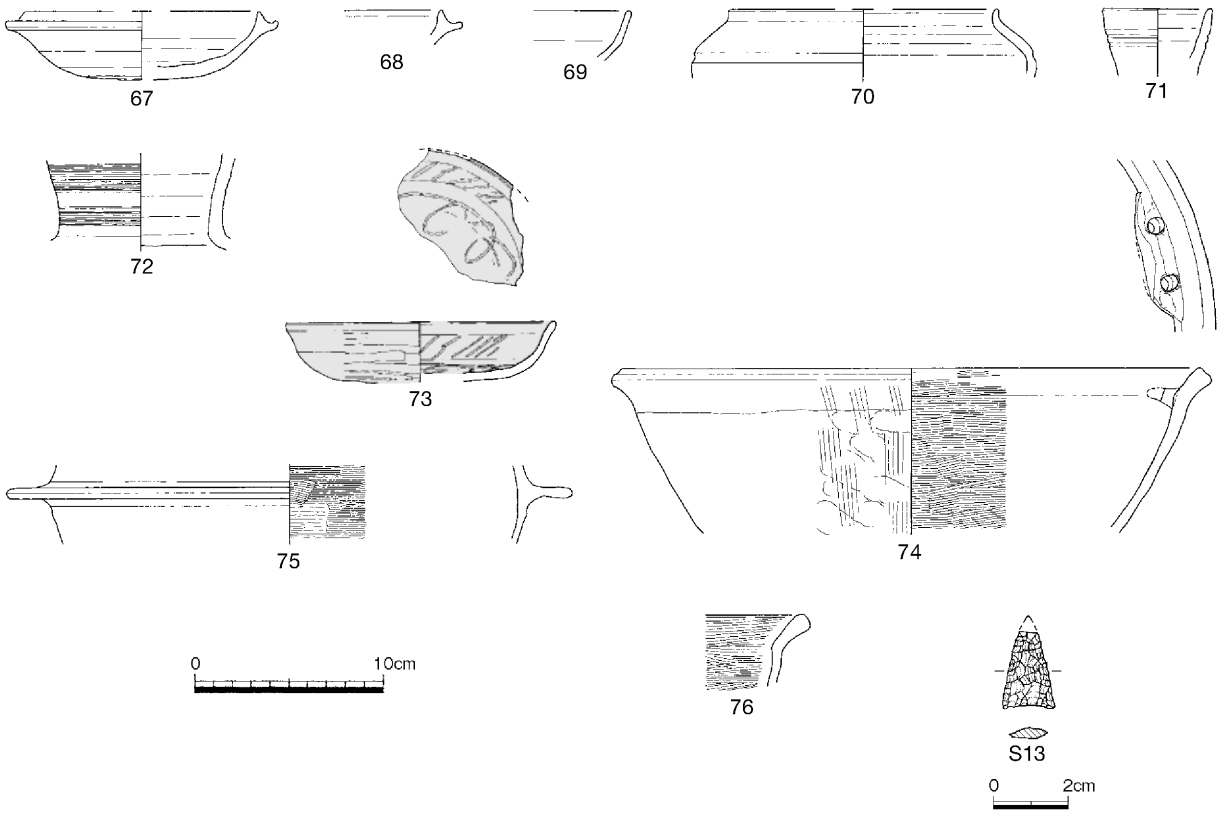
第21図　石室と石室掘り方（1/80）

４　出土遺物

石室内・墳丘盛土・表土などから少量の遺物が出土した（第22図、図版20－１）。このうち67～72は古墳に伴うと考えられる出土遺物で、いずれも須恵器である。量はわずかで小片のみであり、かつ原位置を保つものはない。石室内流入土から出土した杯身67はかえりが短縮しており、復元口径は12.4㎝である。その特徴から７世紀初頭に比定できる。墳丘上出土の68も同様の時期であろう。69は石室内出土で、高杯かと思われるがはっきりしない。短頸壺70、壺72は石材抜き取り跡の窪みに落ち込んでいたものである。71は提瓶の口縁部で、墳丘の南側堆積土から出土した。以上の土器から、奈良井古墳の石室が７世紀初頭の段階で機能していたことは明らかであるが、遺物量がごく少ないことから、古墳の築造年代や追葬の有無を断定するのは困難である。ただ築造年代に関しては、須恵器の示す年代より大きく遡るとは考えにくいであろう。

73は北側壁近くの床面から出土した土師器の杯で、内外両面に丹塗り、内面には暗文が施されている。時期は８世紀代の可能性が高く、奈良時代における古墳の継続使用を示すものかもしれない。

74～76は中世後期の瓦質土器である。うち内耳鍋74は、南側壁南端部の石材が抜き取られた後の浅い窪みに、礫とともに詰め込まれていた。このことから、早くもこの段階で古墳が破壊され、石材が抜き取られたことが推測される。古墳の石室周辺から中世土器が出土する事例は、浅口市内でも宮の脇古墳や塚地古墳などでみられ、この時期に盗掘や墳丘の破壊などが各地で行われたことがわかる。羽釜75・鍋76はそれぞれ石室内と墳丘上から出土した。S13は墳丘盛土中から出土したサヌカイト製の石鏃である。（岡本）



第22図　出土遺物（1/4・1/2）

第２節　小結

奈良井古墳は、佐方川沿いの平野に接する丘陵斜面部の標高45mあまりの場所に築かれた古墳である。後世の破壊が著しく、墳丘・石室とも本来の規模・形状を推し量ることは困難であるが、規模は直径９ｍ弱で、背面に周溝を伴う円墳の可能性が高い。

内部主体は無袖の横穴式石室であり、石室の形態としては本地域で一般的なものであった。石室の構築には周辺で産出する花崗岩が使用される点も他の古墳と同様であるが、側壁の基底石が基本的には縦長に置かれる点は奈良井古墳の特徴といえ、また石材の積み方は概して粗雑といえる。開口方向は東南東で、被葬者が支配下に置いたであろう佐方地区の平野を指向している（図版４－３）。

石室内も撹乱が著しいため遺物は極めて少ないが、出土した須恵器の杯身の形態から判断すると、７世紀初頭の段階で石室が使用されていたことは確実となった。浅口市の金光町佐方地区や、隣接する鴨方町六条院東地区は横穴式石室を伴う後期古墳が多数分布する地域であり、奈良井古墳もそれら古墳群のうちの一つに位置づけられるものであろう。　（岡本）

註

（１）淺口郡誌編纂係「史蹟名勝天然記念物門　第二編各説　第五章富田村、金光町　二、古墳　乙、金光町」
『淺口郡誌』淺口郡役所 1925

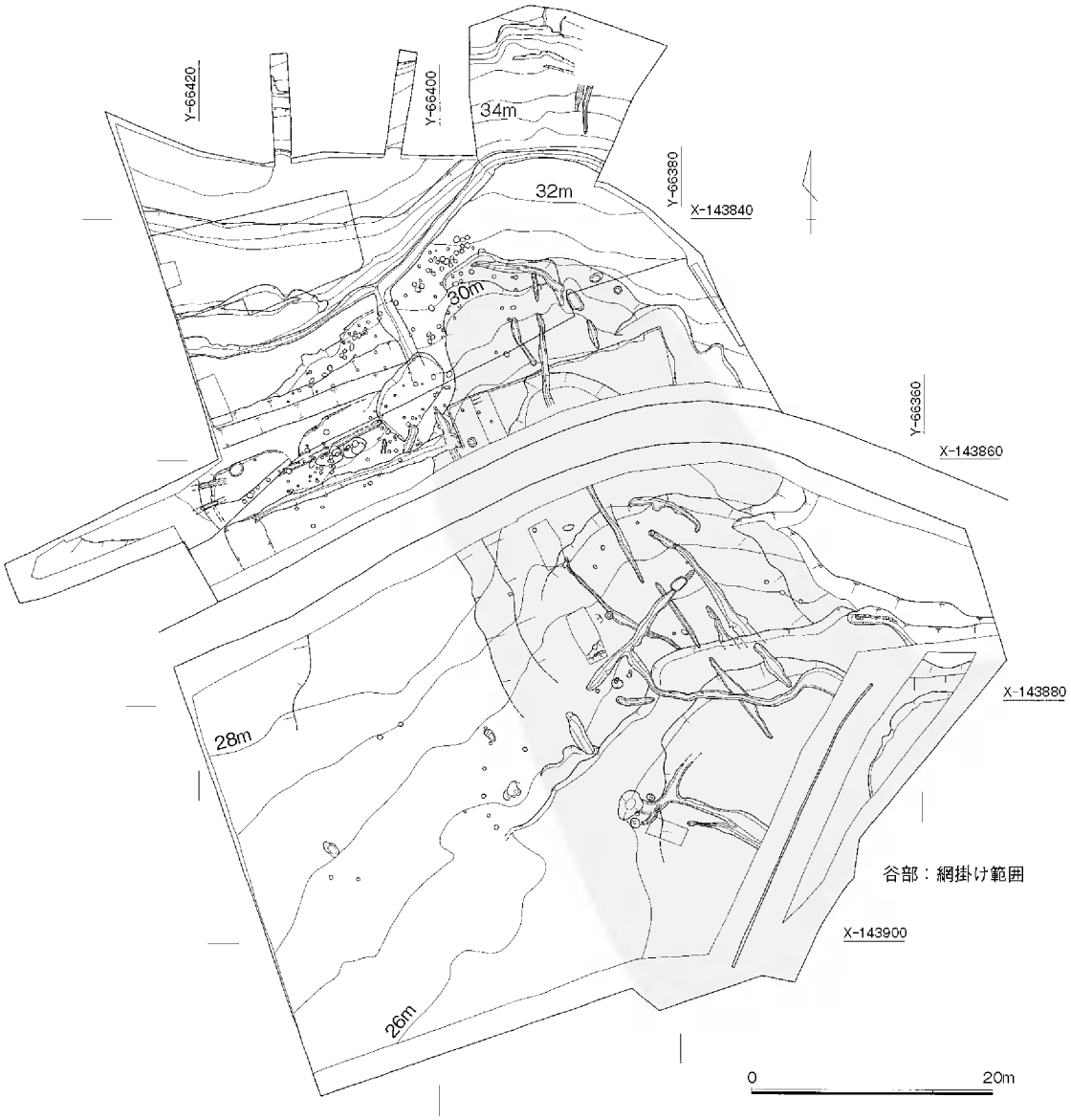
（２）永山卯三郎「第一編上古　第十六章岡山縣に於ける古墳　二古墳横穴及遺物發見地名表　淺口郡」
『岡山縣通史』上編 岡山縣 1930

（３）間壁忠彦「第二章原始・古代　第三節古墳が築かれたころ　二金光町の後期古墳　佐方宮原の古墳」
『金光町史』本編 金光町編纂委員会 2003

第５章　奈良井遺跡

第１節　遺跡の概要

奈良井遺跡は、里見川支流の佐方川左岸の南東方向に延びる丘陵の南斜面にあり、調査地は標高約25ｍから35ｍの範囲に位置する。先述した奈良井古墳は、奈良井遺跡から西へ約100ｍ離れた標高約45ｍ地点の丘陵斜面上に築かれており、互いにその場所を確認することができるほど近接している（巻頭図版１）。調査前の現地は水田や畑の開墾や宅地化によってもとの地形とは大きく変わっていた(図版９－１・２)。

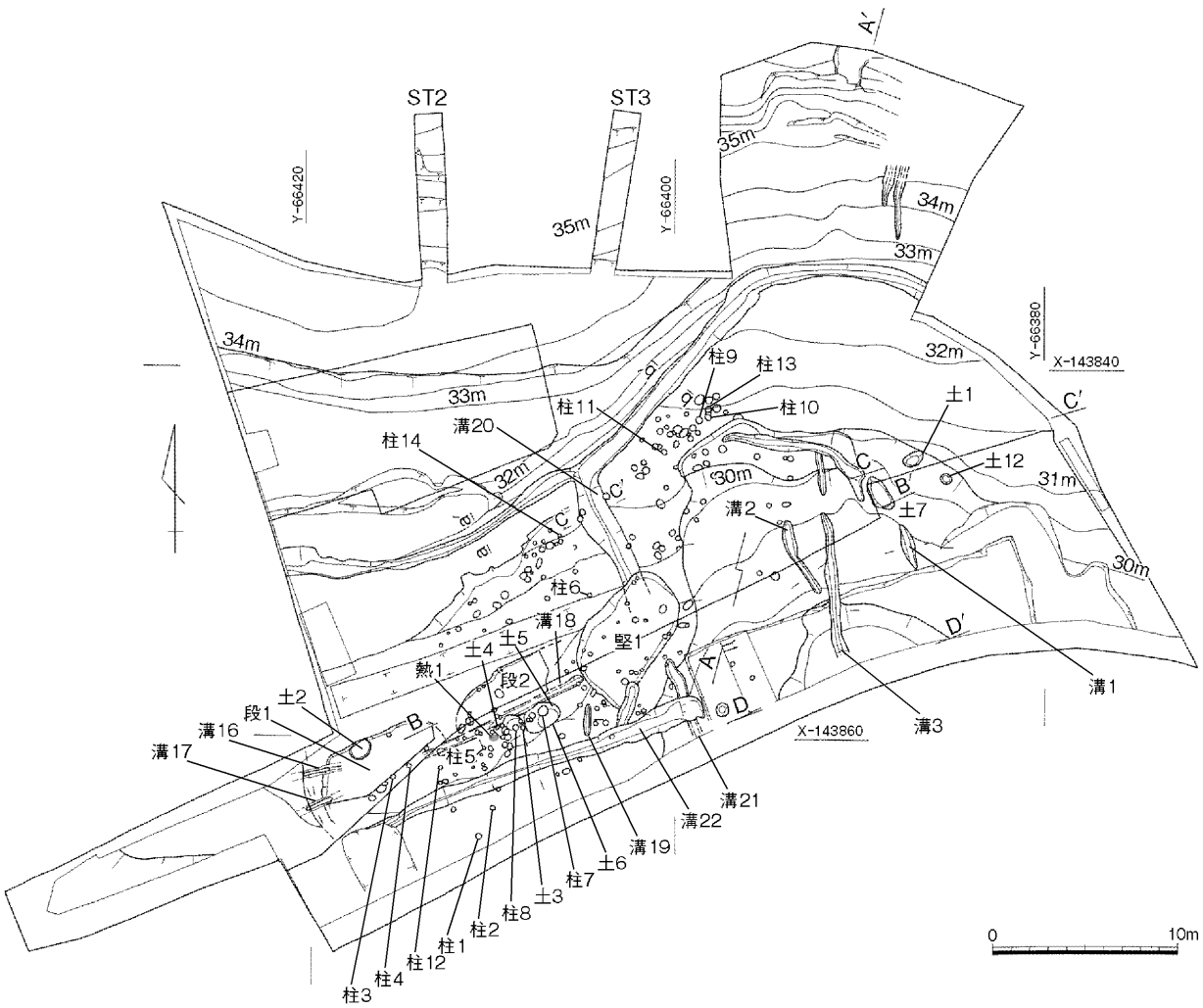


第23図　遺構全体図（1/600）

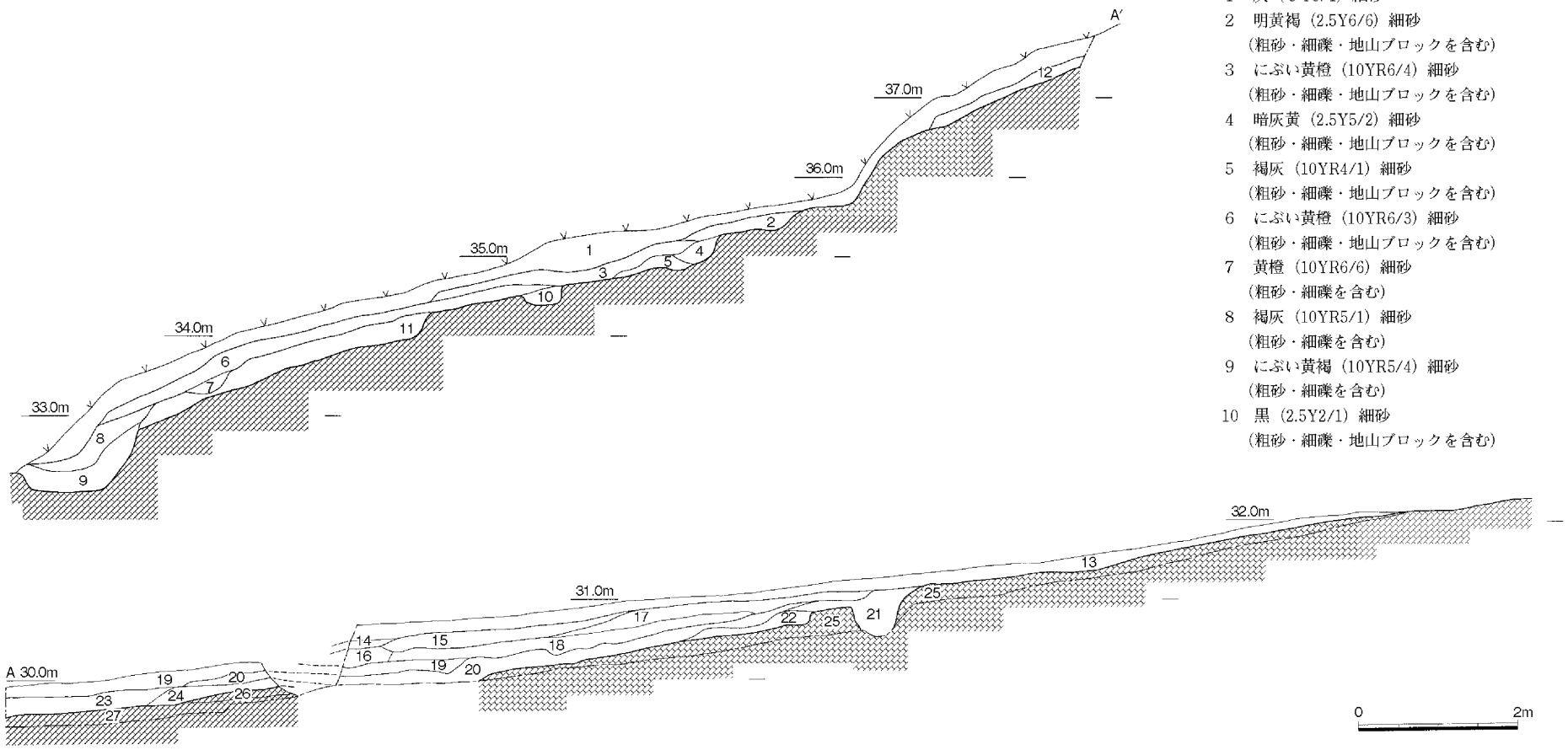
第２章第２節でも触れているとおり、奈良井遺跡は平成23年６月から９月にかけて一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）に伴って県事業分範囲の発掘調査を実施し、引き続き同年10月から平成24年３月にかけて一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）に伴い、国事業分範囲の発掘調査を行っている。そして、国事業分については、調査区北半を１区とし、調査区南半の西側を２区、東側を３区とそれぞれ区割りを行って調査を実施している（第４図）。

今回の調査で報告を行う遺構は、弥生時代の土坑１基、古墳時代の段状遺構２基、土坑10基、被熱面1か所、溝15条、柱穴・ピット、古代の土坑１基、中近世の竪穴遺構１基、土坑６基、溝７条、多数の柱穴・ピットなどである（第23図、図版９－３）。また、遺構検出はできなかったが、調査地東側で認められた南東方向に下る谷部の堆積土から出土した７世紀初頭の須恵器片や窯壁片は、この周辺に須恵器窯が存在したことを示す。遺物は整理箱で51箱出土し、主体は谷部の堆積土に包含された須恵器片や窯壁片である（巻頭図版２－２）。

このほかでは、縄文時代の石鏃・サヌカイト片や弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器や鉄鏃・刀子などがあり、古代では土師器・須恵器・黒色土器・縄目瓦などが、中世では土師質土器・亀山焼・白磁・青磁や土製円盤・砥石・鉄釘などがわずかに認められる。また、時期と出自が特定できないが、製錬滓と思われる鉄滓も数点確認されている。次に調査地小単位の遺構と遺物の状況をみてみる。

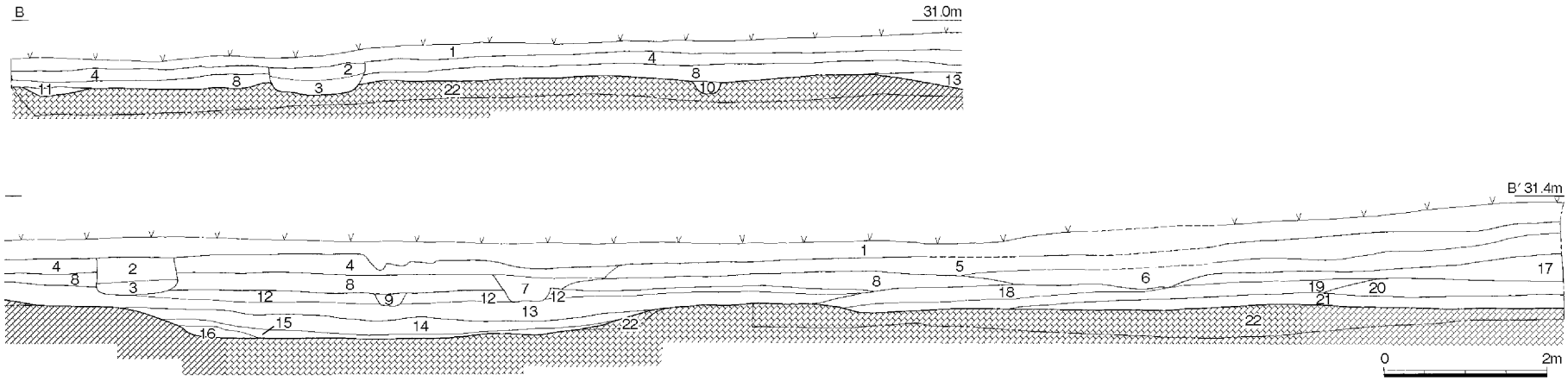


第24図　調査区北半遺構全体図（1/400）



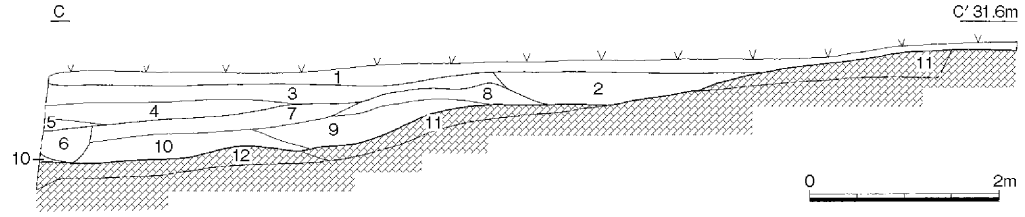
1　灰（5Y5/1）細砂
2　明黄褐（2.5Y6/6）細砂
（粗砂・細礫・地山ブロックを含む）
3　にぶい黄橙（10YR6/4）細砂
（粗砂・細礫・地山ブロックを含む）
4　暗灰黄（2.5Y5/2）細砂
（粗砂・細礫・地山ブロックを含む）
5　褐灰（10YR4/1）細砂
（粗砂・細礫・地山ブロックを含む）
6　にぶい黄橙（10YR6/3）細砂
（粗砂・細礫・地山ブロックを含む）
7　黄橙（10YR6/6）細砂
（粗砂・細礫を含む）
8　褐灰（10YR5/1）細砂
（粗砂・細礫を含む）
9　にぶい黄褐（10YR5/4）細砂
（粗砂・細礫を含む）
10　黒（2.5Y2/1）細砂
（粗砂・細礫・地山ブロックを含む）
11　にぶい橙（2.5YR6/4）細砂
12　黄灰（2.5Y4/1）細砂
（炭・焼土・粗砂・細礫を含む）
13　褐（7.5YR4/6）細砂
（粗砂・細礫を含む）
14　にぶい褐（7.5YR5/4）細砂
（粗砂を含む）
15　褐（7.5YR3/6）細砂
（粗砂を含む）
16　にぶい褐（7.5YR5/3）細砂
（粗砂を含む）
17　褐（7.5YR4/4）細砂
（粗砂・細礫を含む）
18　灰褐（7.5YR4/2）細砂
（粗砂・細礫を含む）
19　灰褐（7.5YR5/2）細砂
（粗砂を含む）
20　暗褐（7.5YR3/4）細砂
（粗砂を含む）
21　褐灰（7.5YR4/1）細砂
22　黄褐（10YR7/8）細砂
（粗砂を含む）
23　暗褐（7.5YR3/3）細砂
（鉄分沈着　粗砂含む）
24　褐（7.5YR4/3）細砂
（粗砂含む）
25　明褐（7.5YR3/4）細砂
（地山　マンガン沈着）
26　褐（7.5YR4/4）細砂（地山）
27　明褐（7.5YR5/6）細砂（地山）

第25図　調査区北半谷部断面図（1/80）



1　暗褐（10YR3/3）細砂
2　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂（暗渠）
3　オリーブ褐（2.5Y4/4）細砂（暗渠）
4　にぶい黄褐（10YR5/4）細砂
5　褐（7.5YR4/6）細砂
6　褐（7.5YR4/4）細砂
7　褐（10YR4/4）細砂
8　にぶい褐（7.5YR5/3）細砂
9　暗褐（10YR3/3）細砂
10　褐（10YR4/4）細砂
11　にぶい黄褐（10YR5/3）細砂
12　暗褐（10YR3/4）細砂
（炭を多く含む）
13　にぶい黄褐（10YR5/4）細砂
（炭を多く含む）
14　褐（10YR4/4）粗砂
15　暗褐（7.5YR3/3）粗砂
（地山ブロックを含む）
16　灰褐（7.5YR5/2）細砂
（地山ブロックを多く含む）
17　暗褐（7.5YR3/3）細砂
（炭を多く含む）
18　灰褐（7.5YR5/2）細砂
19　暗褐（7.5YR3/4）細砂
20　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
21　褐（7.5YR4/4）細砂
22　明褐（7.5YR5/6）細砂（地山）

第26図　調査区北半東西断面図①（1/80）



1　暗褐（10YR3/3）細砂
2　褐（10YR4/6）細砂
（地山ブロックを含む）
3　褐（7.5YR4/6）細砂
4　褐（7.5YR4/4）細砂
5　暗褐（7.5YR3/3）細砂
（炭を多く含む）
6　暗褐（7.5YR3/4）細砂
7　黒褐（7.5YR3/2）細砂
8　褐（7.5YR4/3）細砂
9　暗褐（10YR3/4）細砂
10　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
11　褐（10YR4/6）細砂（地山）
12　褐（7.5YR4/4）細砂（地山）

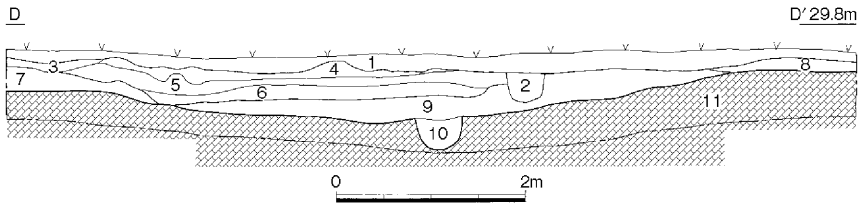
第27図　調査区北半東西断面図②（1/80）

県事業調査区と国事業調査１区の調査地にあたる調査区北半は、北西側では北東から南西に延びる尾根が張り出し、そのまま北東側に向かって谷頭が入り込んでいるような地形である（第24図、図版10－１・２）。この尾根部は大きく２段の段切りがみられ、土層断面の観察から地山まで及ぶ造成土の撹乱や削平が認められた。こうした状況のためかここでは遺構を検出することはできなかったが、調査過程で少量ながら須恵器の破片が出土したため、調査地北側の状況を確認するためにＳＴ２とＳＴ３を上方に設定して調査を行った。その結果、いずれのトレンチも尾根部と同様な段切りが深く及んでいることが明らかになり、そのためか遺構は確認することができなかった。調査区北半の北東側では、堆積土に７世紀初頭の須恵器片や窯壁片を包含している谷部の上方に須恵器窯が存在していた可能性が高いと考えられたことから、調査範囲を北側に広く拡張して須恵器窯の存否の確認を行った。その結果、ＳＴ２やＳＴ３でみられた大きな段切りや深い削平がここでも及んでいることが認められたが、須恵器生産に関わる遺構の検出には至らなかった（第25図）。

調査区北半の南西側は現状では緩やかな傾斜地となっている。ここでは古墳時代の段状遺構、土坑、被熱面、溝、柱穴・ピットや中近世の竪穴遺構、土坑、溝、多数の柱穴・ピットなどを検出した（図版10－３）。なお、調査区境界付近で古墳時代の包含層が確認され、また、段状遺構の一部が調査区外に広がったために、調査範囲を南西側に広く拡張した（図版12－４）。その結果、包含層の掘削や遺構処理の対応はできたものの、さらなる遺構検出については、この範囲のかなり深くまで撹乱や削平が及んでいたために、北西側でみた尾根部の張り出しの続きとそれに関わる南東方向の地形の下がりを検出したのみとなった。南東側では今回唯一の弥生時代の土坑を確認している。また、先述の谷部の続きが認められて、この堆積土の除去後に古墳時代の土坑や溝などを検出している（第26～28図、図版12－１～３）。

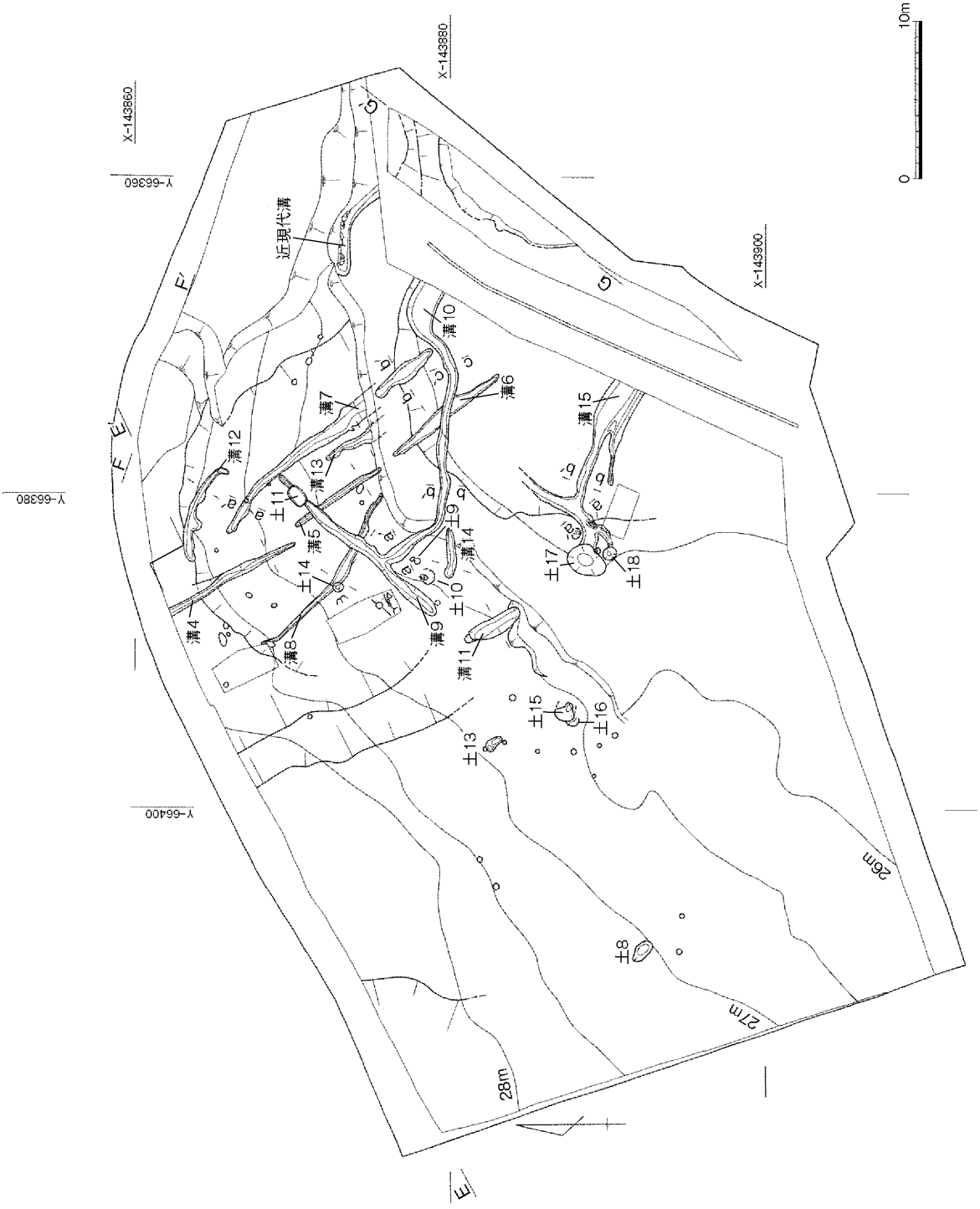
国事業調査２区と３区の調査地にあたる調査区南半では、北西側の一部に古墳時代の包含層の広がりが認められるものの、南西側は開田による削平が及んでおり、わずかに古墳時代後期と中世の土坑、柱穴・ピットを検出したのみである（第29図、図版11－１、13－１）。北東側から南東側にかけては、上部から続く谷部が広がっている。また、この谷部の堆積土を除去した後に、古墳時代後期の土坑、溝や古代の土坑などを検出した。このうち溝は谷筋や谷地形に沿って検出されたものが多いが、谷筋に対して直交する方向に掘削されているものも数条認められた（第29～32図、図版11－２・３、13－２・３、14－１）。

（澤山）

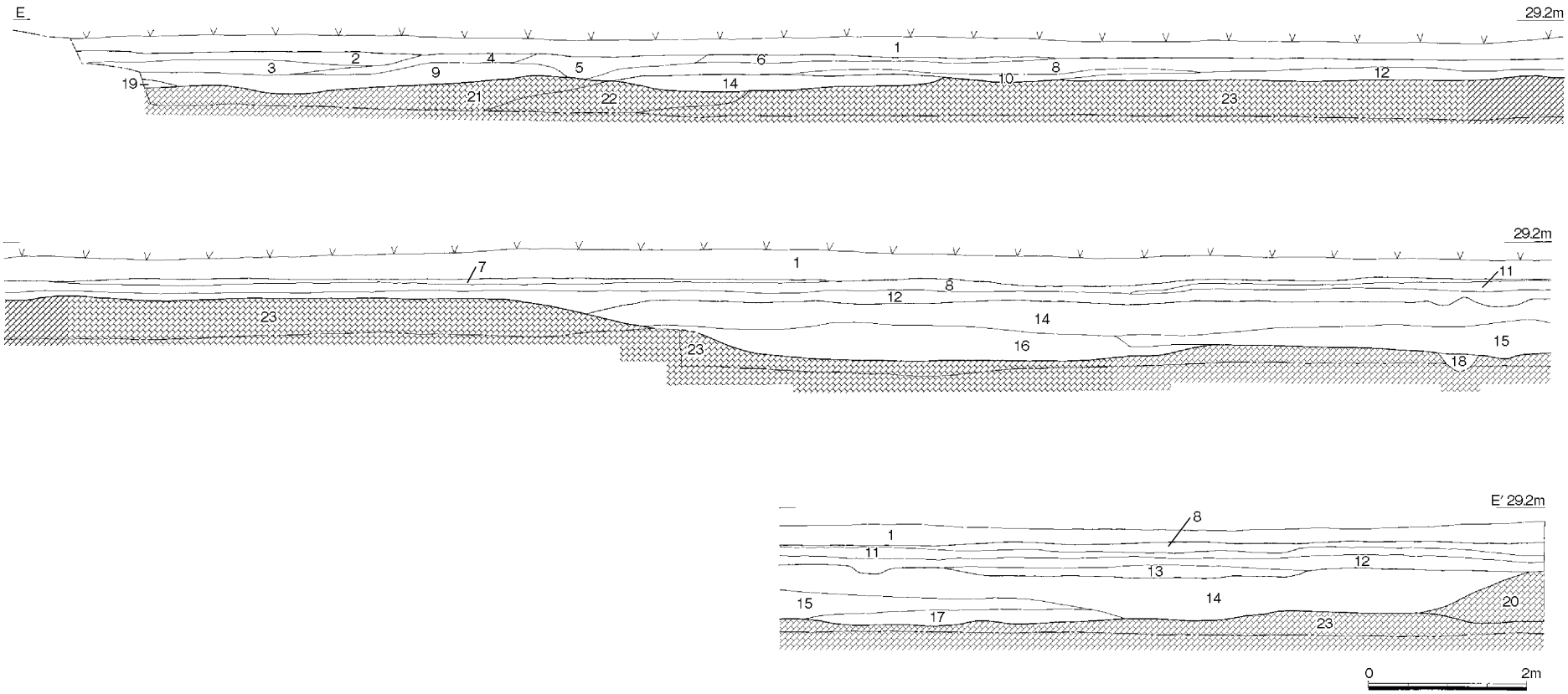


1　暗褐（10YR3/3）細砂
2　暗渠
3　黒褐（10YR3/1）細砂（粗砂を含む）
4　灰黄褐（10YR5/2）細砂（粗砂を含む）
5　褐（7.5YR4/4）細砂
6　灰褐（7.5YR5/2）細砂
7　にぶい黄褐（10YR5/4）細砂
8　黒褐（10YR3/1）細砂
9　褐（7.5YR4/3）細砂
10　褐灰（10YR4/1）細砂（溝3）
11　褐（10YR4/4）細砂（地山）

第28図　調査区北半南壁断面図（1/80）



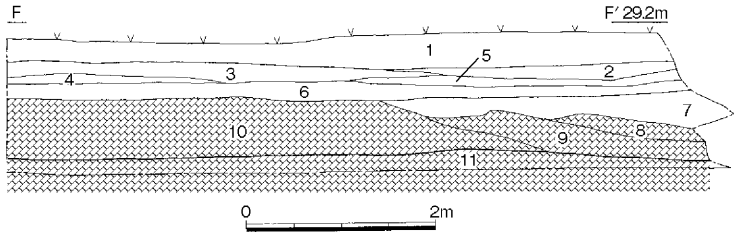
第29図　調査区南半遺構全体図（1/400）



1　黒褐（7.5YR3/2）細砂
2　灰黄褐（10YR4/2）細砂
（鉄分沈着）
3　褐（10YR4/4）細砂
（灰黄褐（10YR5/2）シルトブロックを密に含む）
4　灰黄褐（10YR6/2）微砂
（鉄分沈着）
5　にぶい黄褐（10YR5/3）細砂
（鉄分沈着）
6　灰黄褐（10YR5/2）細砂
（鉄分沈着）
7　にぶい黄褐（10YR5/3）細砂
（鉄分沈着）
8　明褐（7.5YR5/6）細砂
（鉄分沈着　細礫を若干含む）
9　灰黄褐（10YR5/2）粗砂
（細礫を含む）
10　灰黄褐（10YR6/2）細砂
（鉄分沈着）
11　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
（鉄分沈着　粗砂を含む）
12　にぶい黄褐（10YR6/3）細砂
（鉄分・部分的にマンガンが密に沈着）
13　にぶい黄褐（10YR5/3）細砂
14　褐（10YR4/4）細砂
（マンガンが斑状に沈着）
15　暗褐（10YR3/4）細砂
（炭を若干含む）
16　にぶい黄褐（10YR5/3）細砂
17　褐（10YR4/4）細砂
18　暗褐（10YR3/3）細砂
（炭を若干含む）（溝4）
19　にぶい黄橙（10YR6/4）細砂
（細礫を含む）
20　褐（7.5YR4/4）細砂
（地山　粗砂を含む）
21　明褐（7.5YR5/8）細砂（地山）
22　褐（10YR4/6）細砂
（地山　マンガン沈着　細礫を密に含む）
23　にぶい黄褐（10YR5/4）粗砂（地山）

第30図　調査区南半北壁断面図①（1/80）

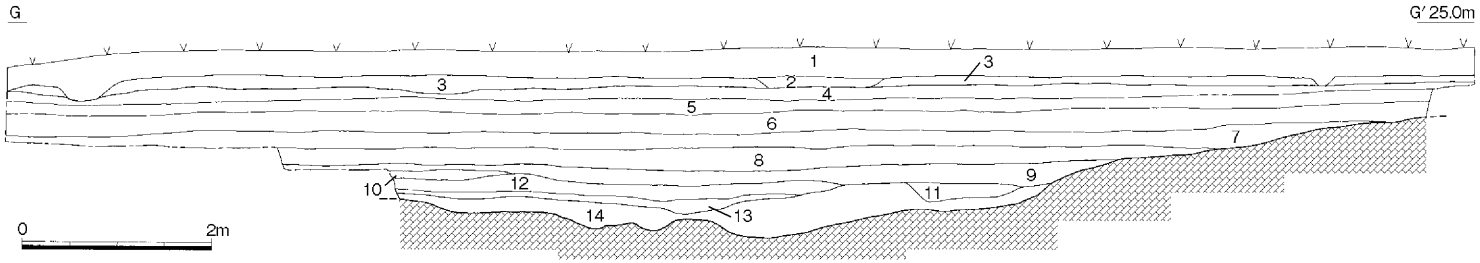
1　黒褐（7.5YR3/2）細砂
2　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
（鉄分沈着）
3　明褐（7.5YR5/6）細砂
（鉄分沈着　粗砂を若干含む）
4　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
（鉄分沈着　粗砂を含む）
5　にぶい黄褐（10YR5/3）粗砂
（鉄分沈着　粗砂を多く含む）
6　にぶい黄橙（10YR6/3）細砂
（鉄分沈着　マンガン密に沈着）
7　にぶい黄褐（10YR5/4）粗砂
（地山　鉄分若干沈着
下層で部分的に中礫を密に含む）



8　にぶい褐（7.5YR5/4）細砂
（地山　鉄分沈着　粗砂を若干含む）
9　にぶい黄橙（10YR6/4）細砂
（地山　鉄分沈着　粗砂を若干含む）
10　褐（7.5YR4/4）細砂
（地山　粗砂を含む）
11　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
（地山）

第31図　調査区南半北壁断面図②（1/80）

1　耕作土
2　撹乱
3　灰黄（2.5YR6/2）砂質土
4　黄褐（10YR5/6）砂質土
（鉄分沈着）
5　褐灰（10YR6/1）砂質土
（マンガン沈着）
6　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
（鉄分沈着）
7　褐灰（10YR4/1）砂質土
（マンガン沈着）



8　黒褐（10YR5/2）砂質土
（マンガン沈着　上層は鉄分沈着
灰色砂質土を横縞状に含む）
9　灰黄褐（10YR5/2）砂質土
（鉄分若干沈着　褐灰色砂質土
・灰色砂質土を横縞状に含む）
10　明黄褐（10YR6/6）粘質土
11　褐灰（10YR4/1）粘質土
（鉄分若干沈着）
12　暗灰黄（2.5Y5/2）砂質土
（鉄分若干沈着　灰色土を部分的に含む）
13　褐灰（10YR4/1）粘質土
14　黄灰（2.5Y6/1）砂質土
（細砂～粗砂を含む）

第32図　調査区南半南壁断面図（1/80）

第２節　弥生～古墳時代の遺構と遺物

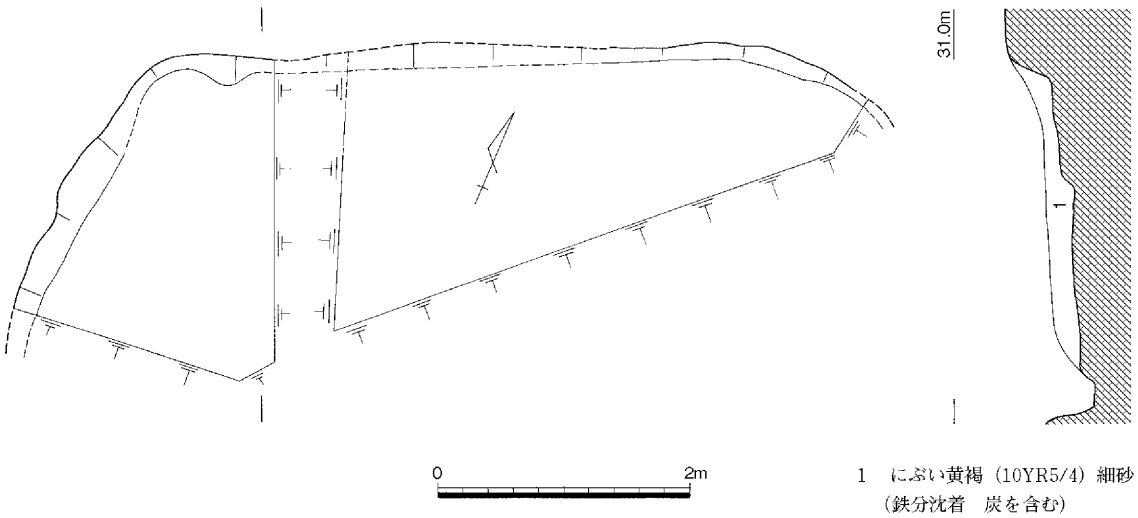
１　段状遺構

段状遺構１（第24・33～36図、図版14－２、20－２）

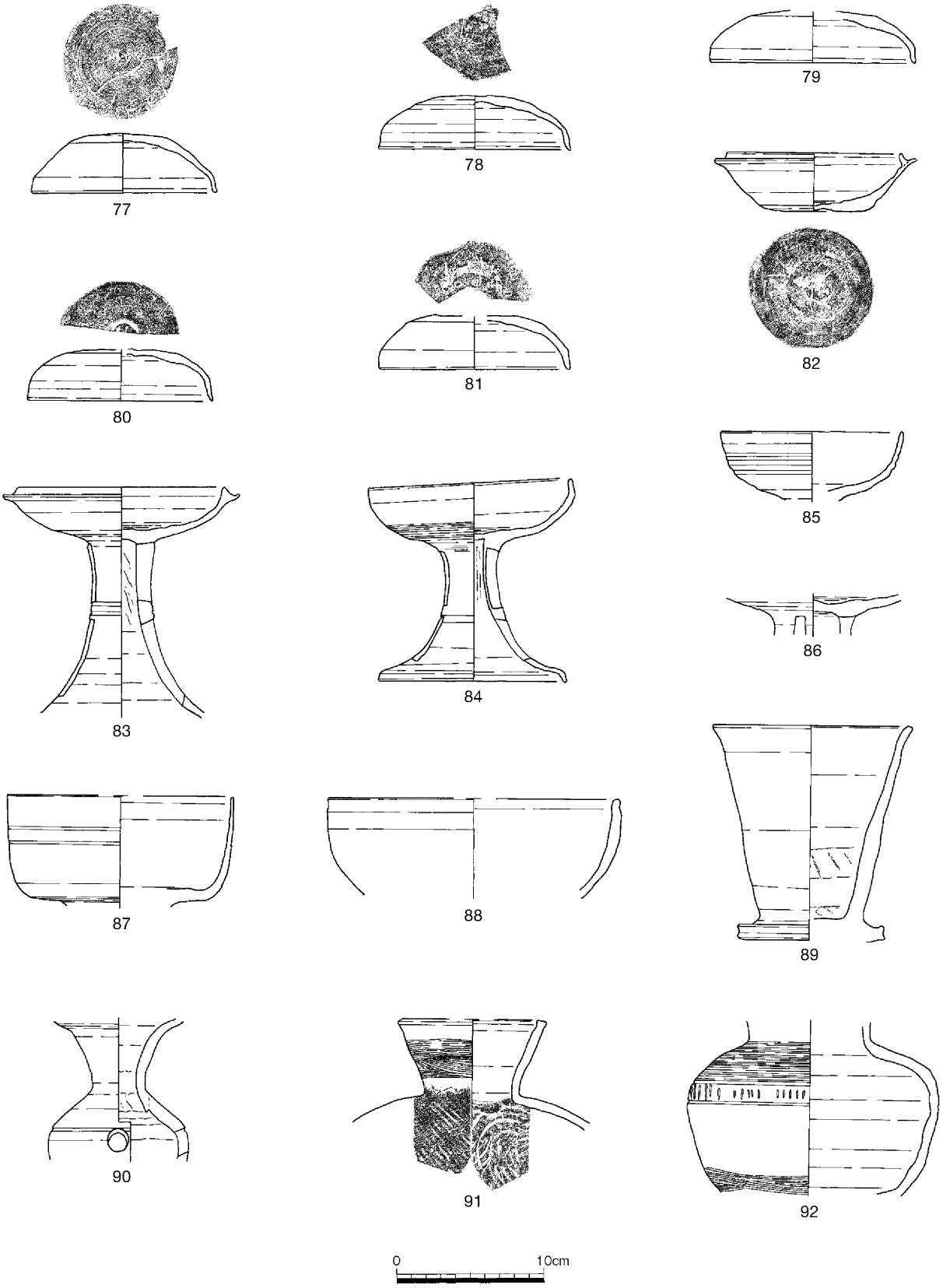
調査区北半の南西端付近に位置する遺構で、重複する土坑２及び溝16・17に切られている。南側が削平によって失われ、北端部のみが残存していたため本来の規模・形状ははっきりしない。ただ、残存部分が不整な隅丸方形を呈し、東端部がわずかながら南側へ屈曲を始めていることからみて、全体としては斜面下方に向けて広がった台形に近い形状であったと推測される。壁面の傾斜は、斜面上方にあたる北側では急であり、西側ではやや緩やかとなる。底面には不規則な起伏が認められたが、柱穴や壁体溝に相当するものが確認できないため竪穴住居や掘立柱建物の造成面などとは考えにくく、遺構の性格は不明である。よってここでは段状遺構と呼称する。

この遺構の埋土中からは、特に底面に近い下層部において各種の須恵器・土師器が出土している。須恵器の中に、他の遺構や谷部出土のものと同様に焼成失敗品が含まれる点から、これらの遺物は遺構に直接伴うというよりは、周辺から遺構内への廃棄ないし流入の可能性が高いと考えられる。77～81は杯蓋、82は杯身で、杯身口縁部の立ち上がりは短縮し、底部はほぼ平らになっている。83～87は高杯で、うち83は有蓋高杯、87は体部がほぼ垂直に立ち上がる形状である。長脚の83・84は、脚部の透かし孔が二方に施されており、84の上段の透かし孔は貫通していない。88は鉢と考えられる。89は捏鉢とされる器種であるが、内面には使用による摩滅などはみられない。90は甕、91は横瓶と考えられる。92～94は壺である。95は甕の口縁部で、外面に斜格子文が施されている。96～98は甕の胴部片で、98には焼成時の火膨れが認められる。99は土師器の甕である。Ｓ14は流紋岩製の砥石で、側面には４面ともに使用痕が残る。

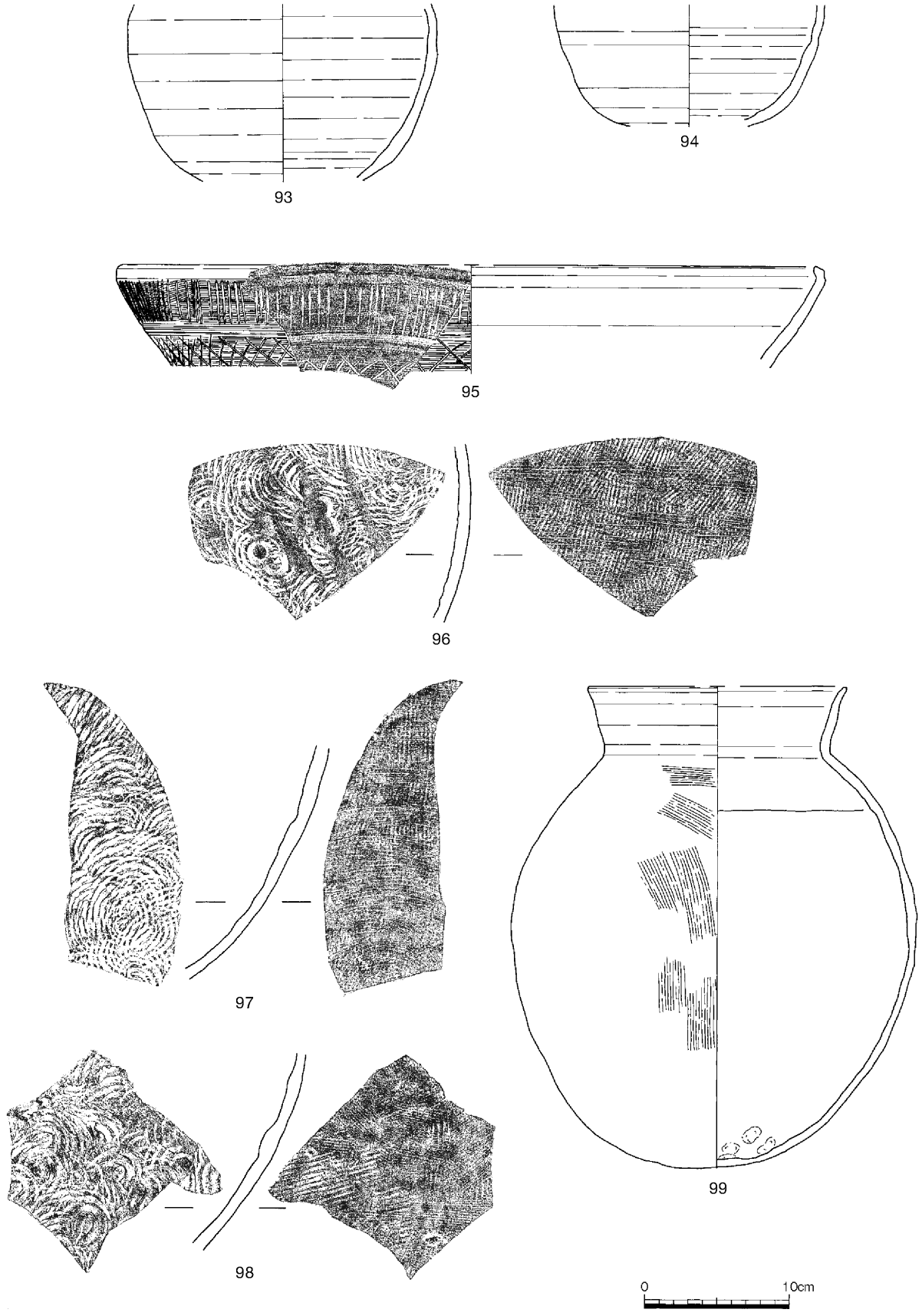
この段状遺構の時期は、出土した須恵器に基づくと７世紀前半に比定される。　（岡本）



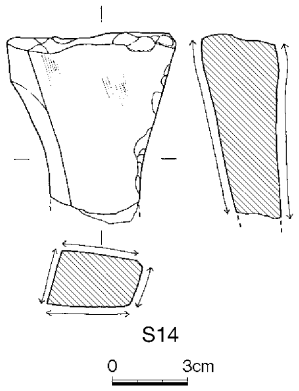
第33図　段状遺構１（1/60）



第34図　段状遺構１出土遺物①（1/4）



第35図　段状遺構１出土遺物②（1/4）



第36図　段状遺構１出土遺物③（1/3）

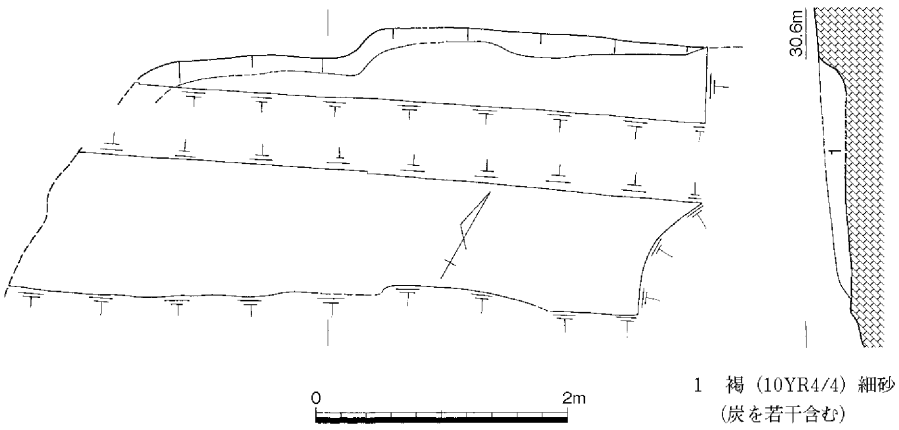
段状遺構２（第24・37図）

段状遺構１の東側に隣接する遺構である。後世の削平が著しく、本来の形状は大きく損なわれており、現状では不整な隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁体溝や柱穴などは検出されなかった。図示可能な遺物は出土していないが、検出状況や埋土の特徴などからみて、段状遺構１とほぼ同時期の遺構と考えられる。（岡本）

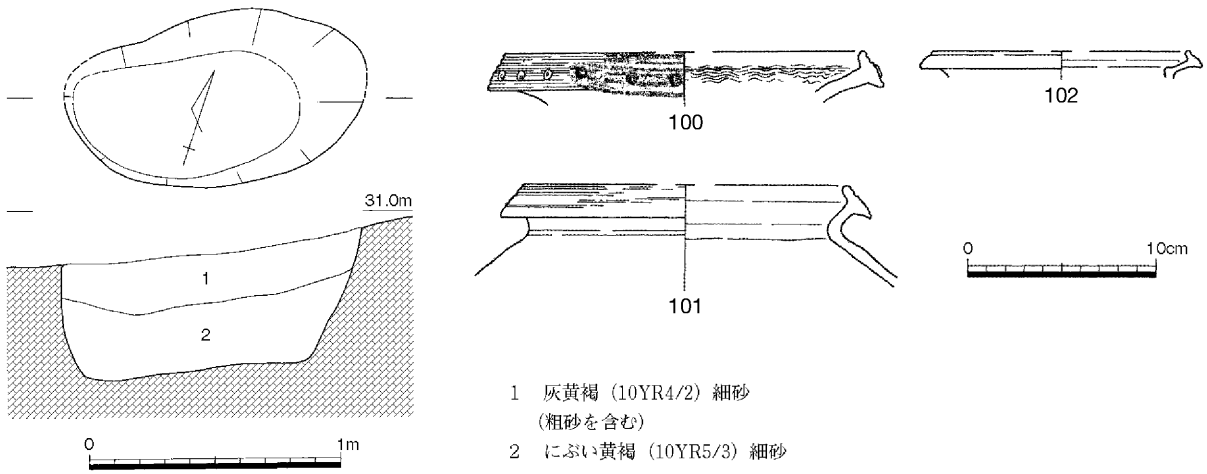
２　土坑

土坑１（第24・38図）

調査区北半の東側に位置する遺構で、長径119㎝、短径70㎝の楕円形を呈し、深さは60㎝を測る。埋土中からは弥生土器片とサヌカイトの砕片が出土している。100は壺、101・102は甕であり、これらから弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。（中原）



第37図　段状遺構２（1/60）



第38図　土坑１（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑２（第24・39図、図版14－３・24－２）

調査区北半の南西端に位置する遺構である。段状遺構１を切る遺構であるが、検出できたのは底面と一部の壁面のみである。検出面で長径127cm、短径91cmの楕円形を呈する。残存部分から、断面形は上部が広がる形態とみられ、深さは壁面の残りが最も良好な北壁で40cmを測る。埋土中から須恵器片を中心とする遺物が出土しており、横瓶103や甕、高杯が確認されている。このほかに土師器甕、鉄製刀子Ｍ１が出土している。出土遺物から７世紀前半の遺構と考えられる。（中原）

土坑３（第24・40図）

調査区北半の南西側に位置する遺構で、土坑４に切られ、土坑５・６が近接して位置している。長径234cm、短径162cmの楕円形であり、埋土中から須恵器片、土師器片が出土している。104は須恵器高杯の蓋で、７世紀前半のものと考えられる。（中原）

土坑４（第24・41図）

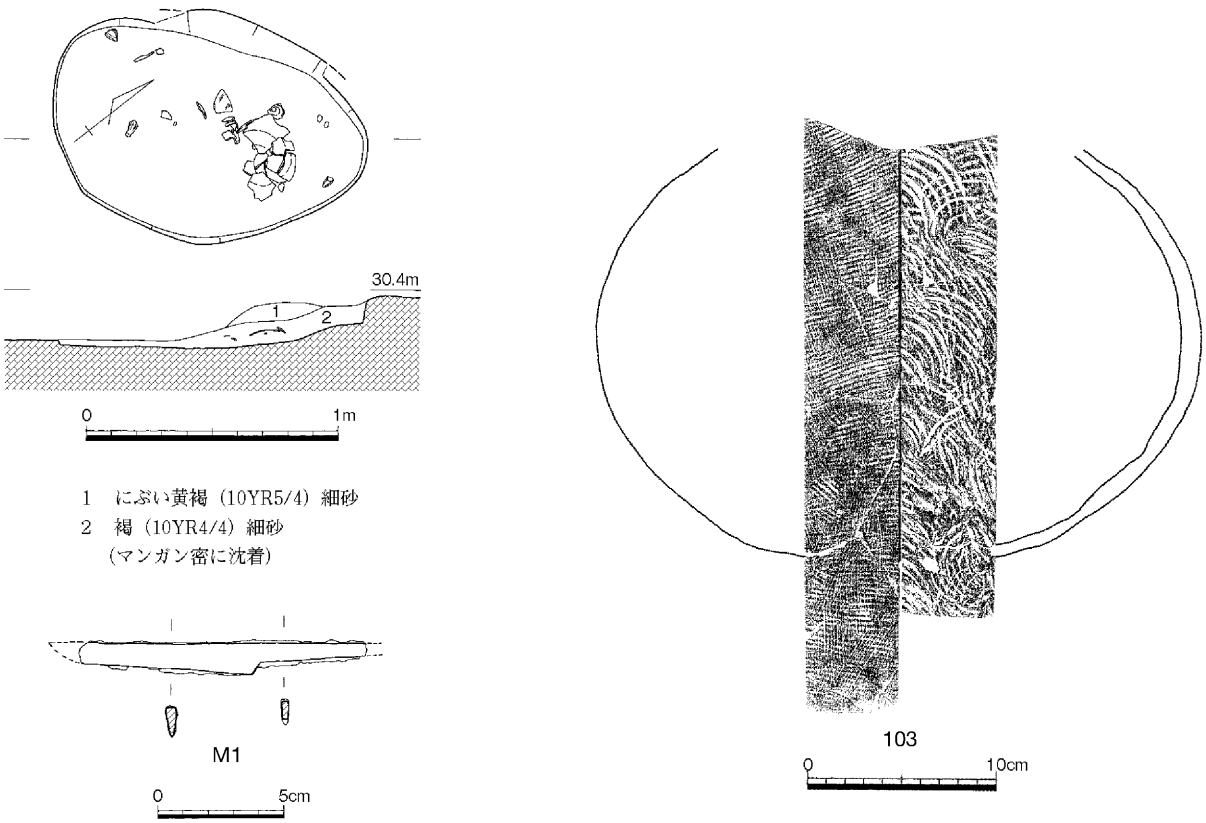
長さ105cm、幅38cmの隅丸方形の土坑である。埋土中から須恵器片、土師器片が出土している。105は須恵器鉢である。（中原）

土坑５（第24・42図）

長径200cm、短径132cmの不整楕円形の土坑である。遺物は出土していないが土坑６に切られていることから古墳時代後期頃のものと推定される。（中原）

土坑６（第24・42図）

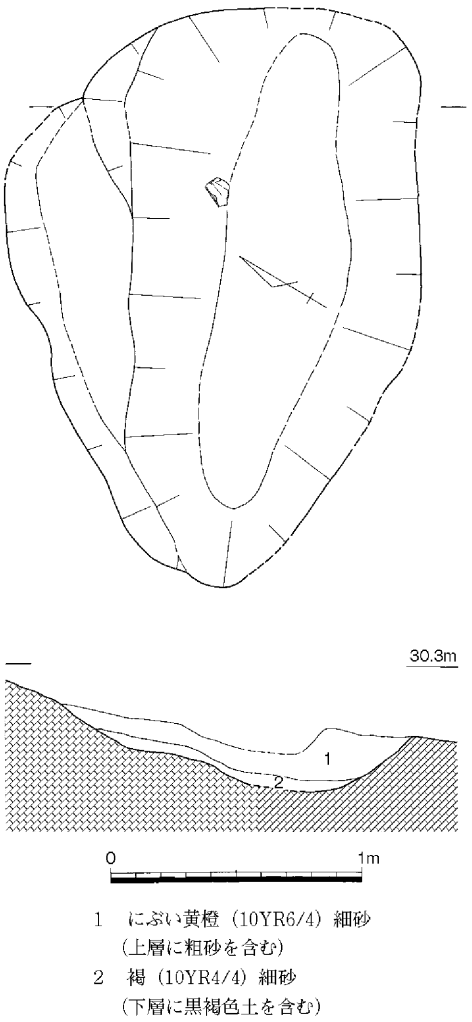
長径118cm、短径77cmの楕円形の土坑である。埋土中から須恵器片、土師器片が出土している。小片のため図化はできなかったが、古墳時代後期のものとみられる。（中原）



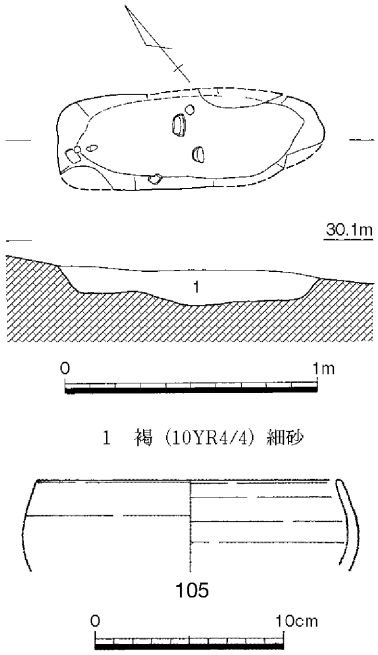
第39図　土坑２（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土坑７（第24・43図）

調査区北半の南東側に位置する遺構である。長径203cm、短径101cmの楕円形で、深さ36cmを測る。埋土中から須恵器片が出土しており、106は杯、107は高杯脚部である。この遺構は７世紀前半のものと考えられる。（中原）



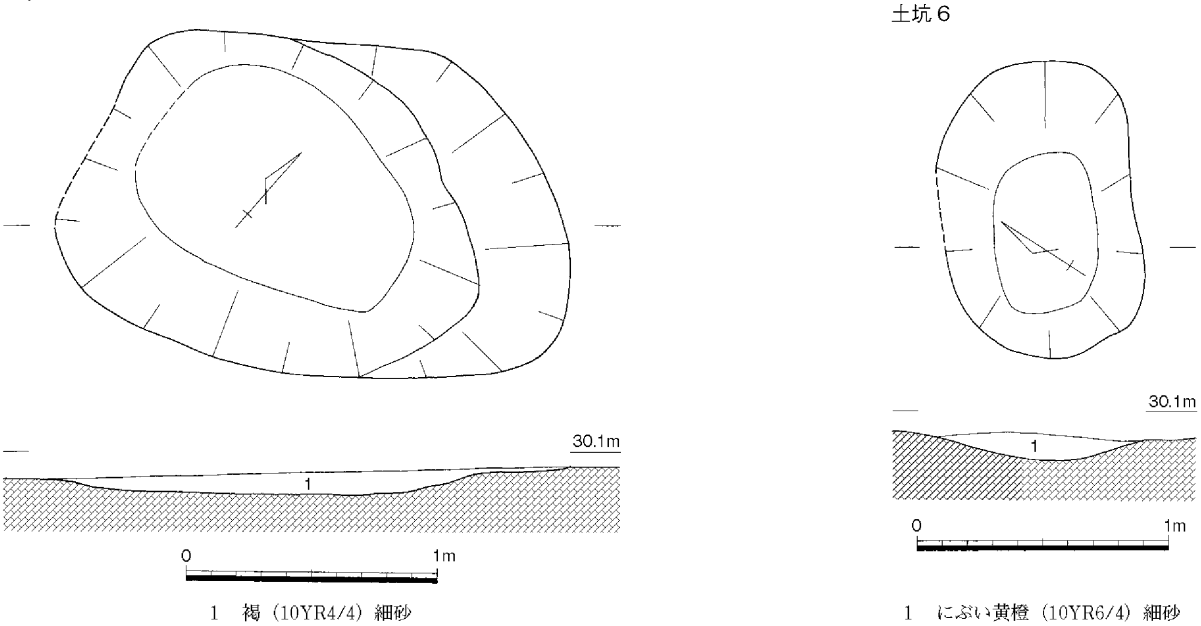
第40図　土坑３（1/30）・出土遺物（1/4）



第41図　土坑４（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑５

土坑６



第42図　土坑５・６（1/30）

土坑８（第29・44図）

調査区南半の西端付近に単独で位置する土坑である。形状は長径152cm、短径83cmの不整な楕円形を呈し、深さは16cmを測る。埋土には木炭や焼土が多く含まれるが、土坑自体には被熱の痕跡はみられない。出土した須恵器杯108、土師器甕109からみて、土坑の時期は７世紀前半である。　(岡本)

土坑９（第29・45図）

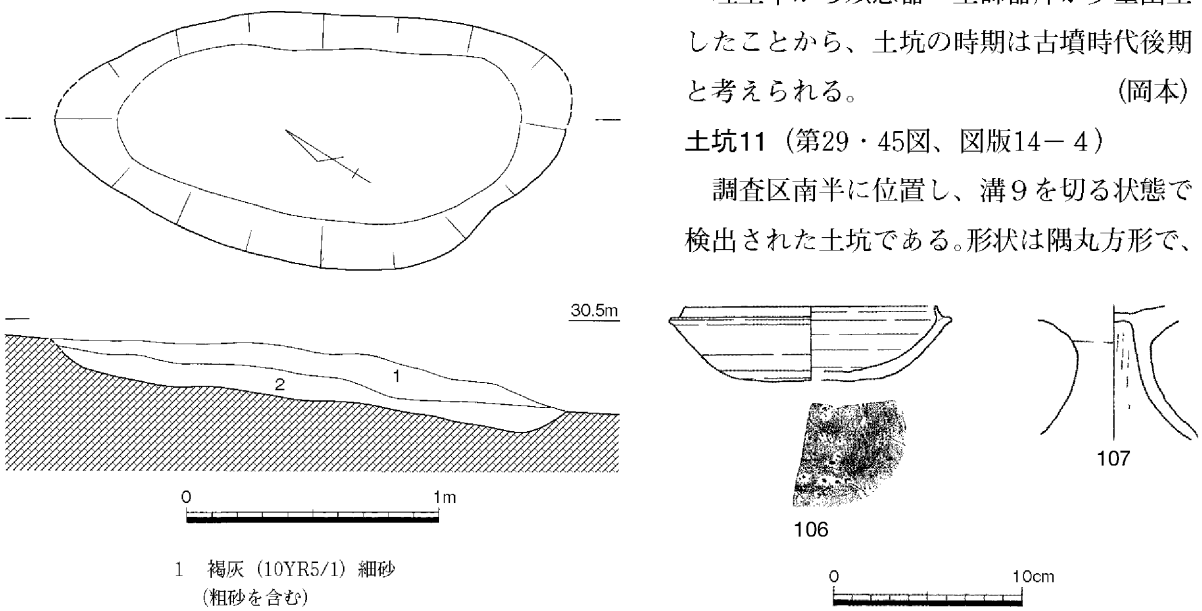
調査区南半の中央付近に位置し、土坑10の北東に隣接する。この土坑は、当初は焼土面として検出しており、形状が不規則なことから、削平された遺構の一部が残存したものの可能性もある。埋土中から須恵器・土師器の小片が出土し、古墳時代後期の遺構と考えられる。　(岡本)

土坑10（第29・45図）

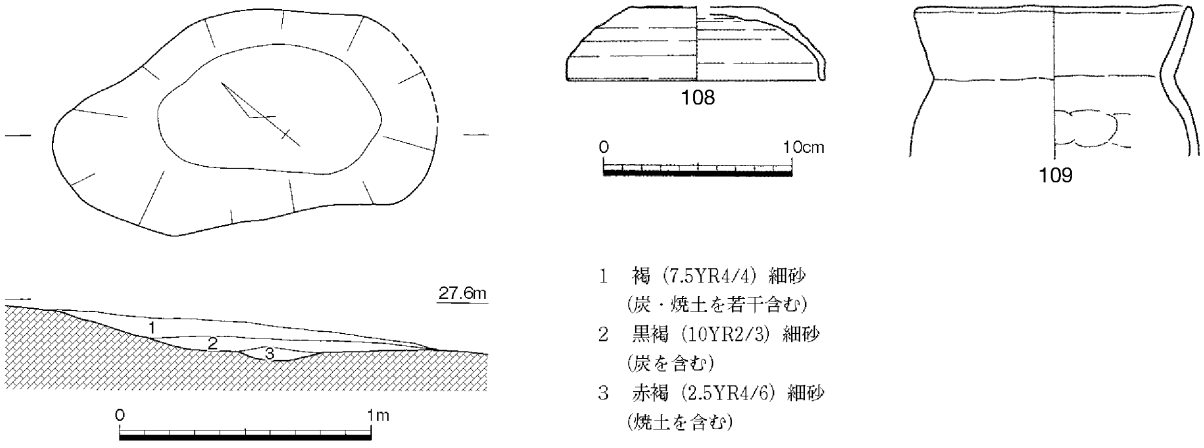
土坑９の南西に隣接する土坑である。平面形は最大径90cmを測る円形で、底面の一部が窪んでいる。埋土中から須恵器・土師器片が少量出土したことから、土坑の時期は古墳時代後期と考えられる。　(岡本)

土坑11（第29・45図、図版14－４）

調査区南半に位置し、溝９を切る状態で検出された土坑である。形状は隅丸方形で、



第43図　土坑７（1/30）・出土遺物（1/4）



第44図　土坑８（1/30）・出土遺物（1/4）

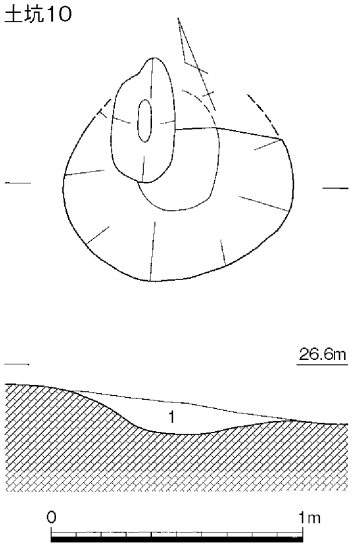
長さ132㎝、幅89㎝であり、深さは12㎝と浅い。埋土は２層に区分され、下層には大量の木炭が含まれる。また壁面や底面の一部は被熱により赤色化し、何らかの高温を伴う作業がこの土坑周辺で行われたことは間違いない。土坑の時期は、検出状況や出土遺物からみて古墳時代後期と考えられ、木炭の放射性炭素年代測定の結果は、６世紀中頃～７世紀中頃の年代を示す。　（岡本）

３　被熱面

被熱面１（第24・45図）

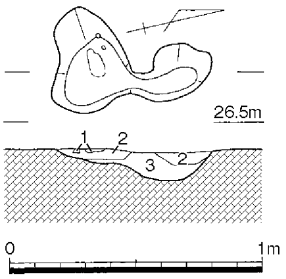
調査区北半の南西側に位置する。地山上の長さ81㎝、幅42㎝の範囲が被熱により赤色化しており、その上面を中心とする長さ140㎝、幅71㎝の範囲に焼土や炭粒を含む覆土が確認された。覆土中から須恵器や土師器の小片が出土していることから、この被熱面は古墳時代後期頃の活動痕跡と考えられる。　（中原）

土坑10



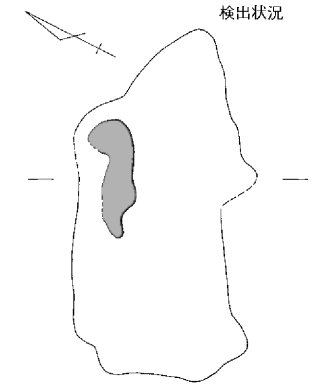
1　にぶい黄褐（10YR5/4）細砂
（マンガン若干沈着）

土坑９

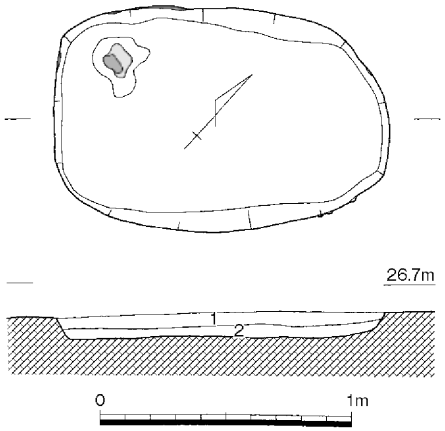


1　明褐（7.5YR5/6）細砂（焼土）
2　褐（7.5YR4/4）細砂
（粗砂を若干含む
部分的に暗褐色を帯びる）
3　にぶい黄褐（10YR5/4）細砂

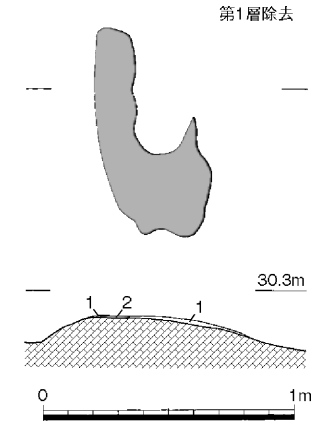
被熱面１



土坑11



1　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
（炭・焼土・粗砂を若干含む）
2　暗褐（10YR3/3）細砂
（炭を多く含む　焼土を若干含む）



1　橙（7.5YR3/4）細砂
（炭・焼土含む）
2　赤褐（7.5YR4/6）・
暗赤（10YR3/4）細砂（地山）

第45図　土坑９～11・被熱面１（1/30）

４　溝

溝１（第24・46図）

調査区北半の南東側で検出された溝で、谷部の東寄りを南流する。後世の削平により南端は細くなっている。遺物は出土していないが、検出層位から溝３と同時期のものである可能性が高い。（中原）

溝２（第24・46図）

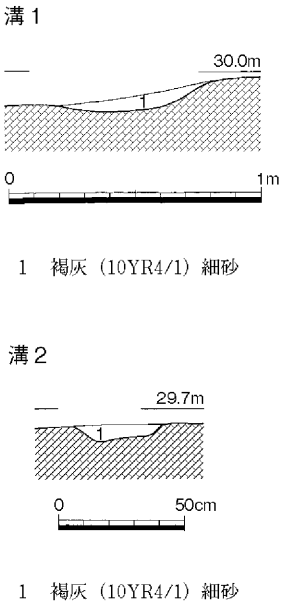
調査区北半の南東側で検出された溝で、谷部のほぼ中央を南流する。検出層位や位置関係から溝３に合流するものであった可能性がある。(中原)

溝３（第24・47図、図版15－１）

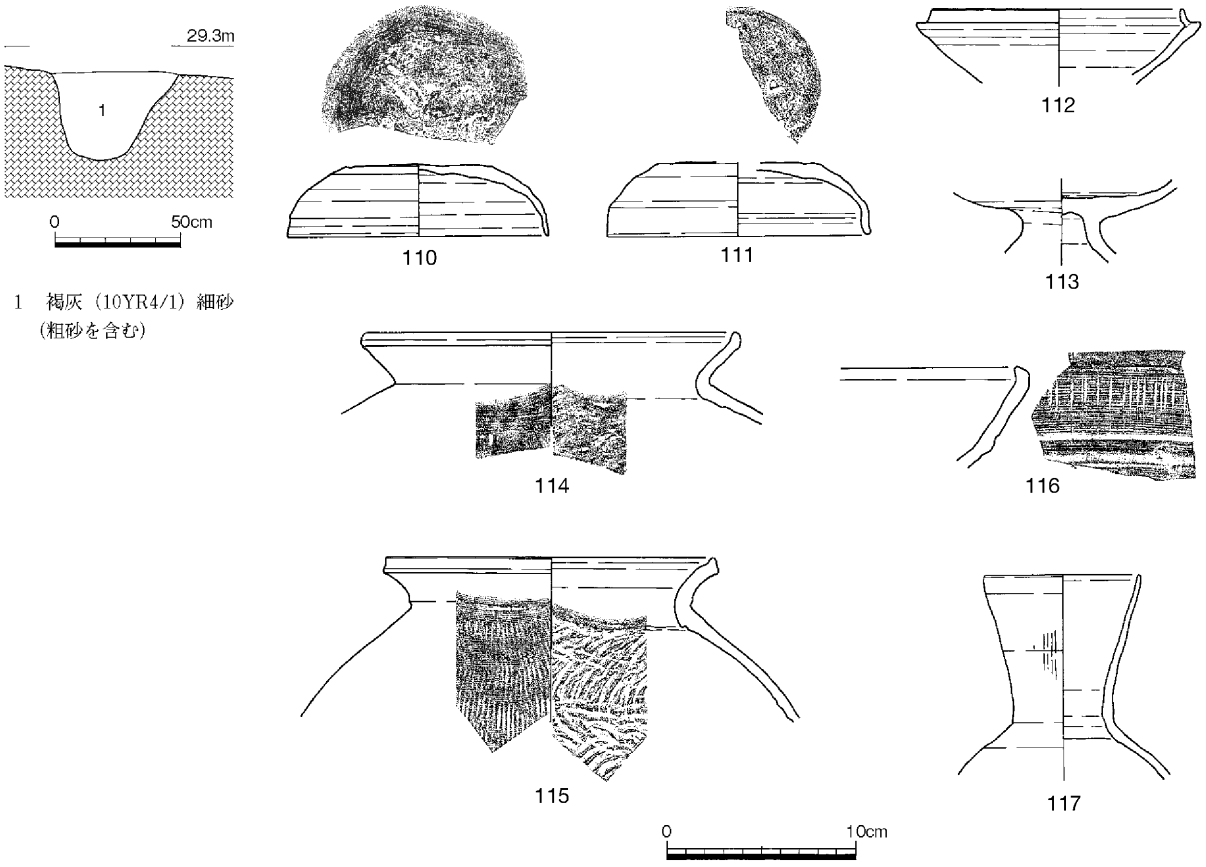
調査区北半で検出された溝で、谷部のほぼ中央を地形に沿って南に流下する。断面は明瞭な逆台形を呈し、自然流路ではなく人工的な溝とみてよいであろう。出土土器から、７世紀前半の溝と考えられる。(岡本)

溝４（第29・48図）

調査区南半の北端付近で検出された溝で、谷部のほぼ中央を地形に沿って南南東に流下する。その位置からみて、北半の溝３と同一遺構の可能性が高い。時期も溝３とほぼ同じと考えられる。（岡本）



第46図　溝１・２（1/30）



第47図　溝３（1/30）・出土遺物（1/4）

溝５（第29・48図）

調査区南半の谷部内で検出された溝の一つで、重複する溝９よりも古い。谷部のほぼ中央を地形に沿って南東に流下する。下方の溝６とは同一遺構の可能性があるが、上方の溝４とは方向が食い違うため別遺構と思われる。遺物はないが、検出層位からみて時期は古墳時代後期であろう。　(岡本)

溝６（第29・48図）

溝５の南東延長上に位置し、方向がほぼ同じであることから同一遺構の可能性がある。重複する溝10よりも古い。出土遺物はないが、検出層位からみて古墳時代後期の遺構であろう。　(岡本)

溝７（第29・48図）

溝13の東側に位置し、ほぼ同じ方向に流れる溝である。南端は後世の掘削によって途切れるが、下段部でも続きの一部が検出された。出土した土器からみて、古墳時代後期の遺構である。　(岡本)

溝８（第29・48図）

谷部の中央よりやや西側に位置し、溝９に切られる溝である。流下方向は南東で、両端付近では削平のためか幅が細くなる。古墳時代後期の溝と思われるが、自然流路の可能性もある。　(岡本)

溝９（第29・48図、図版15－２）

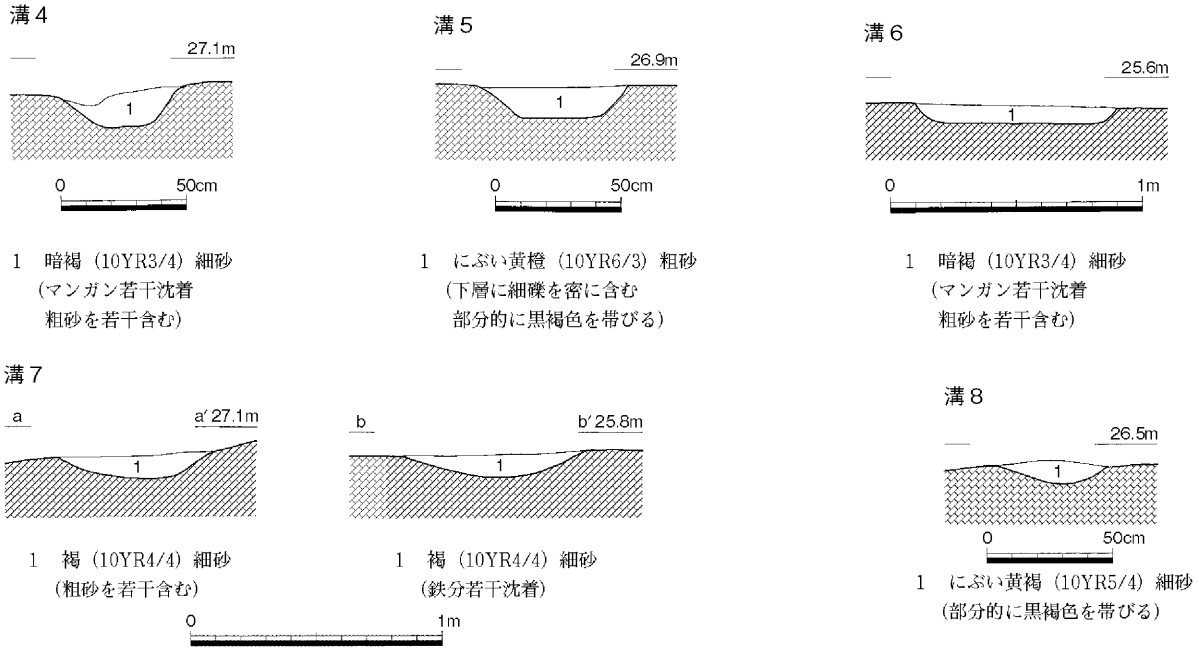
谷部内に位置し、溝５・８を切る溝である。方向が等高線にほぼ平行で、断面形が台形であることから人工的な溝とみてよい。底面の海抜高は次の溝10が取り付く位置で最も低くなっている。埋土から須恵器のほか、刀子Ｍ２、鉄釘Ｍ３が出土した。溝の時期は７世紀前半に位置づけられる。(岡本)

溝10（第29・50図、図版15－３・24－２）

溝９から分岐し、蛇行しながら東へと流下する溝で、溝６を切っている。溝９との関係や断面の形状からみて、人工的な溝であるか、本来は自然流路であっても手を加えている可能性が高い。埋土から土器小片のほか、鉄鏃Ｍ４が出土した。溝の時期は古墳時代後期と考えられる。　(岡本)

溝11（第29・51図、図版20－２）

谷部の西端部に位置し、南南東に流下する溝である。後世の地形改変のため、ごく一部が残存する

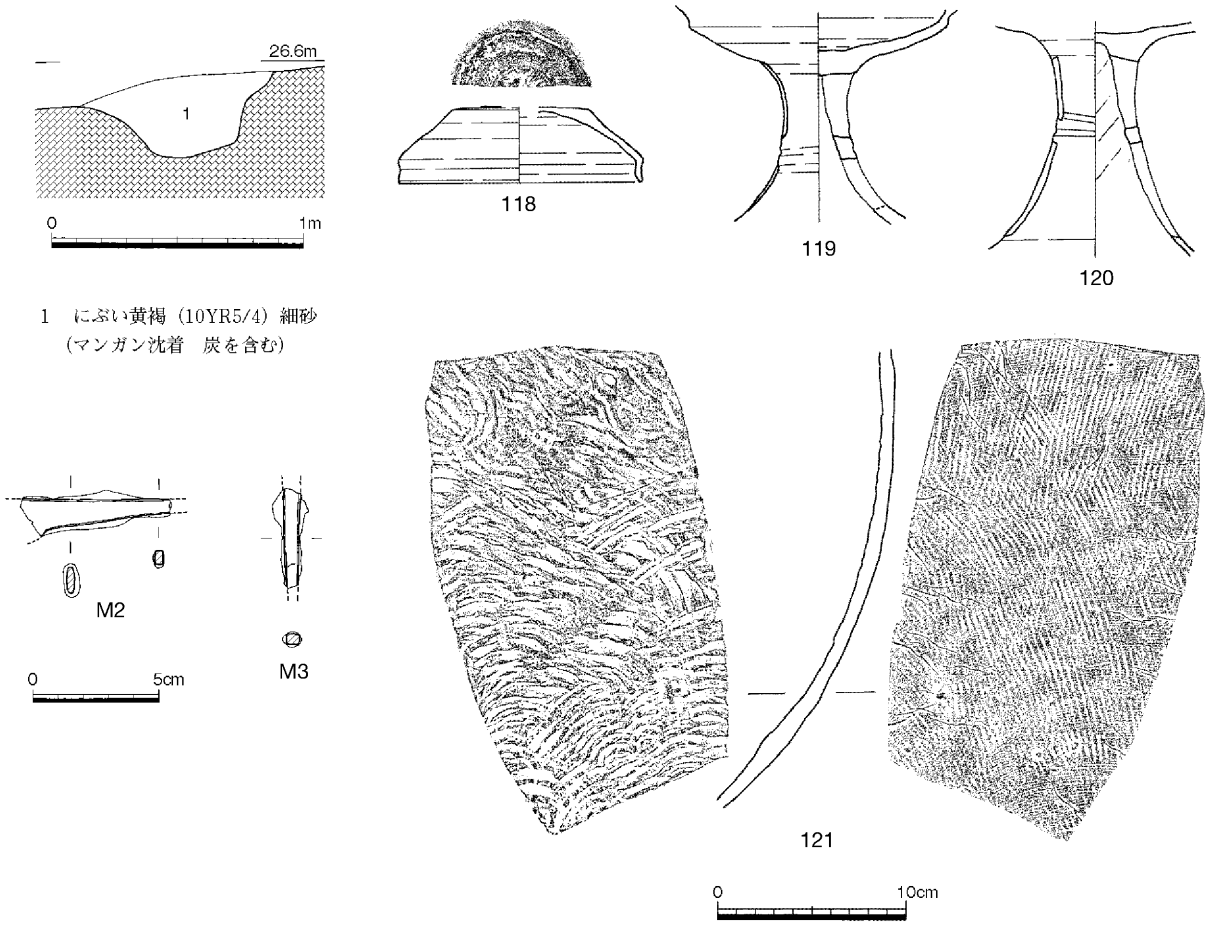


第48図　溝４～８（1/30）

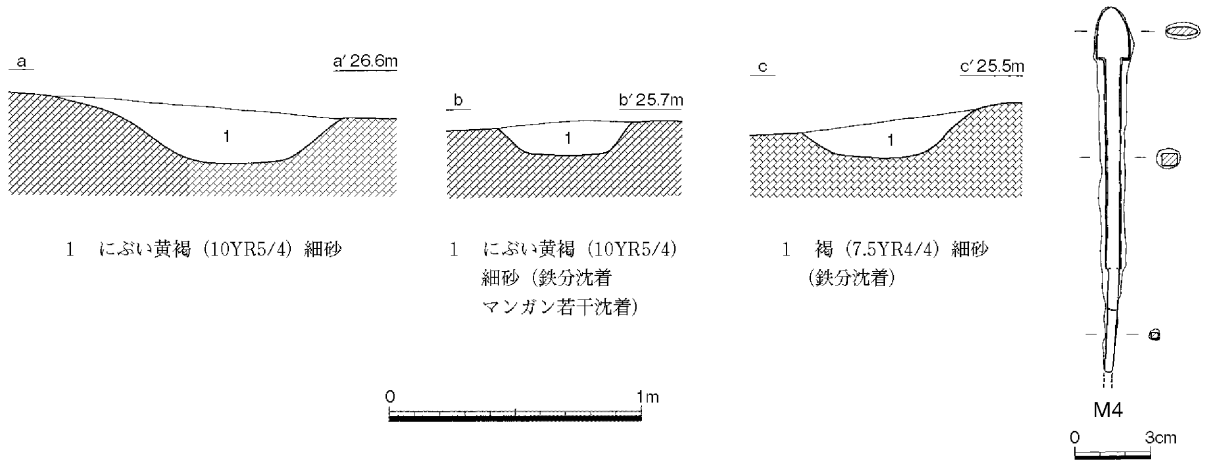
のみで、現状では細長い土坑のような形状を呈する。埋土中からは鉢126、甕127、平瓶128などを含む各種の須恵器や土師器片が出土した。杯身123の内面には同心円状の当て具痕が認められる。出土遺物からみて、溝の時期は７世紀前半である。　(岡本)

溝12（第29・52図）

溝４の東側に位置し、谷部内の等高線に沿うように湾曲して南東方向に流下する溝である。埋土中から須恵器・土師器片が出土し、古墳時代後期の溝と考えられる。　(岡本)



第49図　溝９（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）



第50図　溝10（1/30）・出土遺物（1/3）

溝13（第29・52図、図版15－４）

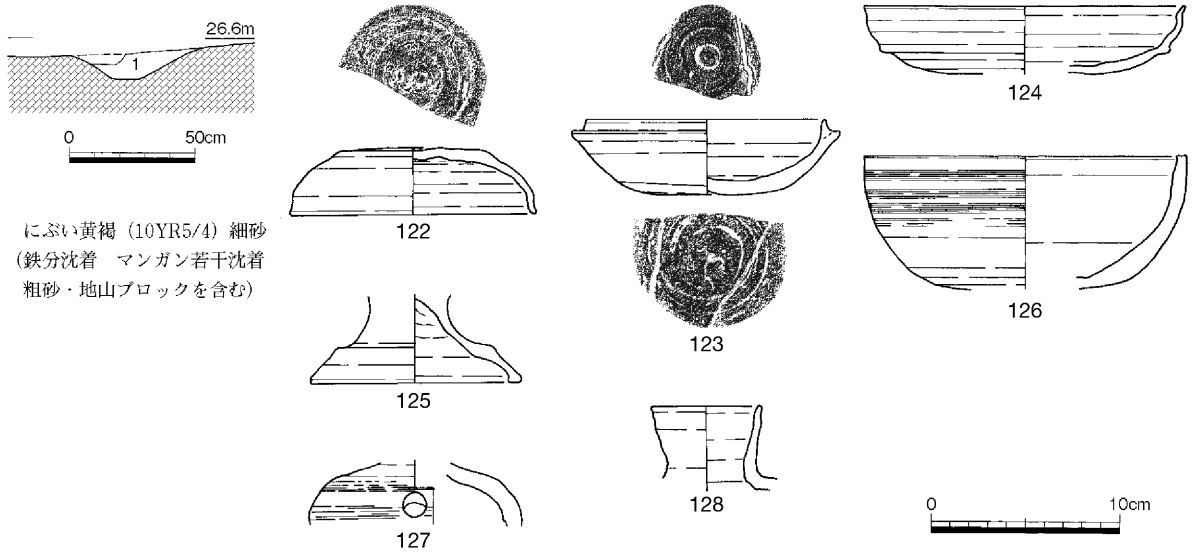
溝７の西隣に位置する溝で、流下方向も同一である。後世の削平や掘削のため、ごく一部が残存していたにすぎない。わずかな出土遺物や検出状況から、古墳時代後期の溝と考えられる。　(岡本)

溝14（第29・52図）

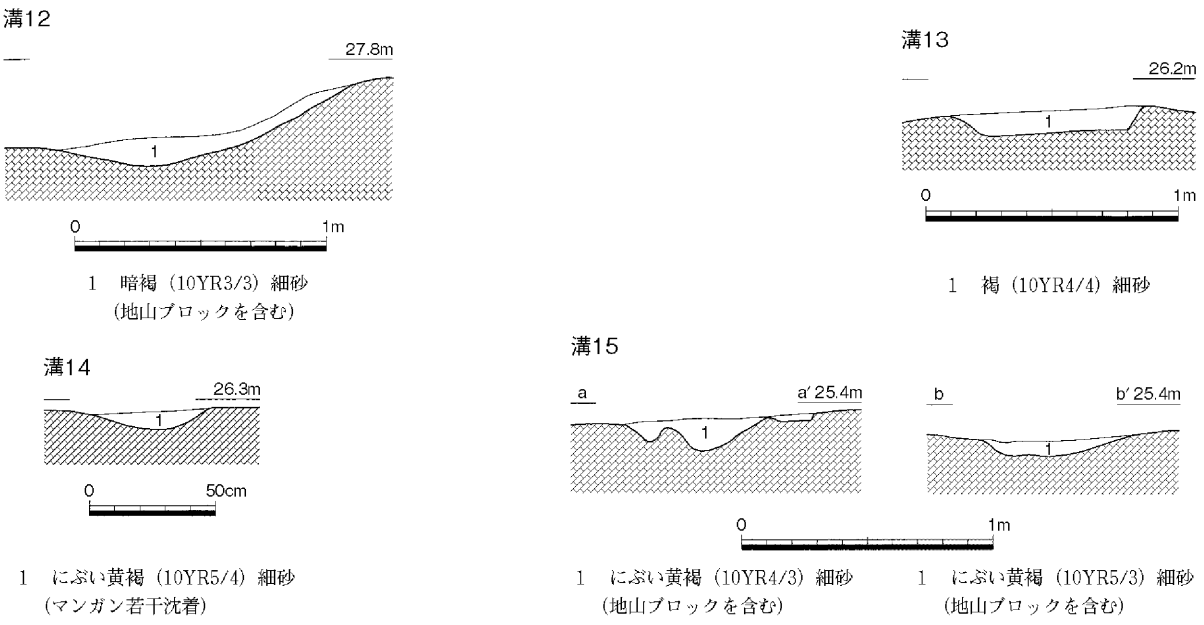
土坑10の南側で検出された東西方向の溝である。検出長はわずか３ｍほどにすぎず、削平された溝の一部が残存したものであろう。出土遺物からみて、古墳時代後期の溝と考えられる。　(岡本)

溝15（第29・52図）

谷部の南端近くで検出した溝で、他の溝からやや離れた位置にある。数条の細い溝が合流して東南東に流下する。出土遺物からは古墳時代後期に位置づけられるが、平面・断面とも形状は整っていないことから、自然流路の可能性が高い。　(岡本)



第51図　溝11（1/30）・出土遺物（1/4）

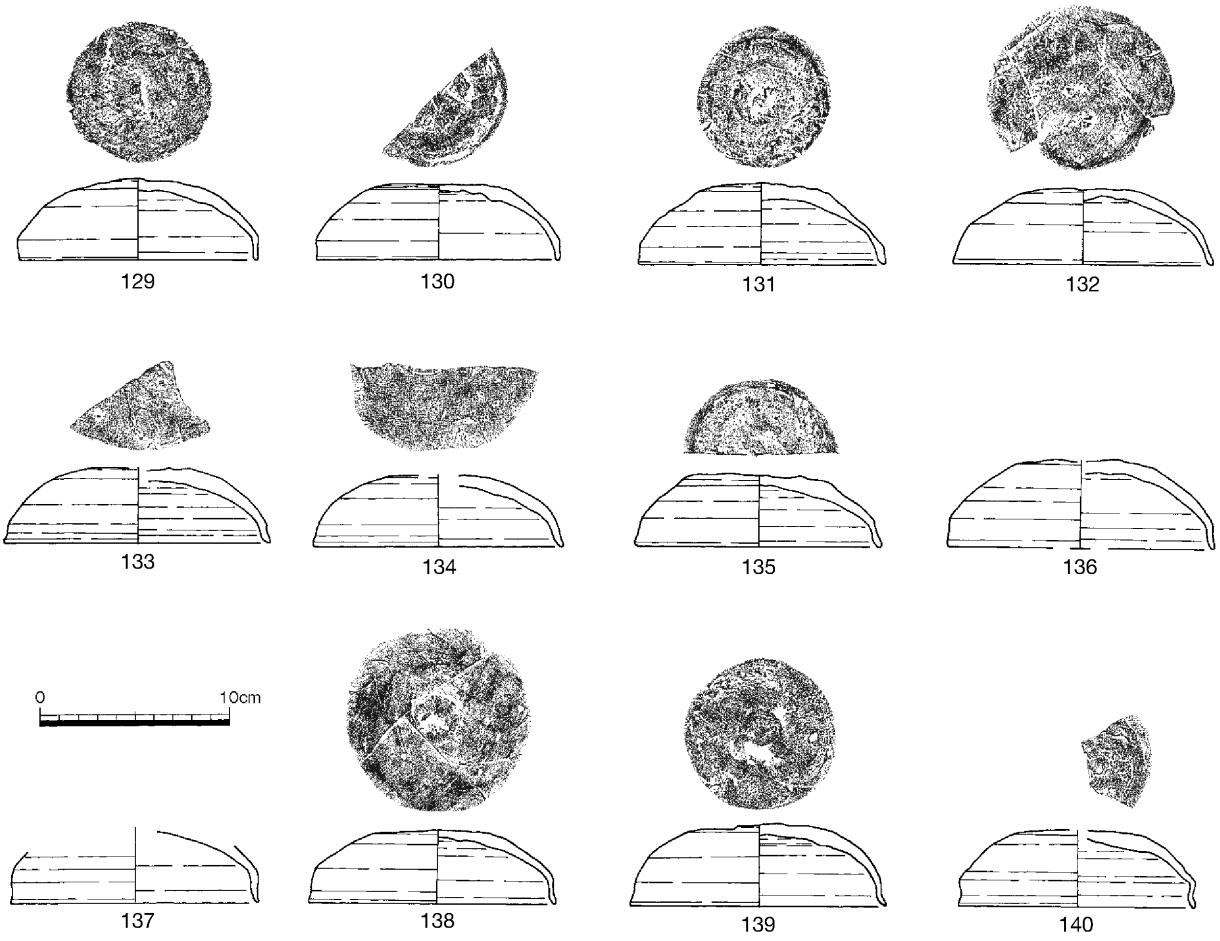


第52図　溝12～15（1/30）

5　谷部

調査地東側の南東方向に下る地形である（第23図）。谷頭に沿って幅80㎝、深さ40㎝の溝がみられるが、機能は不明である（図版15－５、16－１・２）。この溝と谷部からは７世紀初頭の須恵器が出土している。器種は杯蓋129～140、杯身141～156、高杯157～176、脚付椀177・178、脚部179・180、鉢181～187、捏鉢188・189、短頸壺190～192、横瓶193、平瓶194・195、提瓶196、甕197～216などがある（第53～59図、図版21・22、23－１）。これらには焼き歪みや焼きむら、火膨れした不良品や破片どうしが溶着した失敗品がみられ、窯壁片も認められた。こうした状況から谷部上方に須恵器窯が存在したと推測できる。このほか土師器の高杯217、把手218、甕219・220や刀子Ｍ５が出土した（第60図）。

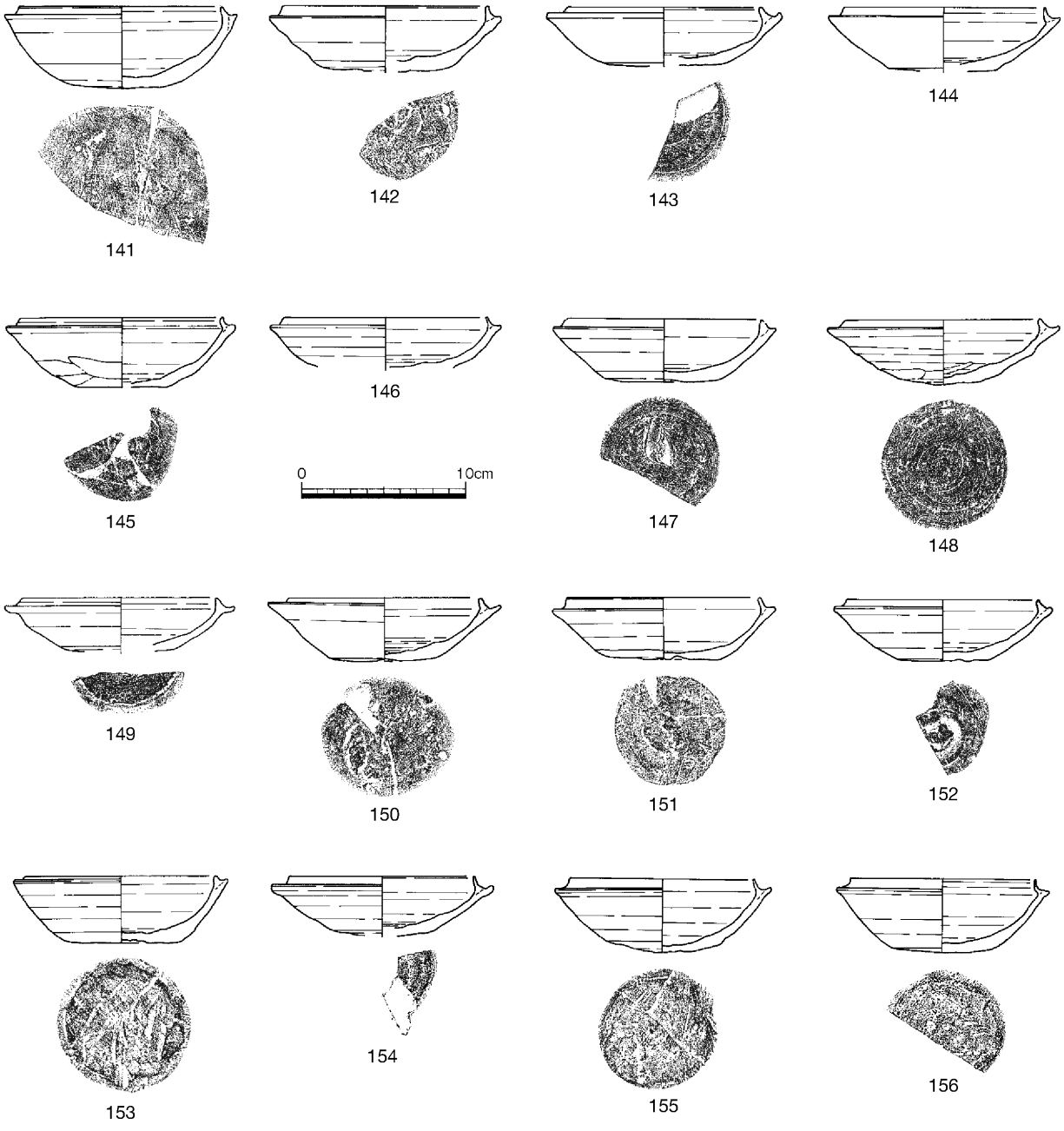
杯蓋129～140の天井部をみると、ヘラキリ、ヘラオコシ後に様々な調整手法をみてとれる。138などは全体に非回転ヘラケズリを行い、130・131は全体にヘラキリ、ヘラオコシ痕を残す。また、138～140の天井部は平坦で、強いヨコナデによって口縁部が大きく外反する形態をもつ。杯身141～156の底部も杯蓋の天井部と同様な調整手法がみてとれる。148は全体に回転ヘラケズリ、147は縁辺のみ回転ヘラケズリを行っている。また、145・151などは縁辺のみ非回転ヘラケズリ、141・153などは全体に非回転ヘラケズリを施し、150などはナデで仕上げている。口縁部をみると141は受け部、その他はたちあがり部を接合する。このうち144～146、154～156などは、たちあがり部のヨコナデによる引き出しが顕著で器壁も薄く、また、150・153のようにたちあがり部がわずかしか出ないものがある。



第53図　谷部出土遺物①（1/4）

長脚高杯157～164のうち、157～159は二方二段透かし孔であり、157の脚部には２条沈線がみられる。160～163は体部から口縁部に向かって外方に立ち上がるが、162はその境に低い稜をもつ。164は四方透かし孔である。短脚高杯（脚付杯）165～172は脚部に透かし孔がなく、このうち165は器壁が薄く、167～169・172も同様の特徴をもつ。杯部は深くて口縁端部を外方に引き出しており、165・167・168は顕著である。脚部端部は内傾して下方に拡張する。166は165に比べて器壁が厚く、171もこれに類する。杯部は浅くて口縁端部まで引き出している。脚部端部は下方に拡張している。

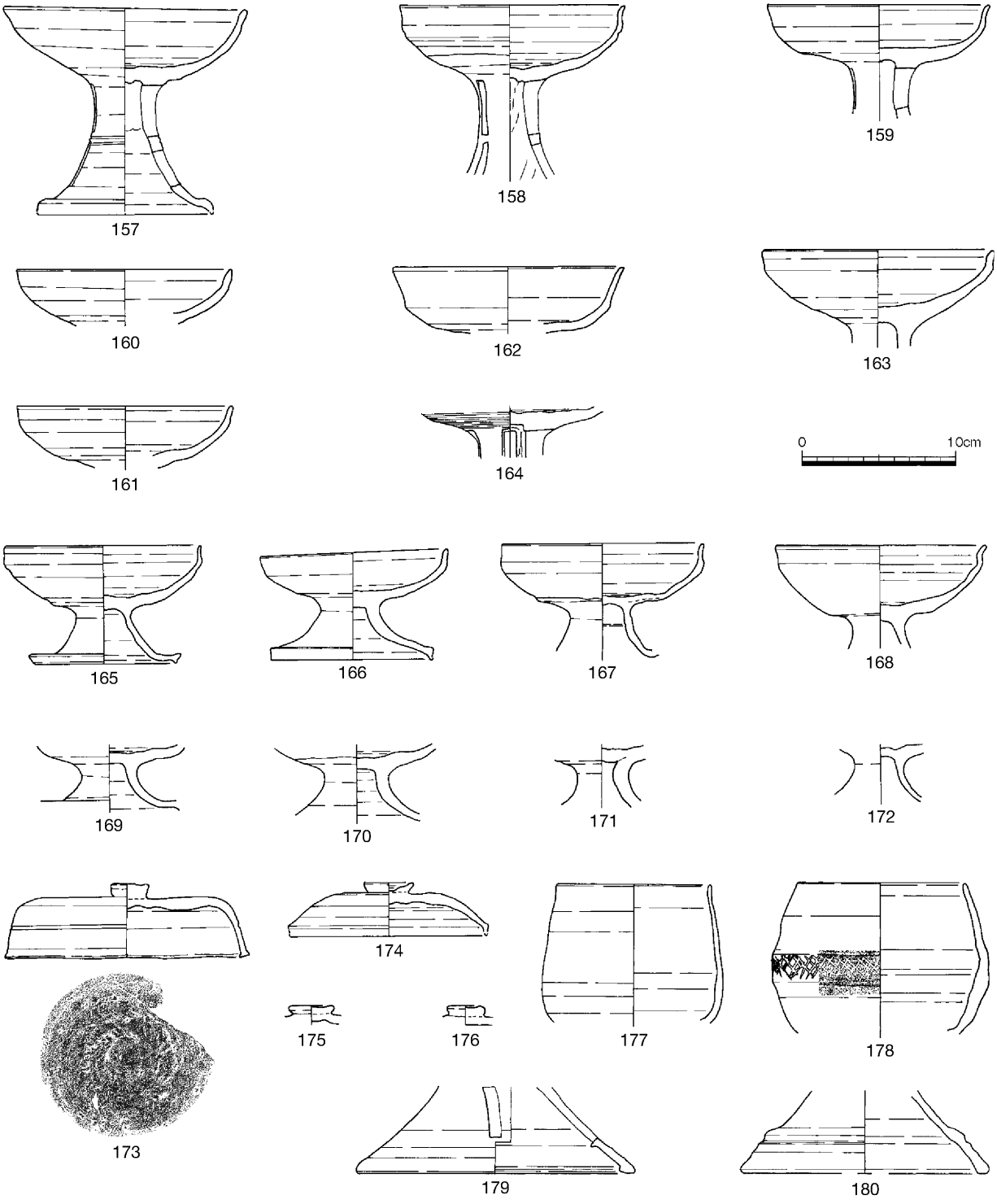
有蓋高杯の蓋と思われる173～176をみると、173はつまみの端部が張り出す円柱状で、肩部と口縁部の間に沈線を施し、内面には渦巻き状の当て具痕が認められる。174は他の須恵器より古い可能性がある。口縁端部はやや内傾して下方に拡張し、つまみは凹状で端部は外方に引き出す。175は全体に扁平で、176は小形で張り出しが弱い。脚付椀177は器壁が薄く、下半付近で最大径となり上方に



第54図　谷部出土遺物②（1/4）

内湾し、口縁部が外反する。178は最大径部に斜格子文が施され、口縁部に向かって内傾する。脚部179・180は高杯、椀や壺などに伴う可能性をもつ。179は外反する形態で、脚部端部の内側にかえりをもつ。方形の透かし孔がみられる。180は段をもち、脚部端部は面取り気味に仕上げている。

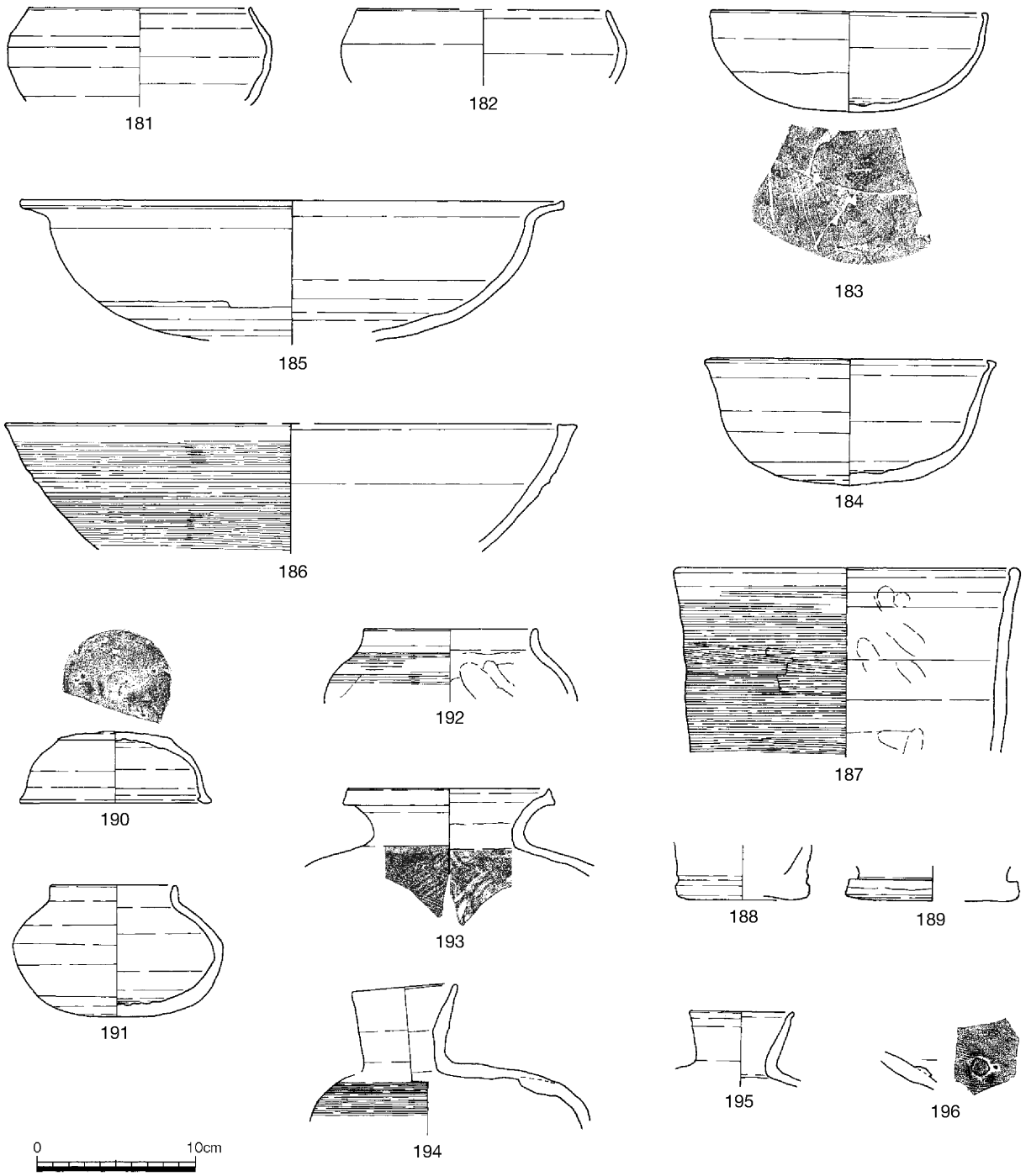
鉢181～187のうち、181・182は鉢部の上半付近で最大径をもち、口縁部に向かって「く」字状に内傾する。183・184は底部からゆるやかに立ち上がり、口縁端部が外傾気味に拡張して、面取りを行う。185は内湾する体部に外反する口縁部をもち、端部は上方に拡張する。186は外方に開く体部で２



第55図　谷部出土遺物③（1/4）

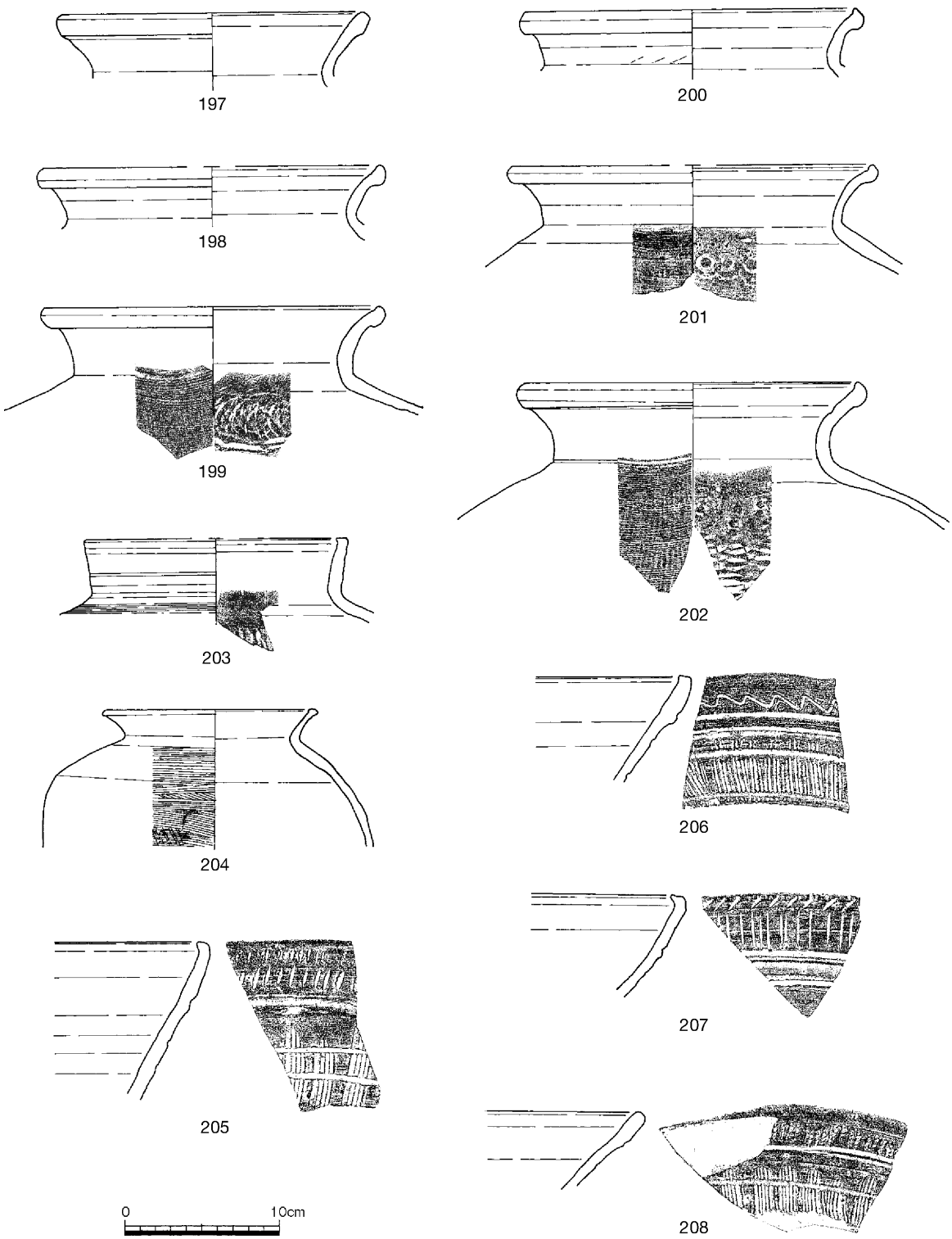
条沈線とカキメを施し、端部は肥厚気味に面取りを行う。187は直立する体部で全体にカキメを施し、口縁端部は丸く収める。捏鉢188・189は底部のみ出土した。短頸壺の蓋190は口縁端部が内傾気味に拡張して丸く収める。191は玉葱形の体部から短く口縁部が外反する。192は191と比べてやや大型品である。横瓶193は口縁端部を内傾気味に上方へ拡張する。体部の特徴から横瓶としたが、別形態の壺の可能性もある。平瓶194は体部上半にカキメを施す。また、天井部には明瞭な閉塞接合痕が認められる。平瓶195は口縁部のみ残存で、提瓶の可能性もある。提瓶196はボタン状の把手をもつ。

甕197～202の口縁端部は若干肥厚させ、197は外傾気味に面取りし、198・199は丸く収め、200～202は内側上方につまみ出す。203は直口甕で、口縁端部は内側に拡張して面取りを行う。甕204は器



第56図　谷部出土遺物④（1/4）

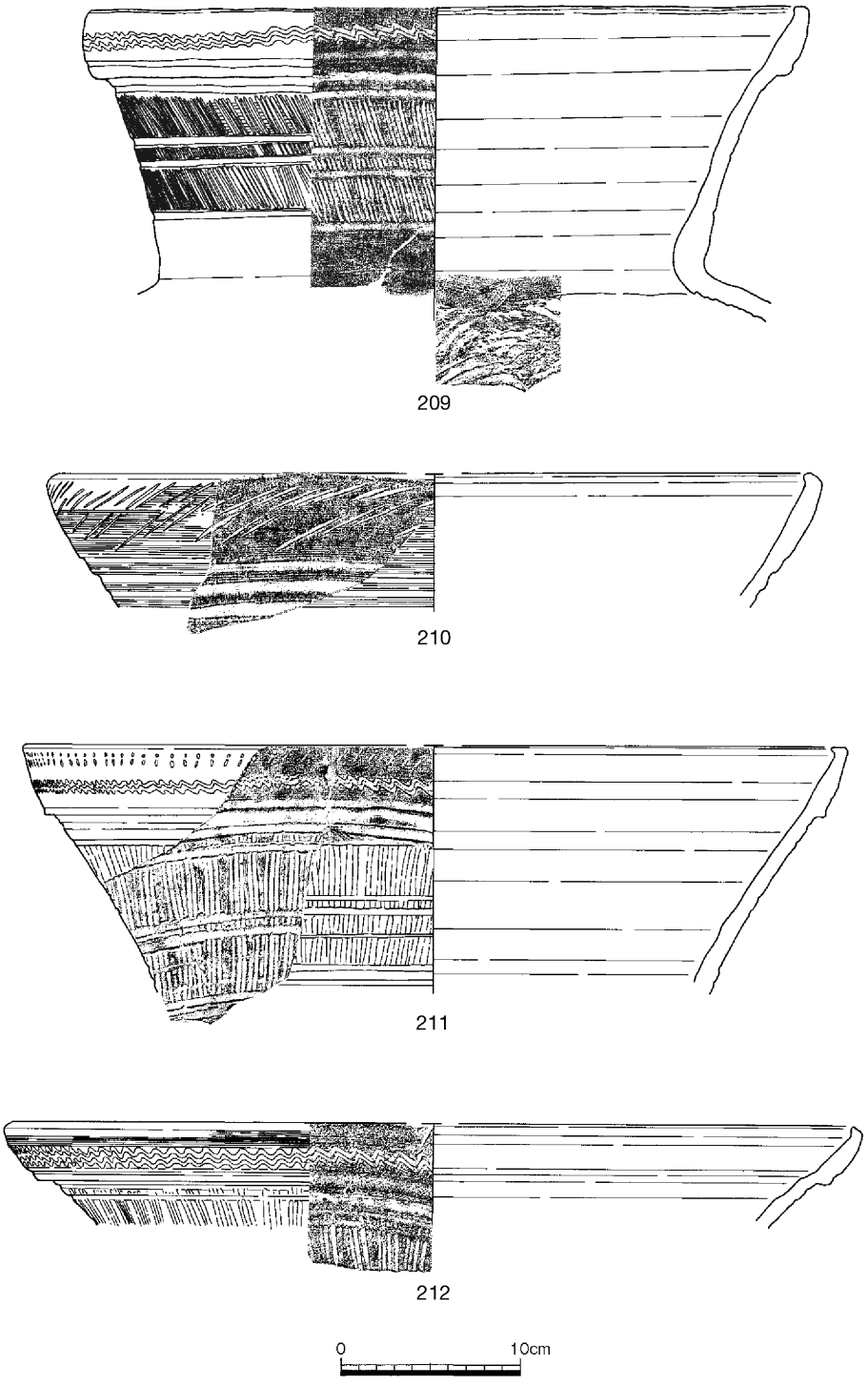
壁が薄く、「く」字状に屈曲する口縁部をもつ。205～212は大形甕である。205の口縁端部は外傾気味に拡張させ、口縁部は二段簾状文、頸部はヘラガキ斜状文に沈線を施す。206の口縁端部は面取りし、口縁部は波状文、頸部はヘラガキ斜状文に２条沈線を行う。207の口縁端部は内側に拡張させ、口縁部は刻目・ヘラガキ直線文、頸部は沈線を行う。208の口縁端部は丸く収め、口縁部は簾状文に沈線、頸部はハケメ状工具の斜状文に沈線を施す。209の口縁端部はわずかに内側に拡張させて面取りし、口縁部は波状文、頸部はヘラガキ斜状文に２条沈線を施す。210の口縁端部は外傾気味に拡張させ、カ



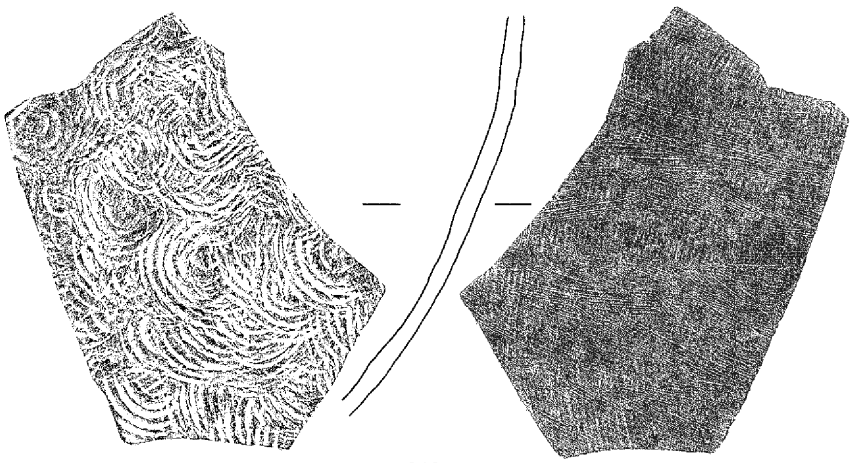
第57図　谷部出土遺物⑤（1/4）

キメ後に口縁上方はヘラガキ斜状文、下方は沈線を施す。211の口縁端部は内側に拡張させ、口縁部は刺突文・波状文、頸部はヘラガキ直線文に２条沈線を３単位施す。212の口縁端部は外傾気味に拡張させ、口縁部はカキメ・波状文・沈線を施し、頸部はヘラガキ直線文に沈線を施す。甕213～216は胴部片で、214・215は破片どうしの溶着がみられる。216は焼成中の破損が認められる。

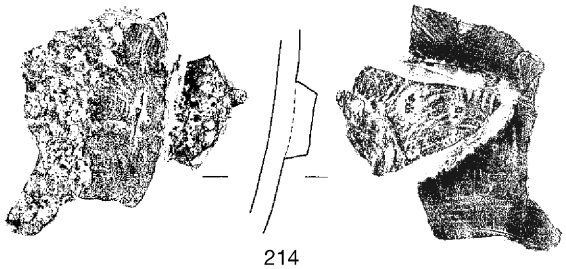
なお、胎土分析の結果、器種による胎土の差異は認められず、県内主要窯跡との比較では浅口市金光町上竹の上竹西の坊遺跡の資料との胎土の類似が指摘された。（澤山）



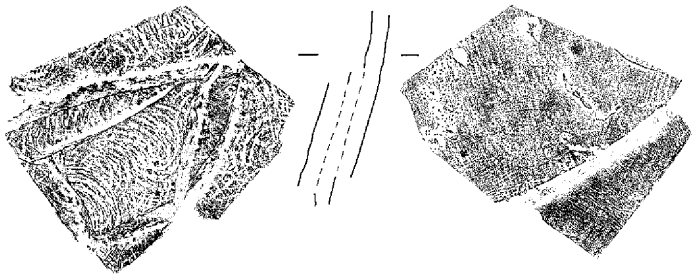
第58図　谷部出土遺物⑥（1/4）



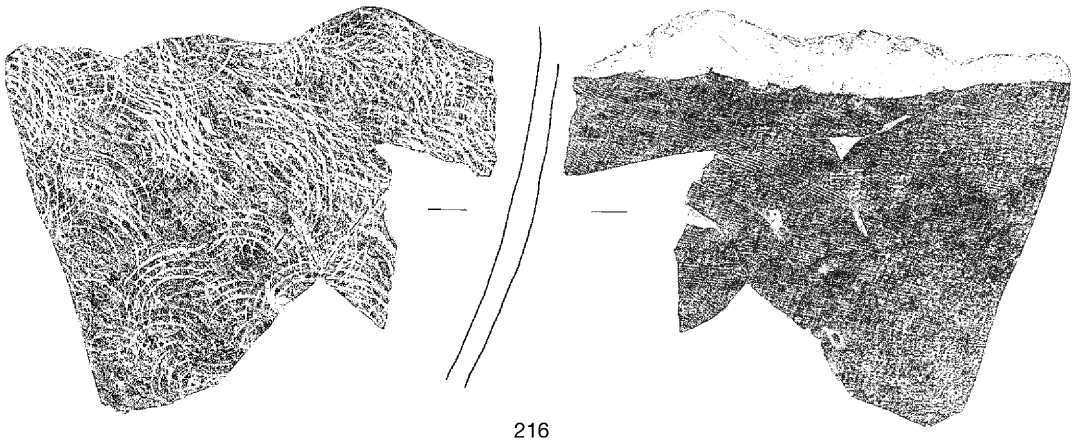
213



214

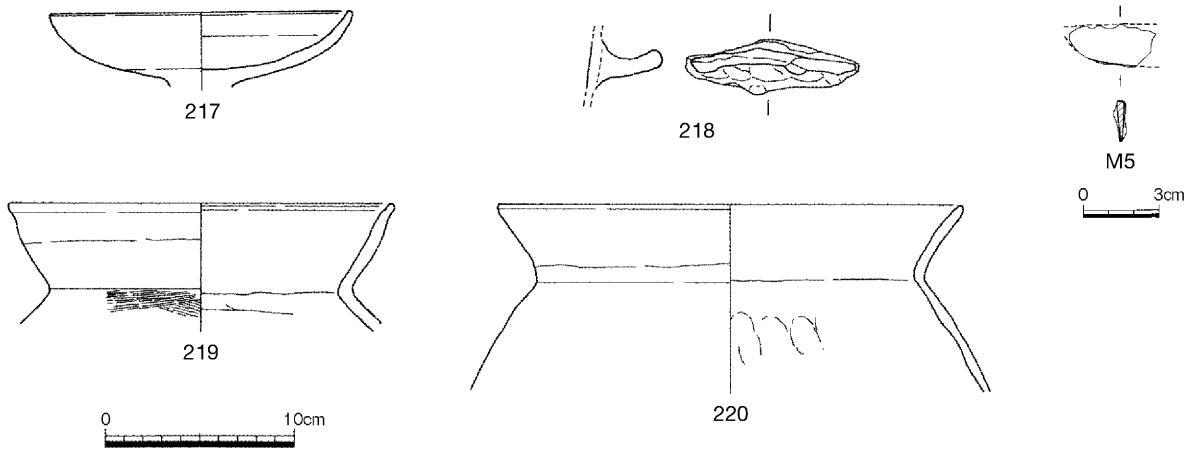


215

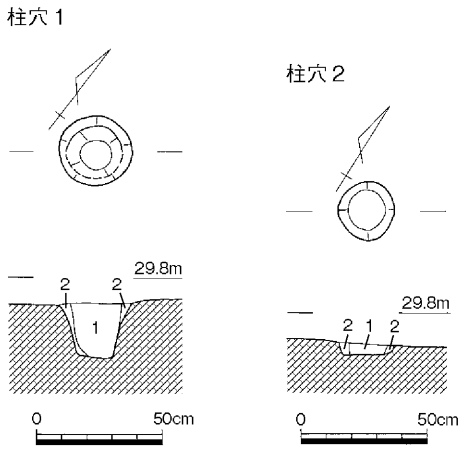


216

第59図　谷部出土遺物⑦（1/4）

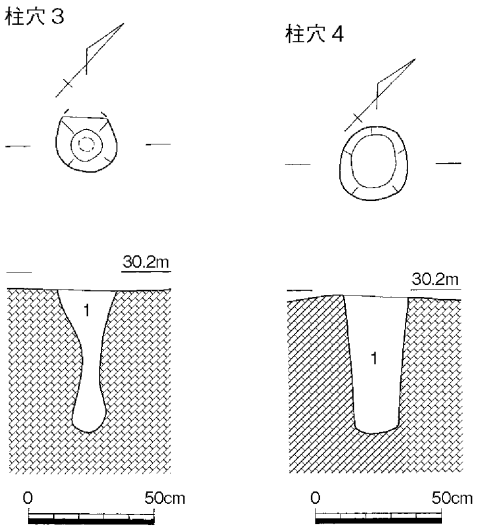


第60図　谷部出土遺物⑧（1/4・1/3）



1　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
（炭を多く含む　焼土を若干含む）
2　明黄褐（10YR6/6）細砂
（地山ブロックを含む）

1　黄褐（10YR5/6）
細砂（炭を多く含む）
2　明黄褐（10YR5/6）
細砂



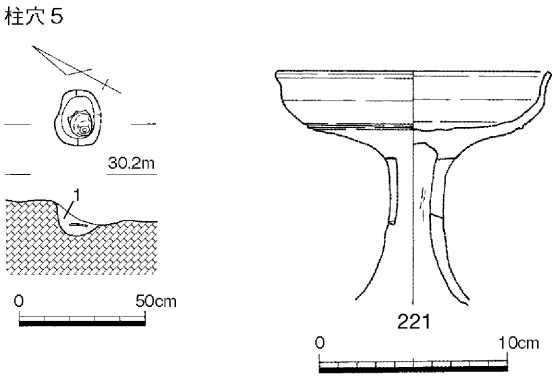
1　にぶい黄褐（10YR5/3）
細砂（炭・焼土を多く含む）

1　にぶい黄褐（10YR5/4）
細砂（炭を含む）

6　柱穴

調査区北半の南西側から柱穴を多数検出している。弥生～古墳時代のものが15基、遺構との切りあいや位置関係からこの時期に属すると推定されるものが11基確認されている。このうち柱穴１～４のように埋土中に炭を含むものもある（第24・61図）。柱穴５からは須恵器高杯221が出土している。埋土中から須恵器片を出土するものが多く、おおむね古墳時代後期の遺構と考えられる。

ただし、柱穴１の埋土中に含まれる炭化物の放射性炭素年代測定により弥生時代中期後半に相当する年代が得られていることから、弥生時代の柱穴もいくつか存在する可能性がある。これに加え、同じ範囲に中世の柱穴群があることや、後世の削平を受けていることで時期決定は難しく、建物や柱穴列の確認にも至らなかった。　（中原）



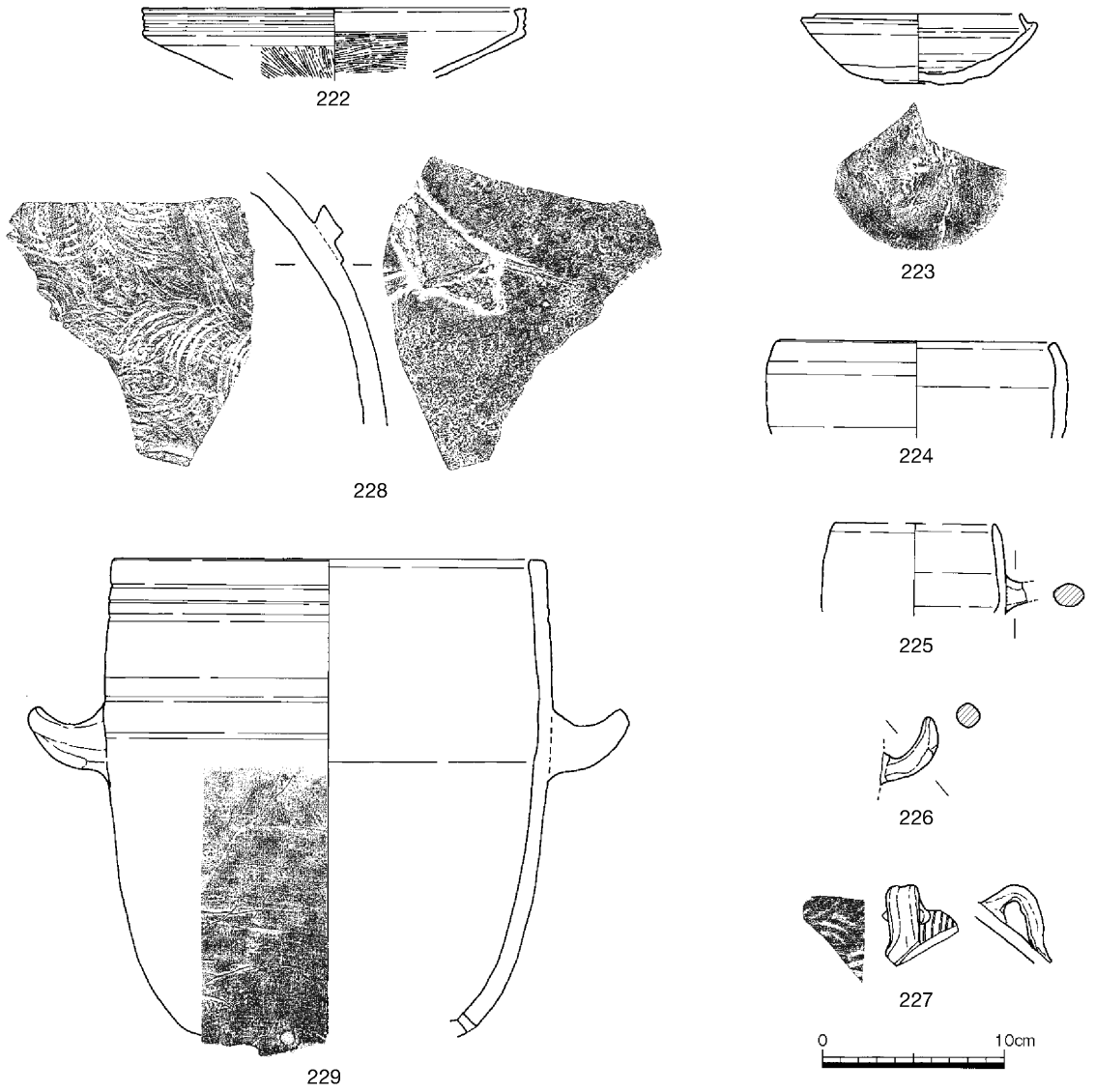
1　にぶい黄褐（10YR5/4）
細砂

第61図　柱穴１～５（1/30）・柱穴５出土遺物（1/4）

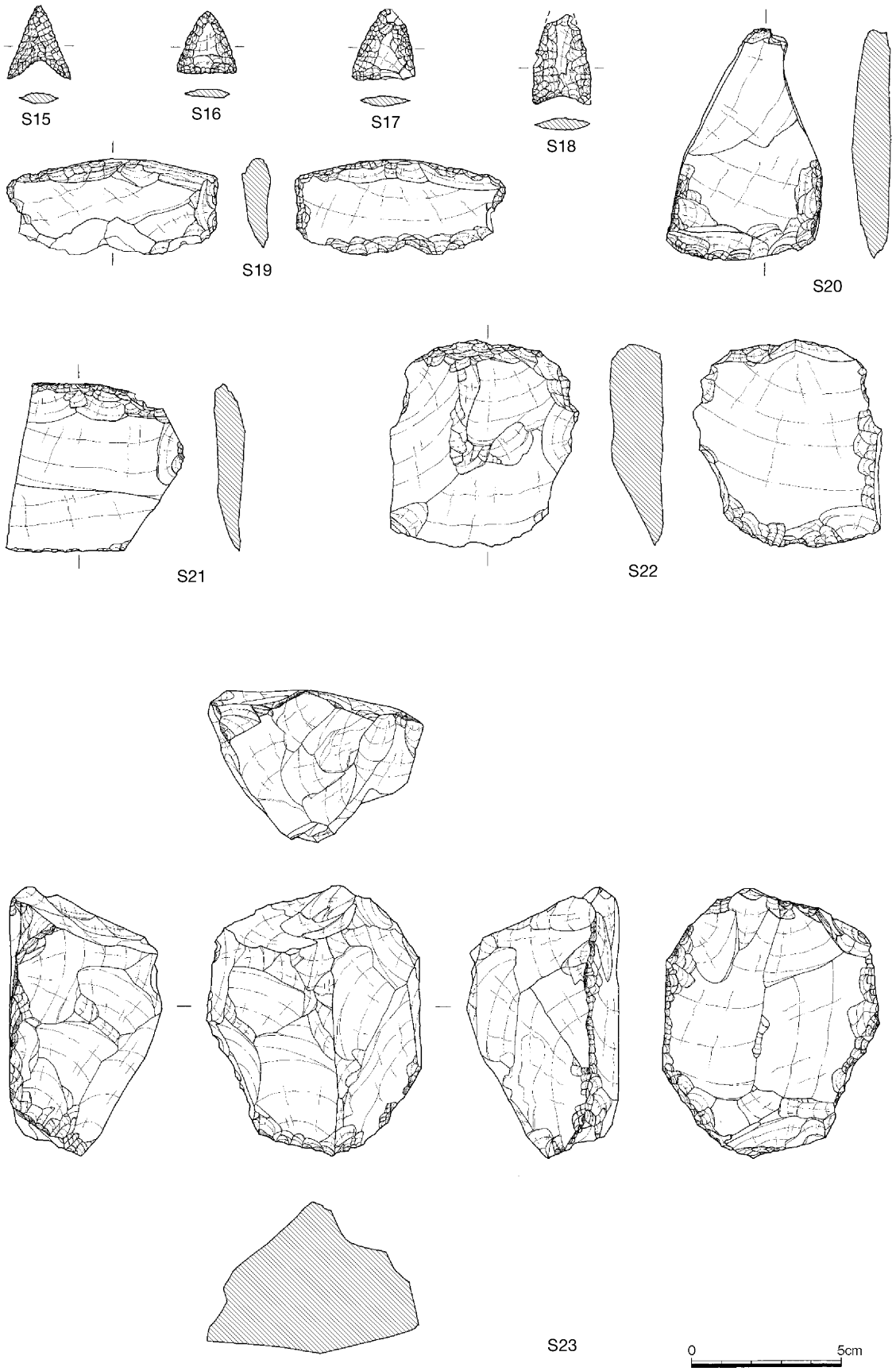
7　遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物では、弥生時代中期後葉の高杯222や須恵器の杯身223、鉢224、把手付椀225・226、壺227、甕228、甑229がみられる（第62図）。高杯222の口縁部は３条凹線文、杯部はヘラミガキを施す。杯身223の外面底部はヘラキリ・ヘラオコシの後、縁辺のみヘラケズリを行う。把手付椀226は鉤状把手をもつ。壺227は肩部の輪状把手であり、外面は平行タタキ後カキメ、内面は同心円あて具痕がみられる。甕228には溶着がみられ、外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕と工具ナデがみられる。甑229の外面上半は３条沈線、下半はカキメが施され、把手が貼り付けられる。底部は小円形と楕円形と思われる２種類の孔が認められる。

石器は谷部から凹基式の石鏃Ｓ15・Ｓ18、平基式の石鏃Ｓ16や刃部が欠損している打製石包丁Ｓ19、端部と刃部側面に敲打の潰しがみられるスクレイパーＳ20やＳ21が出土している。また、調査区北半北側では平基式の石鏃Ｓ17がみられる。なお、剥離痕跡が認められる流紋岩製のＳ22とＳ23は、自然作用による形成も考慮して検討・評価すべき資料と考えている（第63図、図版24－２）。　（澤山）



第62図　遺構に伴わない遺物①（1/4）

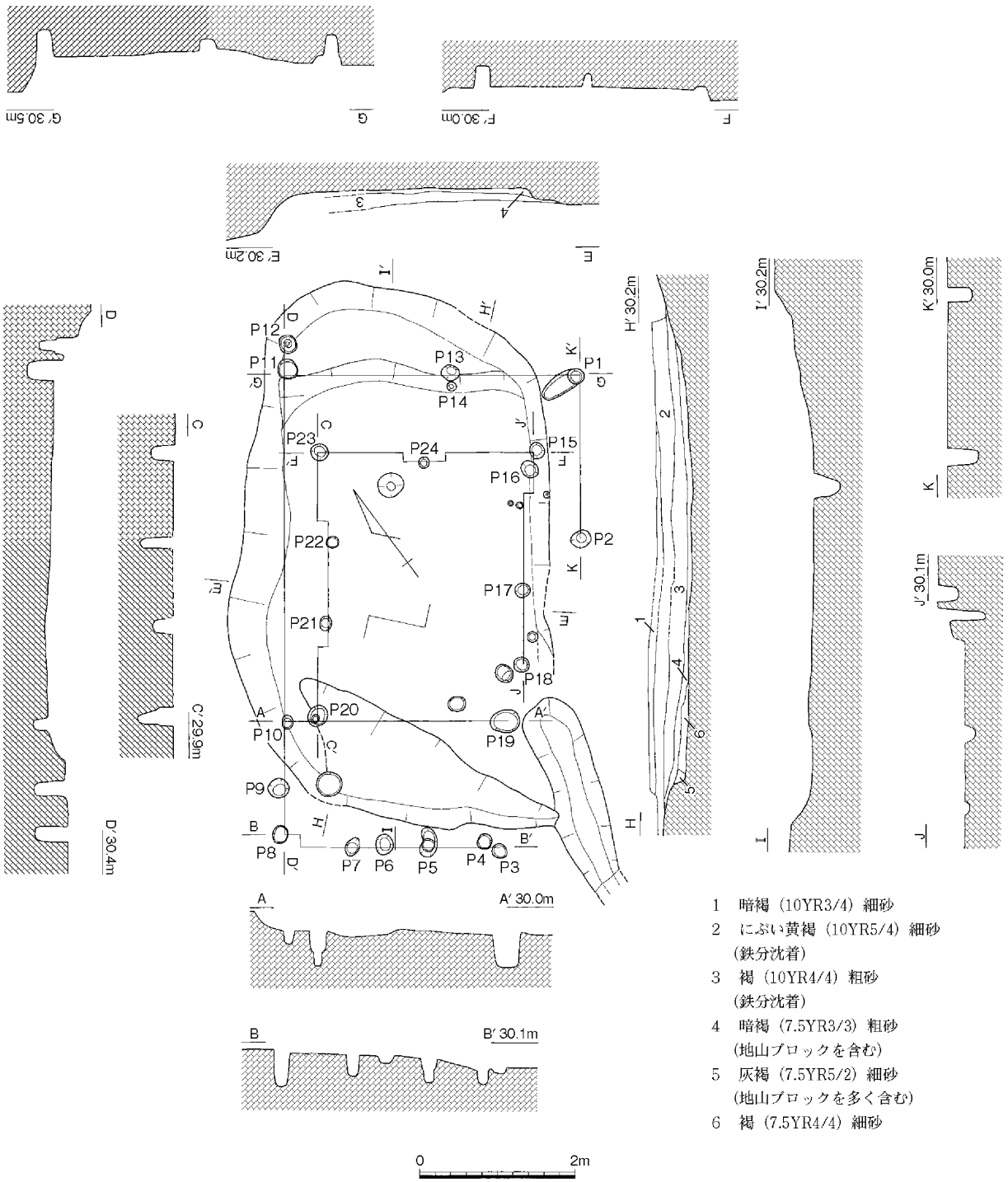


第63図　遺構に伴わない遺物②（1/2）

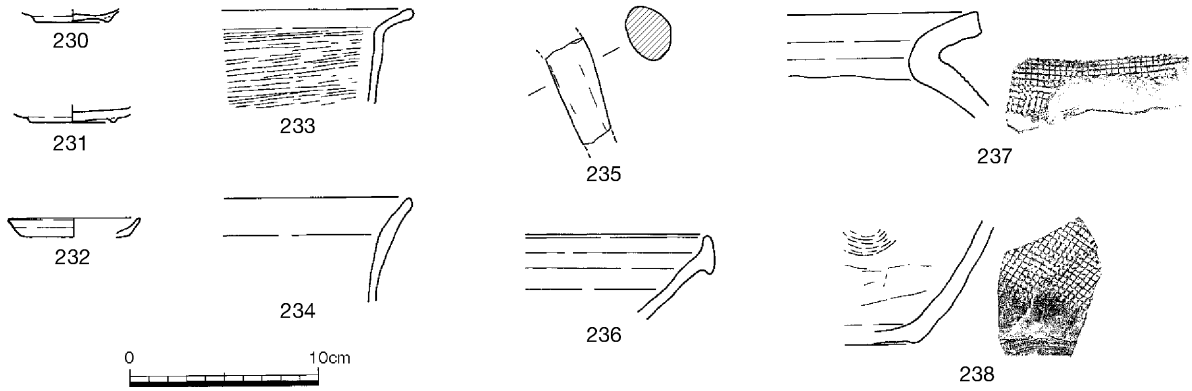
第３節　古代以降の遺構と遺物

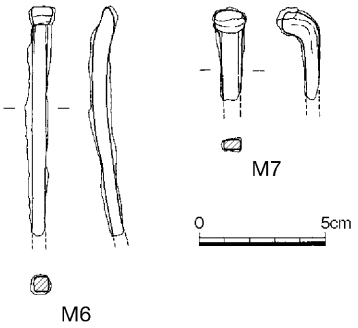
１　竪穴遺構

竪穴遺構１（第24・64・65図、図版16－３、17－１・２）



第64図　竪穴遺構１（1/80）





第65図　竪穴遺構１出土遺物（1/4・1/3）

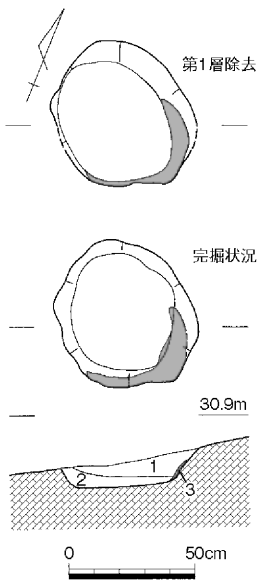
調査区北半の中央部に位置する遺構である。現状で長さ6.68ｍ、幅4.12ｍ、深さは壁面の残りが最も良好な北西壁で40㎝を測る。なお、床面では長さ5.35ｍ、幅3.46ｍを測る。後世の撹乱や掘削により本来の形状をとどめていない部分が多いが、平面は長方形あるいは隅丸長方形であったものと考えられる。南東壁は上部が削平されているものの、底部は本来の形状をとどめており、主軸方向はN－54°－Eである。

埋土中からは多量の土器片が出土しており、このうち代表的なものを図示している。230～235は土師質土器である。椀230・231は、いずれも底部に高台が貼り付けられている。また、232は皿、233・234は鍋の口縁部であり、235は脚部片である。

236は須恵質土器の捏鉢であり、口縁部には重ね焼き痕がみられる。237・238は亀山焼の甕であり、体部に格子目タタキが施される。Ｍ６・Ｍ７は鉄釘であり、頭部を折り曲げている。これらの出土遺物から、竪穴遺構１は中世の遺構であると考えられる。

竪穴遺構の周辺及び内部には、中世の遺物が出土したピットが12基、それに類すると考えられるものが16基確認されている。並びが不規則ではあるものの、これらのピットのいくつかは竪穴遺構の上屋構造を支える柱穴として機能していた可能性が高い。

なお、花粉分析により竪穴遺構最下層の埋土からソバ属の花粉が多く含まれることが明らかになっており、遺構の廃棄後に近辺でソバが生育していた可能性が高い。（中原）



1　灰黄褐（10YR5/2）細砂
（炭・粗砂を含む）
2　黒（10YR2/1）炭層
（灰黄褐（10YR5/2）細砂を含む）
3　橙（5YR7/8）細砂
（地山　被熱痕）

第66図　土坑12（1/30）

２　土坑

土坑12（第24・66図、図版17－３）

調査区北半の東側に位置する遺構である。長径58㎝、短径55㎝の不整円形で、残存部の深さは16㎝である。埋土の下層は炭層であり、壁面の一部が橙色を呈していることからも、この土坑内で火を使った可能性が高い。なお、埋土中からは須恵器片及び土師器片が出土

しているが、炭層で検出された炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、14世紀代に相当する年代が得られた。この結果にしたがえば出土遺物は混入品と考えられ、遺構周辺で検出された柱穴とほぼ同時期の中世の遺構であることが推測される。（中原）

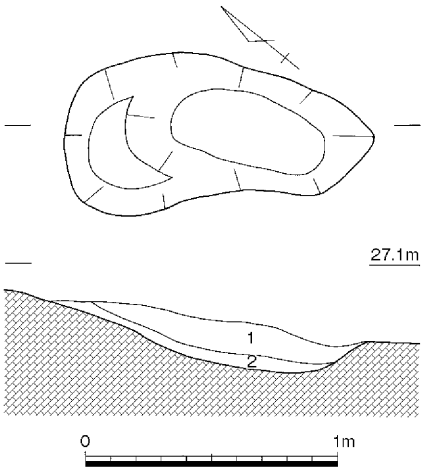
土坑13（第29・67図）

調査区南半の中央からやや西寄りの位置で検出した土坑で、長径122cm、短径58cm、深さ46cmを測る。埋土中から亀山焼や土師質土器が出土したことから、土坑の時期は中世である。（岡本）

土坑14（第29・68図、図版17－４）

調査区南半の中央からやや北寄りの位置で検出した、長径60cmの不整円形を呈する土坑である。検出面からの深さは14cmであるが、内部に瓦質焼成の甕239が据えられていたため、本来は甕の器高に相当する深さがあったと思われる。甕の底部は意図的に打ち欠かれており、内部には口縁部から肩部にかけての破片が落ち込んでいた。

外面は格子目タタキ後にタテハケ、内面は強いタテハケ及びヨコハケで調整される。この種の埋甕は岡山県南西部の遺跡で散見されるもので、本例は中世末ないし近世の製品と思われる。土坑内からはこの甕以外の出土遺物はなかった。遺構の性格としては畑の肥料甕や甕棺の可能性があるが、底が抜かれている理由は不明である。（岡本）

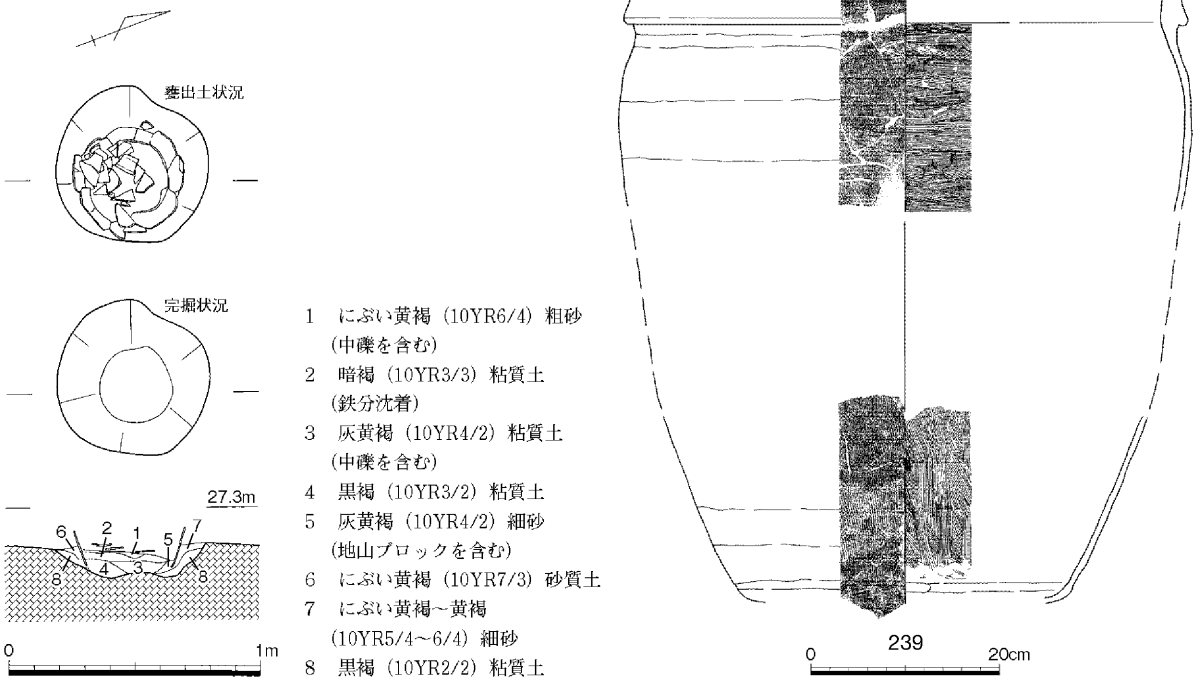


1　灰黄褐（10YR5/2）土　　2　暗灰黄（2.5Y4/2）土
（中礫を多く含む）

第67図　土坑13（1/30）

土坑15（第29・69図）

調査区南半の中央付近に位置する。東側が破壊されているが、残存部の最大径129cm、深さ71cmを測る円形の土坑と



1　にぶい黄褐（10YR6/4）粗砂
（中礫を含む）
2　暗褐（10YR3/3）粘質土
（鉄分沈着）
3　灰黄褐（10YR4/2）粘質土
（中礫を含む）
4　黒褐（10YR3/2）粘質土
5　灰黄褐（10YR4/2）細砂
（地山ブロックを含む）
6　にぶい黄褐（10YR7/3）砂質土
7　にぶい黄褐～黄褐
（10YR5/4～6/4）細砂
8　黒褐（10YR2/2）粘質土

第68図　土坑14（1/30）・出土遺物（1/8）

思われる。若干の土師器片が出土したが、埋土の特徴等から中世の遺構と考えられる。　(岡本)

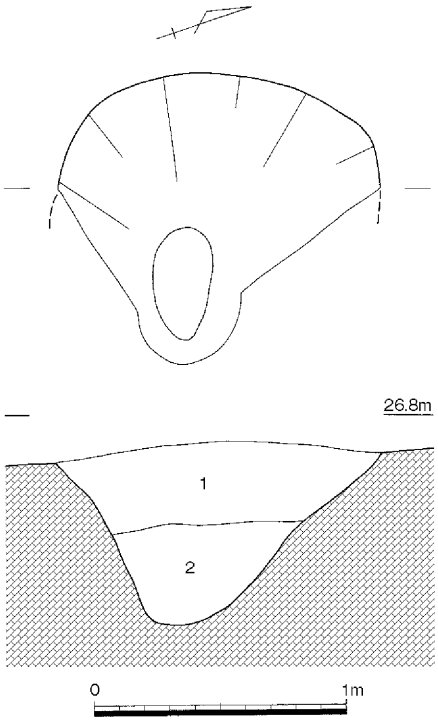
土坑16（第29・69図）

土坑15に切られている土坑で、一部しか残存しないため全体の規模や形状は不明である。出土遺物もないが、埋土の特徴などから中世の遺構と判断した。　(岡本)

土坑17（第29・69図）

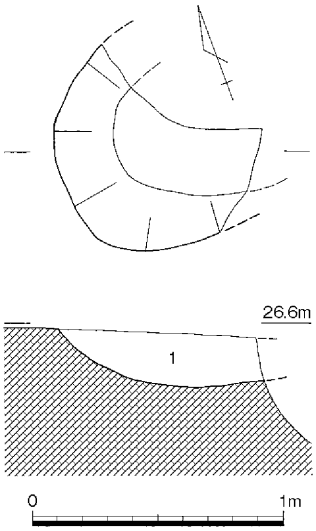
調査区南半の中央からやや南寄りにあり、長径230cm、短径185cm、深さ42cmを測る楕円形の土坑である。埋土内には大きな角礫が１点含まれていたが、意図的に置かれたものではない。隣接する土坑18と埋土が類似することなどから古代の遺構と考えるが確証はない。　(岡本)

土坑15



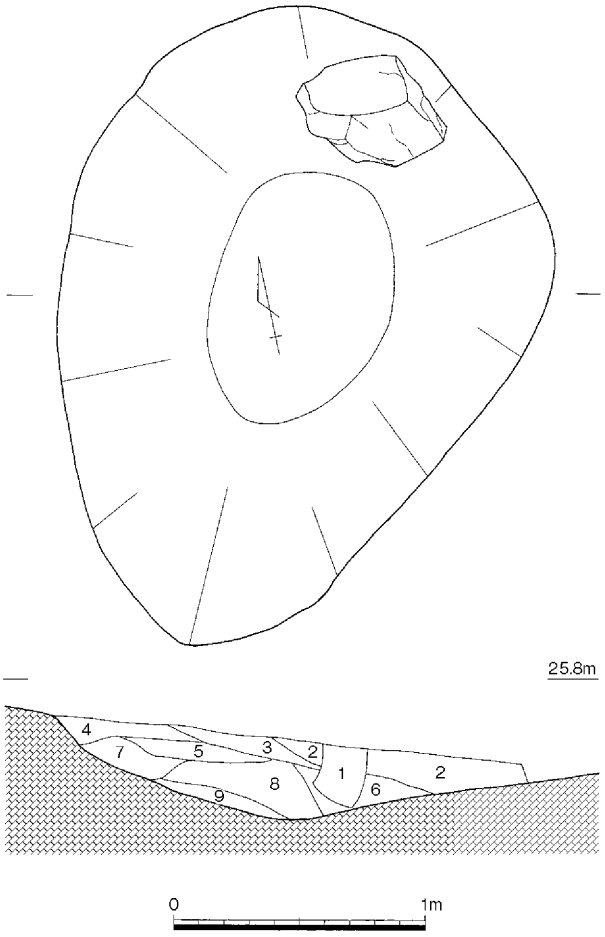
1　灰黄褐（10YR6/2）土
2　黄灰（10YR5/1）土

土坑16



1　にぶい黄褐（10YR5/4）細砂

土坑17

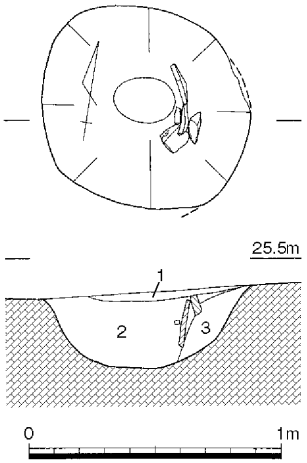


1　にぶい黄褐（10YR5/4）粗砂
2　灰黄褐（10YR4/2）粗砂
（鉄分若干沈着）
3　暗褐（10YR3/3）細砂
（上層鉄分沈着　粗砂を若干含む）
4　にぶい黄橙（10YR6/3）粗砂
（鉄分沈着　細礫を若干含む）
5　灰黄褐（10YR4/2）粗砂
（鉄分沈着）
6　にぶい黄褐（10YR4/3）粗砂
（鉄分沈着）
7　にぶい黄褐（10YR5/4）粗砂
（鉄分沈着）
8　黒褐（10YR3/2）細砂
（鉄分沈着）
9　にぶい黄褐（10YR5/3）粗砂
（鉄分若干沈着）

第69図　土坑15～17（1/30）

土坑18（第29・70図、図版17－５、23－３）

土坑17の南側に隣接する土坑である。長径82㎝のほぼ円形で、深さは32㎝を測り、断面形は深い椀状を呈する。土坑内には、平瓦**241**が凹面を内側にして垂直に立てられていた。瓦は凸面に縄目タタキ、凹面に布目が残る古代のもので、土坑壁面の補強などの目的で転用された可能性がある。埋土からは土師器の杯**240**も出土した。古代において調査区周辺に瓦を葺いた建物があったとは考えにくく、本来の使用場所やこの場所に持ち込まれた経緯は不明である。（岡本）



1　灰黄褐（10YR4/2）細砂
（部分的に黒褐色を帯びる）
2　にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
（部分的に黄褐色（鉄分？）の沈着）
3　黒褐（10YR3/1）細砂
（部分的に黄褐色（鉄分？）の沈着
やや粘性の強いブロックを含む）

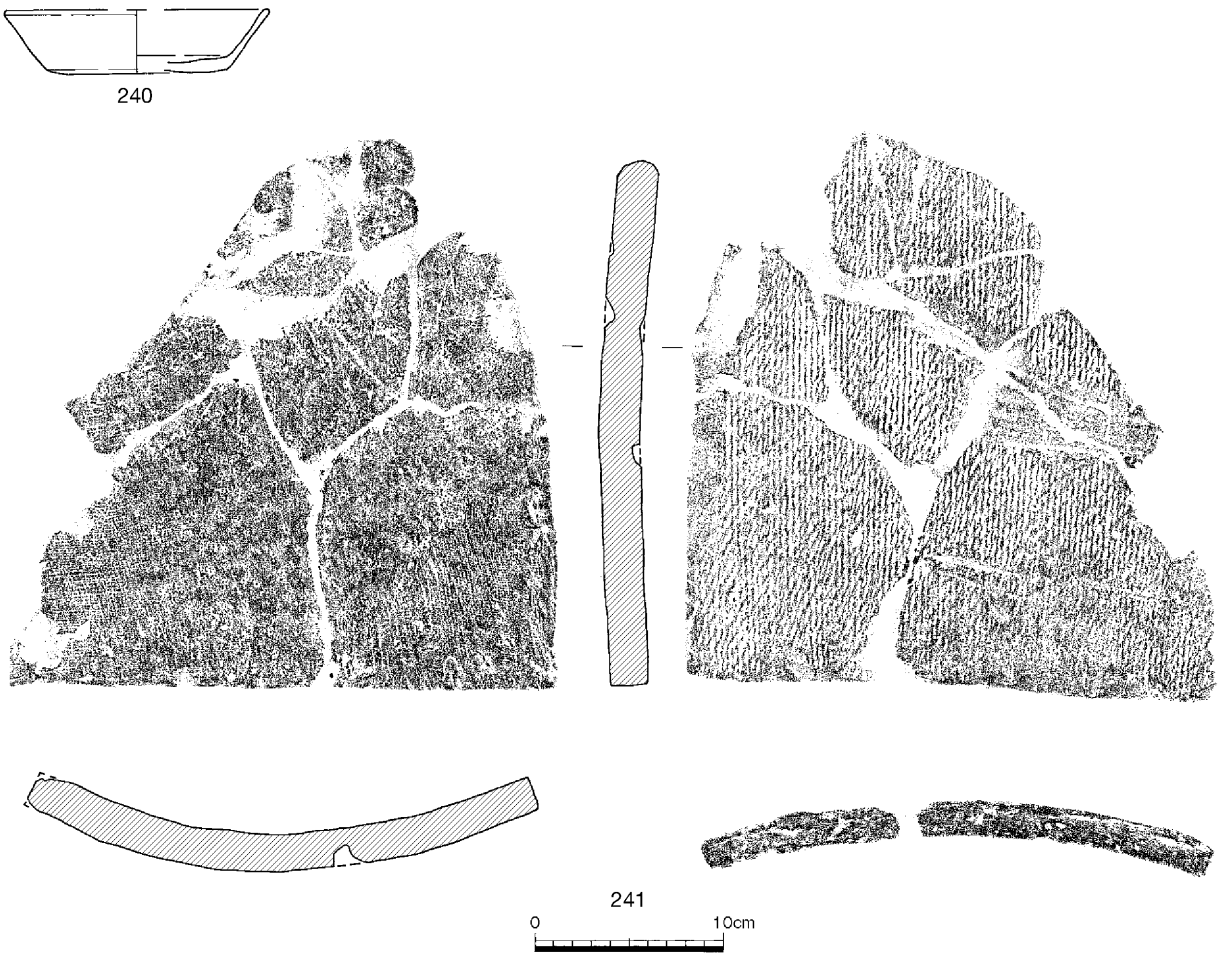
３　溝

溝16（第24・71図）

調査区北半の南西端に位置し、後述する溝17とともに７世紀前半の段状遺構１を切る溝である。古墳時代の遺物が出土しているが、検出層位や埋土の特徴から中世の遺構と考えられる。（岡本）

溝17（第24・71図）

溝16の南側に位置し、同様に段状遺構１を切っている溝である。こ



第70図　土坑18（1/30）・出土遺物（1/4）

の溝からも古墳時代の遺物が出土しているが混入の可能性が高く、検出層位や埋土の特徴から判断すると中世の遺構と考えられる。　(岡本)

溝18（第24・71図）

調査区北半の南部で検出した直線状の溝で、東端は竪穴遺構１に接する。溝の底面には勾配がほとんどなくほぼ平坦で、西側延長上に存在する溝17と同一遺構の可能性もある。埋土中から須恵器や亀山焼の破片が出土しており、遺構の時期は中世である。　(岡本)

溝19（第24・71図）

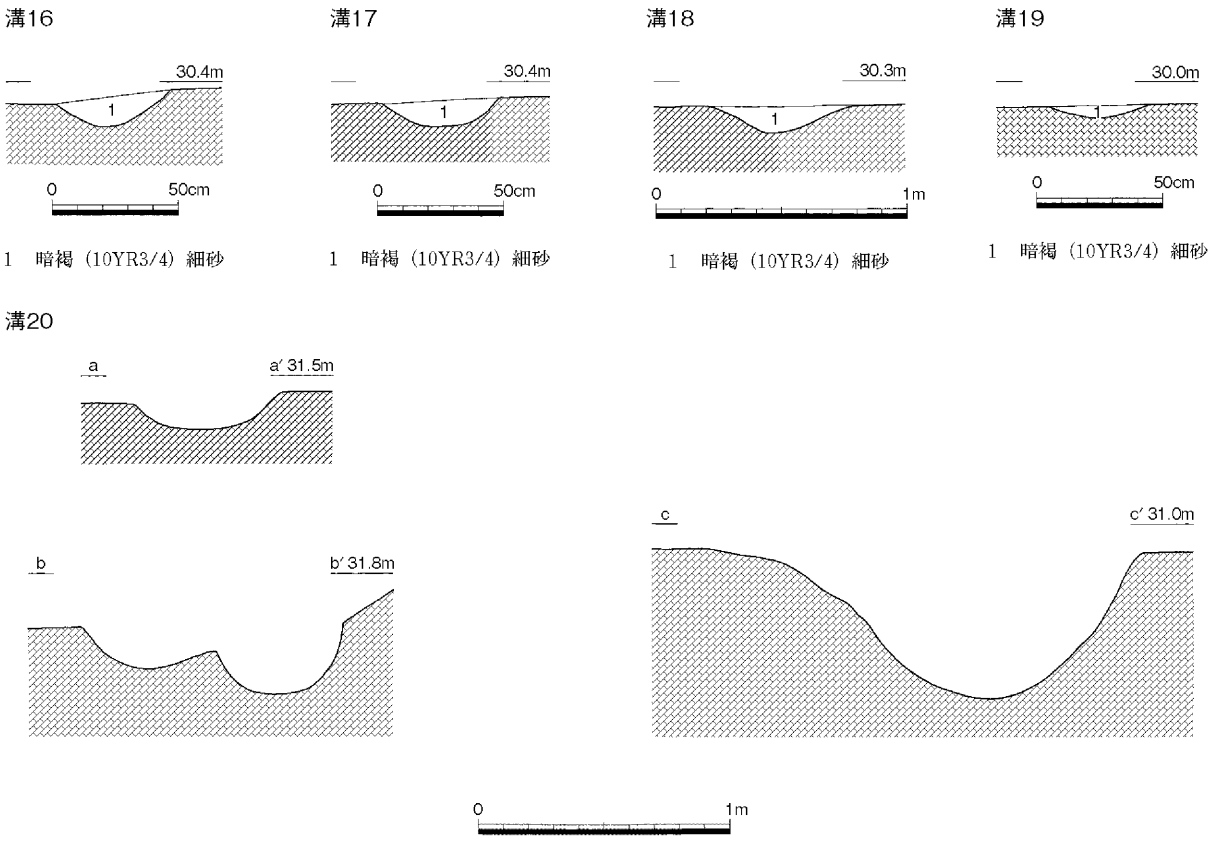
竪穴遺構１の南西側で検出した、ごく短い溝である。深さも３㎝と極めて浅く、削平された溝の一部のみが残存したものであろう。出土遺物はないが、検出状況から中世の溝と判断した。　(岡本)

溝20（第24・71図）

調査区北半で検出した溝である。近世以降に造成された法面の下端に沿う位置にあり、調査区の東西から中央に向かって流れ、中央で合流して南へと流下する。後述する溝21と同一遺構の可能性が高い。竪穴遺構１との新旧関係は、この溝のほうが新しい。埋土中から中世から近世に至る土器・陶磁器等が出土しているが、畑の造成段に伴うことからみて近世以降に掘削された耕作関連の溝であり、その終焉は近現代にまで降る可能性もある。　(岡本)

溝21（第24・72図）

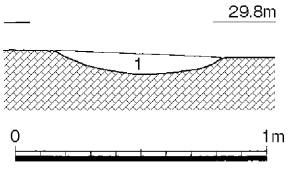
溝20の南延長上に位置する溝で、流下方向も同じであることから同一遺構の可能性が高い。南半部では続きが検出されていない。埋土中から中近世の土器・陶磁器などが出土している。Ｓ24は流紋岩製の砥石で、時期は明確でない。この溝も近世以降の耕作に関連する遺構と考えられる。　(岡本)



第71図　溝16～20（1/30）

溝22（第24・73図）

調査区北半の南端部で検出した。断面形は椀状で、壁面の一部に段がある。底面は西から東へ向かって緩く傾斜する。埋土中から中近世の土器・陶磁器類が出土した。近世以降の耕作に伴う溝であろう。　(岡本)

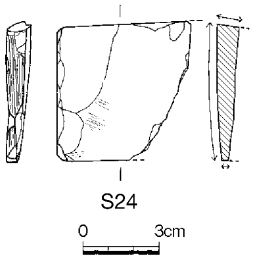


1　暗褐（7.5YR3/3）粗砂

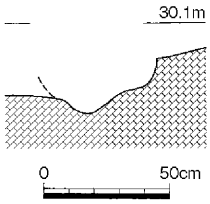
4　柱穴

調査区北半の溝20より南側の平坦面を中心に広範囲で柱穴を検出した（第24図、図版17－６）。このうち中世のものが54基、遺構との切りあいや位置関係からこの時期に属すると推定されるものが51基確認された。調査区北半では多くの柱穴が集中するものの、同じ範囲に弥生～古墳時代の柱穴が混在することや、後世の削平を受けていることもあり、建物や柱穴列の確認には至らなかった。なお、柱穴内から１～３個の角礫が検出されたものが７基あり、そのうち４基を図示している（第74図）。柱穴６は上部が削平を受けているが（図版17－７）、柱穴７～９はほぼ元の形状をとどめており、深さは40～50cmである。この角礫はいずれも底面付近にみられ、柱の底石として据え置かれた可能性もある。

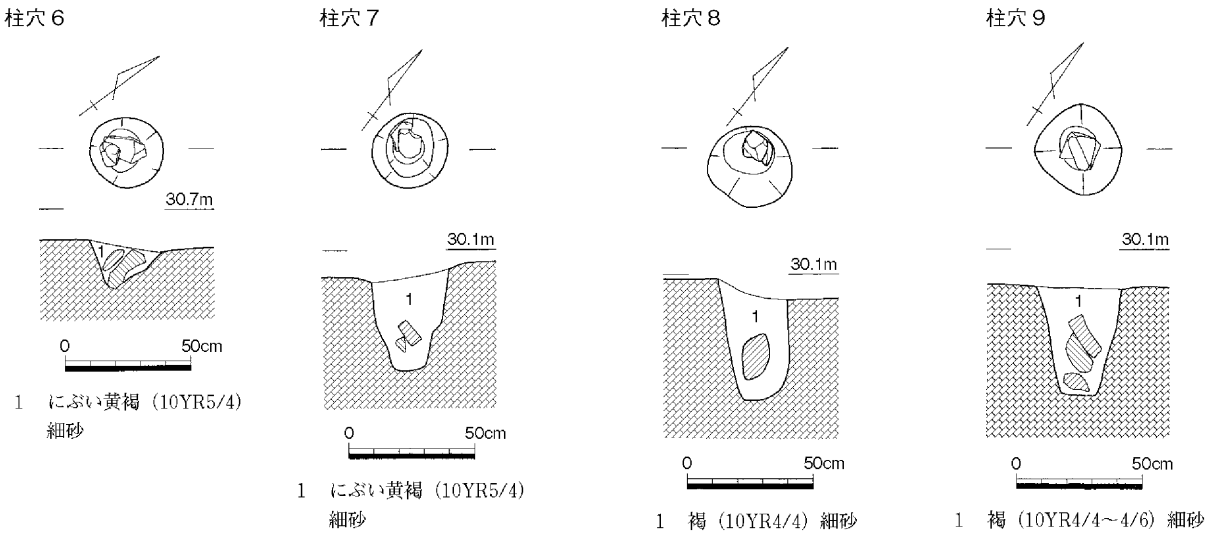
埋土中からは土器片が出土しているが小片が多く、復元可能なものを図示している。柱穴８・10・11からは土師質土器の高台付椀**242～244**、柱穴12からは椀**245**、柱穴13からは小皿**246**が出土した（図版23－２）。鉄器では鉄釘**Ｍ８**が柱穴14から出土している。　(中原)

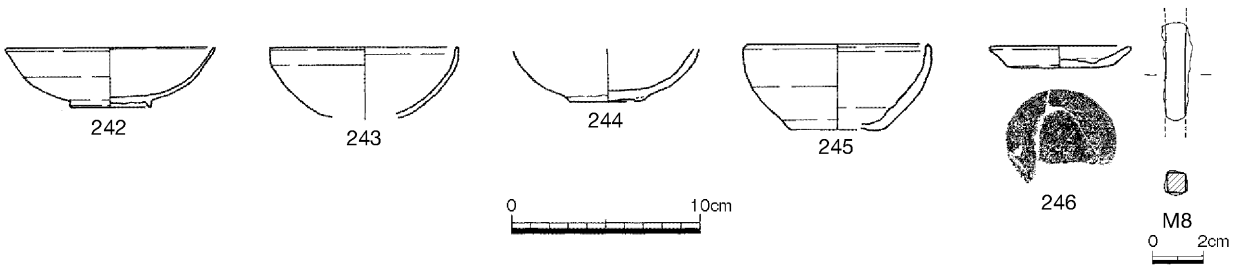


第72図　溝21（1/30）・出土遺物（1/3）



第73図　溝22（1/30）





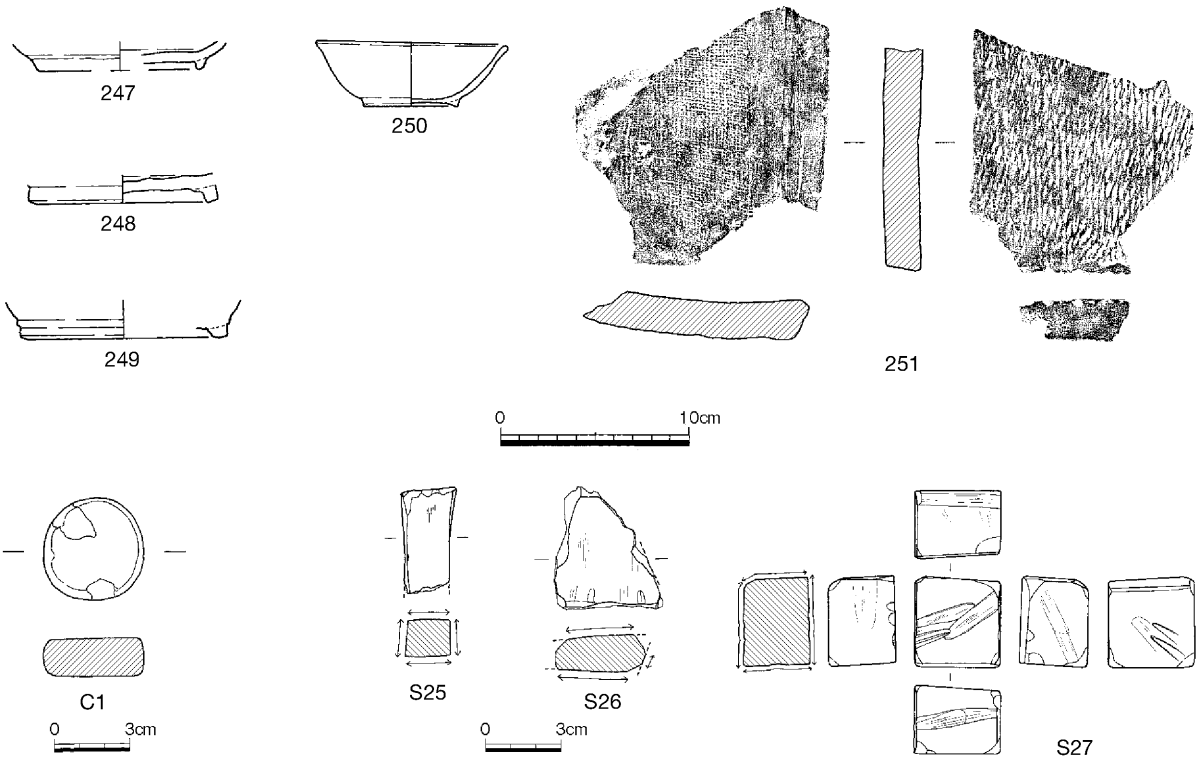
第74図　柱穴６～９（1/30）・柱穴８・10～14出土遺物（1/4・1/3）

５　遺構に伴わない遺物

古代以降の遺構に伴わない遺物では、土師器の高台付杯身247や須恵器の杯身248、壺249、土師質土器高台付椀250、平瓦251や土製円盤Ｃ１、砥石Ｓ25～Ｓ27などが出土している（第75図、図版23－２・24－２）。杯身247は高台を接合後にヨコナデを行う。杯身248、壺249は底部ヘラキリ・ヘラオコシの後に高台を接合するが、明瞭な接合痕がみられる。土師質土器の高台付椀250は口径10.0cm、高さ3.5cmを測り、高台部は形骸化している。平瓦251は凸面縄目タタキ、凹面布目痕が認められる。土製円盤Ｃ１は土器を打ち欠いて製品としている。砥石Ｓ25・Ｓ26は流紋岩製、砥石Ｓ27は砂岩か風化したホルンフェルス製である。この他、黒色土器・亀山焼・瓦質土器・白磁・青磁などの破片もわずかに出土していることから、古代から中世にかけての集落の存在が想起される。　（澤山）

第４節　小結

調査地全域にわたり後世の地形改変が著しく、調査結果がこの遺跡の実相を示しているとは限らない。しかしながら、石鏃の出土や近接する宮原遺跡の調査成果から、縄文時代中期末から後期初頭にかけて、当地は狩猟や採集活動の場として利用されていたと思われる。弥生時代中期後葉にも、狭小な平野部を臨む丘陵の斜面地といった立地環境ながら集落が営まれていることは注目される。特筆すべきは、古墳時代後期に調査地周辺で須恵器窯が操業されていたことであり、高梁川下流西部の窯業生産地として一翼を担ったと推測される。また、古代から中世にかけても集落規模の大小はありながらも、当地で人々が生活していたことが明らかになったことも貴重な成果といえる。　（澤山）



第75図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3）

第６章　自然科学的分野における鑑定・分析

第１節　奈良井遺跡における放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子

１　はじめに

岡山県浅口市金光町佐方に位置する奈良井遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料の情報、調製データは表２のとおりである。

試料は、柱穴１の埋土に含まれていた炭化材片１点（PLD-19999）と同じく土坑12の埋土から採取された炭化材片１点（PLD-20000）、土坑11の下層炭層から採取された炭化材片１点（PLD-21962）の計３点である。柱穴１の埋土には炭と焼土粒が含まれており、遺存状態の良好な炭化材片複数（いずれも１㎝以下の小片）を抽出し、断面を観察して年代測定に最も適した炭化材片を試料とした。柱穴１出土の試料は、最終形成年輪が残っていない部位不明の試料である。土坑12の試料は、やはり遺存状態の良好な炭化材片複数を抽出し、最終形成年輪が遺存する炭化材片の一つを試料とした。土坑11の試料も、最終形成年輪の遺存する炭化材片を埋土から抽出し、試料とした。

測定試料の情報、調製データは表２のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表２　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-19999	調査区：1区 遺構：柱穴１ 層位：埋土内	試料の種類：炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 採取位置：外側 -3年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-20000	調査区：1区 遺構：土坑12 層位：埋土内	試料の種類：炭化材(コナラ属クヌギ節) 試料の性状：最終形成年輪 採取位置：最終形成年輪 -1年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-21962	調査区：3区 遺構：土坑11 層位：下層炭層 試料 No.3	種類：炭化材(針葉樹？枝材) 試料の性状：最終形成年輪 状態 :dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)

３　結果

表３に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を、第76図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-19999 (柱穴１ 出土試料)	-26.88±0.14	2078±18	2080±20	148BC (6.1%) 141BC 112BC (62.1%) 51BC	166BC (95.4%) 46BC
PLD-20000 (土坑12 出土試料)	-28.27±0.15	610±17	610±15	1305AD (28.3%) 1325AD 1345AD (28.0%) 1364AD 1384AD (11.9%) 1393AD	1298AD (76.6%) 1370AD 1379AD (18.8%) 1400AD
PLD-21962 (土坑11 試料No.3)	-26.13±0.20	1464±22	1465±20	577AD (68.2%) 631AD	559AD (95.4%) 644AD

４　考察

各試料の暦年較正結果のうち、２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。なお、考古学による時期と暦年代との対応関係について、弥生時代は小林（2009）、古墳時代は赤塚（2009）を参照した。

柱穴１出土の炭化材片（PLD-19999）は、166-46 cal BC(95.4%)の暦年代範囲を示した。これは、紀元前２世紀前半～紀元前１世紀中頃で、弥生時代中期後半に相当する。遺跡では弥生時代中期後半の土器も出土しており、遺跡の時期との矛盾はない。ただし木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の柱穴１埋土中の試料（PLD-19999）は、最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受けている可能性、すなわち木材の枯死・伐採年代が紀元前２世紀前半～紀元前１世紀中頃よりもやや新しい時期であった可能性もある。

土坑12から出土した炭化材片（PLD-20000）は、1298-1370 cal AD(76.6%)および1379-1400 cal AD(18.8%)の暦年代範囲を示した。これは、おおむね14世紀代で中世（鎌倉時代～室町時代）に相当する。遺跡では14世紀代の遺物も出土しており、遺跡の時期との矛盾はないが、土坑12から出土しているのは古墳時代後期の遺物であり、遺構の時期については慎重に検討する必要がある。

土坑11から出土した炭化材片（PLD-21962）は、559-644 cal AD(95.4%)の暦年代範囲を示した。これは、６世紀中頃～７世紀中頃で古墳時代後期に相当する。遺構の時期については、他の出土遺物や周辺の状況なども合わせた慎重な検討が必要だが、今回の試料は下層の炭層から採取された炭化材であり、古墳時代後期あるいはこれに近い時期の遺構である可能性が高いと考えられる。

参考文献

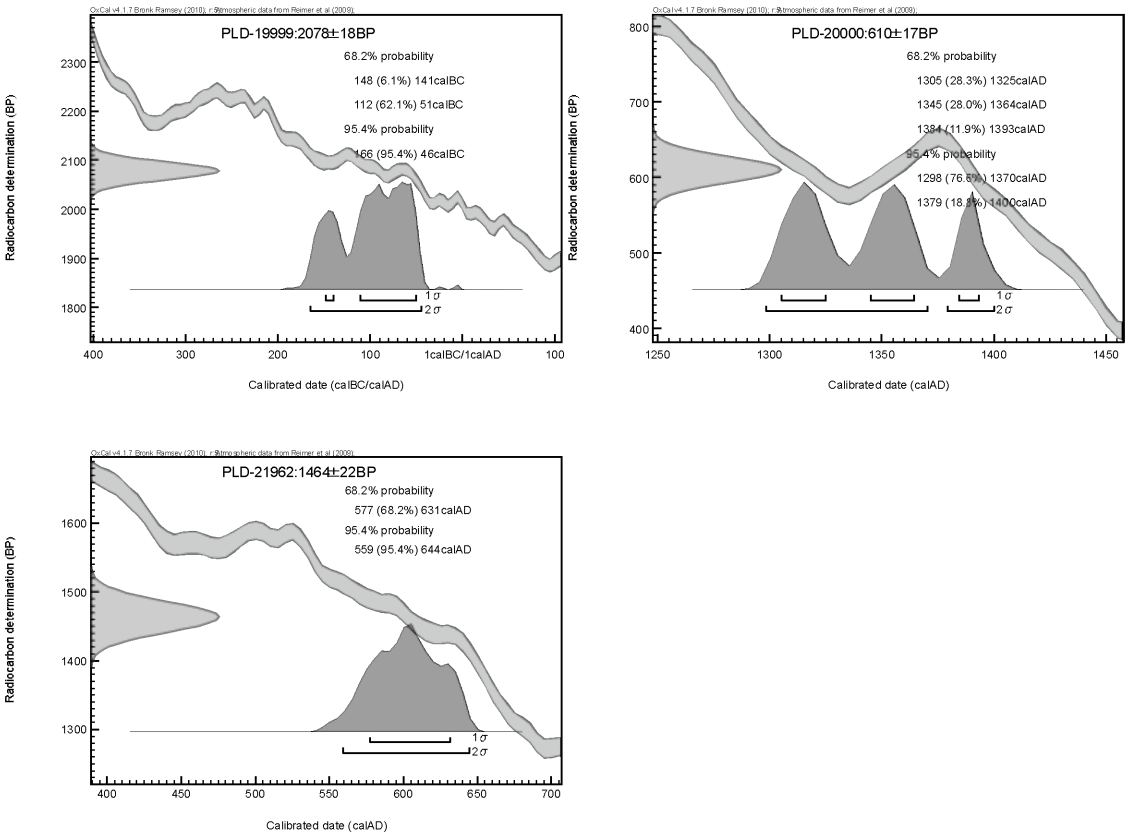
赤塚次郎（2009）弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代．日本文化財科学会第26回大会実行委員会編「日本文化財科学会第26回大会研究発表要旨集」：14-20，日本文化財科学会．

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：55-82，雄山閣．

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.


OxCal v4.1.7 Bronk Ramsey (2010); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2009);
PLD-19999:2078±18BP
68.2% probability
148 (6.1%) 141calBC
112 (62.1%) 51calBC
95.4% probability
166 (95.4%) 46calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calBC/calAD)
PLD-20000:610±17BP
68.2% probability
1305 (28.3%) 1325calAD
1345 (28.0%) 1364calAD
1384 (11.9%) 1393calAD
95.4% probability
1298 (76.6%) 1370calAD
1379 (18.8%) 1400calAD
Calibrated date (calAD)
PLD-21962:1464±22BP
68.2% probability
577 (68.2%) 631calAD
95.4% probability
559 (95.4%) 644calAD
Calibrated date (calAD)

第76図　暦年較正結果

第２節　奈良井遺跡における花粉分析

株式会社パレオ・ラボ　　森　将志

１　はじめに

岡山県浅口市金光町佐方に所在する奈良井遺跡において、古植生を調べるために花粉分析用の土壌試料が採取された。この試料を用いて行った花粉分析の結果と考察を以下に記す。

２　試料と分析方法

分析試料は、竪穴遺構１の東西断面（Ｈ－Ｈ′）（第64図）から３点、谷部土層の調査区北半南壁断面（Ｄ－Ｄ′）（第28図）から５点採取された計８点である（表４）。これらの試料について、以下の手順に従って花粉分析を行った。

試料（湿重約３～４g）を遠沈管にとり、10％の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46％のフッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡は、この残渣よりプレパラートを作製して行った。プレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子をすべて数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本を作製し、図版に載せた。図版に載せた分類群ごとの単体標本（PLC.522～527）は、パレオ・ラボに保管されている。

表４　分析試料一覧表

試料 No.	遺構	層位	時期	土質
1	竪穴遺構1（Ｈ－Ｈ′）	第3層	中世	オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト混じりの砂礫
2		第4層		オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土混じりの砂礫
3		第6層		オリーブ褐色（2.5Y4/6）粘土混じりの砂礫
4	谷部調査区北半南壁断面（Ｄ－Ｄ′）	第5層	中世	オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト混じりの砂礫
5		第6層	古墳時代後期～中世	褐色（10ＹＲ4/4）シルト混じりの砂礫
6		第9層	古墳時代後期	にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）粘土混じりの砂礫
7		第10層		にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト混じりの砂礫
8		第11層	古墳時代後期以前	にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト混じりの砂礫

※土質は株式会社パレオ・ラボによるものであり、調査時のものとは必ずしも一致していない。

３　分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉11、草本花粉10、形態分類を含むシダ植物胞子１の総計22である。これらの花粉・胞子の一覧表を表５に示した。表においてハイフン（―）で結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。なお、今回の分析試料は、いずれも十分な量の花粉化石を含んでいなかったため、分布図は示していない。

検鏡の結果、最も多くの花粉化石を含んでいた試料は、竪穴遺構１第４層採取試料である。なかでも、草本花粉の産出が多く、イネ科が51個、ソバ属が29個、ナデシコ科が11個である。その他の試料は花粉化石が産出していないか、産出していたとしても数種類の分類群がわずかに産出しているだけである。

４　考察

一般的に花粉は乾燥に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリア等によって分解され消失してしまう。今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれていないので、分析試料を採取した場所は乾燥した堆積環境であったと予測される。また、今回の分析試料の土層は、粘土やシルトなどの細粒子が含まれているものの、砂礫が主体であり、花粉粒子が堆積しにくい場所であった可能性も考えられる。いずれにしろ十分な量の花粉化石の産出が見られなかったため、今回の結果から当時の古植生について言及するのは難しい。ただし、竪穴遺構１第４層では栽培植物のソバ属花粉が産出草本花粉の26%を占めている。今回の分析試料にはもともと花粉化石が少ないうえに、ソバ花粉は栽培されている場所からわずかな距離をおくと極端に産出率が小さくなる点や、毎年ソバを裏作している水田の表土から産出する草本花粉と胞子を基数としてソバ花粉の百分率を求めると、大部分の地点で１%以下となる点（中村，1984）から考えると、竪穴遺構１第４層からのソバ属花粉の産出量は非常に多い。試料採取場所が竪穴遺構内であるため、この場所においてソバが栽培されていた可能性は低いように思われるが、竪穴遺構１を廃棄した後にソバ畑にしたか、中世において遺構周辺の谷部斜面などにソバ畑が広がっていた可能性が高い。または、ソバの実は殻の中に花粉が残りやすいという指摘もあり（金原，1997）、ソバの花や実そのものが竪穴遺構１中に存在した可能性も考えられる。

表５　産出花粉化石一覧表

学名	和名	竪穴遺構1 第3層	竪穴遺構1 第4層	竪穴遺構1 第6層	谷部 第5層	谷部 第6層	谷部 第9層	谷部 第10層	谷部 第11層
樹木									
Tsuga	ツガ属	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	1	-	-	-	1	-	-	-
Sciadopitys	コウヤマキ属	2	4	-	-	-	-	-	-
Cryptomeria	スギ属	2	-	1	-	-	1	-	-
Pterocarya-Juglans	サワグルミ属ークルミ属	-	-	-	-	-	-	1	-
Carpinus-Ostrya	クマシデ属ーアサダ属	-	1	1	-	-	-	-	-
Betula	カバノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	-	5	-	-	-	-	-	-
Ulmus-Zelkova	ニレ属ーケヤキ属	-	4	-	1	-	-	-	-
Celtis-Aphananthe	エノキ属ームクノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-
Mallotus	アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	1	-
草本									
Gramineae	イネ科	3	51	3	-	-	-	1	-
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	5	-	-	-	-	-	-
Fagopyrum	ソバ属	-	29	4	-	-	-	-	-
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科ーヒユ科	-	5	-	-	-	-	-	-
Caryophyllaceae	ナデシコ科	-	11	-	-	-	-	-	-
Thalictrum	カラマツソウ属	-	1	-	-	-	-	-	-
Brassicaceae	アブラナ科	-	3	-	-	-	-	-	-
Artemisia	ヨモギ属	-	3	1	-	-	-	-	-
Tubuliflorae	キク亜科	-	1	-	-	-	-	-	-
Liguliflorae	タンポポ亜科	-	1	-	-	-	-	-	-
シダ植物									
Monolete type spore	単条溝胞子	1	-	-	-	-	-	-	-
Arboreal pollen	樹木花粉	5	16	3	1	1	1	2	-
Nonarboreal pollen	草本花粉	4	110	8	-	-	-	1	-
Spores	シダ植物胞子	1	-	-	-	-	-	-	-
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	10	126	11	1	1	1	3	-
Unknown pollen	不明花粉	1	10	-	-	-	-	-	-

引用文献

金原正明（1997）自然科学的研究からみたトイレ文化．大田区立郷土博物館編「トイレの考古学」: 197-216，東京美術．

中村　純（1984）古代農耕とくに稲作の花粉分析学的研究．古文化財に関する保存科学と人文・自然科学－総括報告書－，581-602，同朋舎．

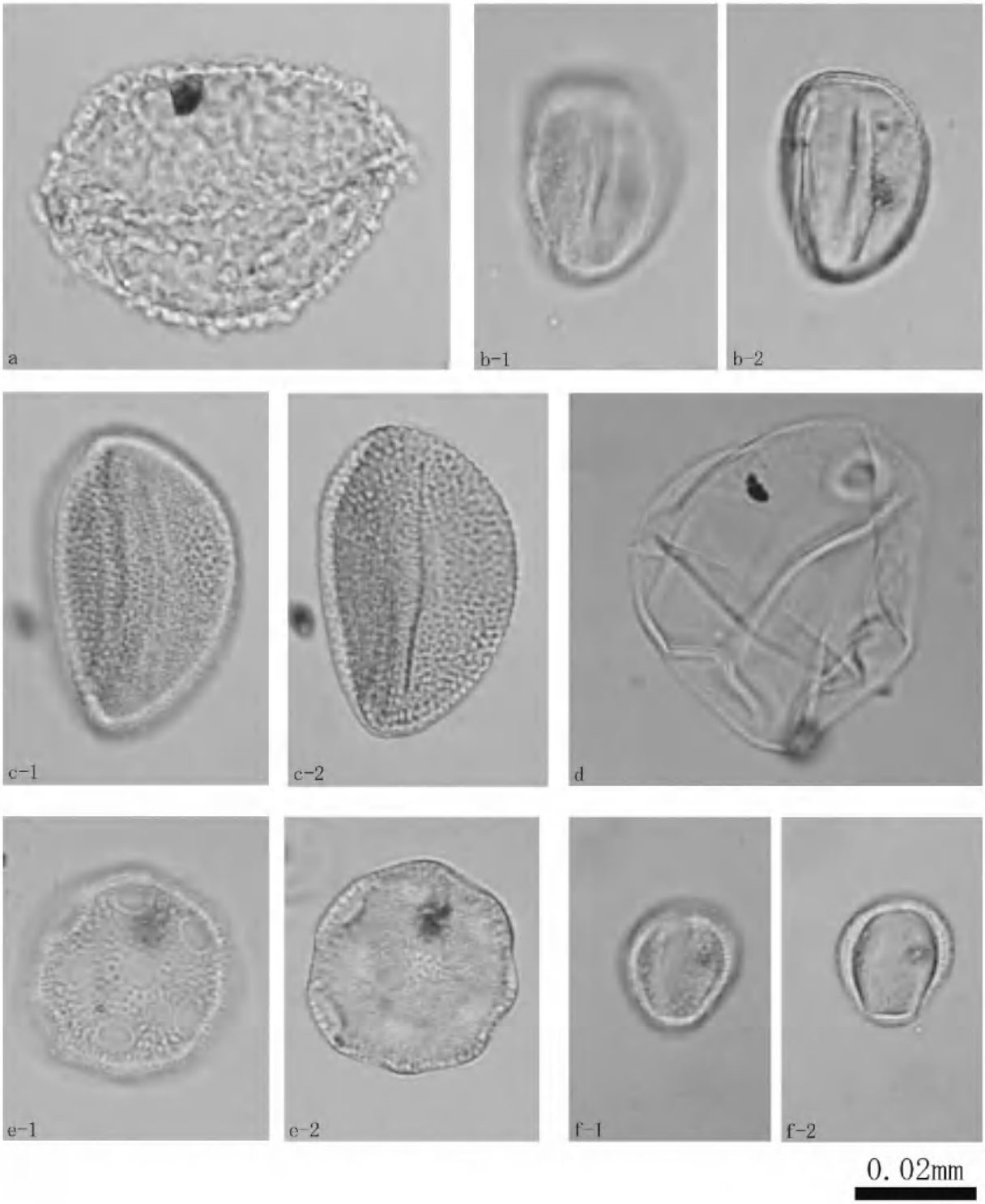


写真６　奈良井遺跡（竪穴遺構１第4層）から産出した花粉化石

a.コウヤマキ属（PLC.522）
b.コナラ属アカガシ亜属（PLC.523）
c.ソバ属（PLC.524）
d.イネ科（PLC.525）
e.ナデシコ科（PLC.526）
f.ヨモギ属（PLC.527）

第３節　奈良井古墳・奈良井遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学　　白石　純

１　はじめに

この分析では、奈良井古墳・奈良井遺跡出土の須恵器の胎土分析を実施し、窯跡は確認されていないが、出土須恵器の器種別の胎土的特徴などを調べることで、この地域の須恵器生産について検討することを目的としている。

２　分析方法と試料

分析は蛍光Ｘ線分析法で行い、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の差異について調べた。測定した成分（元素）は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zrの13成分である。なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：SEA5120A（エスアイアイ・ナノテクノロジー社製）を使用した。

測定条件：Ｘ線照射径2.5㎜、電流50～200mA、電圧50kV/15kV、測定時間300秒、測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：13成分の定量値は地質調査所の標準試料JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JR-1（流紋岩）、JB-1a（玄武岩）、JF-1（長石）の５個の試料を用いて検量線を作成し、定量値を算出した。

測定試料：分析試料は、須恵器表面の汚れを除去後（研磨機）、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製）で粉末（100～200メッシュ）にしたものを加圧成形機で約15ﾄﾝの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる成分を横軸と縦軸にとり、散布図を描き、各遺跡（窯跡）にまとまりがあるか検討した。

表６に奈良井古墳・奈良井遺跡出土須恵器の胎土分析値を示している。分析した試料は35点で、内訳は杯11点、高杯７点、脚部２点、甕１点、椀・鉢３点、横瓶・平瓶３点、壺・甕類７点、窯壁１点である。このうち奈良井古墳出土の試料が２点（試料番号１・２）含まれている。

３　蛍光Ｘ線分析結果について

この分析では測定した13成分のうち、分析試料に顕著な差がみられたのは、Ca、K、Tiの３成分であった。したがってK-Ca、Ti-Caの散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

第77図K-Caの散布図では、器種別の胎土を比較したが、器種に関係なく胎土はほぼ一つにまとまる傾向にあった。

第78図Ti-Ca散布図でもほぼ同じ結果となった。ただ、窯壁だけは、他の製品と胎土が異なっており、これは、これまでの分析でも、窯の粘土と製品の粘土は、胎土が異なっていることがわかっている。つまり、製品に使用される粘土は、それにあったように粘土を加工（すいひ・混和剤など）するものと考えられる。また、奈良井古墳出土の須恵器２点（杯身と短頸壺）も、ほかの奈良井遺跡出土須恵器とほぼ同じ分析値を示した。

第79図K-Ca、第80図Ti-Ca散布図では、県内の主要な窯跡との比較を行った。その結果、奈良井遺跡出土須恵器の胎土は、県西部に位置する上竹西の坊窯跡と胎土が類似していた。また上竹西の坊窯

跡とは、第81図K-Ti散布図で胎土が異なり分類が可能であった。

４　まとめ

胎土分析の結果、奈良井遺跡出土の須恵器は器種に関係なく一つにまとまり、胎土的には類似していることが推測された。また奈良井古墳出土の須恵器も奈良井遺跡のものと胎土がほぼ類似していることが推定された。

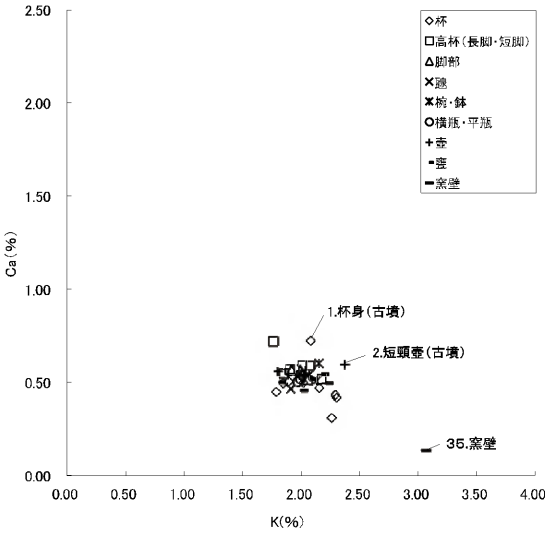
奈良井遺跡と岡山県内の窯跡群との比較では、県西部に位置する上竹西の坊窯跡と胎土が類似していた。しかし、詳細に検討すると奈良井遺跡のほうが上竹西の坊窯跡よりTi量が全体的に少ないことがわかった。

以上の分析結果より、新たな生産地遺跡のデータが蓄積され、今後の須恵器産地推定がより向上することが考えられる。

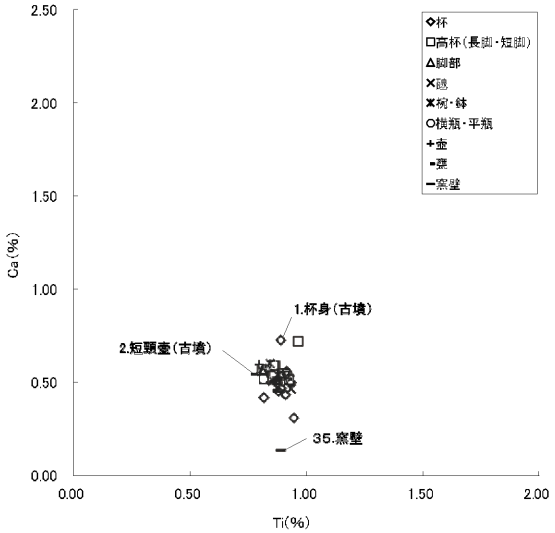
この胎土分析の機会を与えて頂いた澤山孝之氏をはじめ、岡山県古代吉備文化財センター、関係機関の方々にはお世話になった。記して感謝いたします。

表６　奈良井古墳・奈良井遺跡出土須恵器の胎土分析値
（Si ～ P:%、Rb ～ Zr:ppm）

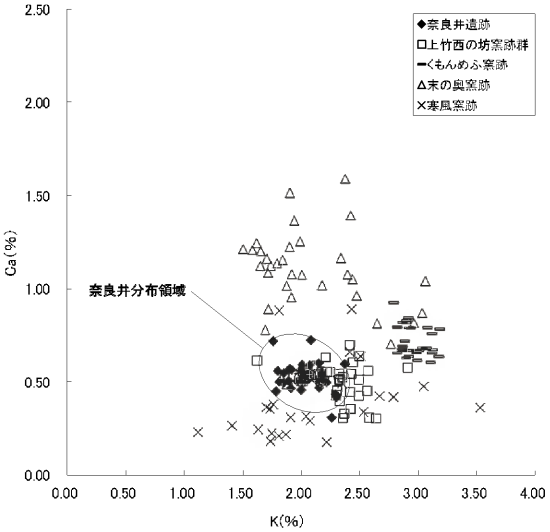
番号	掲載番号	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	67	杯身	72.19	0.89	17.37	6.07	0.02	0.51	0.72	0.00	2.09	0.05	67	113	252
2	70	短頸壺	77.12	0.80	15.53	3.12	0.02	0.23	0.59	0.00	2.37	0.06	57	54	245
3	154	杯身	71.31	0.82	17.49	6.96	0.02	0.54	0.42	0.00	2.30	0.05	39	75	269
4	144	杯身	70.15	0.89	18.70	6.40	0.01	1.05	0.47	0.01	2.16	0.06	62	35	229
5	146	杯身	70.73	0.93	18.64	6.56	0.00	0.42	0.50	0.02	2.02	0.04	73	73	196
6	142	杯身	70.29	0.88	19.63	6.53	0.03	0.22	0.49	0.00	1.85	0.03	34	17	263
7	143	杯身	70.87	0.91	17.78	7.20	0.03	0.32	0.43	0.01	2.29	0.04	69	79	224
8	80	杯蓋	71.14	0.87	18.70	6.50	0.04	0.24	0.50	0.01	1.90	0.04	61	83	257
9	81	杯蓋	71.66	0.92	17.67	6.41	0.03	0.26	0.56	0.37	2.00	0.04	66	93	257
10	79	杯蓋	71.46	0.92	18.46	6.27	0.00	0.21	0.54	0.01	2.02	0.04	59	53	228
11	137	杯蓋	70.92	0.88	18.88	6.76	0.01	0.21	0.45	0.01	1.79	0.03	48	69	263
12	136	杯蓋	75.68	0.95	15.14	5.39	0.02	0.16	0.31	0.00	2.26	0.04	56	47	234
13	83	高杯	69.41	0.97	18.68	7.41	0.04	0.68	0.72	0.20	1.76	0.05	67	126	223
14	85	高杯	71.00	0.81	18.47	6.64	0.02	0.24	0.57	0.24	1.90	0.03	52	52	229
15	87	高杯	72.90	0.86	17.22	6.00	0.02	0.20	0.59	0.01	2.08	0.04	51	68	246
16	163	高杯	70.87	0.82	17.75	6.88	0.02	0.43	0.52	0.40	2.18	0.04	42	88	279
17	159	高杯	71.50	0.87	18.15	6.40	0.00	0.35	0.59	0.00	2.01	0.06	52	68	253
18	167	高杯	70.61	0.93	18.62	6.44	0.01	0.67	0.51	0.00	2.06	0.05	53	77	242
19	170	高杯	68.84	0.91	20.07	6.91	0.05	0.72	0.55	0.00	1.85	0.05	41	89	270
20	179	脚部	71.16	0.81	18.41	6.50	0.01	0.44	0.56	0.00	1.99	0.05	61	52	257
21	180	脚部	70.58	0.82	18.51	6.76	0.02	0.42	0.56	0.26	1.92	0.04	51	48	254
22	88	鉢	72.15	0.88	17.84	5.95	0.01	0.41	0.54	0.03	2.07	0.04	61	41	273
23	177	脚付椀	71.03	0.85	18.45	6.43	0.03	0.33	0.60	0.03	2.15	0.03	79	81	254
24	89	捏鉢	71.29	0.86	18.46	6.36	0.00	0.28	0.51	0.00	2.13	0.04	80	92	246
25	90	甑	71.45	0.94	18.71	6.25	0.01	0.18	0.46	0.00	1.91	0.04	55	33	272
26	193	横瓶	72.64	0.82	17.39	6.35	0.00	0.16	0.52	0.02	1.99	0.03	58	95	231
27	103	横瓶	70.90	0.92	18.44	6.79	0.02	0.28	0.53	0.00	2.01	0.03	60	85	278
28	194	平瓶	73.04	0.89	17.33	5.93	0.00	0.20	0.50	0.01	1.97	0.05	58	89	258
29	92	壺	70.97	0.84	18.62	6.84	0.02	0.24	0.56	0.00	1.80	0.04	50	47	237
30	210	甕	72.70	0.76	17.06	5.91	0.00	0.36	0.54	0.36	2.18	0.03	56	66	275
31	208	甕	71.74	0.87	17.95	6.26	0.00	0.36	0.50	0.00	2.22	0.03	70	82	265
32	203	甕	72.68	0.86	17.38	6.18	0.02	0.32	0.45	0.00	2.00	0.04	48	51	264
33	200	甕	71.55	0.84	17.96	6.84	0.03	0.35	0.50	0.00	1.81	0.05	61	60	201
34	204	甕	71.82	0.87	17.82	6.18	0.02	0.40	0.52	0.17	2.07	0.05	80	61	224
35	－	窯壁	68.75	0.89	18.07	8.52	0.06	0.37	0.13	0.00	3.07	0.05	107	38	318



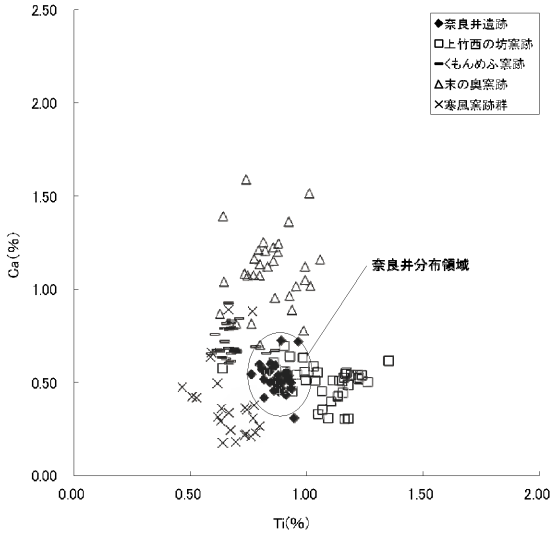
第77図　奈良井古墳･奈良井遺跡出土須恵器の器種別胎土比較①



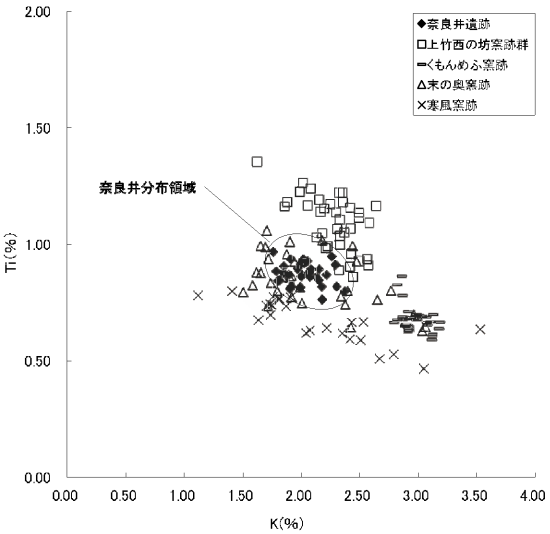
第78図　奈良井古墳･ 奈良井遺跡出土須恵器の器種別胎土比較②



第79図　奈良井古墳･ 奈良井遺跡と県内窯跡の胎土比較①



第80図　奈良井古墳･ 奈良井遺跡と県内窯窯跡の胎土比較②



第81図　奈良井古墳･ 奈良井遺跡と県内窯跡の胎土比較③

第７章　総括

第１節　奈良井古墳について

１　奈良井古墳の特徴と時期

現在、浅口市の旧金光町と旧鴨方町の市街地が広がる鴨方低地を取り巻く丘陵は、第82図(註1)に示すように、横穴式石室を有する後期古墳の密集地帯である。鴨方低地の北側では遙照山山地南麓の丘陵上、南側では寄島山地(註2)の北斜面上に多くの古墳が分布する。このうち、遙照山山地側の本庄川・鴨方川流域では、片山塚１～３号墳(註3)、阿坂古墳・宮の脇古墳(註4)、段林古墳(註5)、塚地古墳(註6)の調査が実施されている。それに対して、寄島山地側では今回の奈良井古墳が初めての調査事例であるが、墳丘及び石室の残存状態が劣悪で出土遺物も極めて少ないことから、墳丘の規模、石室の構造、築造時期や追葬の有無といった基本情報を得ることすら困難である。その制約を踏まえた上で、奈良井古墳の特徴や本地域における位置付けについて検討する。

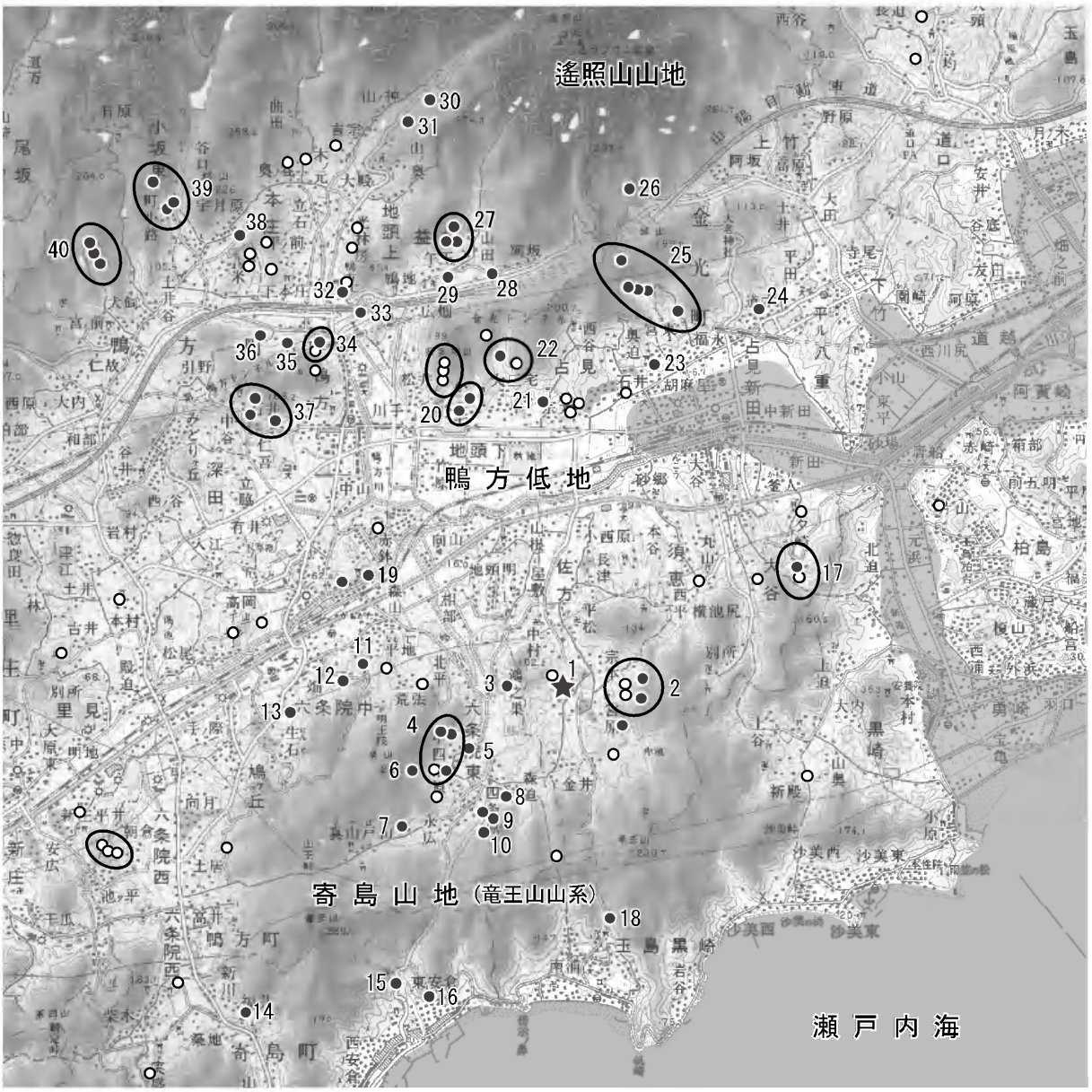
奈良井古墳の石室は、平面形が胴張り状を呈する無袖式と推測される。遙照山山地南麓から寄島山地にかけて分布する横穴式石室はすべて無袖式で、胴張りの形状も阿坂古墳や塚地古墳に類例がある。このため、奈良井古墳の石室の平面形は鴨方低地周辺においては一般的なものと考えられる。石材の積み方に着目すると、側壁の基底石が基本的に縦位である点は他の古墳と異なり、奈良井古墳の特徴であるといえる。石室の規模は、残存長が3.25ｍ、奥壁部での幅が1.15ｍ、最大幅が1.54ｍを測る。石室全長が不明であるため奥壁幅に着目し、既調査の古墳と比較してみると、宮の脇古墳は1.8ｍ、塚地古墳は1.6ｍ、段林古墳は1.1ｍ、阿坂古墳は1.3ｍ、片山塚２号墳は１ｍであり、奈良井古墳の数値は相対的に小規模な後三者に近い。未調査の古墳については、遺跡地図等に掲載された幅の数値は概数のうえ奥壁幅か最大幅かが判然としないが、単純に奥壁幅とみなして比較した場合、やはり奈良井古墳は比較的小規模な部類に入ると考えられる。

出土遺物はわずかで、古墳の築造時期や追葬の有無を検討するのは無理がある。その中で、須恵器の杯身２点（67・68）は、いずれも立ち上がりが短縮した陶邑編年のＴＫ209型式に相当するもので、67の復元口径は12.4㎝を測る。わずかな個体数による比較は困難だが、67の形態は杯の口径縮小が進行している阿坂古墳・塚地古墳より古く位置づけられ、段林古墳の新相段階の杯身に近いと思われる。この結果を、上記の諸古墳について従来指摘されている時系列(註5)に強いて対応させれば、奈良井古墳において埋葬行為が行われた時期は、段林古墳ないし宮の脇古墳のそれに近いものであろう。

なお、石室内からは８世紀代の土師器杯が１点出土している。須恵器の杯身からは１世紀ほどの年代差があり、奈良時代という時代背景を考慮すると通常の追葬に伴う遺物とは考えにくい。むしろ、一部地域でみられる８世紀代における古墳継続使用(註7)の一例とも考えられるが、奈良井古墳においてそれがどのような意図のもとになされたのかは不明である。

２　奈良井古墳の被葬者像

奈良井古墳が築かれているのは、金光町佐方地区を北流する佐方川西岸の丘陵上であり、墳丘上か



● 横穴式石室が確認されている古墳　　○ その他の古墳（横穴式石室以外・消滅・不明等）

１．**奈良井古墳**　２．宮原１～４号墳　３．鴻の巣古墳　４．古寺跡１～４号墳　５．天神山塚古墳
６．上原塚古墳　７．真山戸山下原塚古墳　８．向ヶ市塚古墳　９．永広塚古墳　10．軽部荒神塚古墳
11．山ノ神塚古墳　12．畑岩屋塚古墳　13．龍王池東古墳　14．福井古墳　15．殿山古墳　16．原古墳
17．夕崎１・２号墳　18．七社神社北古墳　19．畳屋古墳　20．小三宅１・２号墳　21．金地古墳
22．朝鮮谷１・２号墳　23．清明塚古墳　24．道木古墳　25．加賀谷１～５号墳　26．大石古墳
27．片山塚１～３号墳　**28．阿坂古墳**　29．向原古墳　**30．段林古墳**　**31．塚地古墳**　32．日吉塚古墳
33．宮の脇古墳　34．下名口１・２号墳　35．上名口古墳　36．上名口荒神塚古墳　37．石井１～３号墳
38．宇月原塚古墳　39．杉谷１～３号墳　40．犬飼木谷１～３号墳
※太字は発掘調査を実施した古墳

第82図　周辺古墳分布図（1/60,000）

（註）当時の推定海域については『金光町史』本編の記述や、同書に掲載されている近世初頭の絵図から類推したものであり、あくまでも一つの可能性を示したものである。特に鴨方低地における海岸線の位置は特定が難しい。ここでは、間壁忠彦「第二章原始・古代　第五節七・八世紀の金光町　二浅口郡の地勢」『金光町史』本編 金光町史編纂委員会 2003 の記述をもとに、当時の海岸線は現地表での標高３ｍ程度に相当すると考え、現在の浅口市立金光中学校の西あたりまで海が入り込んでいたと仮定した。しかし実際は遺跡の空白地帯が西に続くことから、海岸線がさらに奥深くまで入り込んでいたか、海面ではなくても居住に不適な低湿地が広がっていた可能性もある。

らは河川沿いの平野を一望することができる。この立地条件から、被葬者は佐方川沿いの平野を掌握した有力者であることは間違いない。隣接する奈良井遺跡ではほぼ同時期の須恵器窯の存在を裏付ける資料が得られており、経済基盤の一つとして窯業生産も当然考えられるところである。さらに、奈良井遺跡の古墳時代包含層から鉄滓が出土したことも注意される。時期の問題も含めて確証はないが、近辺での製鉄ないし鍛冶作業が想定でき、奈良井古墳の被葬者はこれらの生産活動をも掌握していたのかもしれない。一方、佐方川東岸にも複数の横穴式石室墳が分布しており、中でも奥壁幅1.9ｍの石室を有する宮原１号墳は、同じ平野を基盤としながらも西岸の奈良井古墳に比べて階層的に上位にあった被葬者像が想定できる。

次に、浅口市南部の寄島山地周辺地域において、奈良井古墳や宮原１号墳を含む佐方地区の古墳群がどのような位置を占めていたのかを検討してみたい。寄島山地とは、倉敷市玉島地区の南西端から、浅口市の南端部を通り笠岡市南部の御嶽山にまで続く海沿いの山地を指すが、ここでは第82図に示した倉敷市玉島黒崎から浅口市鴨方町六条院西付近までの竜王山山系を対象とする。この山系における横穴式石室墳の分布をみると、北側中央部を北流する堅川と佐方川の流域に顕著な集中が認められ、それ以外の古墳は山地周縁の丘陵末端部付近に単独ないし少数で立地する例が多い。中央の集中部は、南北に走る小丘陵によって東西に区分され、西半部が浅口市鴨方町六条院東地区、東半部が奈良井古墳を含む金光町佐方地区の古墳群である。

鴨方町六条院東地区の横穴式石室墳は、浅口市内最大規模の石室（石室残存長6.15ｍ、幅２ｍ）を有する天神山塚古墳を筆頭に、堅川流域の平野に接する丘陵上に10基前後が群在し、遙照山南麓の古墳群に比べても遜色がない。古墳の数や石室の規模を指標とすれば、当時の寄島山地周辺では鴨方町六条院東地区の集団が最大勢力を誇り、隣接する金光町佐方地区はそれに次ぐ地位と考えられる。

この両地区は、寄島山地内にあっては比較的大規模な平野を抱え、相対的に高い農業生産力に恵まれているほか、金光町佐方地区については須恵器生産という産業を有していたことが、重要な経済的基盤であったと想定できる。また、両地区ともその地理的位置から、遙照山山地南縁部とは鴨方低地や周辺の低丘陵を介して、海浜部とは峠道を介しての交流が可能であり、結果的に寄島山地における中心部の役割を担うことになったのも自然の流れといえる。奈良井古墳の被葬者もまた、以上のような地域の特性を基盤とした首長の一人であったと考えられる。　(岡本)

註

（１）第82図は、『改訂　岡山県遺跡地図＜第４分冊　井笠地区＞』岡山県教育委員会 2003 と『改訂　岡山県遺跡地図＜第５分冊　倉敷地区＞』岡山県教育委員会 2003 のデータに基づいて作成した。掲載した古墳の大部分は後期のものと思われるが、横穴式石室が確認されない古墳については一律に「その他の古墳」として扱ったため、中期以前の古墳が含まれる可能性がある。

（２）鴨方低地、遙照山山地、寄島山地の用語は、齋藤伸英「第一章金光町の風土　第三節各地の自然環境」『金光町史』本編 金光町史編纂委員会 2003 による。

（３）「〔４〕鴨方町片山古墳群の発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会 1980

（４）「宮の脇古墳・阿坂古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 岡山県教育委員会 1981

（５）「段林遺跡・段林古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』132 岡山県教育委員会 1998

（６）「道面遺跡・塚地古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』147 岡山県教育委員会 1999

（７）間壁葭子「８世紀における古墳継続使用について」『倉敷考古館研究集報』第17号 倉敷考古館 1982

第２節　奈良井遺跡の須恵器について

１　はじめに

奈良井遺跡の谷部から出土した須恵器片や窯壁片は、その周辺で須恵器生産が行われていたことを裏付ける資料である。本節では資料の一括性に問題点はあるものの、この谷部の須恵器を中心に発掘調査で検出された遺構や包含層中から出土した資料も含めて、想定される須恵器窯の操業時期について検討してみる。対象とした器種は資料数にまとまりがあり、法量や調整手法、形態が把握しやすい残存率が６分の１以上で大きな歪みがない杯蓋44点と杯身52点を取り扱った。ただし、検討項目によっては欠損部位の関係で分析点数が異なっている。

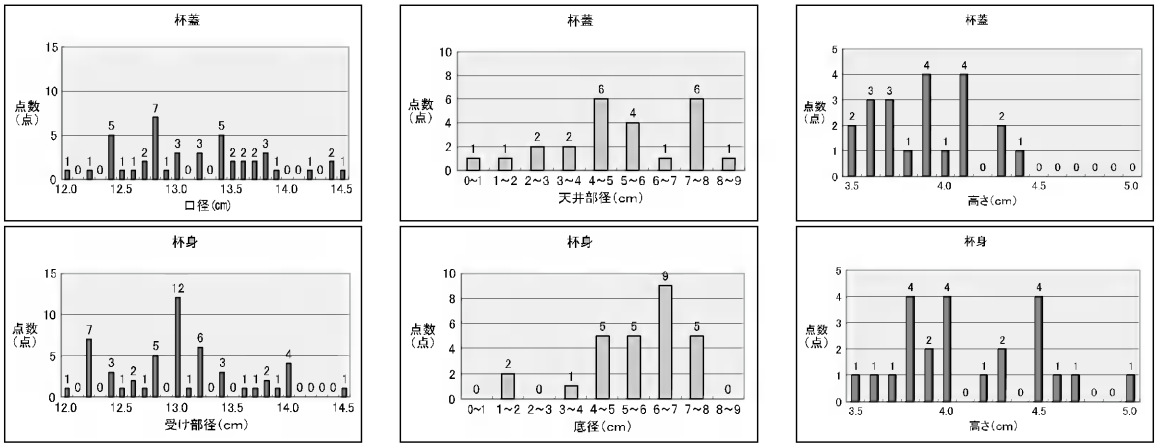
２　法量について

ここでは杯蓋と杯身の各法量の傾向と相関性をみてみる（第83図）。まず、杯蓋44点のうち口径は12.0～14.5cmに収まり、12.8cmが最も多く７点（16％）、12.4cmと13.4cmが各５点（11％）と続く。平均は13.2cmである。天井部径は24点のうち0.0～8.6cmに収まり、4.0～5.0cmと7.0～8.0cmが各６点（25％）と最も多い。器高は21点のうち3.5～4.4cmに収まり、3.9cm、4.1cmが最も多く各４点（19％）であり、平均は3.9cmである。次に、杯身52点のうち受け部径は12.0～14.5cmに収まり、13.0cmが最も多く12点（23％）、12.2cmが７点（13％）と続く。平均は13.0cmである。底径は27点のうち1.2～7.8cmに収まり、6.0～7.0cmが９点（33％）と最も多い。器高は23点のうち3.5cm～5.0cmに収まり、3.8cm、4.0cm、4.5cmが最も多く各４点（17％）で、平均は4.1cmである。

以上の結果から、杯蓋の口径と杯身の受け部径は12.8～13.4cmを中心に、12.2～12.4cmと13.8～14.0cm前後でまとまり、焼け歪みの可能性もあるが14.0cmを越えるものも存在している。なお、時間的変遷に伴う口径の縮小化を考慮すると、12.0cm未満の資料がみられないことは留意すべきであろう。

杯蓋の天井部径をみると、天井部の形状が丸みを帯びた資料の他にも水平なものが認められる。一方、杯身の底部径をみると、丸底の形状はわずかであり平底状を呈するものが多いことが読み取れる。杯蓋と杯身の器高はいずれも平均4.0cm前後でまとまるが、杯身が杯蓋より個体差が大きいようである。

次に、杯蓋の口径と器高との関係をみると、あまり強い相関性は認められず、径の変化に器高があまり影響を受けていないようである。一方、杯身の受け部径と器高では弱い負の相関性を示し、径の広いものは器高が低く扁平な形状を呈しているといえる（第84図）。



第83図　杯蓋・杯身法量点数分布図

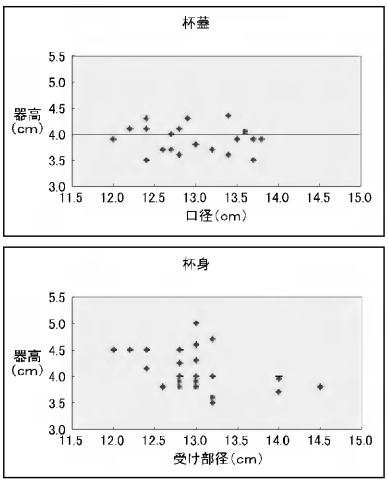
３　調整手法と形態について

ここではまず、杯蓋の天井部と杯身の底部に認められる調整手法についてみてみる。従来、これらの部位は回転ヘラケズリからヘラキリ、ヘラオコシ無調整あるいはナデといった調整の省略化が指摘されている。これを踏まえて対象資料をみると、おおよそ６種類の調整手法が認められる（図版24－１）。すなわち、

Ａ調整…全体に回転ヘラケズリを行い、中央のヘラオコシ痕が消える（杯蓋77・杯身148）。

Ｂ調整…縁辺のみ回転ヘラケズリを行い、中央のヘラオコシ痕が残る（杯身82・147）。

Ｃ調整…縁辺のみ非回転ヘラケズリを行い、中央のヘラオコシ痕が残る（杯身145・151）。



第84図　杯蓋・杯身法量相関図

Ｄ調整…全体に非回転ヘラケズリを行い、中央のヘラオコシ痕が消える（杯蓋138、杯身141・153）。

Ｅ調整…ナデ仕上げを行い、中央のヘラオコシ痕が消えるか薄く残る（杯身123・150）。

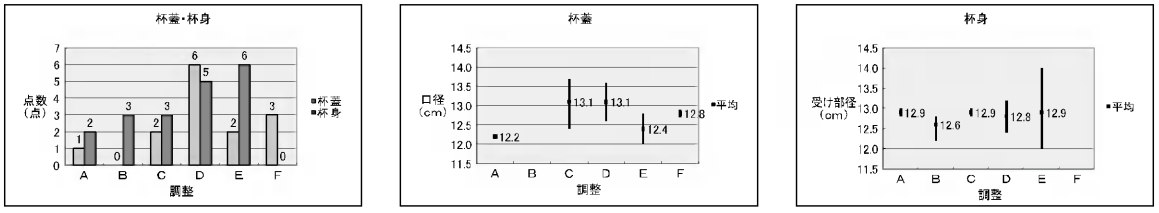
Ｆ調整…無調整のためヘラキリ、ヘラオコシ痕がそのまま残る（杯蓋130・131）。

といったものである。ここでいう非回転ヘラケズリとは特に回転台を必要とせず、土器を手に持って行うことができる調整を指す。この６種類の調整手法では、Ａ・Ｂ調整とＣ～Ｆ調整の「回転台使用の有無」、Ａ～Ｄ調整とＥ・Ｆ調整の「ヘラ状工具使用の有無」、Ａ～Ｅ調整とＦ調整の「調整の有無」が手法の画期とみてとれる。ただし、Ｅ調整のナデ仕上げはヘラ状工具による弱いケズリや粘土塊の付着除去、器面の凹凸を整える局所的なナデ痕跡の評価により、他調整との見極めが難しい面がある。

調整部位が良好な状態の資料はわずかであるが、調整手法の傾向と法量の関係をみてみる（第85図）。杯蓋14点のうちではＤ調整が最も多く６点（43％）で、杯身19点ではＥ調整が最も多く６点（32％）である。また、杯蓋、杯身ともに回転台を使用するＡ・Ｂ調整の割合は高くないようである。一方、調整手法と杯蓋の口径や杯身の受け部径との関係をみると、各調整手法とも径に幅が認められることから、これらの手法の違いは法量による規制ではなく須恵器工人や窯場の技量差ともみてとれる。

次に、杯蓋と杯身の形態をみてみる。先述のように杯蓋は天井部がわずかに丸みをもつか水平で、口縁部内面にかえりを持たない形態である。一方、杯身は底部が杯蓋の天井部より扁平な形態をもち、受け部にはたちあがり部を有する。こうした特徴は奈良文化財研究所の分類の杯Ｈに相当し、出土資料はすべてこの形態であった。言いかえれば、杯蓋に宝珠状のつまみをもち口縁部の内面にかえりを有する杯Ｇは認められず、このことは須恵器生産の時期や特徴を検討する上で留意すべき事項である。

この他の特徴は杯蓋118・138～140のように天井部が平坦で、強いヨコナデによって口縁部が大きく外反するものや杯身150・153のようにたちあがり部が受け部からわずかしか出ないものがみられる点である。これらは杯Ｈで行う従来の杯蓋と杯身の合わせ口の方法の変質や形骸化を示す例ともい



第85図　杯蓋・杯身調整手法点数・法量分布

え、この時期の杯の使用方法を考える上において重要と思われる。

４　想定される須恵器窯の操業時期と他器種の特徴

以上述べてきたように、今回の発掘調査で出土した杯蓋と杯身の法量や調整手法、形態を中心に検討を行ってその特徴を明らかにした。この結果を踏まえて、奈良井遺跡と同じ備中地域南部の倉敷市玉島陶に所在する寒田窯跡群４号窯の発掘調査の成果を基にまとめられた編年案と対比してみる(註1)。

この案では寒田４・５号窯出土の杯蓋を中心に７分類を行い、編年的な位置付けを行っている。出土資料をみると、杯蓋の口径が14.5㎝を中心とする１類、13.5㎝を中心とする２類、12.5㎝を中心として天井部に回転ヘラケズリ調整を行っている３類、また、そのヘラケズリを省略している４類などが対応できると思われる。注目すべきは、杯蓋の口径が12.0㎝前後に集まる５類であり、これに伴って杯Ｇの蓋が出現するとされる。また、この編年案では１・２類は陶邑編年TK209式の範疇、３～５類はTK209～217式の間に該当して、１・２類を寒田Ⅰ期、３～５類を寒田Ⅱ期と呼称している。これにしたがえば、出土資料は寒田Ⅰ期～Ⅱ期に比定される。また、７世紀を中心に須恵器を分析した平井泰男の編年案(註2)によれば、備中Ⅰ～Ⅲ期（想定暦年代：７世紀第１四半期）と対応できると考えられ、未確認である須恵器窯はこの時期を中心に操業されたと想定される。加えて、溝９を切る土坑11から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の暦年代範囲が577-631 cal AD(68.2%)、また559-644 cal AD(95.4%)を示すことは、須恵器窯の操業時期の下限を考える上で重要な分析結果といえる。

次に出土資料の杯蓋と杯身を除く他器種の特徴を概観してみる。高杯は長脚と短脚のものがあるが、寒田４号窯の灰原からの出土状況によれば(註1)、両者は同期に生産された可能性もある。長脚高杯は無蓋が主体であるが有蓋も少量認められ、透かし孔は二・三・四方のものと無孔の脚部もみられる。椀・鉢類には多様な形態が認められ、壺類を含めて沈線間に斜文・斜格子文を施した文様は出土資料の特徴の１つといえる。甕類の大型品には口縁部に明瞭な文様帯をもつ形態とそこから文様帯や施文が省略化したものがみられる。なお、出土資料の各器種の口縁部片（2,020点）の残存率に基づく個体数は155個体と推定され、その割合は杯身37.2％（754点）、杯蓋33.4％（710点）、甕9.2％（285点）、高杯7.6％（95点）、椀・鉢類6.7％（124点）、横瓶・壺類3.1％（37点）、平瓶・提瓶類2.9％（15点）であった。

５　おわりに

本節では想定される須恵器窯の操業時期について検討を進めたが、その一方で課題も明らかになった。例えば、杯蓋や杯身の調整手法の省略化が、法量の縮小化だけでは十分説明できない点である。これには杯Ｈの調整手法が口径などに規定されないとの指摘(註2)は重要である。また、杯Ｈは複数の口径が共伴するために年代決定の根拠にならないとの指摘(註3)も考慮すべきである。加えて、未検出であった杯Ｇの編年的な解釈は、周辺地域の出土資料を再検討する必要があろう。（澤山）

註

（1）「寒田窯跡群４号」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集 倉敷埋蔵文化財センター 2003

（2）平井泰男「岡山県における須恵器の様相―７世紀を中心に―」『岡山県立博物館研究報告』第31号 岡山県立博物館 2011

（3）佐藤　隆「難波地域の新資料からみた７世紀の須恵器編年―陶邑窯跡編年の再構築に向けて―」『大阪歴史博物館研究紀要』第２号 財団法人大阪市文化財協会 2003

遺　構　一　覧　表

遺　物　観　察　表

遺構名称新旧対照表

遺構一覧表・遺物観察表凡例

遺構一覧表（表７・11）

・「平面形」の「(　)」は、推定される形状を表した。
・「断面形」は、上方に広がる壁面に対する底面の形態を「平底」「凹底」に大別して示した。
・「規模」等の数値は調査により得られた残存値であり、「-」は、計測不能もしくは未確認・未検出を示した。

遺物観察表（表８・10・12）

土器

・「計測値」について、須恵器杯蓋の天井部径は「底径」、杯身の受け部径は「口径」欄に示した。
・「計測値」について、口径、底径の「(　)」は残存率が1/6以下を示し、器高の「(　)」は残存値を表した。また、「-」は計測不能を示した。
・「色調（外面）」は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。
・「胎土・鉱物」について、胎土に含まれる粒径が3.0㎜以上を細礫、2.0～3.0㎜を砂礫、1.0～2.0㎜を細砂、0.5～1.0㎜を微砂、0.5㎜未満を精良と示した。鉱物は石英を「石」、長石を「長」、雲母を「雲」、角閃石を「角」とし、鉱物名称不詳の赤色土粒を「赤」、黒色土粒を「黒」として表した。なお、これらの識別はすべて肉眼観察によるものである。
・「残存状況」は、主要計測部位である口縁部を「口」、胴部を「胴」、底部を「底」、「脚部」を「脚」などと表わし、状態を分数あるいは小破片は「片」と示した。また、復元も含めて全体の残存状況が高いものは、「完形」、「ほぼ完形」などと表した。

土製品

・「計測値」、「重量」は、現状の最大値を示した。「色調（外面）」、「胎土・鉱物」、「残存状況」の識別基準は、土器観察表に準じる。

石器・鉄器

・「計測値」、「重量」は、現状の最大値を示した。

表７　宮原遺跡遺構一覧表

土坑

遺構名	平面形	断面形	規模（cm）			底面海抜高(m)	時期	備考
			長径	短径	深さ			
土坑１	不整円形	平底	111	102	21	20.90	近世後期	

表８　宮原遺跡遺物観察表

土器

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土・鉱物	焼成	残存状況	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高					外面	内面
1	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.0)	にぶい黄橙（10YR6/4）	砂礫：長・石・赤	良好	口片	水平口縁（丸）　離位棒状沈線　ミガキ	ナデ
2	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.3)	灰オリーブ（5Y6/2）	細礫：長	やや不良	口片	波状口縁（面取）　沈線　刺突文２個　平滑ナデ	平滑ナデ
3	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.5)	灰白（2.5Y7/1）	細砂：長・石・赤	良好	口片	水平口縁（丸）　沈線　ミガキ	ナデ
4	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.8)	黄灰（2.5Y6/1）	細礫：長・石・雲・黒	良好	口片	波状口縁（丸）　沈線　ミガキ　摩滅	ナデ
5	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.4)	にぶい黄橙（10YR7/3）	細礫：長・雲・赤	良好	口片	水平口縁？（面取）　沈線　巻貝条痕	平滑ナデ
6	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.8)	にぶい黄橙（10YR6/3）	細砂：長・石・赤・角	良好	口片	水平口縁（丸）　沈線　ミガキ	ナデ
7	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.5)	にぶい黄橙（10YR7/2）	砂礫：長・石	良好	口片	水平口縁（面取）　沈線　摩滅	ナデ
8	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.5)	オリーブ黒（5Y3/1）	砂礫：長・石	良好	口片	波状口縁（丸）沈線　摩滅	ナデ
9	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.3)	にぶい黄橙（10YR7/2）	砂礫：長・石・雲・赤	良好	口片	水平口縁（面取・刻目）　沈線　摩滅	摩滅
10	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.6)	灰黄（5Y7/2）	砂礫：長・石・雲・黒	良好	口片	波状口縁（面取）　沈線　ミガキ	ナデ
11	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.6)	にぶい黄橙（10YR7/4）	砂礫：長・雲・赤	良好	口片	波状口縁（面取・刻目）沈線　摩滅	平滑ナデ
12	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.5)	灰黄褐（10YR5/2）	細砂：長・石	良好	口片	水平口縁（面取）　沈線　ナデ	平滑ナデ
13	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.4)	灰黄（2.5Y7/2）	細砂：長・石・雲・黒	良好	胴片	二枚貝条痕　沈線	摩滅
14	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.5)	灰白（2.5Y8/2）	細礫：長・石・赤	良好	胴片	貼付突帯文　沈線　ナデ	ナデ
15	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.3)	灰黄（2.5Y7/2）	細礫：長・石	良好	胴片	沈線　摩滅	平滑ナデ
16	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.4)	浅黄橙（10YR8/3）	砂礫：長・石	良好	胴片	沈線　ミガキ	平滑ナデ
17	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.4)	灰黄（2.5Y7/2）	細砂：長・石・赤・黒	良好	胴片	二枚貝条痕？　沈線　摩滅	摩滅
18	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.1)	にぶい黄橙（10YR7/2）	細礫：長・石・雲	良好	胴片	沈線　ミガキ	ナデ
19	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.3)	灰黄（2.5Y7/2）	砂礫：長・石	良好	胴片	沈線　ナデ	摩滅
20	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.1)	灰黄（2.5Y6/2）	砂礫：長・石・雲	良好	胴片	沈線　ナデ	ナデ
21	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.9)	灰黄（2.5Y7/2）	砂礫：長・石	良好	胴片	沈線　ミガキ	摩滅
22	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.4)	にぶい黄橙（10YR7/2）	砂礫：長・石・雲・赤	良好	胴片	沈線　ナデ　摩滅	ナデ
23	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.8)	灰黄（2.5Y7/2）	細礫：長・石・黒	良好	口片	水平口縁（面取）　ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	平滑ナデ
24	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.5)	にぶい黄橙（10YR7/3）	細砂：長・石	良好	口片	水平口縁（面取気味）　ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	平滑ナデ
25	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.0)	にぶい黄橙（10YR7/2）	砂礫：長・石	良好	口片	水平口縁（面取）　ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	平滑ナデ
26	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.4)	灰黄（2.5Y6/2）	細砂：長	良好	口片	波状口縁（面取）　ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	ナデ
27	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.3)	灰黄（2.5Y6/2）	砂礫：長・石	良好	口片	波状口縁（面取）　ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	平滑ナデ
28	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.2)	にぶい黄橙（10YR7/3）	砂礫：長・雲	良好	口片	波状口縁（丸・肥厚）　ＬＲ縄文？　沈線　ミガキ	ナデ
29	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.2)	灰黄（2.5Y6/2）	細砂：長・石・雲・黒	良好	口片	波状口縁（面取）　ＬＲ縄文？　沈線　摩滅	平滑ナデ
30	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.8)	灰黄（2.5Y6/2）	細砂：長・石・角	良好	胴片	ＬＲ縄文　沈線　ナデ	平滑ナデ
31	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.1)	灰白（2.5Y8/2）	細砂：長・石・赤	良好	胴片	ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	ナデ
32	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.4)	にぶい黄橙（10YR6/3）	細砂：長・石・雲	良好	胴片	ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	ナデ
33	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.5)	灰黄（2.5Y6/2）	細砂：長・石・赤・黒	良好	胴片	ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	摩滅
34	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.4)	にぶい黄橙（10YR6/3）	細砂：長・石	良好	胴片	ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	ナデ
35	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.7)	灰黄褐（10YR5/2）	砂礫：長・石・雲	良好	胴片	ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	ナデ
36	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.3)	灰黄（2.5Y7/2）	細礫：長・石	良好	胴片	ＬＲ縄文　沈線　ミガキ	ナデ
37	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.8)	暗灰黄（2.5Y4/2）	細砂：長	良好	胴片	撚縄文　沈線　ミガキ	ナデ
38	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.9)	にぶい黄橙（10YR6/3）	細礫：長・石・雲	良好	胴片	撚縄文　沈線　ミガキ	ナデ

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土・鉱物	焼成	残存状況	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高					外面	内面
39	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.9)	褐灰（10YR5/1）	砂礫・長・雲・赤	良好	胴片	擬縄文　沈線	ナデ
40	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(2.3)	灰黄褐（10YR6/2）	細礫・長・石・雲	良好	口片	水平口縁（丸）　口縁部下端肥厚　ナデ	ナデ
41	河道１	縄文土器	深鉢？	－	－	(2.7)	灰白（5Y7/1）	砂礫・長・石・黒	良好	口片	水平口縁（丸）　口縁部下端肥厚　ナデ	ナデ
42	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.0)	浅黄橙（7.5YR8/3）	細礫・長・石・赤	良好	口片	水平口縁（丸）　口縁部下端肥厚　ナデ	ナデ
43	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(1.4)	灰黄褐（10YR5/2）	細礫・長・石・雲	良好	口片	水平口縁（面取・刻目）　ナデ	ナデ
44	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.4)	にぶい黄橙（10YR7/4）	細礫・長・石	良好	口片	水平口縁（丸）　ナデ	ナデ
45	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.3)	灰黄（2.5Y6/2）	細礫・長・石	良好	口片	水平口縁（丸）　巻貝条痕	ナデ
46	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.1)	褐灰（10YR4/1）	砂礫・長・雲・赤	良好	口片	波状口縁（面取）　巻貝条痕	ナデ
47	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(3.3)	灰黄（2.5Y6/2）	砂礫・長・石・雲	良好	口片	水平口縁（丸）　巻貝条痕	ナデ
48	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(4.0)	灰黄（2.5Y7/2）	細礫・長・石	良好	口片	水平口縁（丸）　ナデ	ナデ
49	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.8)	灰白（10YR8/2）	砂礫・長・石・雲	良好	口片	水平口縁（面取気味）　巻貝条痕	ナデ
50	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.1)	灰黄（2.5Y6/2）	細礫・長・石	良好	口片	波状口縁（面取）　平滑ナデ	平滑ナデ
51	河道１	縄文土器	浅鉢？	－	－	(7.7)	灰黄（2.5Y7/2）	砂礫・長・石	良好	口片	水平口縁（丸）　ナデ	ナデ
52	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.6)	にぶい黄橙（7.5YR7/4）	砂礫・長・石・赤	良好	胴片	二枚貝条痕	平滑ナデ
53	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.0)	灰黄（2.5Y6/2）	細砂・長・石	良好	胴片	巻貝条痕	ナデ
54	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(5.7)	にぶい黄橙（10YR6/4）	細礫・長・雲・赤	良好	胴片	巻貝条痕	ナデ
55	河道１	縄文土器	深鉢	－	－	(8.0)	灰（5Y5/1）	細礫・長・石・雲	良好	胴片	巻貝条痕	ナデ
56	河道１	縄文土器	深鉢	－	4.6	(2.1)	淡黄（2.5Y8/3）	砂礫・長・石・赤	良好	底1/4	平底　ナデ	ナデ
57	河道１	縄文土器	深鉢	－	9.2	(2.1)	灰白（5Y7/1）	細砂・長・石・雲・赤	やや不良	底1/5	高台底　ナデ	ナデ
58	河道１	縄文土器	深鉢	－	11.4	(2.9)	浅黄橙（7.5YR8/3）	細礫・長・石・雲・赤	良好	底1/6	高台底　ナデ	ナデ
59	河道１	縄文土器	深鉢	－	5.8	(3.0)	浅黄（2.5Y7/3）	細礫・長・石	良好	底1/6	凹み底　ナデ	ナデ
60	河道１	縄文土器	深鉢	－	(10.0)	(3.0)	にぶい黄橙（10YR7/3）	砂礫・長・石・雲	良好	底1/7	凹み底　ナデ	ナデ
61	河道１	縄文土器	深鉢	－	12.6	(3.6)	にぶい黄橙（10YR7/2）	細礫・長・石・雲・赤	良好	底1/4	高台底　ナデ	ナデ
62	河道１	縄文土器	深鉢	－	5.0	(4.3)	にぶい黄橙（10YR7/3）	細礫・長・石	良好	底1/5	平底　沈線　ナデ	ナデ
63	河道１	縄文土器	深鉢	－	5.0	(3.3)	灰黄（2.5Y7/2）	細礫・長・石	良好	底1/3	凹み底　ナデ	ナデ
64	土坑１	磁器	碗	－	(5.0)	(3.8)	淡黄（2.5Y8/3）		良好	胴1/3	貫入	
65	土坑１	土師質土器	鍋	－	－	(3.5)	灰黄（2.5Y7/2）	細礫・長・石	良好	口片	ハケメ、ナデ　すす付着	ナデ
66	包含層	須恵器	高杯	－	9.6	(6.0)	灰（N5/）	精良	良好	脚柱部1/1	短脚一段透かし孔（楕形）	

石器

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値（mm）			重量（g）	石材	残存状況	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
S1	河道１	石鏃	19.5	14.5	2.8	0.51	サヌカイト	完形	縄文時代後期	凹基式
S2	河道１	石鏃	18.0	15.0	2.8	0.44	サヌカイト	基部・先端部欠損	縄文時代後期	凹基式
S3	河道１	石鏃	21.5	11.5	2.5	0.30	サヌカイト	基部欠損	縄文時代後期	凹基式
S4	河道１	石鏃	14.0	11.5	2.0	0.26	サヌカイト	先端部欠損	縄文時代後期	凹基式
S5	河道１	石鏃	15.0	10.5	3.0	0.41	サヌカイト	ほぼ完形	縄文時代後期	凹基式
S6	河道１	石鏃	30.0	17.0	4.0	1.77	サヌカイト	基部・先端部欠損	縄文時代後期	凹基式、全体に風化が進む
S7	河道１	石鏃	24.0	14.0	3.0	1.01	サヌカイト	基部欠損	縄文時代後期	平基式
S8	河道１	石鏃	14.0	15.5	3.0	0.50	サヌカイト	先端部欠損	縄文時代後期	平基式
S9	河道１	凹み石	68.5	66.0	27.5	174.36	花崗岩	完形	縄文時代後期	両面敲打痕、側面敲打痕と擦痕
S10	河道１	石核	118.0	90.5	30.5	347.94	サヌカイト	完形	縄文時代後期	一部に潰れ
S11	包含層	石鏃	21.5	12.5	3.0	0.87	サヌカイト	基部・先端部欠損	縄文時代後期	平基式、先端部若干摩滅
S12	包含層	スクレイパー	97.0	64.0	13.0	88.96	サヌカイト	完形	弥生時代？	一部に敲打痕

表９　宮原遺跡遺構名称新旧対照表

遺構名	旧調査区：遺構名	遺構名	旧調査区：遺構名
河道１	№３流路	土坑１	№４土坑

表10　奈良井古墳遺物観察表

土器

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土・鉱物	焼成	残存状況	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高					外面	内面
67	石室内	須恵器	杯身	(12.4)	(4.8)	(3.6)	灰白（2.5Y7/2）	細砂：黒	良好	口1/8	底部ヘラケズリ	
68	石室南東側墳丘上	須恵器	杯身	－	－	(1.9)	灰白（5Y8/2）	細砂：黒	良好	口片		
69	石室内	須恵器	高杯？	－	－	(2.6)	灰白（2.5Y7/1）	砂礫：長	良好	口片		
70	側壁石抜き取り跡	須恵器	短頸壺	(14.0)	－	(3.6)	灰白（2.5Y7/2）	精良	良好	口1/8	体部１条沈線	
71	古墳南側	須恵器	提瓶	7.7	－	(3.6)	灰白（5Y7/1）	精良	精良	口1/6	２条沈線	
72	側壁石抜き取り跡	須恵器	壺	－	－	(5.2)	灰（5Y5/1）	細砂：長・石	良好	頸片	カキメ	
73	石室内	土師器	杯身	(14.2)	(9.6)	(3.2)	明赤褐（5YR5/6）	砂礫：長・石・雲	良好	底1/4	体部下半平滑なヘラケズリ　赤色顔料塗布	体部右上がり、底部らせんの暗文　赤色顔料塗布
74	側壁石抜き取り跡	瓦質土器	鍋	30.6	－	(8.8)	灰（7.5Y6/1）	精良	良好	口5/6	口縁部ヨコナデ　体部ハケメ後ナデ	ハケメ後二孔一対内耳把手貼付
75	石室内	瓦質土器	羽釜	－	－	(4.2)	にぶい褐（7.5YR6/3）	砂礫：長・雲	良好	調1/8	外耳把手貼付後ナデ	ハケメ
76	石室南東側墳丘上	瓦質土器	鍋	－	－	(3.8)	橙（5YR6/6）	細砂：長・石	良好	口片	口縁部ヨコナデ　体部ハケメ	ハケメ

石器

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値（mm）			重量（g）	石材	残存状況	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
S13	墳丘盛土	石鏃	20.5	14.0	3.0	0.77	サヌカイト	先端部欠損	縄文時代？	凹基式

表11　奈良井遺跡遺構一覧表

段状遺構・竪穴遺構

遺構名	平面形	断面形	規模（cm）			底面海抜高（m）	主軸	床面積（㎡）	柱穴（基）	柱間距離（cm）	時期	備考
			長さ	幅	深さ							
段状遺構１	不整隅丸方形	平底	459	－	60	30.01	N-23° -E	－	－	－	古墳時代後期	
段状遺構２	不整隅丸方形	平底	－	－	34	30.23	N-30° -E	－	－	－	古墳時代後期	
竪穴遺構１	隅丸長方形	平底	668	412	40	29.62	N-54° -E	16.2	(28)	21 ～ 453	中世	埋土中からソバ属の花粉検出多。

土坑・被熱面

遺構名	平面形	断面形	規模（cm）			底面海抜高（m）	時期	備考
			長さ・長径	幅・短径	深さ			
土坑１	楕円形	平底	119	70	60	30.23	弥生時代中期	
土坑２	楕円形	平底	127	91	40	30.17	古墳時代後期	
土坑３	楕円形	平底	234	162	38	30.02 ～ 29.79	古墳時代後期	テラス状の段をもつ。
土坑４	隅丸方形	平底	105	38	16	29.84	古墳時代後期	

遺構名	平面形	断面形	規模（cm）			底面海抜高(m)	時期	備考
			長さ・長径	幅・短径	深さ			
土坑５	不整楕円形	平底	200	132	20	29.91	古墳時代後期	
土坑６	楕円形	平底	118	77	10	29.91	古墳時代後期	
土坑７	楕円形	平底	203	101	36	30.05	古墳時代後期	
土坑８	不整楕円形	平底	152	83	16	27.08	古墳時代後期	
土坑９	不整形	平底	61	42	5	26.33	古墳時代後期	
土坑10	(円形)	凹底	90	-	18	26.32	古墳時代後期	
土坑11	隅丸方形	平底	132	89	12	26.48	古墳時代後期	被熱面あり。放射線炭層年代測定実施。
土坑12	不整円形	平底	58	55	16	30.61	中世	被熱面あり。放射線炭層年代測定実施。
土坑13	楕円形	凹底	122	58	46	26.48	中世	
土坑14	不整円形	平底	60	57	14	27.02	中世末ないし近世	甕を埋設。
土坑15	(円形)	凹底	129	-	71	25.96	中世	
土坑16	(楕円形)	平底	-	-	23	26.35	中世	
土坑17	楕円形	凹底	230	185	42	25.20	古代？	角礫出土。
土坑18	円形	凹底	82	80	32	25.27	古代？	平瓦を埋設。
被熱面１	-	-	81	42	-	30.14	古墳時代後期	焼土・炭の範囲は140×71cm。

溝

遺構名	断面形	規模（cm）			底面海抜高（m）	時期	備考
		上端幅	下端幅	深さ			
溝１	平底	64～26	28～14	9	29.87～29.45	古墳時代後期	
溝２	平底	57～24	30～12	17	29.99～29.57	古墳時代後期	溝３と合流か。
溝３	凹底	70～26	20～9	85	30.60～28.54	古墳時代後期	溝４と同一か。
溝４	凹底	60～30	20～7	22	27.49～26.64	古墳時代後期	溝３と同一か。
溝５	平底	70～80	40～7	13	27.51～26.44	古墳時代後期	溝６と同一か。
溝６	平底	85～25	60～20	8	29.52～29.50	古墳時代後期	溝５と同一か。
溝７	平底	128～38	48～12	15	27.09～25.93	古墳時代後期	
溝８	凹底	42～24	38～10	9	26.36～26.03	古墳時代後期	
溝９	平底	98～60	28～24	27	26.65～26.39	古墳時代後期	
溝10	平底	120～48	88～20	23	26.22～25.16	古墳時代後期	溝９から分岐。
溝11	凹底	110～58	50～44	53	26.31～26.12	古墳時代後期	
溝12	凹底	62～30	29～16	14	27.54～27.13	古墳時代後期	
溝13	平底	75～37	62～16	12	26.33～25.99	古墳時代後期	
溝14	凹底	56～44	38～13	8	26.26～26.06	古墳時代後期	
溝15	凹底	100～20	66～8	6	25.29～24.89	古墳時代後期	
溝16	凹底	45	12	15	30.31～30.22	中世	
溝17	平底	37	30	7	30.11～30.08	中世	溝18と同一か。
溝18	凹底	52～40	10～14	9	30.16～30.12	中世	溝17と同一か。
溝19	平底	42～25	20～4	3	29.90～29.84	中世	
溝20	凹底	174～60	18～14	57	32.34～29.85	近世以降	溝21と同一か。
溝21	平底	70～41	26～16	9	29.64～29.62	近世以降	溝20と同一か。
溝22	凹底	55～30	10～5	23	26.60～25.04	近世以降	

表12　奈良井遺跡遺物観察表

土器

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土・鉱物	焼成	残存状況	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高					外面	内面
77	段状遺構1	須恵器	杯蓋	12.2	3.0	4.1	灰（N6/）	砂礫：長・赤	良好	天井1/1	天井部回転ヘラケズリ	
78	段状遺構1	須恵器	杯蓋	12.8	4.0	3.6	灰（N6/）	砂礫：長・雲・赤	良好	口1/4	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ？	
79	段状遺構1	須恵器	杯蓋	13.7	(2.8)	3.5	灰（N6/）	砂礫：長・雲・赤	良好	口1/4	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ？	
80	段状遺構1	須恵器	杯蓋	12.4	3.2	3.5	灰（N6/）	砂礫：長	良好	天井1/2	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ・ナデ？	
81	段状遺構1	須恵器	杯蓋	12.7	(5.2)	3.7	灰（N6/）	砂礫：長・赤	良好	口1/2	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ？	回転ナデ（平滑）
82	段状遺構1	須恵器	杯身	11.8	7.0	4.0	灰（N6/）	砂礫：長	良好	ほぼ完形	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺回転ヘラケズリ	たちあがり部接合痕
83	段状遺構1	須恵器	高杯	14.0	—	(15.7)	灰白（5Y8/2）	砂礫：長・雲・黒・赤	不良	口1/4	摩滅　長脚二方二段透かし孔　脚部2条沈線	脚部シボリ痕
84	段状遺構1	須恵器	高杯	13.7	12.7	13.1～13.9	灰（10Y6/1）	細砂：長・石	良好	脚1/2	長脚二方二段透かし孔（上方未完遂）杯底部カキメ	歪み　杯部回転ナデ（平滑）　脚部シボリ痕
85	段状遺構1	須恵器	高杯	12.1	—	(4.7)	灰白（N7/）	砂礫：長・赤	良好	口1/4	杯底部回転ヘラケズリ	杯脚部接合時のユビオサエ
86	段状遺構1	須恵器	高杯	—	—	(2.9)	灰（N5/）	細砂：長・黒・赤	良好	杯脚片	長脚三方透かし孔	
87	段状遺構1	須恵器	高杯	15.2	—	(7.5)	明褐灰（7.5YR7/1）	砂礫：長・雲・黒・赤	不良	口1/3	長脚透かし孔　杯部2条沈線	歪み
88	段状遺構1	須恵器	鉢	19.3	—	(6.6)	灰白（2.5Y8/1）	砂礫：長・石・雲	不良	口1/6	口縁部強いヨコナデ・外反	工具痕
89	段状遺構1	須恵器	提鉢	13.4	10.0	14.7	灰白（5Y7/1）	砂礫：長	良好	胴2/3	体部カキメ　底部回転ヘラケズリ・ナデ	体部下半シボリ痕
90	段状遺構1	須恵器	甕	—	—	(9.6)	灰白（10Y7/1）	細砂：長・黒	良好	頸1/3	体部1条沈線	頸部シボリ痕　頸胴部明瞭な接合痕
91	段状遺構1	須恵器	横瓶	8.9	—	(7.5)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・黒	良好	口1/8	頸部カキメ　体部平行タタキ後カキメ	頸胴部明瞭な接合痕　体部同心円当て具痕
92	段状遺構1	須恵器	壺	—	—	(11.7)	灰（N6/）	砂礫：長・赤	良好	胴1/4	体部上半カキメ後回転ナデ　2条沈線間刺突文	歪み
93	段状遺構1	須恵器	壺	—	—	(12.2)	灰（10Y6/1）	砂礫：長	良好	胴片	下半回転ヘラケズリ	
94	段状遺構1	須恵器	壺	—	—	(8.4)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・黒	不良	胴片	下半回転ヘラケズリ	
95	段状遺構1	須恵器	甕	57.8	—	(7.0)	灰（N6/）	細砂：長・黒	良好	口1/12	口縁部カキメ・櫛状文　頸部カキメ・ヘラガキ斜格子文	
96	段状遺構1	須恵器	甕	—	—	(15.0)	灰白（7.5Y7/1）	細砂：長	良好	胴片	平行タタキ後カキメ	同心円当て具痕後ナデ
97	段状遺構1	須恵器	甕	—	—	(16.1)	灰白（N7/）	砂礫：長・赤	良好	胴片	平行タタキ後カキメ	同心円当て具痕
98	段状遺構1	須恵器	甕	—	—	(13.6)	灰（N5/）	砂礫：長・雲・黒・赤	良好	胴片	平行タタキ後カキメ	歪み　火膨れ　同心円当て具痕
99	段状遺構1	土師器	甕	17.5	6.6	33.0	橙（7.5YR7/6）	砂礫：長・雲	良好	口1/3	摩滅　体部ハケメ	歪み　体部ヘラケズリ後ナデ　底部ユビオサエ
100	土坑1	弥生土器	壺	19.0	—	(2.7)	にぶい黄橙（10YR7/4）	細砂：長・石・雲・赤	やや不良	口1/8	口縁部内傾上下拡張・5条凹線文・円形浮文	口頸部5条波状文
101	土坑1	弥生土器	甕	17.0	—	(5.4)	浅黄（2.5Y7/3）	砂礫：長・石・赤	やや不良	口1/8	口縁部内傾上下拡張・凹線文　摩滅	摩滅
102	土坑1	弥生土器	壺	13.4	—	(1.5)	にぶい褐（7.5YR5/4）	細砂：長・石	やや不良	口1/8	口縁部内傾上下拡張　摩滅	
103	土坑2	須恵器	横瓶	—	—	(22.1)	灰（N4/）	細砂：長・赤	良好	胴1/2	平行タタキ後カキメ	同心円当て具痕
104	土坑3	須恵器	高杯蓋	—	—	(3.4)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・石・黒	やや不良	つまみ1/1	天井部回転ヘラケズリ　つまみ貼り付け後ナデ	
105	土坑4	須恵器	鉢	16.0	—	(4.9)	灰（5Y6/1）	細砂：長・石・黒・赤	やや不良	口1/4		
106	土坑7	須恵器	杯身	13.3	7.8	4.0	灰白（N7/）	細礫：長・黒	やや不良	底1/3	自然釉　礫付着　底部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ・ナデ？	礫付着　火膨れ　たちあがり部接合痕
107	土坑7	須恵器	高杯	—	—	(7.0)	灰（N6/）　灰白（10YR8/2）	細礫：長・雲	不良	脚柱1/1	自然釉　礫付着	脚部シボリ痕ナデ
108	土坑8	須恵器	杯蓋	13.5	7.0	3.9	灰（10Y6/1）	細砂：長・石・黒	良好	口1/4	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・非回転ヘラケズリ・ナデ？	
109	土坑8	土師器	甕	14.3	—	(7.9)	黒褐（10YR3/2）	細砂：長	良好	口1/4	付着物のため調整不明	
110	溝3	須恵器	杯蓋	13.7	7.2	3.9	灰（N6/）	細礫：長・雲	やや不良	口1/2	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ	回転ナデ（平滑）
111	溝3	須恵器	杯蓋	13.8	8.6	3.9	灰（7.5Y5/1）	細砂：長・石	やや不良	天井1/3	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・非回転ヘラケズリ・ナデ？	回転ナデ（平滑）
112	溝3	須恵器	杯身	13.0	—	(3.9)	灰（N6/）　灰白（N7/）	砂礫：長・雲・黒	不良	口1/4	底部剥落	礫付着　たちあがり部接合痕・強い引き出し
113	溝3	須恵器	高杯	—	—	(4.4)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・石・黒	やや不良	脚柱1/1		
114	溝3	須恵器	甕	19.6	—	(4.8)	灰白（2.5Y8/1）	砂礫：長・雲・黒	やや不良	口1/6		体部同心円当て具痕
115	溝3	須恵器	甕	17.2	—	(8.7)	灰白（N7/）	細砂：長・石	やや不良	口1/4	体部平行タタキ後カキメ	体部同心円当て具痕
116	溝3	須恵器	甕	—	—	(5.3)	灰（N4/）	砂礫：長	やや不良	口片	口縁部カキメ・ヘラガキ直線文　頸部沈線	
117	溝3	土師器	壺	8.0	—	(10.9)	橙（5YR6/6）	砂礫：長	良好	口1/2	摩滅　頸部ミガキ	口頸部の明瞭な接合痕

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土・鉱物	焼成	残存状況	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高					外面	内面
118	溝9	須恵器	杯蓋	12.8	7.4	4.1	灰（N6/）	細礫：長・雲・赤	良好	口1/2	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・非回転ヘラケズリ・ナデ？　口縁部強いヨコナデ・外反	
119	溝9	須恵器	高杯	—	—	(11.5)	灰（N6/）	砂礫：長・黒・赤	良好	脚柱1/1	長脚二方二段透かし孔　脚部2条沈線	歪み　脚部シボリ痕・ナデ
120	溝9	須恵器	高杯	—	—	(12.1)	灰（N6/）	細礫：長・雲・赤	やや不良	脚柱1/1	長脚二方二段透かし孔　脚部2条沈線	歪み　脚部シボリ痕・ナデ
121	溝9	須恵器	甕	—	—	(23.9)	灰白（N7/）	砂礫：長・黒・赤	やや不良	胴片	平行タタキ後カキメ	同心円当て具痕　工具ナデ
122	溝11	須恵器	杯蓋	12.8	7.4	3.6	灰（N5/）	細砂：長・黒	良好	天井2/3	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・粘土付着	
123	溝11	須恵器	杯身	12.6	4.6	4.0	灰白（7.5Y7/1）	細砂：長・黒	不良	底2/3	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・非回転ヘラケズリ・ナデ	中央に同心円の当て具痕　その他回転ナデ（平滑）
124	溝11	須恵器	高杯	16.7	—	(3.6)	灰白（N7/）	細砂：長	やや不良	口1/4	杯底部回転ヘラケズリ　杯部に稜をもつ	
125	溝11	須恵器	高杯・鉢・壺？脚部	10.9	—	5.0	灰（10Y6/1）	精良	良好	脚1/2		
126	溝11	須恵器	鉢	17.0	12.6	(7.1)	灰白（N7/）	細礫：長	やや不良	口1/6	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・ナデ・粘土付着　体部カキメ	
127	溝11	須恵器	甕	—	—	(3.4)	灰（N5/）	細礫：長・雲	不良	胴片	体部カキメ・沈線	頸胴部明瞭な接合痕
128	溝11	須恵器	平瓶	5.6	—	(4.5)	灰（N5/）	細礫：長・赤	良好	口1/1		頸胴部明瞭な接合痕
129	谷部	須恵器	杯蓋	12.4	0.0	4.3	灰白（N7/）	砂礫：長・雲	やや不良	ほぼ完形	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ	土付着
130	谷部	須恵器	杯蓋	12.7	7.0	4.0	灰（N4/）	細砂：長・黒	やや不良	口1/2	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・粘土付着	
131	谷部	須恵器	杯蓋	12.9	5.4	4.3	褐灰（7.5YR6/1）	砂礫：長・赤	やや不良	ほぼ完形	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ	歪み　回転ナデ（平滑）
132	谷部	須恵器	杯蓋	13.6	2.8	4.1	灰白（10YR7/1）	細礫：長・石	やや不良	天井1/1	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ	回転ナデ（平滑）
133	谷部	須恵器	杯蓋	13.9	4.8	(4.0)	褐灰（7.5YR5/1）	細礫：長・黒・赤	やや不良	口1/6	粘土付着　天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ？	焼きむら
134	谷部	須恵器	杯蓋	13.0	4.0	(3.7)	灰白（N7/）　灰（N4/）	細礫：長・雲・黒・赤	不良	天井1/2	自然釉　天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ？	焼きむら
135	谷部	須恵器	杯蓋	12.0	7.4	3.9	褐灰（10YR6/1）	砂礫：長・黒	不良	天井1/2	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・非回転ヘラケズリ・ナデ	
136	谷部	須恵器	杯蓋	13.8	4.0	(4.7)	灰白（10YR7/1）	砂礫：長・黒・赤	やや不良	天井1/8	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ？	焼きむら　回転ナデ（平滑）
137	谷部	須恵器	杯蓋	12.8	—	(3.8)	灰白（N7/）	砂礫：長・黒	やや不良	天井1/4	天井部剥離	火膨れ
138	谷部	須恵器	杯蓋	13.0	4.2	3.8	灰白（5Y7/1）　灰（N6/）	砂礫：長・赤	やや不良	ほぼ完形	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ　口縁部強いヨコナデ・外反	歪み　焼きむら
139	谷部	須恵器	杯蓋	13.4	1.2	4.4	灰（10Y5/1）　にぶい黄橙（10YR6/3）	細砂：長・石・赤	やや不良	天井1/1	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ　口縁部強いヨコナデ・外反	焼きむら
140	谷部	須恵器	杯蓋	12.4	6.8	4.1	灰（7.5Y4/1）	細砂：長・石・黒・赤	やや不良	口2/3	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ？　口縁部強いヨコナデ・外反	火膨れ
141	谷部	須恵器	杯身	12.2	4.0	5.0	灰白（N7/）　灰白（10YR8/1）	砂礫：長・石・雲・赤	不良	底1/2	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ	受け部接合痕
142	谷部	須恵器	杯身	12.4	5.2	4.0	灰黄（2.5Y7/2）	細砂：長・雲・黒	やや不良	底1/2	粘土付着　底部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ？	火膨れ　歪み　たちあがり部接合痕　その他回転ナデ　（平滑）
143	谷部	須恵器	杯身	11.7	6.4	3.6	灰（10Y5/1）	細砂：長・黒	良好	底1/3	剥ぐ落によるキズ　底部ヘラキリ・ヘラオコシ・ナデ？	たちあがり部接合痕
144	谷部	須恵器	杯身	12.1	6.8	(3.9)	灰黄（2.5Y7/2）	細砂：長・石・赤	不良	口1/5	摩滅　底部ヘラキリ・ヘラオコシ？	たちあがり部接合痕・強い引き出し
145	谷部	須恵器	杯身	12.3	5.6	4.3	灰黄（2.5Y6/2）	細砂：長・赤	不良	口1/2	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ	焼きむら　たちあがり部接合痕・強い引き出し
146	谷部	須恵器	杯身	12.2	—	(3.0)	灰白（10YR7/1）	砂礫：長・赤	不良	口1/5	底部剥落	たちあがり部接合痕・強い引き出し　その他回転ナデ　（平滑）
147	谷部	須恵器	杯身	11.9	6.8	3.8	灰（7.5Y6/1）	細砂：長・石	やや不良	底2/3	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺回転ヘラケズリ	たちあがり部接合痕
148	谷部	須恵器	杯身	11.8	1.2	3.9	灰黄褐（10YR6/2）	細砂：長・黒・赤	やや不良	底1/1	底部全体回転ヘラケズリ	焼きむら　たちあがり部接合痕　その他回転ナデ・仕上げナデ
149	谷部	須恵器	杯身	11.6	6.4	(3.3)	灰（N6/）	砂礫：長・雲・黒	良好	口1/3	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・ナデ	たちあがり部接合痕
150	谷部	須恵器	杯身	11.6	6.0	3.9	灰白（7.5Y7/1）	砂礫：長・石・黒	良好	底1/1	粘土塊付着　底部ヘラキリ・ヘラオコシ・ナデ	たちあがり部接合痕・強い引き出し・浅い受け部
151	谷部	須恵器	杯身	11.7	6.6	3.8	灰（N6/）	細砂：長・黒	良好	ほぼ完形	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ	たちあがり部接合痕・強い引き出し
152	谷部	須恵器	杯身	11.5	5.6	3.8	灰白（7.5Y7/1）	細砂：長・黒	やや不良	底1/2	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・縁辺非回転ヘラケズリ？	たちあがり部接合痕
153	谷部	須恵器	杯身	11.5	7.0	4.2	褐灰（10YR6/1）	砂礫：長・赤	やや不良	ほぼ完形	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ	歪み　たちあがり部接合痕・浅い受け部
154	谷部	須恵器	杯身	11.3	3.4	(3.6)	灰（7.5Y6/1）	細砂：長・黒	不良	口1/4	底部ヘラキリ・ヘラオコシ？	たちあがり部接合痕・強い引き出し
155	谷部	須恵器	杯身	(11.0)	1.4	4.5	灰（N5/）	砂礫：長・雲・赤	良好	ほぼ完形	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・全体非回転ヘラケズリ	底部ユビ押し出し　たちあがり部接合痕・強い引き出し
156	谷部	須恵器	杯身	11.1	6.0	4.5	灰白（N7/）　にぶい黄橙（10YR7/3）	砂礫：長・赤	やや不良	底2/3	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・非回転ヘラケズリ・ナデ	たちあがり部接合痕・強い引き出し
157	谷部	須恵器	高杯	15.7	11.3	13.3～13.5	灰（7.5Y6/1）	砂礫：長・黒	やや不良	口1/4	長脚二方二段透かし孔（位置不一致）脚部2条沈線	歪み　杯部回転ナデ（平滑）
158	谷部	須恵器	高杯	14.5	—	(11.3)	灰（5Y5/1）	砂礫：長・石・黒	良好	口1/6	長脚二方二段透かし孔（非対称）	
159	谷部	須恵器	高杯	14.3	—	(7.4)	灰白（5Y7/1）	砂礫：長・黒・赤	やや不良	口1/2	長脚二方二段透かし孔	杯部回転ナデ（平滑）
160	谷部	須恵器	高杯	13.9	—	(3.7)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・石・黒・赤	やや不良	口2/3	杯底部回転ヘラケズリ	杯部回転ナデ（平滑）
161	谷部	須恵器	高杯	14.0	—	(4.0)	黄灰（2.5Y6/1）	砂礫：長・雲・赤	やや不良	口1/6	杯脚部明瞭な接合痕	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土・鉱物	焼成	残存状況	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高					外面	内面
162	谷部	須恵器	高杯	14.3	—	(4.3)	灰白（7.5Y7/1）	砂礫：長・雲・赤	やや不良	口1/2	杯底部回転ヘラケズリ　杯部に稜をもつ	杯部回転ナデ（平滑）
163	谷部	須恵器	高杯	14.3	—	(6.4)	灰（N6/）	砂礫：長・雲・赤	良好	口1/2	杯底部回転ヘラケズリ	杯脚部接合時のユビオサエ
164	谷部	須恵器	高杯	—	—	(3.2)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・石・黒	やや不良	脚柱1/1	長脚四方透かし孔　杯底部カキメ	
165	谷部	須恵器	高杯	12.4	7.7	9.1	灰（N6/）	細礫：長・雲	やや不良	脚1/2	杯脚部明瞭な接合痕	歪み　杯脚部接合時のユビオサエ杯部回転ナデ（平滑）
166	谷部	須恵器	高杯	12.0	10.4	6.8～7.2	灰（10Y6/1）	細砂：長・石	良好	口3/4	杯脚部明瞭な接合痕	歪み　土付着　杯脚部接合時のユビオサエ
167	谷部	須恵器	高杯	7.9	—	(7.5)	灰（7.5Y6/1）	細砂：長・石	やや不良	口1/2	杯底部回転ヘラケズリ　杯脚部明瞭な接合痕　口縁部強いヨコナデ・外反	杯脚部接合時のユビオサエ　杯部回転ナデ（平滑）
168	谷部	須恵器	高杯	13.4	—	6.8	灰白（10YR8/1）	砂礫：長・黒	不良	口1/4	口縁部強いヨコナデ・外反	杯部回転ナデ（平滑）
169	谷部	須恵器	高杯	—	—	(4.2)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・黒	やや不良	脚柱1/1		
170	谷部	須恵器	高杯	—	—	(4.9)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・石・赤	やや不良	脚柱1/1		重ね焼き痕　杯部回転ナデ（平滑）
171	谷部	須恵器	高杯	—	—	(4.0)	灰（N6/）	砂礫：長・黒・赤	良好	脚柱1/1		
172	谷部	須恵器	高杯	—	—	(3.9)	灰白（10YR8/2）	砂礫：長・雲・黒	不良	杯脚片		
173	谷部	須恵器	高杯蓋	14.4～16.1	2.5	4.9	灰白（5Y7/2）	細砂：長・石・赤	やや不良	口4/5	環付着　天井部ナデ　1条沈線　つまみ貼り付け後ナデ	歪み　火膨れ　中心部渦巻き状の当て具痕
174	谷部	須恵器	高杯蓋	12.7	—	(3.5)	灰（7.5Y5/1）	砂礫：長・石	やや不良	つまみ1/1	天井部回転ヘラケズリ　つまみ貼り付け後ナデ	
175	谷部	須恵器	高杯蓋	—	—	(1.2)	灰（N5/）	精良	良好	つまみ1/1		
176	谷部	須恵器	高杯蓋	—	—	(1.3)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・石	良好	つまみ1/1		
177	谷部	須恵器	脚付椀	9.8	—	(9.0)	灰白（N7/）	砂礫：長・雲・黒	良好	口1/4		粘土付着
178	谷部	須恵器	脚付椀	10.9	—	(9.8)	灰白（2.5Y7/1）	砂礫：長・雲・黒・赤	不良	口5/6	体部斜格子文	歪み　焼きむら
179	谷部	須恵器	高杯・椀・壺？脚部	—	17.7	(5.6)	灰（N4/）	細砂：長・赤	良好	脚1/4	方形透かし孔	
180	谷部	須恵器	高杯・椀・壺？脚部	—	15.8	(5.4)	灰（10Y6/1）	細砂：長・黒	良好	脚1/8		
181	谷部	須恵器	鉢	13.9	—	(8.1)	灰（5Y6/1）	砂礫：長	やや不良	口1/6		
182	谷部	須恵器	鉢	(15.6)	—	(4.7)	にぶい黄橙（10YR7/2）	砂礫：長・雲・赤	良好	口1/8		
183	谷部	須恵器	鉢	17.0	—	6.3	黄灰（2.5Y6/1）	砂礫：長・赤	やや不良	底部1/3	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・非回転ヘラケズリ・ナデ	
184	谷部	須恵器	鉢	17.4～18.4	12.5	7.9	灰（10Y5/1）	砂礫：長・石	良好	底2/3	底部回転ヘラケズリ	歪み　底部回転ナデ（平滑）
185	谷部	須恵器	鉢	24.2	—	(8.8)	灰黄（2.5Y7/2）	細砂：長・黒	不良	口1/4	底部回転ヘラケズリ・ナデ	火膨れ
186	谷部	須恵器	鉢	(36.0)	—	(8.0)	灰（N6/）	砂礫：長・雲・赤	良好	口片	体部カキメ・沈線	
187	谷部	須恵器	鉢	21.4	—	(11.7)	にぶい黄褐（10YR5/3）	細砂：長・黒	やや不良	口1/5	体部カキメ	体部ナデ・ユビオサエ
188	谷部	須恵器	提鉢	—	8.2	(3.6)	にぶい黄橙（10YR7/2）	砂礫：長	不良	底1/5		剥離
189	谷部	須恵器	提鉢	—	10.8	(2.2)	灰（5Y6/1）	細砂：長・黒	良好	底1/4		剥離
190	谷部	須恵器	短頸壺蓋	12.0	7.0	4.5	灰（N6/）	砂礫：長・赤	良好	天井2/3	天井部ヘラキリ・ヘラオコシ・ナデ口縁端部内傾・拡張	
191	谷部	須恵器	短頸壺	7.7	5.3	8.3	灰白（2.5Y7/1）	細砂：長・石・黒	やや不良	底1/1	底部回転ヘラケズリ	
192	谷部	須恵器	短頸壺	10.6	—	(4.7)	灰（N4/）	砂礫：長・雲・赤	良好	口1/6	体部カキメ後ナデ	頸胴部明瞭な接合痕・ナデ
193	谷部	須恵器	横瓶	12.6	—	(5.5)	灰（10Y6/1）	細砂：長・黒・赤	良好	口1/4	体部平行タタキ後カキメ	体部同心円当て具痕
194	谷部	須恵器	平瓶	6.5	—	(9.1)	にぶい黄橙（10YR7/2）	細礫：長・黒・赤	不良	口1/1	自然釉　体部上半カキメ	天井部明瞭な円盤接合痕
195	谷部	須恵器	平瓶	6.4	—	(4.6)	灰白（N7/）　黄灰（2.5Y6/1）	砂礫：長・雲	不良	口2/3	口縁端部強いヨコナデ	砂礫溶着　頸胴部明瞭な接合痕
196	谷部	須恵器	提瓶	—	—	(2.3)	灰（7.5Y6/1）	砂礫：長・雲	やや不良	破片	カキメ後ボタン状把手貼り付け	
197	谷部	須恵器	甕	19.5	—	(4.8)	灰黄褐（10YR6/2）	細砂：長・黒	やや不良	口1/5		焼きむら
198	谷部	須恵器	甕	21.7	—	(4.8)	黄灰（2.5Y5/1）	細砂：長・石・黒・赤	良好	口1/8		
199	谷部	須恵器	甕	21.6	—	(7.0)	灰（N5/）	細砂：長・石	良好	口1/4	体部平行タタキ後カキメ	体部同心円当て具痕
200	谷部	須恵器	甕	21.3	—	(4.5)	灰（N5/）	細砂：長・黒	良好	口1/3		
201	谷部	須恵器	甕	23.2	—	(7.1)	灰（N5/）	砂礫：長・赤	良好	口1/6	体部上半カキメ	体部同心円当て具痕
202	谷部	須恵器	甕	21.5	—	(9.6)	灰（N5/）　にぶい黄橙（10YR6/3）	細砂：長・石・赤	やや不良	口1/1	体部体部平行タタキ後カキメ	焼きむら　体部同心円当て具痕
203	谷部	須恵器	甕	16.8	—	(5.4)	褐灰（10YR6/1）	砂礫：長・雲・赤	不良	口1/7	口縁部1条沈線	体部同心円当て具痕
204	谷部	須恵器	甕	13.4	—	(9.1)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・黒・赤	やや不良	口1/5	体部カキメ下半平行タタキ	歪み
205	谷部	須恵器	甕	—	—	(10.2)	暗灰（N3/）	細砂：長・赤	やや不良	口片	口縁部2段簾状文　頸部ヘラガキ斜状文後沈線	

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土・鉱物	焼成	残存状況	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高					外面	内面
206	谷部	須恵器	甕	—	—	(7.9)	灰（7.5Y6/1）	細砂：長・石・赤	やや不良	口片	口縁部波状文　頸部ヘラガキ斜状文後2条沈線	
207	谷部	須恵器	甕	—	—	(6.6)	灰（N4/）	細砂：長・赤	やや不良	口片	口縁部刻目・ヘラガキ直線文　頸部沈線	火膨れ　自然釉
208	谷部	須恵器	甕	—	—	(5.1)	暗灰（N3/）	細砂：長・石	やや不良	口片	口縁部櫛状文後1条沈線　頸部ハケメ状工具による斜状文後沈線	
209	谷部	須恵器	甕	39.7	—	(17.5)	灰（N5/）	細礫：長・黒	やや不良	口1/2	瘤付着　口縁部波状文　頸部ヘラガキ斜状文後2条沈線　体部平行タタキ後カキメ	歪み　火膨れ　体部同心円当て具痕
210	谷部	須恵器	甕	41.6	—	(7.5)	灰（10Y4/1）	細砂：長・黒・赤	やや不良	口1/12	口縁部カキメ・ヘラガキ斜状文　頸部カキメ・沈線	歪み　火膨れ　粘土・土・藁付着　自然釉
211	谷部	須恵器	甕	(45.3)	—	(13.7)	灰白（N7/）　灰（N5/）	砂礫：長・雲・赤	不良	口1/6	口縁部刺突文・波状文　頸部ヘラガキ直線文後2条沈線3単位	火膨れ
212	谷部	須恵器	甕	(46.7)	—	(5.7)	灰白（10Y7/1）	細砂：長・石・赤	やや不良	口1/6	自然釉　口縁部カキメ・波状文・沈線　頸部ヘラガキ直線文後沈線	火膨れ
213	谷部	須恵器	甕	—	—	(21.0)	灰（N6/）	細砂：長	良好	胴片	平行タタキ後カキメ	歪み　同心円当て具痕
214	谷部	須恵器	甕	—	—	(10.7)	灰白（N7/）	砂礫：長・雲・黒	やや不良	胴片	表面どうし溶着　平行タタキ　剥離	同心円当て具痕　剥離
215	谷部	須恵器	甕	—	—	(10.2)	黒（7.5Y2/1）オリーブ黒（7.5Y3/1）・灰白（N7/）	砂礫：長・雲	不良	胴片	表面どうし溶着　平行タタキ後カキメ	歪み　同心円当て具痕
216	谷部	須恵器	甕	—	—	(13.9)	灰（10Y4/1）	細砂：長・雲・黒	不良	胴片	平行タタキ後カキメ	歪み　火膨れ　焼成中破損の痕跡　同心円当て具痕
217	谷部	土師器	高杯	(15.8)	—	(4.0)	橙（2.5YR6/6）	砂礫：長・雲	良好	口1/3	杯脚部の明瞭な接合痕	ヨコナデ（平滑）
218	谷部	土師器	甕？把手	—	—	(2.9)	にぶい黄橙（10YR6/3）	細砂：長・石・雲・黒・赤	良好	把手片	手づくね　ユビオサエ	ヨコナデ　ユビオサエ
219	谷部	土師器	甕	20.2	—	(11.7)	にぶい橙（7.5YR6/4）	細砂：長・雲・黒・赤	良好	口1/3	体部ハケメ	体部ヘラケズリ
220	谷部	土師器	甕	24.4	—	(9.9)	橙（7.5YR6/6）	砂礫：長・黒・赤	やや不良	口1/3	摩滅	摩滅　ユビオサエ
221	柱穴5	須恵器	高杯	14.2	—	(12.8)	灰（N6/）	砂礫：長	良好	口1/6	長脚二方二段透かし孔（未貫通有）杯部2条沈線	脚部シボリ痕
222	包含層	弥生土器	高杯	20.9	—	(3.9)	にぶい褐（7.5YR5/4）	細砂：長・石・赤	良好	口1/2	口縁部3条凹線文　杯部ヘラミガキ	杯部ヘラミガキ
223	包含層	須恵器	杯身	11.2	4.2	(3.9)	灰（7.5Y6/1）	砂礫：長・黒・赤	不良	口1/2	粘土付着　底部ヘラキリ・ヘラオコシ・非回転ヘラケズリ・ナデ	たちあがり部接合痕・強い引き出し
224	包含層	須恵器	鉢	15.0	—	(5.3)	橙（7.5YR7/6）灰白（7.5Y8/2）	砂礫：長・黒・赤	不良	口1/3		
225	包含層	須恵器	把手付椀	8.7	—	(4.9)	灰白（7.5Y7/1）	細砂：長・黒	良好	口片	自然釉　把手貼り付け・ナデ	
226	包含層	須恵器	把手付椀	—	—	(2.1)	灰（5Y6/1）	精良	良好	把手片	鈍状把手貼り付け	
227	包含層	須恵器	壺	—	—	(4.4)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・黒	やや不良	把手片	平行タタキ後カキメ　把手貼り付け後ナデ	同心円当て具痕
228	包含層	須恵器	甕	—	—	(13.8)	灰オリーブ（5Y6/2）	細砂：長・黒	やや不良	胴片	表面どうし溶着　平行タタキ　剥離	同心円当て具痕　工具ナデ
229	包含層	須恵器	甕	23.4	—	(26.0)	灰（N6/）　灰（7.5Y6/1）	細礫：長・赤	やや不良	胴1/4	体部上半3条沈線・下半カキメ　底部円形・楕円形孔　把手貼り付け	把手貼り付け部ユビオサエ
230	整穴遺構1	土師質土器	高台椀	—	4.0	(1.2)	浅黄橙（10YR8/3）	細礫：長・石	やや不良	高台1/1	高台部貼り付け	
231	整穴遺構1	土師質土器	高台椀	—	4.4	(0.8)	灰白（7.5YR8/2）	砂礫：長	やや不良	高台2/3	高台部貼り付け	
232	整穴遺構1	土師質土器	小皿	6.8	5.0	(1.0)	にぶい橙（7.5YR7/3）	砂礫：長・雲・赤	良好	口1/3		
233	整穴遺構1	土師質土器	鍋	—	—	(5.0)	にぶい黄橙（10YR7/3）	細砂：長・石・雲・赤	良好	口片	体部ハケメ・ユビオサエ・ナデ	体部ハケメ
234	整穴遺構1	土師質土器	鍋	—	—	(5.5)	にぶい黄橙（10YR6/4）	細砂：長・石・赤	良好	口片	スス・炭化物付着　調整不明	摩滅
235	整穴遺構1	土師質土器	鍋	—	—	(5.5)	にぶい橙（5YR6/4）	砂礫：長・石・雲	良好	脚片		
236	整穴遺構1	須恵質土器	擂鉢	—	—	(4.5)	灰白（N7/）	細砂：長・黒	やや不良	口片	口縁部重ね焼き痕・自然釉	
237	整穴遺構1	亀山焼	甕	—	—	(5.6)	灰白（5Y7/1）	細砂：長・石	やや不良	口片	格子目タタキ	
238	整穴遺構1	亀山焼	甕	—	—	(6.4)	灰白（10Y7/1）	細砂：長	やや不良	底片	格子目タタキ	当て具痕後ナデ
239	土坑14	瓦質土器	甕	57.0	35.4	(68.0)	灰（5Y6/1）	細礫：長	やや不良	口1/3・底1/1	底部欠損　体部格子目タタキ後タテ方向カキメ	体部上半ヨコ・斜方向、下半タテ方向カキメ
240	土坑18	土師器	杯身	(13.9)	(9.5)	3.4	灰白（5Y7/1）	砂礫：長	やや不良	底1/6	摩滅	摩滅
241	土坑18	土師質	平瓦	—	—	—	灰白（5Y7/1）	砂礫：長	良好	破片	(29.3)×(27.3)×2.2　布目痕	縄目タタキ
242	柱穴8	土師質土器	高台椀	11.1	3.2	4.2	灰白（7.5YR8/1）	砂礫：長	良好	口1/1	摩滅　高台部貼り付け	摩滅
243	柱穴10	土師質土器	高台椀	9.9	-	(3.7)	淡黄（2.5Y8/3）	細砂：長・石・赤	良好	口1/3	摩滅	摩滅
244	柱穴11	土師質土器	高台椀	—	4.0	(2.7)	灰白（2.5Y8/2）	細砂：長・石・黒・赤	良好	底1/4	摩滅　高台部貼り付け	摩滅
245	柱穴12	土師質土器	椀	9.6	5.0	4.6	浅黄橙（7.5YR8/4）	細礫：長・石	良好	口1/6	摩滅	摩滅
246	柱穴13	土師質土器	小皿	7.4	5.8	1.2	浅黄（2.5Y7/3）	細砂：長・赤	良好	底3/4	底部ヘラキリ・ヘラオコシ・ナデ	口縁端部スス付着
247	包含層	土師器	杯身	—	(8.8)	(1.6)	にぶい橙（7.5YR6/4）	細砂：長・赤・角	良好	高台1/8	高台部貼り付け	
248	包含層	須恵器	杯身	—	10.1	(1.5)	黒褐（2.5Y3/2）	細砂：長・石	不良	高台1/6	底部ヘラキリ・ヘラオコシ　高台部貼り付け時の明瞭な接合痕	
249	包含層	須恵器	壺	—	(11.0)	(2.0)	灰（N5/）	細礫：長・雲・赤	良好	高台1/5	底部高台接合時の明瞭な接合痕	剥落

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調（外面）	胎土・鉱物	焼成	残存状況	形態・手法の特徴など	
				口径	底径	器高					外面	内面
250	包含層	土師質土器	高台椀	10.0	5.1	3.3～3.5	灰黄（2.5Y7/2）	細砂：長・石・黒・赤	やや不良	高台1/1	高台部貼り付け	
251	包含層	土師質	平瓦	—	—	—	灰白（7.5Y8/1）	細礫：長・雲・黒	やや不良	破片	(11.5) ×（9.3）×2.0 布目痕	縄目タタキ

土製品

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値（mm）			重量（g）	色調（外面）	胎土・鉱物	焼成	残存状況	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚							
C1	包含層	土製円盤	42.1	—	15.2	26.77	灰白（10Y7/1）	精良	良好	完形	中世	土器加工

石器

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値（mm）			重量（g）	石材	残存状況	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
S14	段状遺構1	砥石	75.5	67.5	32.0	165.89	流紋岩	完形	古墳時代後期	4面使用痕確認
S15	包含層	石鏃	24.0	21.0	4.0	1.04	サヌカイト	完形	縄文時代？	凹基式、全体に風化が進む
S16	包含層	石鏃	20.5	20.0	30.0	1.14	サヌカイト	完形	縄文時代？	平基式
S17	包含層	石鏃	24.0	20.5	3.5	1.70	サヌカイト	完形	縄文時代？	平基式
S18	包含層	石鏃	30.0	19.5	4.0	2.43	サヌカイト	先端部欠損	縄文時代？	凹基式
S19	包含層	打製石包丁	70.0	32.0	9.5	23.63	サヌカイト	刃部欠損	弥生時代？	端部摩滅痕と自然面確認、刃部広く欠損確認
S20	包含層	スクレイパー	77.5	51.5	13.5	60.77	サヌカイト	完形	弥生時代？	端部と刃部側面敲打による潰し確認
S21	包含層	スクレイパー	59.0	56.0	10.0	43.11	サヌカイト	完形	弥生時代？	端部敲打による潰し、刃部未調整、使用痕確認
S22	包含層	剥片石器？	62.5	69.0	20.0	90.43	流紋岩	完形	不明	剥離痕跡確認、自然作用による形成の可能性
S23	包含層	石核？	90.0	72.0	50.5	333.87	流紋岩	完形	不明	剥離痕跡確認、自然作用による形成の可能性
S24	溝21	砥石	52.5	55.0	10.0	36.00	流紋岩	一部欠損	中世	3面使用痕確認
S25	包含層	砥石	42.0	22.0	16.3	22.46	流紋岩	一部欠損	中世	4面使用痕確認
S26	包含層	砥石	48.5	43.0	15.0	45.49	流紋岩	完形	中世	3面使用痕確認
S27	包含層	砥石	36.0	34.0	27.0	63.24	砂岩か風化したホルンフェルス	完形	中世	全面使用痕確認

鉄器

掲載番号	遺構・土層名	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	残存状況	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
M1	土坑2	刀子	114.7	14.4	5.4	12.85	鉄	両端欠損	古墳時代後期	
M2	溝9	刀子	60.0	15.8	3.2	10.48	鉄	両端欠損	古墳時代後期	
M3	溝9	釘	39.1	7.4	5.0	4.93	鉄	両端欠損	古墳時代後期	
M4	溝10	鏃	145.6	14.6	4.7	21.96	鉄	ほぼ完形	古墳時代後期	
M5	谷部	刀子	33.6	16.9	3.2	4.51	鉄	先端一部残	古墳時代後期	
M6	竪穴遺構1	釘	91.8	10.0	8.9	14.88	鉄	先端欠損	中世	
M7	竪穴遺構1	釘	37.1	13.2	7.9	5.12	鉄	先端欠損	中世	
M8	柱穴14	釘	39.5	11.9	8.9	8.55	鉄	両端欠損	中世	

表13　奈良井遺跡遺構名称新旧対照表

遺構名	旧調査区：遺構名	遺構名	旧調査区：遺構名	遺構名	旧調査区：遺構名
段状遺構１	県：№３段状遺構	土坑16	国２区：№28土坑	溝15	国３区：№45溝
段状遺構２	県：№８段状遺構	土坑17	国３区：№44土坑	溝16	県：№９溝
竪穴遺構１	県・国１区：№７竪穴遺構	土坑18	国３区：№43土坑	溝17	県：№10溝
土坑１	県：№13土坑	被熱面１	国１区：№18被熱面	溝18	国１区：№26溝
土坑２	県：№１土坑	溝１	国１区：№48溝	溝19	国１区：№20溝
土坑３	国１区：№29土坑	溝２	県・国１区：№47溝	溝20	県：№11溝
土坑４	国１区：№23土坑	溝３	県：№6溝・国１区：№15溝	溝21	国１区：№19溝
土坑５	国１区：№22土坑	溝４	国３区：№32溝	溝22	国１区：東西溝
土坑６	国１区：№21土坑	溝５	国３区：№41溝	柱穴１	国１区：P138
土坑７	国１区：№14土坑	溝６	国３区：№49溝	柱穴２	国１区：P147
土坑８	国２区：№27土坑	溝７	国３区：№33溝	柱穴３	県：P95
土坑９	国３区：№46土坑	溝８	国３区：№42溝	柱穴４	県：P96
土坑10	国３区：№36土坑	溝９	国３区：№38溝	柱穴５	国１区：P144
土坑11	国３区：№31土坑	溝10	国３区：№39溝	柱穴６	県：P19
土坑12	国１区：№12火処	溝11	国３区：№35土坑	柱穴７	国１区：P124
土坑13	国２区：№24土坑	溝12	国３区：№34溝	柱穴８	国１区：P127
土坑14	国３区：№30土坑	溝13	国３区：№37溝	柱穴９	県：P214
土坑15	国２区：№25土坑	溝14	国３区：№40溝	谷部	県：№５段状遺構・谷部　国１～３区:谷部

図版１

１　調査区西側全景
（北から）

２　調査区西側全景
（東から）

３　調査区東側全景
（北西から）

図版２

宮原遺跡

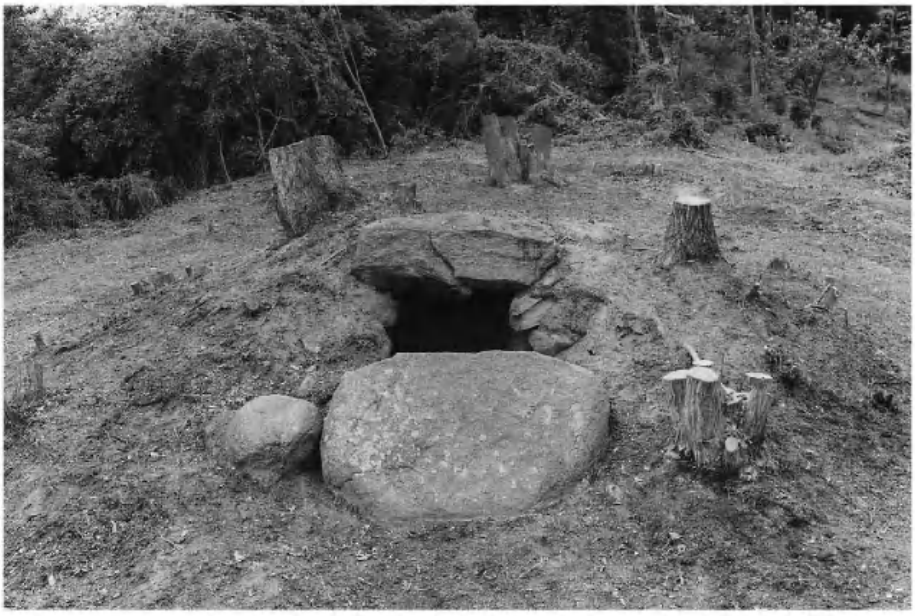
１　河道１断面
（北西から）

２　調査区西壁南側
断面（北東から）

３　調査区西壁北側
断面（南東から）

図版３

１　調査前遠景
（東から）



２　調査前全景
（東から）

３　調査前全景
（南から）

図版４

奈良井古墳

１　墳丘全景（東から）

２　墳丘遠景（南上空から）

３　墳丘と集落遠景（北西上空から）

４　石室内断面（北東から）

５　周溝断面（北東から）

図版 5

1　墳丘断面（東から）

2　墳丘南側断面
（東から）

3　墳丘北側断面
（東から）

図版６

奈良井古墳

１　石室掘り方南側
断面（東から）

２　石室掘り方北側
断面（東から）

３　石室掘り方西側
断面（北から）

１　石室全景（東から）

２　石室と集落遠景（北西から）

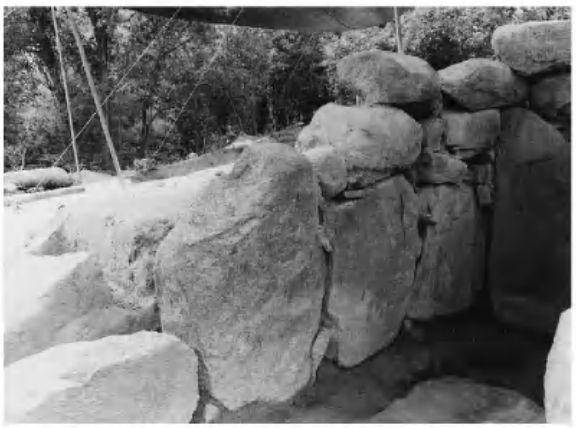
３　石室全景（南東から）

４　石室全景（北東から）

図版８

奈良井古墳

１　石室奥壁（東から）



２　石室南壁（北東から）

３　石室北壁（南東から）

４　石材抜き取り跡の土器だまり（北から）

５　石室掘り方（東から）

１　調査区北半調査前
全景（南東から）

２　調査区南半調査前
全景（東から）

３　遺構全景
（南東上空から）

図版 10

奈良井遺跡

1　調査区北半全景
（西から）

2　調査区北半全景
（南西から）

3　調査区北半南西側
全景（北から）

1　調査区南半西側
全景（南西から）

2　調査区南半東側
全景（北東から）

3　調査区南半東側
全景（南西から）

図版 12

奈良井遺跡

1　調査区北半東西断面（北西から）

2　調査区北半東西断面（北から）

3　調査区北半南壁断面（北西から）

4　調査区北半北壁断面（南東から）

図版 13

1　調査区南半西壁
断面（南東から）

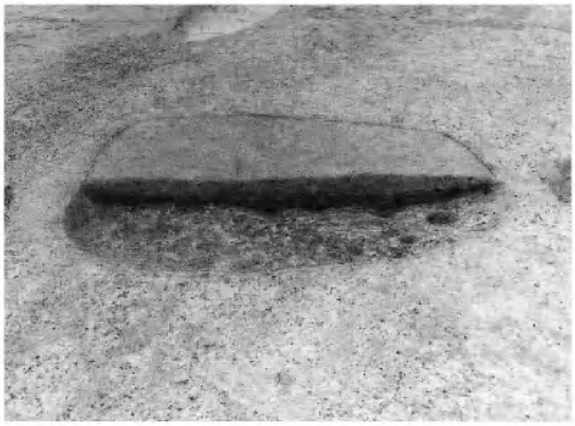
2　調査区南半北壁
断面（南東から）

3　調査区南半北壁
断面（南西から）

1　調査区南半南壁断面（北から）

2　段状遺構１（東から）

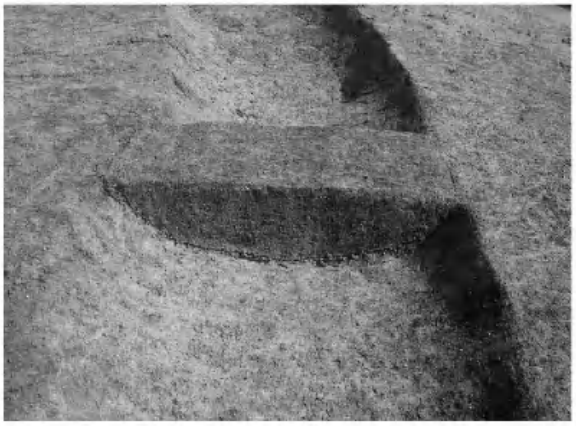
3　土坑２（南東から）



4　土坑 11（南東から）

1　溝３断面（南から）

2　溝９断面（南西から）



3　溝 10 断面（南西から）

4　溝 13 断面（南東から）

5　谷部溝遺物出土状況（南東から）

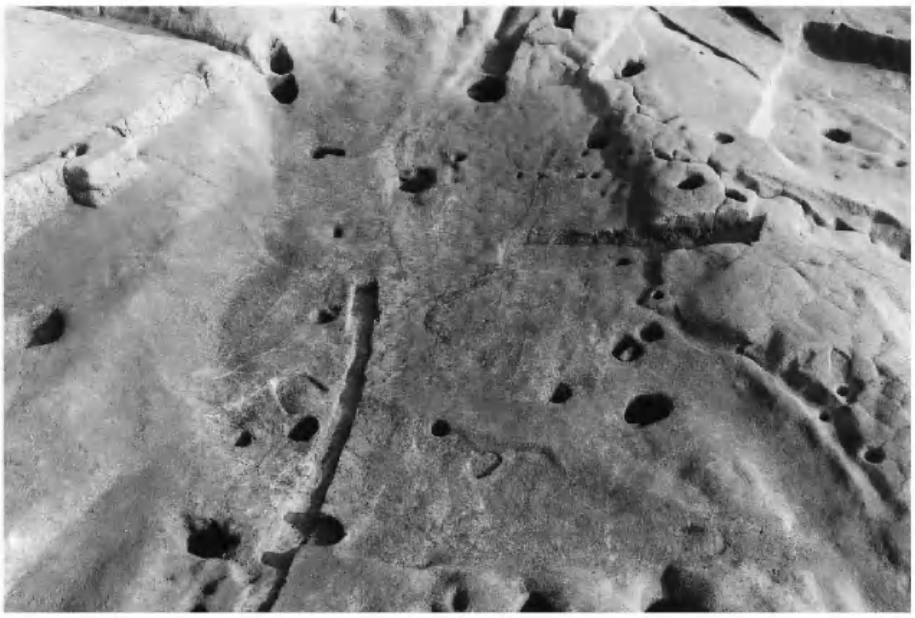
図版 16

奈良井遺跡

1　谷部溝
（南東から）

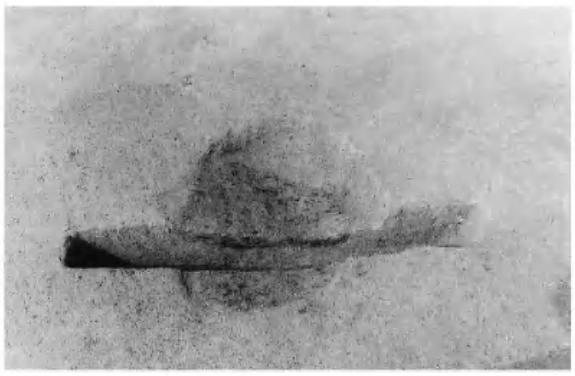
2　調査区北半谷部
断面（南東から）

3　竪穴遺構 1
（北西から）

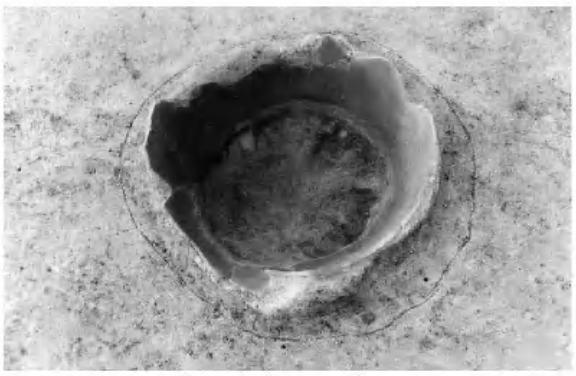


1　竪穴遺構１
（南西から）

2　竪穴遺構１土層断面（北東から）



3　土坑 12（南から）

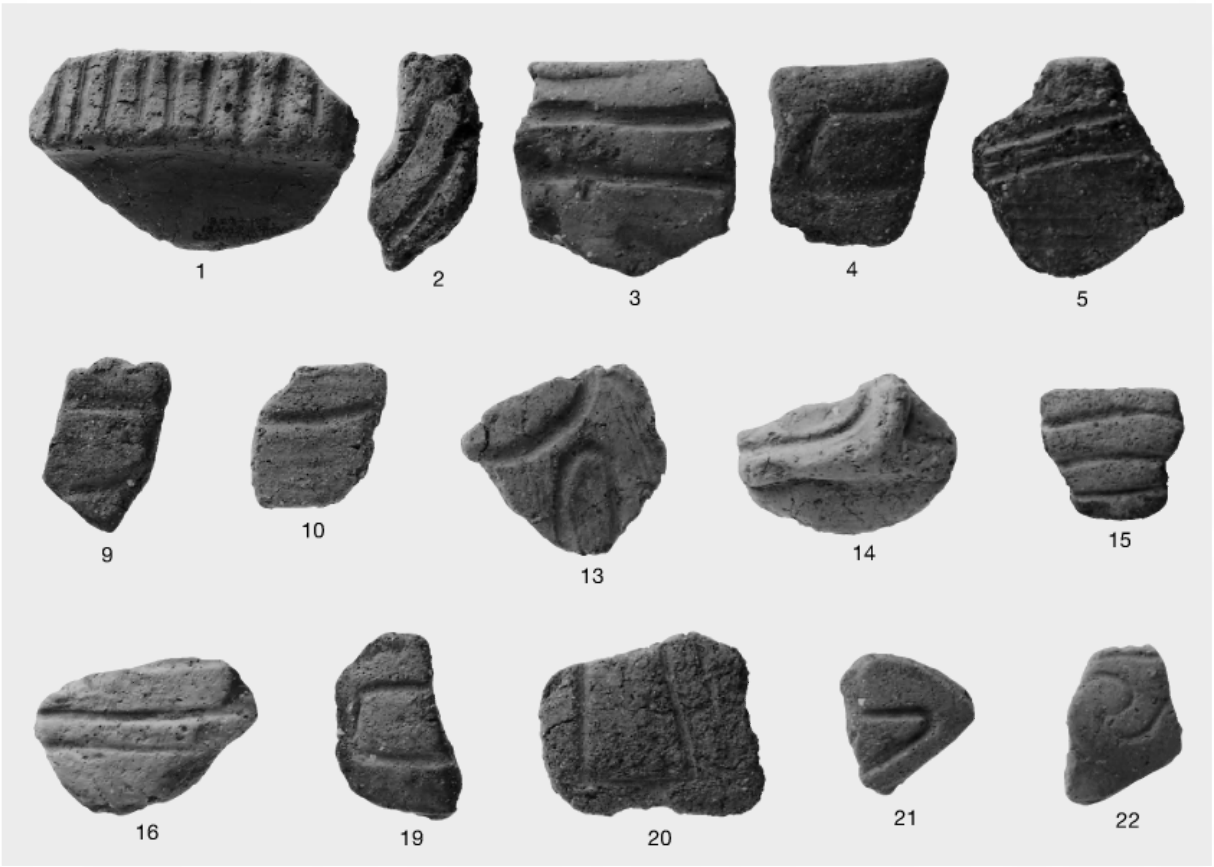


4　土坑 14（東から）

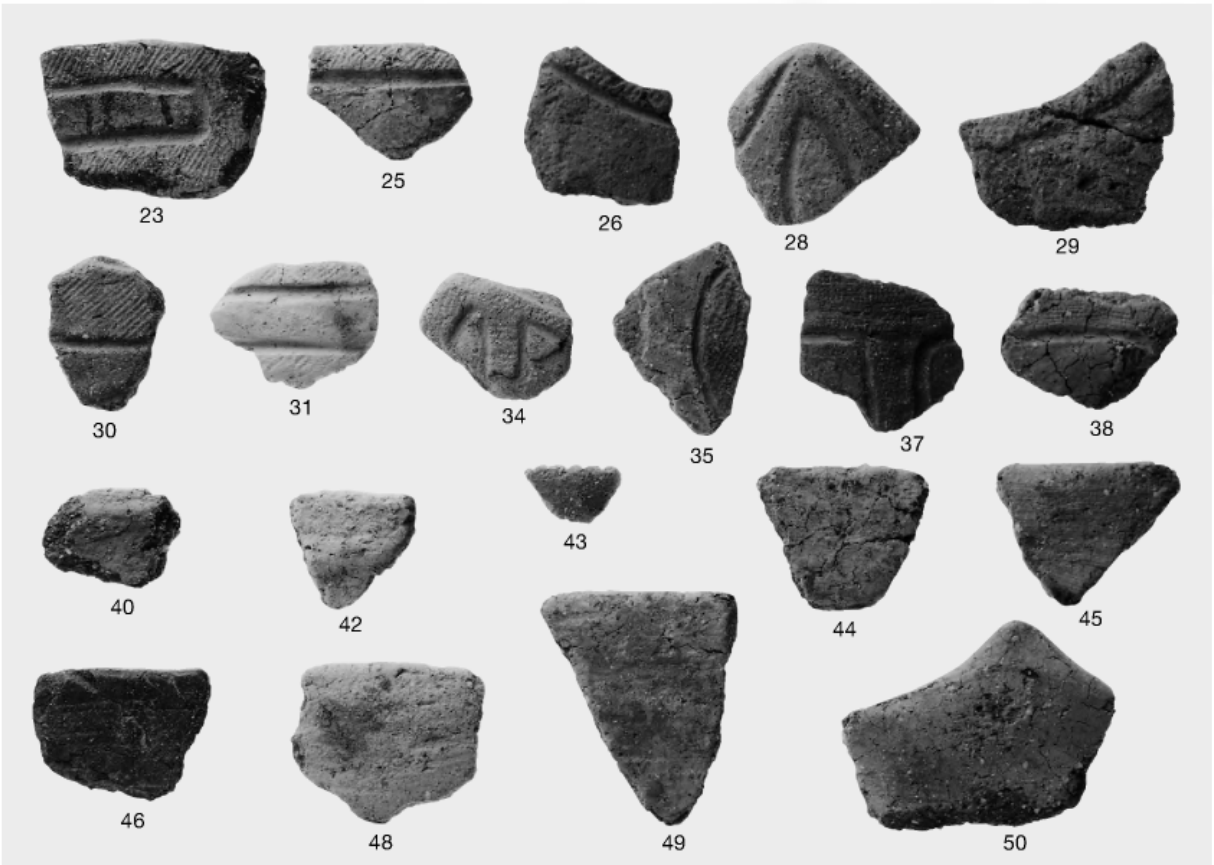
5　土坑 18（南西から）

6　柱穴掘り下げ作業（北東から）

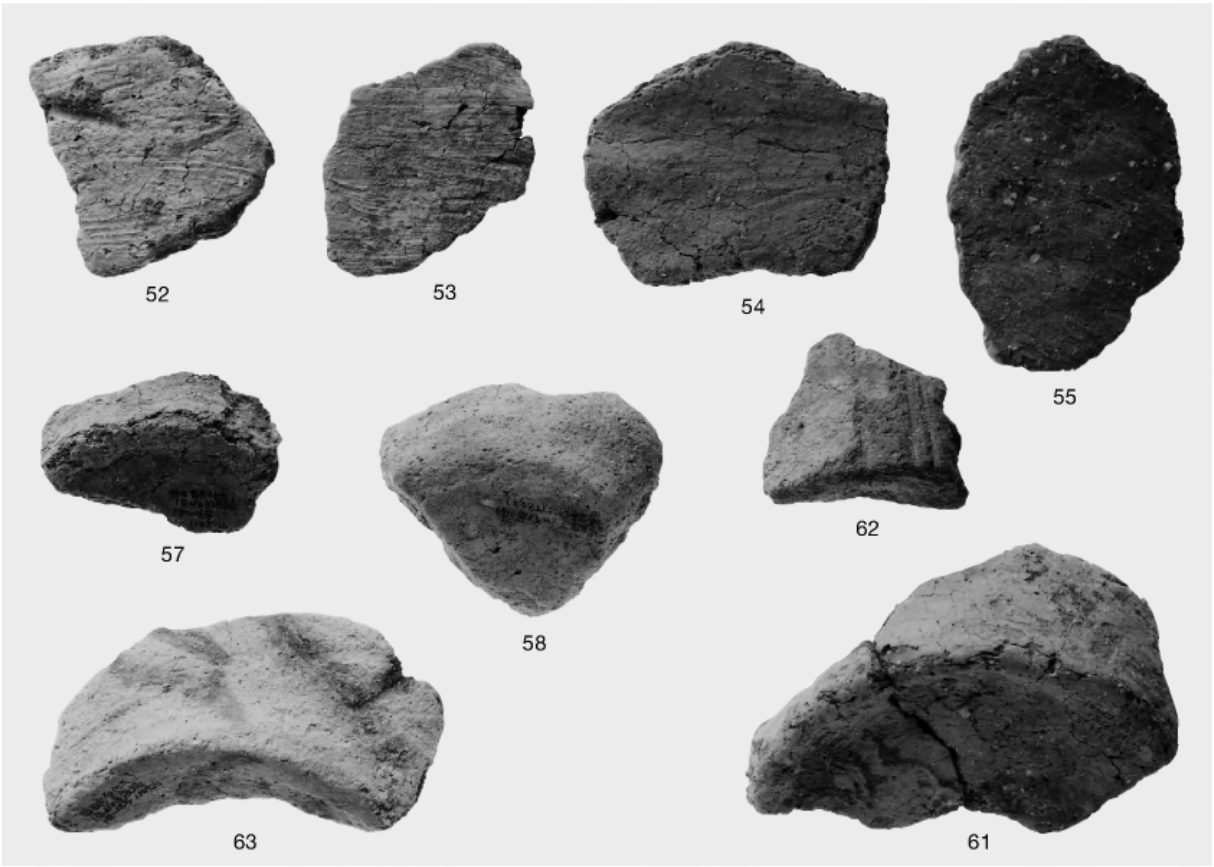
7　柱穴６（南東から）



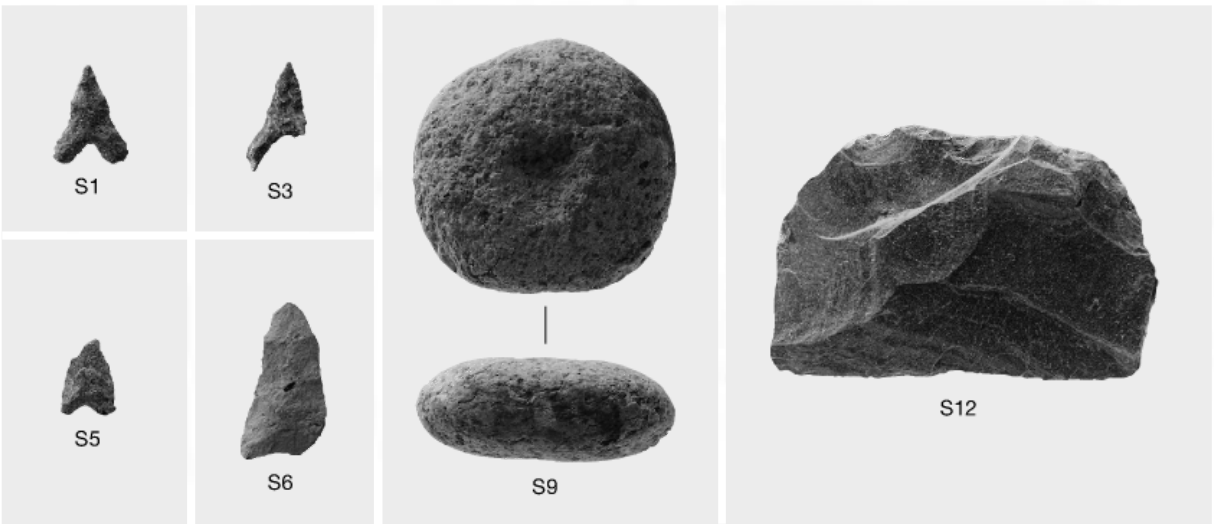
1　河道 1 出土土器①

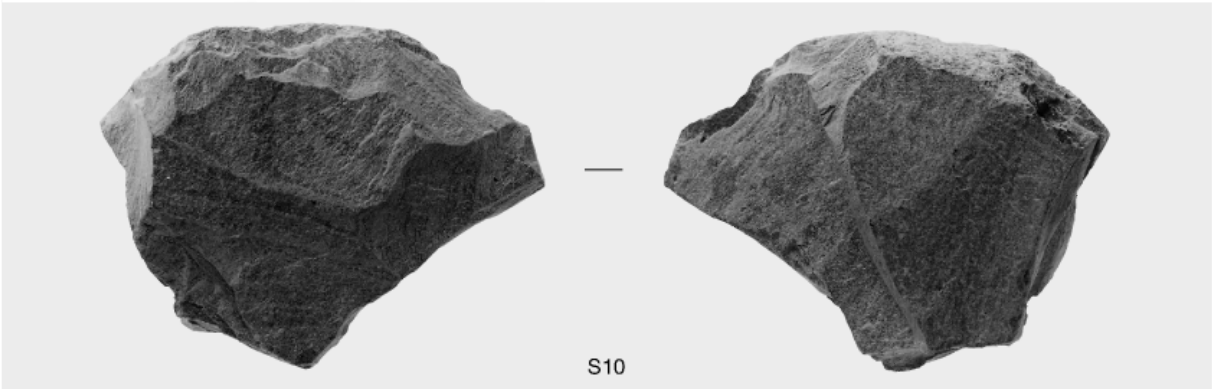


2　河道 1 出土土器②



1　河道 1 出土土器③





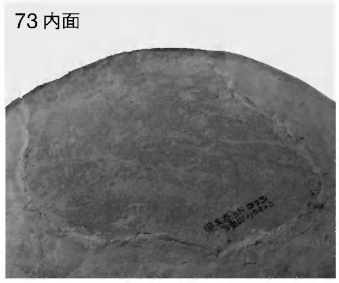
2　出土石器

図版 20

奈良井古墳・奈良井遺跡

67

73



73 内面

1　奈良井古墳出土土器

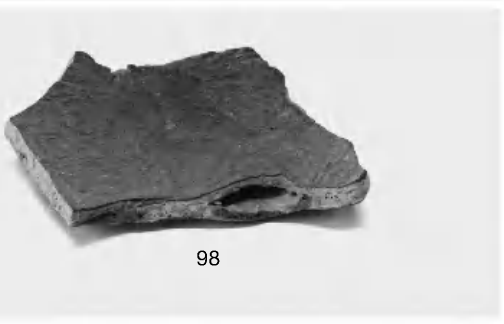
77

82

84

89

99



98

123

2　奈良井遺跡段状遺構 1、溝 11 出土土器

図版 21

129

130

131

132

138

139

141

148

150

151

153

155

谷部出土土器①

157

165

166

178

173

184

190

185

191

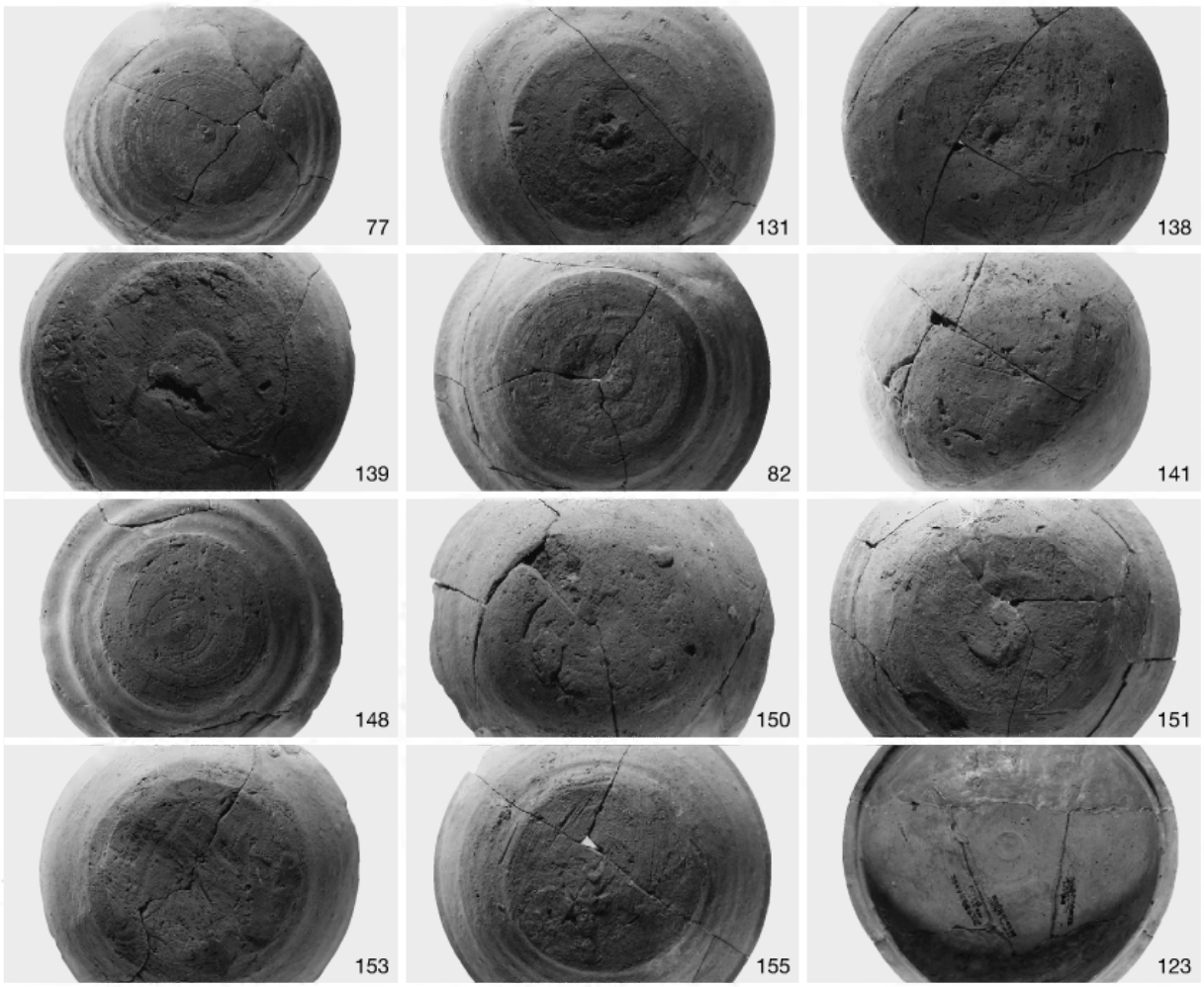
谷部出土土器②

1　谷部出土土器③

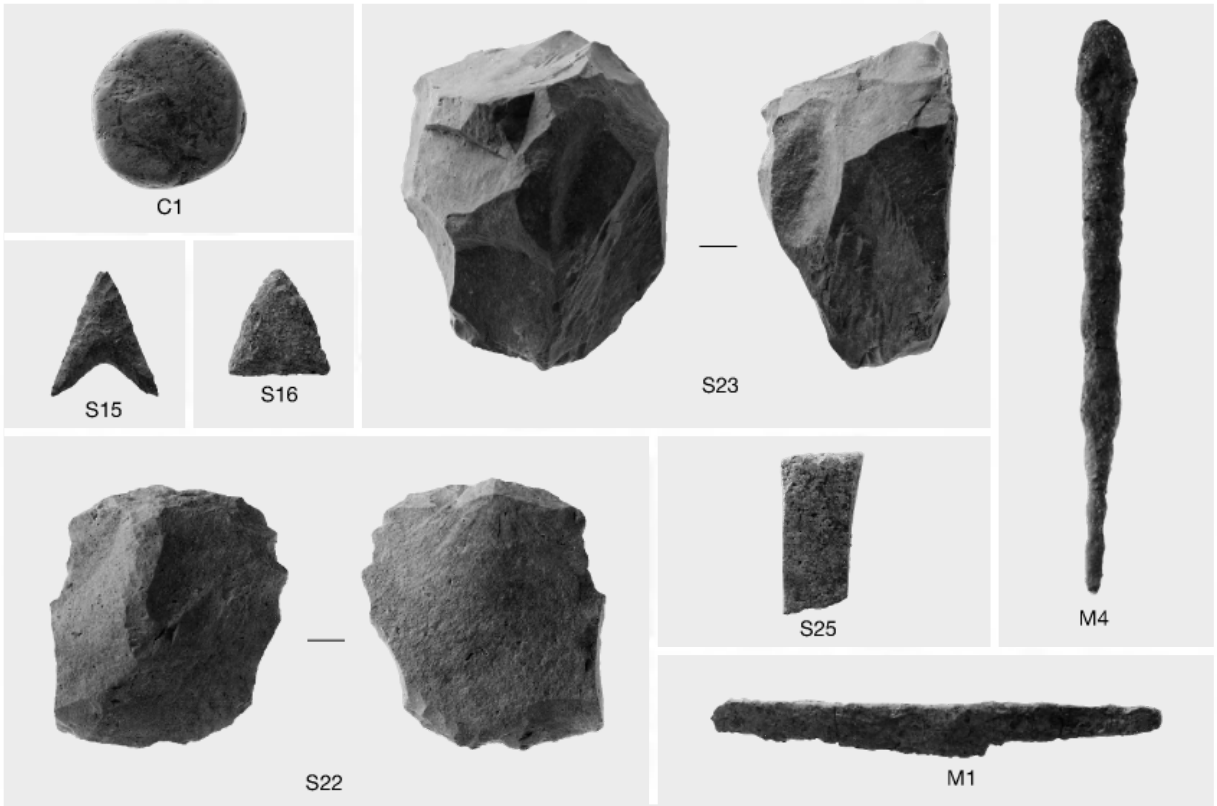
2　柱穴８・13、包含層出土土器

3　土坑 18 出土瓦

図版 24



1　杯蓋外面天井部・杯身外面底部・杯身内面底部



2　出土土製品・石器・鉄器

報告書抄録

ふりがな	みやばらいせき　ならいこふん　ならいいせき
書名	宮原遺跡　奈良井古墳　奈良井遺跡
副書名	一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）及び一般県道南浦金光線単県地方特定道路整備事業（道路改築）に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	237
編著者名	澤山孝之・岡本泰典・中原香織・石田爲成・白石　純
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市北区西花尻1325-3　TEL 086-293-3211 ＵＲＬ http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市北区内山下2-4-6　TEL 086-224-2111
発行年月日	2013年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
宮原遺跡	浅口市金光町佐方2550ほか	33216	334420084	34° 31′ 16″	133° 36′ 43″	20110401～20110610	700	記録保存調査
奈良井古墳	浅口市金光町佐方2170-3		334420082	34° 31′ 15″	133° 36′ 33″	20110622～20110930	570	
奈良井遺跡	浅口市金光町佐方2215ほか		334420083	34° 31′ 14″	133° 36′ 36″	20110525～20120314	3,803	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮原遺跡	集落	縄文時代	河道１条	縄文土器、石器	
		近世	土坑１基	土師質土器、磁器	
奈良井古墳	古墳	古墳時代	古墳１基	須恵器、土師器	
奈良井遺跡	集落	縄文時代		石器	
		弥生時代	土坑１基	弥生土器	
		古墳時代	段状遺構２基、土坑10基、被熱面１か所、溝15条、柱穴多数	須恵器、土師器、石器、鉄器、窯壁片	須恵器片と窯壁片の出土から、付近で須恵器窯の操業が推定される。
		古代～近世	竪穴遺構１基、土坑７基、溝７条、柱穴多数	須恵器、亀山焼、土師器、瓦、土製品、石器、鉄器、鉄滓	

要約

宮原遺跡は縄文時代後期初頭を主体とする河道１条と近世の土坑１基を検出し、遺物は縄文土器・須恵器・土師器・磁器・石器など整理箱で３箱出土した。

奈良井古墳は７世紀初頭に築造された直径９ｍ弱の円墳の可能性が高いことが明らかとなった。横穴式石室の規模は石室長3.25ｍ、最大幅1.54ｍ、天井高1.75～2.01ｍを測る。石室内・墳丘盛土・表土などから、須恵器・土師器の小片が出土した。この他、瓦質土器など整理箱で１箱出土した。

奈良井遺跡は調査区東側の谷部の堆積土から、７世紀代の須恵器片が多数出土した。須恵器片は焼け歪みや溶着した破片が多く、また窯壁片が多数含まれていたことから付近に窯跡の存在が推測された。この他の遺構としては、弥生時代から近世までの段状遺構・竪穴遺構・土坑・被熱面・溝・柱穴多数を検出した。また、遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦・土製品・石器・鉄器・窯壁片など整理箱で51箱出土した。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 237

宮 原 遺 跡
奈 良 井 古 墳
奈 良 井 遺 跡

一般国道２号改築工事（玉島笠岡道路）
及び一般県道南浦金光線単県地方特定
道路整備事業（道路改築）に伴う発掘調査

平成25年３月８日　印刷
平成25年３月15日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山市北区内山下2-4-6

印刷　サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2